

紀 要

第47卷

2 0 1 4

鈴 鹿 工 業 高 等 専 門 学 校

鈴鹿工業高等専門学校紀要

第47巻

目 次

高等教育機関における Moodle 利用状況のデータベース化の報告……………	白井 達也……………1 原田 寛之
トルエンスルホン酸の加水分解反応における速度論的解析……………	澤田 善秋……………5 水谷 友哉 淀谷 真也
「鈴鹿高専の専門力を結集して三重の海を守ろう」プロジェクトについて……………	平井 信充……………11 甲斐 穂高 山口 雅裕 黒田 大介 兼松 秀行
教室内・画像提示装置の開発と運用……………	石原茂宏……………17
中庸思想研究の課題と展望（二） —対の思想から考察した金谷治氏の中庸思想学説の批評—……………	小倉 正昭……………44 (119)
中庸思想研究の課題と展望（一） —対の思想から考察した宮崎市定氏の中庸思想の構造学説の批評—……………	小倉 正昭……………62 (101)
中庸思想の構造論研究史の考察 —対の思想から考察した中庸思想研究の現段階（三）—……………	小倉 正昭……………82 (81)
対の思想と中庸思想研究 —対の思想から考察した中庸思想研究の現段階（二）—……………	小倉 正昭……………104 (59)
中庸の定義と其の政治思想的意義 —対の思想から考察した中庸思想研究の現段階（一）—……………	小倉 正昭……………126 (37)
中庸思想研究の問題の提起 —「中庸思想」研究史の現段階と課題(序章)—……………	小倉 正昭……………140 (23)

孟子の楊朱・墨翟論

一対の思想から考察した中国政治思想の構造論研究(序章)…………… 小倉 正昭……………162
(1)

教職員の研究活動記録……………163

CONTENTS

Report of the Database Compilation of Utilization Status of Moodle in the Institutions of Higher Education	Tatsuya SHIRAI	1
	Hiroyuki HARADA	
Kinetics Study on Hydrolysis of Toluenesulfonic Acid	Yoshiaki SAWADA	5
	Yuya MIZUTANI	
	Shinya YODOYA	
Educational and Research Project of “Protection of the Sea of Mie Prefecture Based on Academic Abilities of Suzuka National College of Technology”	Nobumitsu HIRAI	11
	Hotaka KAI	
	Masahiro YAMAGUCHI	
	Daisuke KURODA	
	Hideyuki KANEMATSU	
Development and Operation of Digital Signage System in the Classroom	Shigehiro ISHIHARA	17
Problems and Visions of the Study of “the Doctrine of the Mean” —Criticisms of Miyazaki and Kanaya’s theories of the Doctrine of the Mean and the thought of <i>Dui</i> (Preceding Chapter1) —	Masaaki OGURA	44
		(119)
Problems and Prospects related to Study of the Doctrine of the Mean (1) —Criticism of Ichisada Miyazaki’s structural theory of the Doctrine of the Mean examined from a perspective of the thought of <i>Dui</i> —	Masaaki OGURA	62
		(101)
History of Study of the Structural Theory of the Doctrine of the Mean —The present stage of study of the “Doctrine of the Mean” examined from a perspective of the thought of <i>Dui</i> (3)—	Masaaki OGURA	82
		(81)
Thought of <i>Dui</i> and Study of the Doctrine of the Mean —Present stage of study of the “Doctrine of the Mean” examined from a perspective of the thought of <i>Dui</i> (2)—	Masaaki OGURA	104
		(59)

Definitions of the Mean and their Significance for Political Thought	
—Present stage of study of the “Doctrine of the Mean” examined from a perspective of the thought of <i>Dui</i> (1)—	Masaaki OGURA ······ 126
	(37)
Rise of Questions of Study of the Doctrine of the Mean	
—The present stage and problems of the history of study of the “Doctrine of the Mean” (Introduction)—	Masaaki OGURA ······ 140
	(23)
Mencius’ Theory on the Thought of Yang Zhu and Mozi	
—Study of the structural theory of Chinese political thought examined from the thought of <i>Dui</i> (Introduction)—	Masaaki OGURA ······ 162
	(1)
Research Activities of the Faculty Members	····· 163

高等教育機関における Moodle 利用状況のデータベース化の報告

白井 達也^{1*}, 原田 寛之²

1:機械工学科

2:札幌学院大学 電子計算機センター

現在, 日本国内の多くの高等教育機関が Learning Management System (LMS) として Moodle を採用している. 文部科学省は海外と国内での LMS の利用状況に関する調査を行っているが, 公表されるのはアンケート回答に基づく統計上の数値であり, 実際の利用状況を表してはいない. 本ノートでは 2013 年 8 月時点における日本国内の全ての国立大学, 公立大学, 私立大学, 高等専門学校での Moodle の利用状況を調査した結果を報告する. 本報告の主題は調査結果そのものではなく, 今後継続的に調査結果を更新し最新情報を入手可能なデータベースの紹介と, 本データベースを構築するに至った経緯と目的を述べることにある.

Key Words : e-Learning, Moodle, Learning Management System

(受付日 2013 年 9 月 2 日 ; 受理日 2014 年 1 月 9 日)

1. 調査の背景と特徴

自学自習を目的とした e-Learning システムは, 情報通信技術 (Information and Communication Technology : 以下, ICT) の進歩と普及に伴い学校教育現場に浸透し始め, 有用性は一定の理解を得られた. 欧米に比べて遅れているが, 教師と学生間の双方向コミュニケーションや協働作業を通じて学習内容の定着を図る新しいタイプの学習管理システム (Learning Management Systems : 以下, LMS) も, 国内での利用が徐々に広がっている. さらに 2012 年度中より米国を中心に活発化した Web を用いた大規模講義 MOOC (Massive Open Online Course) の台頭など, 今後も LMS の技術動向に高等教育機関 (以下, 学校) は注意を向け続けなくてはならない. LMS の普及状況は旧 NIME (National Institute of Multimedia Education: 独立行政法人メディア教育開発センター) による 2007 年度までの調査報告¹と, 旧 NIME の業務の一部を引き継いだ放送大学学園 ICT 活用・遠隔教育センターによる 2009-2010 年度の調査報告²がある. この報告において, LMS を利用している学校は大学全体で 40.2% (1,084 機関), 内訳は国立大学が 51.7% (330 機関), 私立大学が 38.3% (704 機関), 公立大学が 22.6% (50 機関), 短期大学では 24.5% (83 機関), 高等専門学校 (以下, 高専) では 73.2% (41 機関) であることが示されている. 利用している LMS の種類は全機関種別において Moodle が最も高く, 大学が 43.0% (国立大学 42.4%, 公立大学 54.0%, 私立大 42.5%), 短期大学が 53.0%, 高専が 63.4% である. 以上の調査は各校に対して質問紙法

により行われた. なお, 以上のデータの調査対象は, 大学のみ学校単位ではなく学部研究科単位 (国立大学 820, 公立大学 334, 私立大学 2,822, 計 3,976) である. 同様の調査を筆者も全高専に対して行った結果を 2011 年度に報告している³. ただし, これらの調査報告の中身は集計結果であり, 学校毎の利用状況を詳細に知ることはできない. 回答者が実務担当者である保証が無いため, 実際の現場の利用状況が正確に拾い上げられていない恐れもある.

今回行った調査の特徴は以下の四つ, 1) 調査対象とする LMS を Moodle に限定, 2) 調査結果をオンライン上のデータベースに蓄積して公開, 3) 学校毎の詳細な情報を提供, 4) 調査結果は各教育機関から提出された情報ではなく外部より検索エンジン等を用いて行う調査に基づく, である. 本調査結果は論文等の裏付けデータとして用いることも可能だが, 自校に LMS 導入を考える学校教職員が他校での利用状況を調べ, 実際に運用している部署へコンタクトして情報共有する助けになることも想定している.

2. 検索エンジンを用いた Moodle 利用状況の調査

2.1 調査対象と調査方法

調査の最大の目的は, 各学校において全学規模で運用している Moodle サイトの存在を確認することである. 存在の確認は, 学外から Web ブラウザによるアクセスが可能な URI の特定が最適だが, 学内専用やポータルサイトへのログインを必要とするなど URI が学外から見えない

場合もあるので、調査年度においても Moodle が全学規模で用いられていると判断できる記述のある文書やページの発見でも可とした。

調査対象とする学校は、日本国内の全ての国立大学 (86 校 87 キャンパス)、公立大学 (83 校)、私立大学 (611 校)、国公立高専 (57 校 62 キャンパス) の合計 843 キャンパスである。時間の都合により短期大学 (381 校) は調査対象外とした。学校名のリストは日本学術振興会の Web サイトにある科学研究費申請書類作成用の機関コード一覧表⁴を元にした。

調査方法は主に検索エンジンの Google を用いた。“学校名”に“Moodle”、“e ラーニング”、“LMS”の単語をそれぞれ追加した三組の検索キーワードで検索を行った。なお、“e ラーニング”による検索は“e-Learning”も検索対象に含まれる。検索結果に Moodle サイトと思われる URI を発見したら実際にアクセスを試みる。Moodle 以外の LMS を全学利用していることが判明した場合はその URI も記録する。多くの学校で英語学習や資格試験専用の商用 LMS (主に e-Learning と称する) を利用しているが、本調査では教職員が自由にコースなどを作成してコンテンツを提供できる汎用性の高いシステムのみを LMS として認めた。具体的には Blackboard, WebCT, WebClass, Sakai, CEAS, TIES などで、NetCommons は厳密には CMS (Contents Management System) に近いが、今回の調査ではこれも LMS と認めた。

データベースに登録する各教育機関のデータは、1) Moodle の利用状況、2) 機関コード、3) 学校名、4) 学校名の読み仮名、5) キャンパス名あるいはサーバ管理部署名、6) 住所、7) 学校 Web サイトトップページの URI、8) Moodle サーバの URI、9) Moodle 以外の LMS 利用時の URI、10) 学校種別である。1) Moodle の利用状況は表 1 に示すように 6 種類とし、未使用時を除く各項目に該当するサーバが存在した場合はそれぞれの URI を個別に記録する。それらの発見した URI を元にして表 1 中の番号が小さいものを優先して利用状況として採用する。学内ポータルサイトにログインしないと辿り着けない場所に Moodle サイトへのリンクが存在したり、サイト名やページ中に“Moodle”の文字列を含まなかったり、URI に“moodle”の文字を含まないなどの理由で Moodle サイトを発見できない場合もあるため、“未使用”と判断したとしても Moodle サイトを発見できなかったに過ぎず、実際にはその学校で Moodle は有効活用されているかも知れない。したがって実際の Moodle 利用率は今回の調査結果よりも高い値にあるはずである。

調査期間は作業量が多かったため平成 25 年 3 月より同年 8 月までの半年近くに亘っている。年度を跨いだ間に学校の統廃合やサーバの停止、URI の変更が生じている可能性はある。

表 1 Moodle 利用状況の種別

利用状況	説明
1. 全学利用	学校に所属する全教職員および全学生が利用可能な Moodle サイト。サーバは学内に存在しなくても構わない。民間企業が提供するサービスを利用している場合も構わない。
2. 個別利用(学内)	学内の一部の教職員や個人の単位で管理されている Moodle サイトの内、サーバが学内にあるもの。
3. 個別利用(学外)	学内の一部の教職員や個人の単位で管理されている Moodle サイトの内、サーバが学外にあるもの。
4. 共同利用	複数の大学などによるコンソーシアムなどで管理・運用される Moodle サイトを利用している場合。
5. 他の LMS	Moodle 以外の LMS のみを用いている場合。
6. 未使用	LMS を一切用いていない場合。

2.2 調査結果

調査結果を表 2 に示す。上段が該当する学校数で下段が全学校数に対する百分率である。Moodle を全学利用していることが確認できた学校は国立大学で 40.2%、公立大学で 15.7%、私立大学で 17.2%、高専で 27.4%である。一部の学部、学科、研究室単位で Moodle サイトを管理運用していることが確認できた学校まで含めた小計は、国立大学で 71.3%、公立大学で 34.9%、私立大学で 31.9%、高専で 41.9%である。表 2 中に参考として第 1 章で挙げた文献 2 中の 2010 年度の LMS 普及率に Moodle 利用率を積算した比率を示す。大学に関しては、放送大学学園によって行われた調査結果よりも大きな利用率を示しているが、放送大学学園が算出した利用率は学部研究科単位での厳密な調査結果に基づいているためである。本調査は学校単位での調査であるため、大学において全学利用のサイトが用意されていれば、Moodle を全く利用していない学部研究科があっても全学利用中と評価する。

Moodle 利用状況の意味を考察する。“全学利用”は全学部全学科の教職員が希望すれば自由にコースを作成可能な状況にあることを意味する。実際の活用度合いはコース数やアクセス数などを精査する必要があるが、現実的には不可能なので本調査では活用度合いは調査対象外とする。“個別利用”は、Moodle サイトの管理責任が学校側と教員側に分けられると思われる。前者は初年度教育や留学生向けなど用途を特化しているために全学利用

表 2 Moodle を利用していると思われる大学等の数と比率

学校種別	学校数	全学	個別 (学内)	個別 (学外)	小計	参考 (文献2)	共同	他LMS	未使用
国立大学	87	35	27	0	62	—	8	7	10
(%)		40.2	31.0	0.0	71.3	21.9	9.2	8.0	11.5
公立大学	83	13	14	2	29	—	13	6	35
(%)		15.7	16.9	2.4	34.9	20.7	15.7	7.2	42.2
私立大学	611	105	64	26	195	—	42	73	301
(%)		17.2	10.5	4.3	31.9	16.3	6.9	11.9	49.3
高専	62	17	9	0	26	—	1	11	24
(%)		27.4	14.5	0.0	41.9	46.4	1.6	17.7	38.7

では無いだけで、Moodle を全学的に運用する技術的な課題は少ないと予想される。一方、後者は学外設置も含めて教員が必要に応じて LMS の導入と Moodle の選定を行った結果だろう。後者かつ“個別利用（学内）”ならば Moodle サイトが学内ネットワーク上に存在することを情報セキュリティポリシー上、認められていることを意味するため、予算と人員の確保が可能であれば Moodle を全学的に利用する制度上の課題は少ないと思われる。後者かつ“個別利用（学外）”の場合は逆に、Moodle に精通した教員は少数ながら存在するものの、全学利用は技術的にも制度的にも難しいものと思われる。“共同利用”は、複数の大学でコンソーシアムを組むなどして代表校のネットワーク上あるいは独立したドメイン上の Moodle サイトを利用している場合である。単独の教員ではサーバを管理できないため場所を借りている場合と、単位互換協定を締結して大規模に行っている場合とに分けられる。“他の LMS”は全学的に Moodle 以外の LMS を用いている場合だが、積極的に調査している訳では無く、本質的には未使用と同等である。Moodle 以外の LMS を全学的に用いている場合、Moodle へ乗り換えるにはそれまでに作成したコンテンツの変換が必要なため、乗り換えは容易ではない。“未使用”と判断された学校の中にも Moodle サイトを利用している学校はありと推測される。これらの学校については各学校関係者からの情報提供を期待する。

2.3 調査結果の公表方法

本ノート執筆時点では、調査結果のデータベースは本校内の Moodle サイト上のデータベースモジュールに蓄積している⁵。ゲストログインで全データの閲覧および検索が可能である。将来的には moodle.org の Japanese moodle コース⁶上にデータベースを移して、同コースの登録ユーザであれば自由にデータの修正（変更確定には承認を必要とする）を可能とする予定である。ユーザインタフェースは今後も変更する可能性はあるが、現時点におけるデータの一覧表示と個別表示のスクリーンショットを図 1 に示す。本データベースは国内の高等教育機関における Moodle サイトの全リンク集でもあるので、安易に“個別利用”の URI まで公開するのは好ましくないため一覧表示では全学利用の URI のみ表示している。

3. まとめ

国内の国立大学、公立大学、私立大学、高専における Moodle の運用状況を、Google 検索をベースとして調査を行い、データベース化した。現在の Moodle 利用状況について報告すると共に、データベースに蓄積されているデータの説明と利用方法について説明した。今後は、データベースの情報を有志により更新するための手順の確

(a) 一覧表示

(b) 個別表示

図 1 データベースの画面例

定と、収集したサーバへの URI の到達確認の自動化について検討する予定である。

今回のデータベース化を行うにあたり、先がけて主要な大学での Moodle の利用状況を調査し公開して頂いていた富山大学の木原 寛先生、手作業での調査を補完する貴重なデータを提供して頂いた札幌学院大学の原田寛之氏に感謝します。

References

1. メディア教育開発センター：e ラーニング等の IT を活用した教育に関する調査報告書（2007 年度），メディア教育開発センター(2008).
2. 放送大学学園：文部科学省先導的の大学改革推進委託事業「ICT 活用教育の推進に関する調査研究」委託業務成果報告書、文部科学省（2011）.
3. 白井達也：Moodle を利用した学校ポータルサイト構築の事例紹介とネットワーク化の提案，日本高専学会誌，Vol.17, No.3, 63-70(2012)
4. 日本学術振興会：機関番号一覧，<https://www.kaken.jsps.go.jp/kaken1/kikanList.do>
5. Moodle に関する広範な情報をオープンに公開するコース：<http://www.suzuka-ct.ac.jp/mech/moodle2/course/view.php?id=24>
6. moodle.org, Japanese moodle コース：<https://moodle.org/course/view.php?id=14>

(Original Article)

Report of the Database Compilation of Utilization Status of Moodle in the Institutions of Higher Education

Tatsuya SHIRAI^{1*}, Hiroyuki HARADA¹

1: Dept. of Mechanical Engineering

2: Computer Center, Sapporo Gakuin Univ. ²,

In recent years, many of institutions of higher education in Japan have adopted Moodle as Learning Management System. Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology had surveyed statistically about utilization of LMS in foreign countries and Japan, however the report of survey does not express the real situation of utilization since it is just statistical numerical value based on the questionnaire answer. In this note, we report the result of survey how many national universities, public universities, private universities and colleges of technology in Japan are using Moodle at August, The main subject in this note is not statistical report of survey. The main subjects are the designing of database for updating the data and obtaining current data, and the purpose of constructing the database.

Key Words : e-Learning, Moodle, Learning Management System

トルエンスルホン酸の加水分解反応における速度論的解析

澤田 善秋^{1*}, 水谷 友哉², 淀谷 真也¹

1: 生物応用化学科

2: 株式会社 イーテック

有機合成用触媒として用いられるパラトルエンスルホン酸 (*p*-TSA) は、トルエン (TL) と濃硫酸を反応させて製造されている。その実生産工程から副産物として、少量の未回収 TSA を含む使用済み硫酸の廃液 (希硫酸) が生じる。この希硫酸中の TSA を加水分解し、TL として回収できれば、*p*-TSA 製造工程での原料として再利用することが可能となる。そこで、硫酸中の TSA を加水分解して TL を回収するプロセスに関して実験および反応速度論的解析を行ったので報告する。

Key Words : トルエンスルホン酸, 加水分解, 異性化反応, 反応速度

(受付日 2013 年 8 月 28 日 ; 受理日 2014 年 1 月 9 日)

1. 緒言

有機合成用触媒として用いられるパラトルエンスルホン酸 (以下 *p*-TSA と略す) は、トルエン (以下 TL と略す) と濃硫酸を反応させて製造されている。その実生産工程から副産物として、少量の未回収 TSA を含む使用済み硫酸の廃液 (以下、希硫酸と略す) が生じる。この副産品中の TSA を加水分解し、TL として回収することにより、*p*-TSA 製造工程での原料として再利用することが可能となる。そこで、硫酸中の TSA を加水分解して TL を回収するプロセスに関して実験および反応速度論的解析を行った。実プロセスで残留する希硫酸には硫酸が 50~60wt% 含まれており、TSA 含有率が 25wt% 程度の TSA 高濃度プロセス品と 9wt% 程度の TSA 低濃度プロセス品の 2 種類が存在する。また、TSA には *o*、*p*、*m* 体の 3 種類の異性体が存在する。TSA 高濃度プロセス品の代表的な異性体比率は *o*-TSA 62%、*p*-TSA 24%、*m*-TSA 14% である。また、TSA 低濃度プロセス品の異性体比率は *o*-TSA 32%、*p*-TSA 18%、*m*-TSA 50% である。これら 2 種類のプロセス品を原料として加水分解を実施した。加水分解方法としては一括仕込み後、加熱、加水分解させる回分濃縮法と連続的に水を添加しながら加熱、加水分解させる半回分水添加法を実施した。

2. 理論

基本反応は図 1 の反応式に示す通り TSA が加水分解され TL と硫酸が生成する。TSA の加水分解反応は、一般式としては図 1 に示した通りであるが、3 種類の異性体は各々、同時並行的に異性化反応および加水分解反応を起

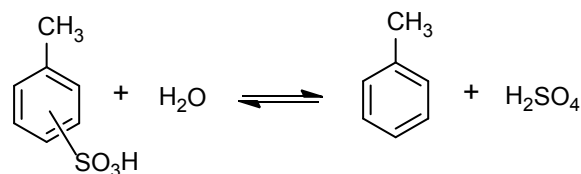


図 1 TSA の加水分解反応式

こすものと考えられる。各々の異性体比率は温度の影響を受け、 $\sigma > \cdot p > m$ の順で転位反応が起こりやすいことが知られている¹⁾。

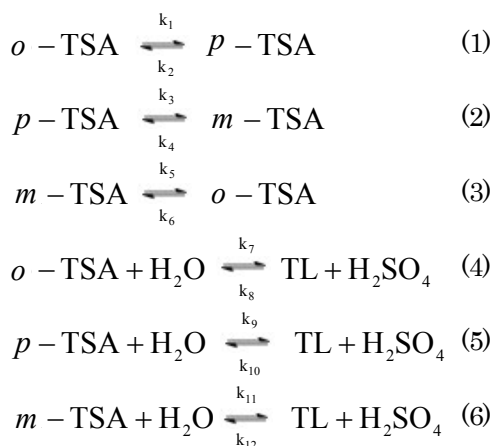


図 2 異性化および加水分解反応式

図 2 に異性化及び加水分解反応式を示した。3 種類の異性体の異性化および各異性体の加水分解を表している。

$$r_{o-TSA} = -(k_1 + k_6)C_{o-TSA} + k_2C_{p-TSA} + k_5C_{m-TSA} - k_7C_{o-TSA}C_{H_2O} + k_8C_{TL}C_{H_2SO_4} \quad (7)$$

$$r_{p-TSA} = k_1C_{o-TSA} - (k_2 + k_3)C_{p-TSA} + k_4C_{m-TSA} - k_9C_{m-TSA}C_{H_2O} + k_{10}C_{TL}C_{H_2SO_4} \quad (8)$$

$$r_{m-TSA} = k_3C_{p-TSA} - (k_4 + k_5)C_{m-TSA} + k_6C_{o-TSA} - k_{11}C_{m-TSA}C_{H_2O} + k_{12}C_{TL}C_{H_2SO_4} \quad (9)$$

$$r_{H_2O} = -k_7C_{p-TSA}C_{H_2O} + (k_8 + k_{10} + k_{12})C_{TL}C_{H_2SO_4} - k_9C_{p-TSA}C_{H_2O} - k_{11}C_{m-TSA}C_{H_2O} \quad (10)$$

$$r_{TL} = k_7C_{o-TSA}C_{H_2O} - (k_8 + k_{10} + k_{12})C_{TL}C_{H_2SO_4} + k_9C_{p-TSA}C_{H_2O} + k_{11}C_{m-TSA}C_{H_2O} \quad (11)$$

$$r_{H_2SO_4} = k_7C_{o-TSA}C_{H_2O} - (k_8 + k_{10} + k_{12})C_{TL}C_{H_2SO_4} + k_9C_{p-TSA}C_{H_2O} + k_{11}C_{m-TSA}C_{H_2O} \quad (12)$$

図3 反応速度式

図3は物質毎の反応速度式(例えば o -TSA の反応速度: r_{o-TSA})を表している。また $k_1 \sim k_{12}$ は反応速度定数である。ここで C_{o-TSA} は o -TSA の濃度(mol/l)を示している。

3. 実験方法および装置

図4に実験装置図を示した。異性化反応速度は、原料となる希硫酸を300mlの三口フラスコに仕込み、オイルバス中で所定の温度(100~160℃)に加熱して1時間毎にサンプルを採取、分析して測定した。異性体組成は、アルカリ溶融²⁾後、クレゾール類としてガスクロマトグラフィーにて分析した。異性化反応速度の測定においては、異性化温度および硫酸濃度の影響を確認すべく硫酸濃度を51, 56, 60, 64%の4点とし反応温度を100~150℃の範囲で異性化反応速度を測定した。高温になる程、加水分解の影響が顕著になるため、生成したTLを全還流にてフラスコに戻

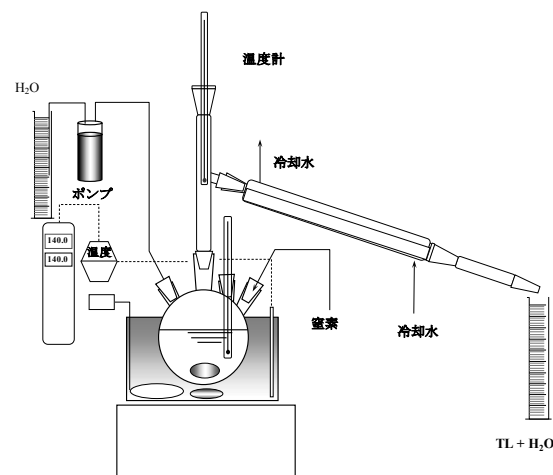


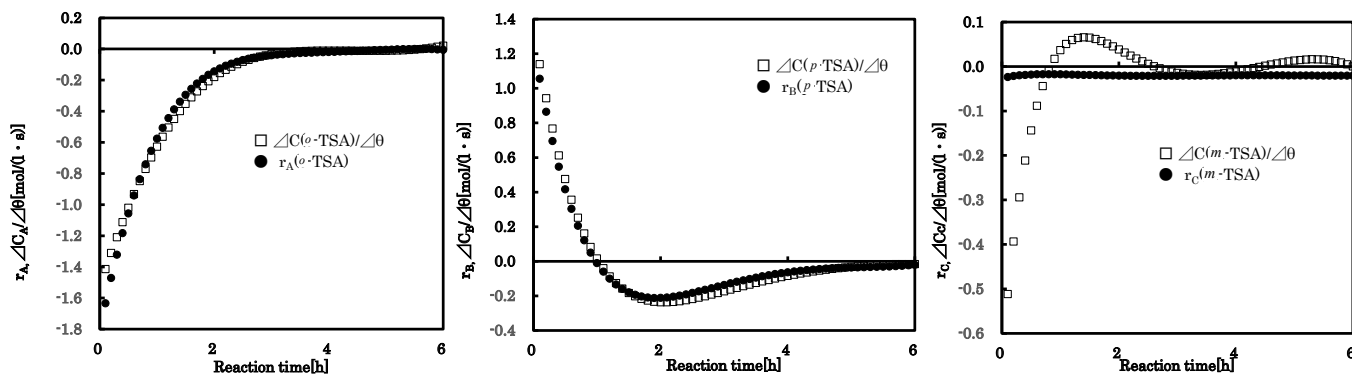
図4 TSA加水分解実験設備

して異性化速度を測定した。加水分解速度の測定においては、1,000ml フラスコ中で、仕込み原料として実験室で市販の p -TSA 単品を用い硫酸、水濃度を調整した原料(以下、モデル品と略す)および実プロセスから採取した原料(以下、プロセス品と略す)を用いた加水分解実験を実施し反応率の経時変化を確認した。モデル品では、仕込み量が約700g程度になるように、 p -TSA 濃度7~15wt%, 硫酸40~70wt%に調製した。プロセス品では、仕込み量が約700g, TSA 濃度9~24wt%, 硫酸濃度55~60%で実施した。

4. 実験結果

4.1 シミュレーションモデル

反応速度式(7)~(12)を基に実測値から Excel2010 の Solver を用いて以下の方法で $k_1 \sim k_{12}$ を求めた。一例として高濃度プロセス品を原料として155℃にて半回分式で加水分解を実施した実測値を用いて反応速度定数を求めた方法を記載する。実測値から反応時間と TSA 濃度[wt%], 異性体比率[%], 硫酸濃度[wt%], 反応率[%]の各々の近似式を求めた。反応時に留出する量(水+TL)および反応で消費される水は連続的に添加し、TL は生成と同時に留去されるものとした。また、推算を簡略化するため便宜上、水

図5 $\Delta C_{o-TSA}, m-TSA, p-TSA} / \Delta \theta$, $r_{o-TSA}, m-TSA, p-TSA}$ の精度(時間変化)

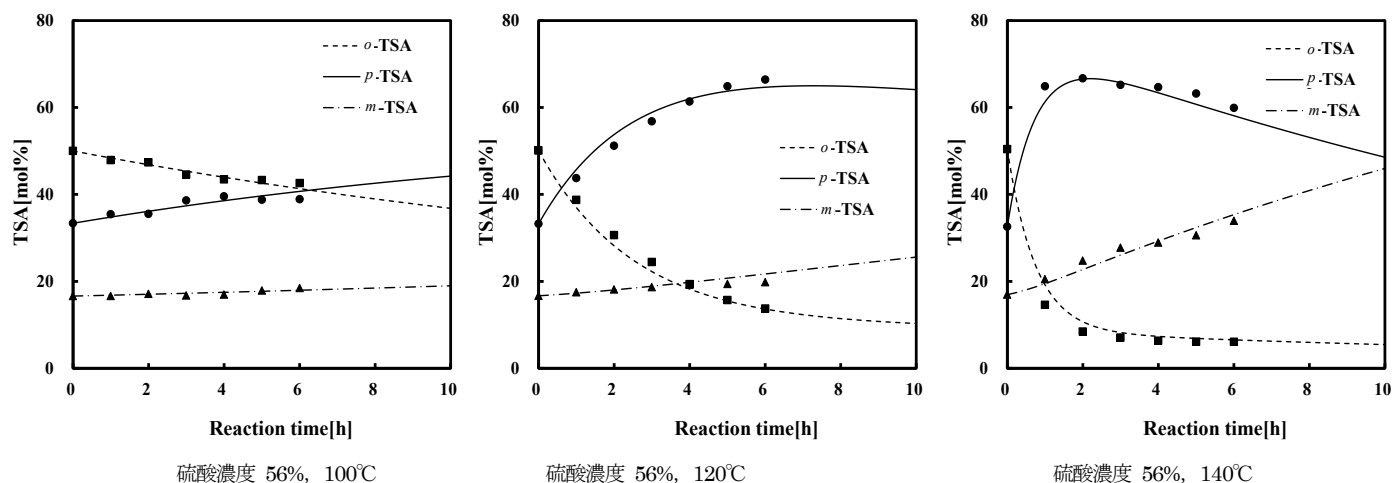


図6 異性化温度の異性体比への影響

に関してはモル濃度が大きく変化しないため定容反応として取り扱った。 $k_1 \sim k_{12}$ を求めるために近似式から単位時間当たりの反応量 $\angle C_{oTSA} / \angle \theta [\text{mol}/(\text{l} \cdot \text{s})]$, $\angle C_{pTSA} / \angle \theta$, $\angle C_{mTSA} / \angle \theta$, $\angle \text{CH}_3\text{SO}_3 / \angle \theta$ を求め、これらの量が各物質の反応速度 r_{oTSA} (7 式), r_{pTSA} (8 式), r_{mTSA} (9 式), $r_{\text{H}_2\text{SO}_4}$ (12 式) と一致するように Solver を用いて各々の絶対誤差の平方和が最小になる条件で計算させた。図5にその結果を示した。平方和は 8.90×10^{-1} 程度とそれ程低くはないが、結果的にシミュレーションとして、方向性を探る上で支障がない程度であった。ここで求めた反応速度定数を用いて、物質収支と反応速度式(7)~(12)を微分方程式の一般的数値解法のひとつである4次の Runge-Kutta 法を用いて、Excel VBA によるマクロで異性化比率、反応率および各物質の濃度を求められるシミュレーションモデルを作成した。

4.2 異性化反応

図6に硫酸濃度 56%における異性化温度の異性体比率への影響を示した。異性化温度を高くすると見かけ上、 o -TSA が p -TSA に異性化し、生成した p -TSA が m -TSA へと異性化することが確認された。●, ▲, ■は実測値、実線・破線・鎖線は $k_1 \sim k_6$ を実験的に求めた値を用いたシミュレーション結果を示している。異性化温度が 100°C の時は、 o -TSA が p -TSA に徐々に転位し、 p -TSA から m -TSA への転位はごくわずかであった。温度が 120°C になると p -TSA への転位速度が上昇し、 m -TSA の生成速度も増加している。140°C では、 p -TSA の生成速度が上昇し、さらに p -TSA から m -TSA への異性化速度が増加する。 p -TSA は時間と共に減少して m -TSA が増加することが明らかになった。速度定数および濃度からみて o -TSA $\rightleftharpoons$ p -TSA の速度定数 k_1 , k_2 および p -TSA $\rightarrow$ m -TSA の速度定数 k_3 が支配的であり、その他の速度定数は無視しても図6に示すシミュレーション結果と実測値が比較的良好に一致

することが確認された。

4.3 加水分解反応

回分濃縮方式では、原料を仕込んだ後、段階的に加熱して反応温度を上昇させながら加水分解を行った。反応温度は 140~170°C とした。半回分水添加方式では、反応温度を一定に保ちながら、生成する TL と共沸して留出する量と反応にて消費される量と同量の水を連続的に添加しながら反応を行った。反応温度は、140~160°C とした。図7に純 p -TSA および低濃度プロセス品を原料として用いた場合の回分濃縮方式、また図8には高濃度プロセス品を原料とした半回分水添加方式の反応時間と反応率の実測値を示した。各プロットは、留出した TL 量から求めた反応率を示している。回分濃縮方式では、いずれの原料でも4時間程度で硫酸水溶液の沸点に達し、 p -TSA で反応率 85%、また低濃度プロセス品では 40%程度で加水分解反応が平

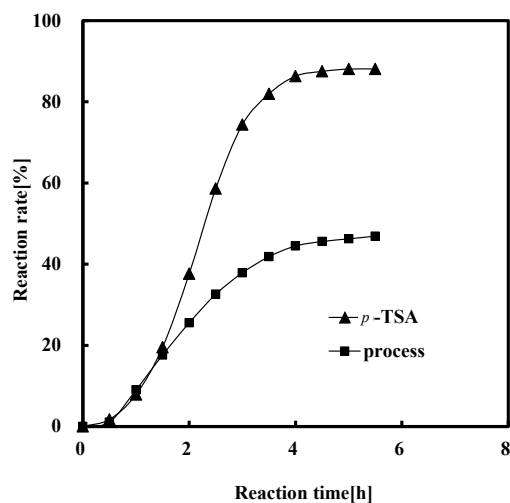


図7 反応時間の反応率への影響(回分式)

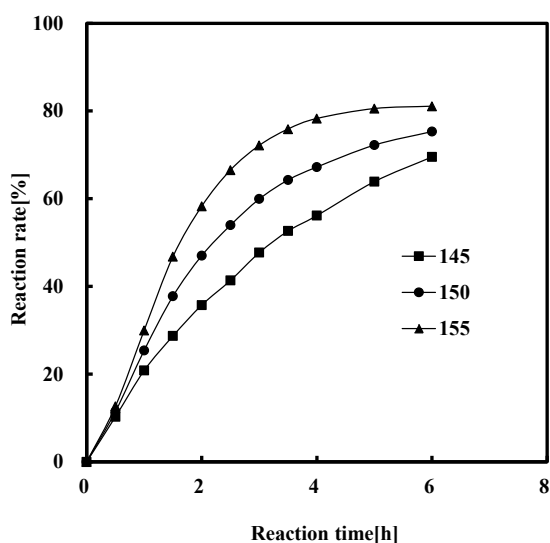


図8 反応時間の反応率への影響(半回分式)

衡に達した. *m*-TSA は *p*-TSA に比べて分解しにくいので, *m*-TSA が原料中に存在するプロセス品では, 加水分解が起こりにくく 40%程度の反応率で反応が終了したと推察される. 図8に示した高濃度プロセス品を用いた半回分水添加方式では, 反応温度 155°C, 6h で 80%以上の反応率が得られた. 高濃度プロセス品には *m*-TSA が 25%と低濃度プロセス品の *m*-TSA 50%に比べて低いため, 回分濃縮方式で得られた値より高い反応率が得られたものと考えられる. 残留する *m*-TSA を強制的に加水分解すべく, 160°C以上で反応させると TSA が硫酸により酸化され黒色の炭化物が析出した. また, 残液も着色したため加水分解は 160°C以下で行う必要があることが判明した. 加水分解反応においても, 転位反応と同様に速度論的解析を行った. 高濃度プロセス品を仕込み, 155°C, 半回分水添加方式で 0.5~1.0h ごとに残留液をサンプリングし, 添加水および留出液の物質収支と残留液の分析結果から反応率, 異性体比率の推移を追跡した. 図9に 0.5~1.0h ごとにサンプリングして分析した異性体比率を示した. ●, ▲, ■は実測値を, また, 実線・破線・鎖線はシミュレーション結果を示している. 図9の異性体比率については, 推算値が反応初期の急激な変化には追従していないものの, 現象をよく再現できていると思われる.

4.4 硫酸濃度の影響

TSA の加水分解反応は, 図1の反応式に示したように生成物側の硫酸濃度を下げれば, 反応速度が向上することが予測される. そこで希硫酸を水で希釈し硫酸濃度を下げて, 加水分解を実施した後に水分を加熱留去する方法に, 効果があるかどうかを見極めるために以下の検討を実施した. 上述の加水分解反応シミュレーションモデルを用いて, 原料に高濃度プロセス品を用い, 反応温度を 155°C, 半回分

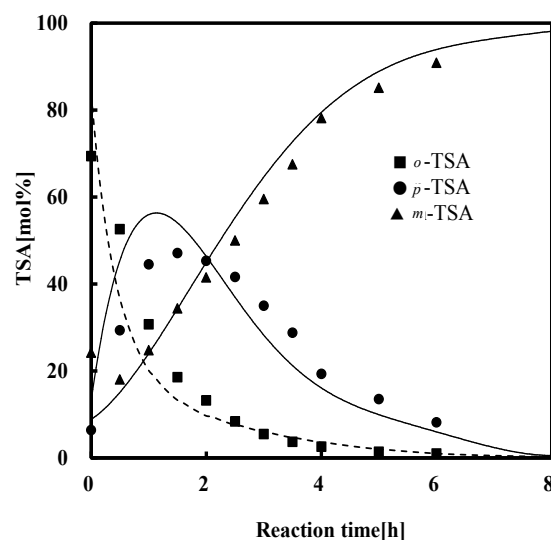


図9 加水分解反応時間と異性体比率

方式で硫酸濃度を 20~75%に変化させた場合の反応率(6h 後)への影響を推算し図10に示した. 硫酸濃度(仕込み)が 50%を超えた辺りから逆反応(スルホン化)が支配的になり, 急激に加水分解反応率が低下することが確認された. 本結果は, トルエンの半回分式スルホン化反応において, 硫酸濃度が 50%を超えた辺りから TSA の合成反応が定常状態になり, スルホン反応速度が硫酸濃度の 1 次比例して増加すると報告⁴⁾されている内容と一致する. 高濃度プロセス品(硫酸 51.4%, 155°C, 6h)で 79.2%の反応率が得られたのに対して, 硫酸濃度を 20%に低下させれば, 反応率が 86.9%と 7.7%向上することが期待される.

但し, 硫酸濃度の低下に伴い沸点が低下し, 20%では 104°C程度となるため加圧して沸点を 155°Cまで上げる必要がある. そのためには 5 気圧程度まで加圧することとな

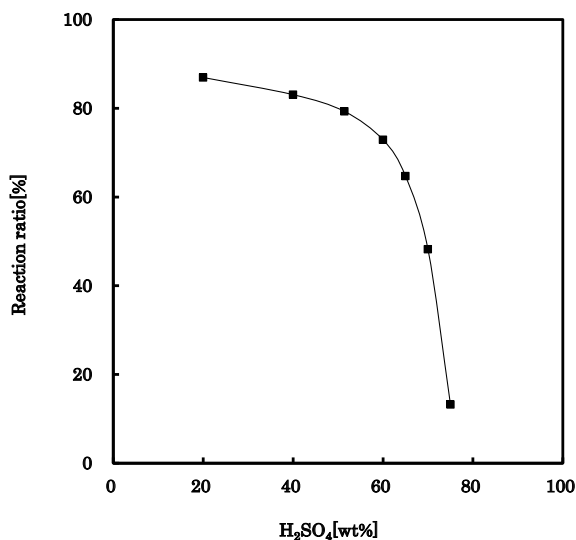


図10 硫酸濃度と 6h 後の反応率

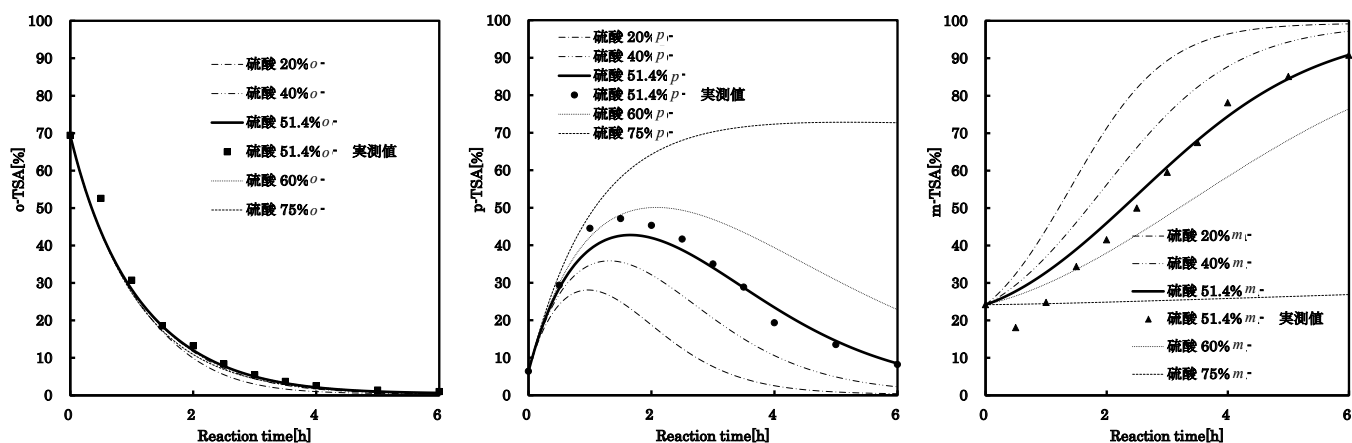


図 1-1 硫酸濃度と異性体比率

る。低濃度プロセス品でシミュレーションを実施した結果では、高濃度プロセス品のような反応率の向上は望めない結果となった。図 1-1 には硫酸濃度の各異性体比率への影響を示した。異性化比率では σ 体は硫酸濃度の影響をほとんど受けずに低下するが、 p 体、 m 体は硫酸濃度が高いほど高くなる結果となった。但し、本推算結果は、実験では確認されていない。また、図 1-2 に示したように異性体比率では、硫酸濃度の増加に伴い p 体比率が増加し、 m 体比率が低下する結果となった。

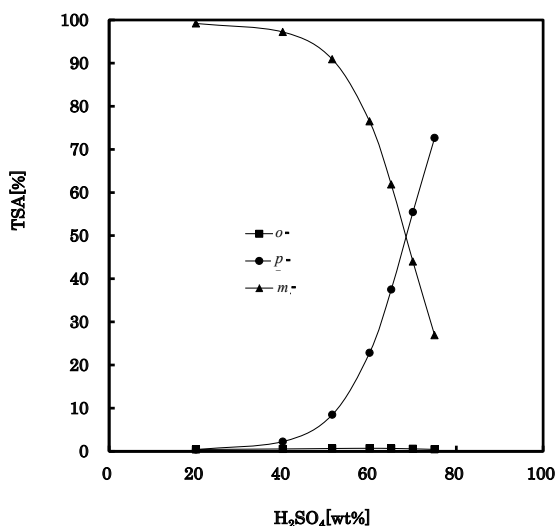


図 1-2 硫酸濃度と 6h 後の異性体比率

5. まとめ

- ① p -TSA 合成プロセスから生じる希硫酸中に含まれる TSA 異性体に関して、異性化反応温度の異性体比率への影響を実測し、反応速度式に基づく推算を可能とした。また、加水分解反応においても、反応時間と反応率および異性体比率との関係を推算可能とし、実測値と良く一致することを確認した。
- ② 希硫酸中の TSA の加水分解における半回分水添加方

式における反応時間と反応率の関係を実測した。実測値から原料として p -TSA を用いた場合、 150°C 、4h 程度で反応率 90% が得られた。また、回分濃縮方式では、硫酸水溶液の沸点制約により 4h で反応率が 85% に達することが判明した。

- ③ 高濃度プロセス品を用いた半回分水添加方式では、反応温度 155°C 、6h で 80% 以上の反応率が得られた。また、 160°C 以上では硫酸による酸化に起因する黒色析出物が生じた。
- ④ 原料中に m 体を多く含む低濃度プロセス品では、分解が起こりづらく、最終反応率が 50~55% 程度までしか進行しないことが判明した。また、常圧での反応温度が、硫酸水溶液の沸点に達し、反応温度を上げられないことも確認された。
- ⑤ シミュレーションモデルを用いて、硫酸濃度の加水分解反応率への影響を推算したところ、硫酸濃度が 50% を超えると反応率が急激に低下することが明らかとなった。そこで、硫酸濃度を低下させて加水分解反応率を向上させるべく検討を行ったが、大幅な反応率の向上は期待できなかった。

References

1. 永井芳男, N.N.ボロチュツォフ, ファインアロマティックス中間体 -その化学と合成-, pp34-54, 技報堂(1973).
2. 竹中二郎他, トルエンの半回分式スルホン化反応における異性体分布, 工業化学雑誌, 70 巻 10 号, pp1695-1698(1967).
3. Morley J. O. and Watson S. P., Experimental and molecular modeling studies on aromatic sulfonation, *Journal of the Chemical Society, Perkin Transactions 2*, 3, 538-544(2002).
4. 竹中二郎他, トルエンの半回分式スルホン化反応の速度論的研究, 工業化学雑誌, 70 巻 10 号, p1690-1694(1967).

Kinetics Study on Hydrolysis of Toluenesulfonic Acid

Yoshiaki SAWADA^{1*}, Yuya MIZUTANI², Shinya YODOYA¹

1:Dept. of Chemistry and Biochemistry

2:E-TEC (Emulsion Technology) Co., Ltd.

p-Toluenesulfonic acid (*p*-TSA) which is used as catalyst for organic synthesis is produced by a chemical reaction between toluene and concentrated sulfuric acid. Dilute sulfuric acid solution contains unrecovered TSA which is generated in the manufacturing process as a by-product. Unrecovered TSA in the dilute sulfuric acid solution is disposed as waste, resulting in raw material loss and cost increase. Unrecovered TSA has potential to be hydrolyzed to toluene through hydrolysis reaction and can be recycled in a sulfonation process. We studied the isomerization and hydrolysis reaction experimentally and kinetically to find the most suitable operating conditions. As a result, we made it possible to estimate trends of the isomer ratios and reaction rate by the simulation model based on the reaction equations with high accuracy. It is also confirmed that the relation between temperature and rate constants were obtained by the data from the experiments and the activation energy and frequency factor were obtained by the Arrhenius equation. The yield of hydrolysis of TSA was about 80% for 6 hours at 155 °C by semi-batch reaction method.

Key Words : Toluenesulfonic acid, Hydrolysis, Isomerization Reaction, Kinetics

「鈴鹿高専の専門力を結集して三重の海を守ろう」プロジェクト について

平井 信充^{1*}, 甲斐 穂高¹, 山口 雅裕¹, 黒田 大介², 兼松 秀行²

1: 生物応用化学科

2: 材料工学科

鈴鹿高専の宝である学生の力を最大限引き出すために、基礎学力と並び社会人基礎力の強化が必須である。後者を強化する場として各種創造活動プロジェクト等があるものの、専門を最大限生かすことができる機械工学科、電気電子工学科、電子情報工学科と比較して、生物応用化学科、材料工学科の学生については必ずしも適切な場が十分とは言えない状況である。以上の背景を元に、学生が社会人基礎力を強化することが可能な場を提供すると同時に、地域に根ざした学科横断的な研究成果を発信することが、本「鈴鹿高専の専門力を結集して三重の海を守ろう」プロジェクトの目的である。

Key Words : 海洋環境, COD_{OH} 化学分析, プラクトン観察, 創造工学, 教育効果

(受付日 2013 年 9 月 4 日 ; 受理日 2014 年 1 月 9 日)

1. 緒言

鈴鹿高専生は鈴鹿高専の宝であり、その潜在能力を引き出すための場を提供することは極めて重要である。鈴鹿高専のスローガン「創造力豊かな国際社会に通用するエンジニアの育成」の達成のためには、現状の講義カリキュラムは保持しつつ、特に、英語力と並んで、社会人基礎力¹の強化が極めて有効であると考えられる。社会人基礎力とは、経済産業省が提唱する「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」をあらわす概念であり、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」の3つの能力から構成されている。社会人基礎力を強化する場として、4, 5 学年では卒業研究や創造工学等がカリキュラムとして設定されているが、1~3 年といった、より若い年代への機会提供も極めて重要である。その際、機械工学科、電気電子工学科、電子情報工学科の学生は、ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、エコカープロジェクト、小水力発電プロジェクト、デザインコンテスト等の「創造活動プロジェクト」等を通じて自らの専門を最大限生かしながら社会人基礎力を強化できる機会が得られるのに対し、それらと比較すると、生物応用化学科、材料工学科の学生については、そういった場が限られているのが現状である。

以上の背景を元に、生物応用化学科、材料工学科の学生に自らの専門を生かしながら社会人基礎力を強化でき

る機会を与えるため、「鈴鹿高専の専門力を結集して三重の海を守ろう」プロジェクトを2013年度に立ち上げた。そのコンセプトと現在までの活動について報告する。

2. プロジェクトの目的、趣旨

まず、プロジェクトを立ち上げるにあたって、プロジェクトの目的として以下の2つを設定した。1つは教育的側面からの「鈴鹿高専生、とりわけ生物応用化学科、材料工学科の学生の社会人基礎力の強化」である。緒言で述べた通り、生物応用化学科、材料工学科の学生が、その専門を十二分に生かしてチームの中で先導的役割を果たすことができる場を新たに提供する必要があると考えた。勿論、最終的には全学的なプロジェクトへの移行を視野に入れているが、まずは生物応用化学科の学生、次いで材料工学科の学生にターゲットを絞ってプロジェクトを軌道にのせることを目指すこととした。

もう1つは研究的側面からの「地域に根ざした学科横断的研究成果の発信」である。高専1~3年は年代としては高校生と同じであるが、高等教育機関である高専の特徴を考慮して、その専門性を重視したテーマをとりあげることとした。そのため、後述する通り、本プロジェクトの成果を学生から発信する手段としては、コンテスト等よりは寧ろ学生による学会発表に主眼を置くこととした。また、「技術者養成に関する地域の中核的教育機関」という立場からプロジェクトのテーマの大枠を検討した。

三重県は、海岸線の長さが全国第8位²⁾に位置し、内湾(伊勢湾)環境と外洋(熊野灘)環境の両方を含むといった、日本でも有数の「海洋県」であることから、海に着目して、「鈴鹿高専の専門力を結集して三重の海を守ろう」というプロジェクトの名称を決定した。

3. 学生アンケートおよびプロジェクト詳細

前章であげた目的の達成に向け、「鈴鹿高専の専門力を結集して三重の海を守ろう」という名称での2013年度開講の「創造工学演習」を立ち上げた。「創造工学演習」とは、「独自性のある工作、実験、調査等の演習課題について、新規機能、新データ解析、手法、考察等を行う」授業であり、専門の選択科目の1つである。放課後や長期休暇を利用して本創造工学演習を実施することとし、2013年度は、生物応用化学科の3年生にターゲットを絞って、参加者を募った。その際、まず、2013年5月初旬に、教員(山口、甲斐、平井)からの趣旨説明および全員でのフリーディスカッションを行った後、学生にアンケートを行い、当日参加した23名全員から有効回答を得た。なおアンケートは4項目からなり、自由記述形式とした。項目は以下の通りである。

- (1) この創造工学演習に参加した(or 参加を検討している)理由について、自由に書いてください。
- (2) この創造工学演習でやってみたいテーマはありますか？あれば書いてください。
- (3) 授業以外に、クラブや他のプロジェクト、バイト等、本演習との両立が必要な何かはありますか？何か本演習に対する希望はありますか？
- (4) 他に何かあれば、以下に自由に書いてください。

本アンケートは学生にとって興味の高そうなテーマを検討する目的で行った。そこで、項目(1)(2)(4)から主要なキーワードをリストアップしたところ、以下のようになった。

- 8名：「(海の)生物、生態」
 3名：「(海の)水質」、「透明骨格標本」
 2名：「エネルギー」
 1名：「大気汚染」、「光合成」、「微生物」、「花火」、「環境」、「エンジン」、「病気」、「化粧品」、「CO₂」、「酵素」

なお、学生には必ずしも(三重の)海にとらわれなくてよいと伝えていたため、上記には海に無関係なキーワードも含まれている。

以上を受けて、教員でプロジェクトの詳細の検討を行った。プロジェクトで行う内容の決定については、専門性の確保の観点から、学生に任せることが難しいと考え、

上記のアンケート結果を踏まえて教員で相談の上決定し、学生に提示することとした。

まず、生物応用化学科の特徴を考慮して、生物分野と化学分野の双方にまたがる内容とした³⁾。また、専門性を重視したテーマをとりあげるが、実験手法自体は既に履修済みの内容とすることにより、低学年時に学ぶ内容が高学年および卒業後につながっていることを実感させることを狙った。更に、(三重の海を)「守る」ためにはまず「知る」ことが重要と考え、「三重県の海の海洋環境を生物、化学の両面から知る」ことをプロジェクトの目的とした。具体的な調査・検討内容は以下の通りである。

- (1) 海洋環境の化学的側面として、三重県各地の海岸で海水をサンプリングして、海水中の有機物量を化学的酸素要求量(COD_M)分析により測定する。
- (2) 海洋環境の生物的側面として、三重県各地の海岸で海水をサンプリングして、海水中のプランクトンを顕微鏡で観察して調査する。
- (3) 海洋環境の化学的側面と生物的側面の相関について検討する。もし、関連性が無ければ、関連性が無い理由であったり、関連性があると思われる調査項目についても検討する。

なお、(1)で行う滴定、(2)で行う光学顕微鏡観察はどちらも既に学生実験等で履修済みの内容である。



図1 海水サンプリング箇所

以上の内容について、学生（創造工学演習受講者 24 名）に提示した上で、7 月下旬に白子海岸において、海水のサンプリング方法の講習会を開催した。その後、本演習における具体的な調査箇所決定について学生に一任し、北は桑名、南は尾鷲までの 12 ヶ所（講習会を行った白子海岸を含めると 13 ヶ所）を決定した（図 1）。選んだ地点は、砂浜や護岸された港、河口など様々である。その後、夏休み期間中に、学生が 3~4 名ずつのグループに分かれて、海水のサンプリングを行った（図 2）。また、8 月下旬には参加可能な学生 12 名を集め COD_{OH}分析を学生の手で行った（図 3）。



図 2 プランクトンネットによる海水サンプリング



図 3 COD_{OH}分析の様子

分析結果の詳細については別紙に譲るが、例えば、白子海岸での調査では、有機物含量の多い地点に生息するとされるフジツボのキブリス幼生やゴカイのネクトケータ幼生が有機物含量の少ない地点に生息するとされるトゲナシエボシミジンコと同所的に採集されるなど興味深い知見が得られている。解析を進めることにより、三重県沿岸域における海洋環境の化学的側面と生物的側面の相関に新たな知見が得られることを期待できると考えている。

4. プロジェクト上の留意点、教育効果、中間アンケート

チームを組んで円滑にプロジェクトを遂行する能力は、社会人基礎力の主要な要素の一つであると考え、前述の

通り、調査の日時や調査地点の割り当てなどは学生に一任し、教員ができるだけそれにあわせる形を取っている。顕微鏡観察についても、複数曜日の放課後に実習室を開放し、その都度学生が自由に参加できる形を取っている。但し、正課への影響を避けるため、クラブ活動などと同様、試験期間中（定期試験 2 週間前から終了まで）の間は、活動を行わないこととした。

また、プランクトンに関しては、膨大な種が報告されているため、種レベルでの同定は大変難しい。教員からは、種名を決めることにこだわることなく、調査地点ごとの類似や違いといった傾向を掴むように、という指示を行った。現在、学生同士でディスカッションしながら、データをまとめようとしているところである。

更に、活動を行う中で、リーダー的な役割の学生と、そうでない学生が分かれてきた。人数を考えればこれは予想されたことであり、その中で円滑な活動が行われることが理想である。そこで、それぞれの立場にある学生の意識を探り、今後の進め方に反映させる目的で、本創造工学演習についての中間アンケート調査を 10 月に行い、受講者 24 名全員から有効回答を得た。その結果の概要を図 4 にまとめて示す。(a)の「テーマを受講しての感想」は、希望者のみが受講していることもあり、極めて好意的なものであった。(b)の「テーマの難易度」は、易しいという意見と難しいという意見がおおよそ同数であった。作業自体はシンプルで易しいが原理や考察は若干難しいという意見が大半であり、教員の想定内であった。(c)の「生物分野と化学分野の双方にまたがる内容」という観点については、半数以上の学生が有意義と回答したが、一方で生物的側面のみが強いという意見も複数存在した。そこで今後は、現状の COD_{OH}の精密分析に加え、複数の調査項目（窒素、リン等）についてパックテストを用いた簡易分析を補完的に行って、化学分析の調査項目を増やすことを考えている。その結果、限られた時間の中で研究に必要な専門性を確保しつつ、より詳細な考察が可能なデータを学生が入手することができればと考えている。(g)の「主体的に参加できたか」という設問に対しては、大半が主体的に参加できたと答えた反面、勉強やクラブ活動などとの兼ね合いで毎回の参加は難しかったという回答もあった。また、(f)の「やりがいや達成感」についてあまりなかったと回答した学生は、その理由にまだ半年しか経過していないことに加え、今までの活動が、海水サンプリング、化学分析、顕微鏡観察のみであることを挙げている。今後は、考察や発表などの活動もあるので、これらを通じてそれぞれの学生なりの「主体性」を出して活動し、「やりがいや達成感」を感じてくれればと考えている。なお、(h)の「発表したいか」については、半数以上が発表を希望しており、できる限り発表の場を数多く用意できればと考えている。

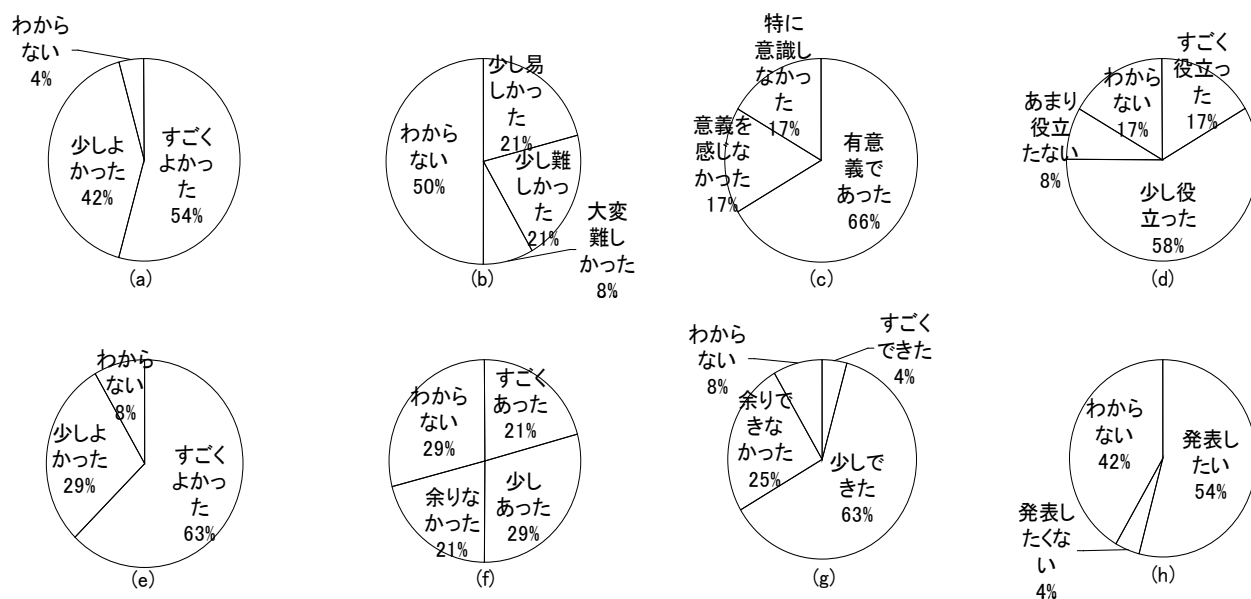


図4 中間アンケート結果（選択式設問，創造工学演習受講者 24 名からの回答）

(a) 実際にテーマを受講して、その内容はどうですか？ (b) 本テーマの内容は易しいですか？難しいですか？ (c) 本テーマは、生物と化学の両方にまたがるテーマですが、そのことに関して有意義でしたか？ (d) 実際にテーマを受講して、研究・分析手法の習得に役立ちましたか？ (e) 本テーマはフィールドワークを取り入れています、よかったですか？ (f) 本テーマを受講して、現時点で、やりがいや達成感はありましたか？ (g) 本テーマについて、自身は主体的に参加できましたか？ (h) 今後、外部発表（口頭発表，ポスター発表）する機会があれば、自分で発表したいですか？

5. 今後の予定

今後は、秋および冬にも計 1～2 回の海水サンプリングを行い、既に得られている調査結果も踏まえて、海洋環境の化学的側面と生物的側面の相関について検討していきたいと考えている。また、学生による学会発表、具体的には、高専祭におけるポスター発表（2013 年 10 月，鈴鹿市），エコプロダクツ 2013 におけるポスター発表（2013 年 12 月，東京都），第 19 回高専シンポジウムにおけるポスター発表（2014 年 1 月，久留米市），日本動物学会中部支部大会における口頭発表（2014 年 3 月，岡崎市）を通じて、学生のプレゼンテーション能力を中心とした社会人基礎力の強化を行うと共に、教員による専門誌への論文投稿も行っていく予定である。

また、現状では生物応用化学科がパイロット的にプロジェクトを進めているが、材料工学科への展開については以下の通り進めていきたいと考えている。共著者の黒田，兼松は、金属材料の海洋浸漬実験の結果、微生物の種類やその分布が変化すれば、それに影響を受けた金属材料の腐食および生物付着状態が大きく異なることを既に明らかにしている⁴。このことは、海洋の環境（化学分析，生物調査等）をより正確に把握した上で、金属材料の海洋浸漬実験を進めることが極めて重要であることを示している。そこで、2013 年度後半には、化学分析，生

物調査を行った地点のうちの 1，2 箇所において、材料の海洋浸漬実験を行い、問題点を抽出し、2014 年度以降の本格的スタートに向けた準備を行えればと考えている。

6. 謝辞

本プロジェクト遂行にあたり、学内競争資金である「校長裁量経費」の助成を得ており、ここに感謝の意を表す。また、本プロジェクトに関して、創造工学演習の共同開講者であり、適切なコメントを頂いた鈴鹿高専生物応用化学科教職員の皆様に感謝する。最後に、本創造工学演習を主体的に実行しアンケートにも協力いただいた、平成 25 年度生物応用化学科 3 年生の 24 名に感謝する。

References

1. 経済産業省ホームページ
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
2. 国土交通省水管理・国土保全局海岸室：海岸統計。
3. 山口雅裕，甲斐徳高，中川元斗，平井信充：創造工学「干潟の環境を分析する」とその教育効果，高専教育，Vol.37，印刷中。
4. 黒田大介，鎌倉渚，小松真也，生貝初，兼松秀行，小川亜希子：海洋環境下における種々の金属材料への海洋生物付着，CAMP-ISIJ，Vol. 23，(2010) 666。

(Original Article)

Educational and Research Project of “Protection of the Sea of Mie Prefecture Based on Academic Abilities of Suzuka National College of Technology”

Nobumitsu HIRAI^{1*}, Hotaka KAI¹, Masahiro YAMAGUCHI¹, Daisuke KURODA², Hideyuki KANEMATSU²

1:Dept. of Chemistry and Biochemistry

2:Dept. of Material Sciences and Engineering

The basic abilities that a full-fledged member of society is required to have, as well as basic scholastic achievement, are indispensable for the students in Suzuka national college of technology. There are a lot of opportunities for the students in the Department of Mechanical Engineering, Department of Electrical and Electronic Engineering, and Department of Electronic and Information Engineering to strengthen their basic abilities for the member of society, but not for those in Department of Chemistry and Biochemistry and in Department of Materials Science and Engineering. The purpose of the educational and research project, called “Protection of the sea of Mie prefecture based on academic abilities of Suzuka national college of technology” is not only to provide the students in Department of Chemistry and Biochemistry and those in Department of Materials Science and Engineering the opportunity to strengthen their basic abilities for the member of society, but also to present research activities based on Mie prefecture.

Key Words : marine environment, chemical oxygen demand, observation of plankton, creative engineering, educational effect

教室内・画像提示装置の開発と運用

石原 茂宏^{1*}

1:教育研究支援センター

学生への連絡とビデオ作品を表示するため教室用デジタル・サイネージシステムを開発し、2008年1月より本科25教室に設置・運用している。システムはMicrosoft Windows XP Home EditionのクライアントPC、Web Server、FTP Serverによって構成されている。本稿では装置のシステム構成と、約5年間の運用状況を報告する。

Key Words : デジタル・サイネージ, 教室, ネットワーク, HTA, Windows

(受付日 2013 年 8 月 29 日 ; 受理日 2014 年 1 月 9 日)

1. はじめに

2008年2月より教室に教室内・画像提示装置(電子看板、デジタル・サイネージ)を設置し、運用している。設置にあたって求められた機能は、(1)学生が作成したビデオコンテンツを昼休みに再生すること、(2)教職員からの連絡事項を指定した教室に表示する機能を持つこと、(3)全教職員が特定の端末に限らず連絡事項を入力できることの三点であった。

寡聞にして条件を満たすデジタル・サイネージが見当たらなかったことと、運用開始までの準備期間が非常に短かったこともあり、既製品のサーバ・パソコン・モニター等によるハードウェアと自作のソフトウェアにより構成されるシステムとして開発した。

2007年11月から機種選定等にとりかかり、12月に工事業者により本科25教室へ機器を設置、2008年1月よりソフトウェアの作成に取りかかり、1月末にビデオ表示の運用を開始、5月には教職員各位によるメッセージ入力と表示を開始した。

さらに2009年には専攻科4教室へ、2011年には食堂へ追加設置をおこない、現在も運用中である。

2. システムの概要

2-1. 教室内・画像提示装置

図1は教室に設置されている提示装置である。黒板の隣に20.1インチのワイドモニターが天井吊り下げ式のディスプレイスタンドに取り付けられている。安価なCeleronを搭載したパソコンを接続し、Windows XP上の自作ソフトウェアにより画面制御を行っている。また、モニターの裏側には薄型のスピーカーを設置している。

図2に実際にメッセージを表示している様子を示す。

一画面に一件のメッセージを表示し、メッセージが複数ある場合は数十秒後に切り替わる。メッセージの文字数に応じて文字サイズと表示時間は自動調節される。後席の学生からも視認可能とするには、設置したモニターのインチ数では全角50文字程度以内が望ましい。



図1 提示装置

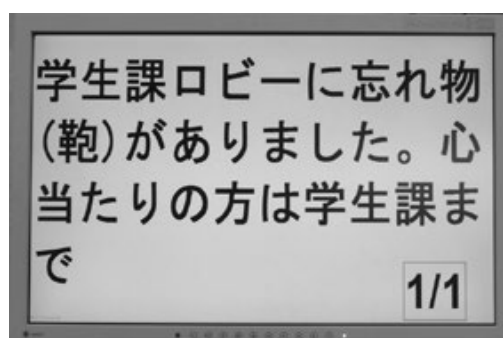


図2 メッセージ表示画面

ビデオとメッセージを表示する掲示用ソフトウェアには HTML と JavaScript を用いて HTA (HTML アプリケーション) を作成した。シャットダウンや ftp をおこなう制御ソフトウェアには VBScript と JavaScript を用いて WSH (Windows Script Host) を作成した。どちらもスクリプトとすることで短時間での機能修正が容易であった。

2-2. システム構成 (ハードウェア)

表 1 に掲示装置のハードウェア構成を示す。モニターには 5 年間のハードウェア保守を標準で備える耐久性の高いモデルを選択し、パソコンは低騒音・低発熱・低価格のモデルを選択した。

2-3. システム構成 (ソフトウェア)

表 2 に掲示装置のソフトウェア構成を示す。基本的に OS 標準搭載機能のみで構成しており、ウィルス対策ソフト以外の有償ソフトウェアは利用していない。環境保全のため Windows Study State によりシャットダウン時にはデスクトップ環境が元の状態に戻るようになっている。また、フリーソフトウェアの VNC を導入してリモートデスクトップによるメンテナンスを可能にしている。

表 1 ハードウェア構成

モニター	Eizo FlaxScan S2031W
取付金具	オーエス TH-200LD01
取付金具	オーエス TH-PA1000S
パソコン	EPSON ST110
スピーカー	YAMAHA NX-U10(S)

表 2 ソフトウェア構成

OS	Microsoft Windows XP Home
RDP	VNC 4.1
ウィルス対策	Symantec Endpoint Protection
環境保全	Windows StudyState

この他、Web サーバと FTP サーバによりシステムが構成される。

2-4. ビデオ再生

ビデオ作品の作成は学生によって行われる。放送同好会の活動や、部活動の勧誘等に利用された。

ビデオのファイル形式は OS が標準で対応する WMV 形式とし、解像度はファイルサイズとも勘案して 1280×720 を推奨した。再生を希望する日の前日までに FTP サーバにファイルをアップロードすると、当日の朝に掲示装置が自動的にダウンロードをおこなう。ストリーミン

グ再生ではなくポッドキャスト方式としたのは、全台同時再生時の遅延を避けるためである。

2-5. メッセージ入力方法

図 3 は教職員がメッセージ入力に利用する Web インタフェースである。イントラネットに接続した端末の Web ブラウザから入力可能である。認証は pop3 認証とすることでアカウント管理の負担を軽減している。

ソフトウェアには Perl で動作する掲示板ソフト Apeboard+¹ を利用し、画面構成のカスタマイズと、pop3 認証機能やプレビュー機能等を追加した。

図 3 教室内画面提示装置

表示させたい教室、メッセージ本文、掲載日数、入力者のアカウント名とパスワードを画面上部のフォームに入力する。掲示装置ではどのように表示されるか判るようにプレビューが表示される。

教室を選択すると、表示中のメッセージがプレビュー表示でリストアップされる。また、入力者のアカウント

名を入力すると、その入力者が投稿した現在表示中のメッセージがリストアップされ、新規作成するメッセージ文の参考にすることや、既に表示する必要がなくなったメッセージの削除をおこなうことができる。

メッセージ入力欄にはプレーンテキストを入力するだけで良いのだが、HTML のタグを用いた改行と文字色変更を指定できるようにした。はじめ、この機能は一般に開示していなかったが、多くの利用者が積極的に利用を始めたためヘルプへの記載をおこなった。また、その機会に画像ファイルを表示する機能を追加し、画像はモニター解像度の横幅にあわせて最大表示されるよう自動調節する機能を持たせた。

2-6. 基本的な動作

各教室の掲示装置は、制御用パソコンからの WOL(Wake On LAN)を受けて平日の午前 8 時頃に起動する。起動後は自動的にローカルログオンをおこない、スタートアップメニューに登録された制御用ソフトウェアが起動する。これにより FTP サーバから制御用と掲示用ソフトウェアのダウンロードがおこなわれ、それらが実行される。これは導入当初にソフトウェアの修正頻度が高いことを予想して、更新作業を容易にするために組み込んだ機能である。

その後、ビデオファイルのダウンロードが実行され、完了時には掲示用ソフトウェアが立ち上がる。まずは現在時刻を画面表示し、サーバ負荷軽減のためランダムに指定された秒数後に Web サーバにアクセスしてメッセージを取得する。Web インタフェースにより教職員から入力されたメッセージは XML 形式で各掲示装置から取得され、表示対象教室や表示期間の指定で取捨選択がおこなわれたのち画面表示される。メッセージ表示が一巡したのちには、再びメッセージの取得をおこなう。

昼休みの 12:20 にビデオ再生が開始され、再生終了時か 12:50 にメッセージ表示に戻る。

終了時間の 17:15 になると制御ソフトウェアにより終了処理が開始される。掲示ソフトウェアを終了した後に、起動後に自動ダウンロードしたファイルを全て削除し、OS をシャットダウンする。何らかの事情でシャットダウンが開始されなかった場合も、OS 起動から 12 時間後には自動シャットダウンする仕組みを盛り込んでいる。

3. 運用状況と改善点

3-1. 運用状況

図 4 に投稿されたメッセージ数を示す。導入当初より頻繁に利用されており、2008 年 4 月から 2013 年 8 月までに約 10 万件のメッセージを表示している。月平均で 1,513 件であった。

最も件数が多いのは 2011 年 6 月の 4,830 件であった。

以降、減少傾向にあるのは、表示数が多すぎるため本当に大切なメッセージを見逃す傾向にある、との指摘があったためだ。そのため入力時に指定可能な表示日数の最大値を短縮するとともに、事務局より教職員に対して、重要度の低い投稿は遠慮していただくこと、必要なくなったメッセージはすぐに削除していただくこと等の連絡をおこなっている。

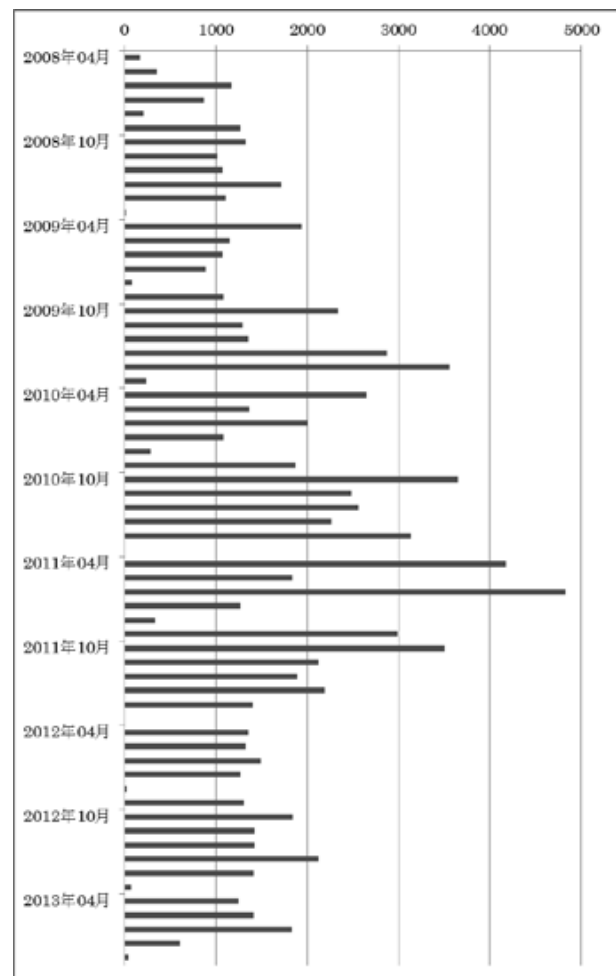


図4 メッセージ表示数

3-2. 導入後の修正と機能拡張

微細な動作不調から重大な障害まで、運用中に多くの修正を施す必要があった。また、その他の機能追加として、掲示画面にメッセージ数を表示、Firefox ブラウザへの対応、入力者へ機種依存文字を指摘するよう表示を工夫、画面表示に適さない長文メッセージの投稿を制限、専攻科教室へのメッセージ入力と表示に対応、管理コマンド機能の追加、視認性の高いフォントに変更、画面レイアウトの変更、等をおこなった。

2009 年 10 月には、授業補助のため本校が全学的に利用している CMS(コンテンツマネジメントシステム)の

Moodle との連携を可能にした。Moodle にログオンした学生の教室に表示されているメッセージが表示されるよう、自作のブロックを作成して組み込んだ。これにより自宅や外出先からもメッセージを確認することが出来るようになった。

2011 年 7 月には、寮食堂に同様の装置を設置したいという要望を受けた。食堂の入口に設置するため、メッセージ毎に画面が切り替わるのでは無く、一画面に必要な事項が全て表示されたほうが都合良い。そこで図 5 の大型テレビモニターを設置し、掲示ソフトウェアと入力インタフェースをカスタマイズしたバージョンを作成した。



図 5 寮食堂用提示装置

4. まとめ

本科 25 教室に設置する教室内・画像掲示装置を作成し、約 5 年間の運用をおこなった。設計・購入・開発期間が 3 ヶ月程度と極端に短期間だったため、運用しながら試行錯誤して修正と機能拡張をおこなってきた。

これまで業務として情報処理センター・情報処理演習室の教育用コンピュータシステムや、校内 LAN のネットワーク機器とサーバ装置の導入と運用をおこなってきたため、趣の異なる情報システムではあるが、それらの技術の応用で作成をおこなった。

幸いにして教職員からは好評で迎えられ、翌年には専攻科 4 教室へ、翌々年には寮食堂への追加設置をおこなっており、すべて現在も運用中である。

今後は、掲示装置に用いている Windows XP の製品サポートが 2014 年 4 月で終了するため、掲示装置を撤去するか、あるいは機器更新をおこなう必要がある。選択は事務担当者に委ねるのみだが、更新に備えて市販のデジタル・サイネージシステムを視野に入れつつ検討を開始している。調査したところ前回同様の機器構成としても市販品より数割は安価に導入できるようだ。また、Raspberry Pi のような極端に低価格な超小型 Linux コンピュータでも実用に足る可能性があり、試作を開始している。

References

1. <http://www.2apes.com/>

(Original Article)

Development and Operation of Digital Signage System in the Classroom

Shigehiro ISHIIHARA^{1*}

¹: Education and Research Support Center

I developed a Digital Signage System for twenty-five classrooms, in Jan 2008. The system consists of a Web Server, FTP Server, and Microsoft Windows XP Home Edition Clients. It can play short videos and display a short message for students. This paper describes digital signage system configurations and results for the period between 2008 and 2013.

Key Words : Digital Signage, classroom, Network, HTA, Windows

(Original Article)

**Problems and Visions of the Study of “the Doctrine of the Mean”
—Criticisms of Miyazaki and Kanaya’s theories of the Doctrine of the
Mean
and the thought of *Dui* (Preceding Chapter1) —**

Masaaki OGURA

In Japan, the start of the present evidential study of the Doctrine of the Mean, which was a real structural study that hurdled the limits of text critics, was *Chugoku shiso no tokushitsu* (*Characteristics of Chinese Thought*) by Miyazaki. The subsequent structural study of the Doctrine of the Mean was the study of *Chuyo* (*The Mean*) by Kanaya. Both works are ambitious and laborious, but many questions and problems remain unsolved. An important viewpoint to find answers to the questions and unsolved problems in their studies of “the Doctrine of the Mean” is to introduce and adopt dualist thought (“the thought of *Dui*”), which is a basic and traditional thought for Chinese people, to the study of the Doctrine of the Mean.

Keywords: Itisada Miyazaki, Osamu Kanaya , Doctrine of the Mean, structural theory of the mean, The thought of *Dui*

* Department of General Education (Humanities and Social Science

- (九)『孟子(下)』(小林勝人訳注 三五一頁 岩波文庫 一九九五年 参照)
- (一〇)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一三七頁 中公新書一
一二〇 一九九三年 参照)
- (一一)『中庸』(宇野哲人全訳 四三頁―四五頁 講談社学術文庫 一九八三
年 参照)
- (一二)『中国思想を考える』(金谷治 第三章 对待―両面思考― 一三七頁
中公新書一二〇 一九九三年 参照)
- (一三)『中国思想を考える』(金谷治 第三章 对待―両面思考― 九三頁 中
公新書一二〇 一九九三年 参照)
- (一四)『中国思想を考える』(金谷治 第三章 对待―両面思考― 一五六頁
中公新書一二〇 一九九三年 参照)
- (一五)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一四〇頁 中公新書一
一二〇 一九九三年 参照)
- (一六)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一四二頁 中公新書一
一二〇 一九九三年 参照)
- (一七)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一四五頁―一四六頁 中
公新書一二〇 一九九三年 参照)
- (一八)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一四八頁―一四九頁 中
公新書一二〇 一九九三年 参照) 『荀子(上)』(金谷治訳注 一
四六頁 岩波文庫 二〇〇六年 第一五刷 参照)
- (一九)『論語』(金谷治訳注 二三頁―二四頁 岩波文庫 一九八九年 参照)
- (二〇)『孟子(下)』(小林勝人訳注 一七四―一七五頁 岩波文庫 一九九五
年 第三六刷 参照)
- (二二)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四三頁―一四四頁 岩波文庫 一九九
八年 参照) 金谷氏は、注において、和とは、「雑多なものを包摂す
る調和均整の状態」としている。
- (二三) 化学反応―物質がそれ自身で、あるいは他の物質との相互作用によつて
他の物質に変わる現象。(日本大百科全書・小学館)。また熱力学では、
接している二つの系の間にみかけ上熱の移動がなくなったとき、熱
平衡に達したという。(熱力学的平衡・ウィキペディア)。
- (二四)『論語』(金谷治訳注 五六頁 岩波文庫 一九八九年 参照)
- (二五)『孟子(下)』(小林勝人訳注 七二頁 岩波文庫 一九九五年 参照)
- (二六)『大学・中庸』(金谷治訳注 一五七頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (二七)『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂著 七四頁 明徳出版社 平成元
年 五版 参照)
- (二八)『孟子(下)』(小林勝人訳注 三三三頁 岩波文庫 一九九五年 参照)
- (二九)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四八頁注三 岩波文庫一九九八年参照)
- (三〇)『対の思想と中庸思想―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的
背景(五)』(鈴鹿工業高等学校紀要 第四五巻 二〇一二年 参
照)。「対の思想の政治思想的意義―対の思想(両面思考)の生まれて
きた歴史的背景(終章)」(鈴鹿工業高等学校紀要 第四五巻 二
〇一二年 参照)
- (三一)『朱子学と陽明学』(島田虔次著 第一章 新しい哲学の出發 二八頁
岩波新書六三七 一九六七年 参照)
- (受付日 二〇一三年 九月 九日)
- (受理日 二〇一四年 一月 九日)

なければ、対待機能との整合性がとれなく、中庸思想の包容性や統合性に論理を展開して行けず、中庸思想は調和論であるとの結論に到達できない故である。

金谷氏が指摘した中庸の内面的な構造的な理解方法への新たな展開と、その未解決である歴史的意義の問題点については、「中庸思想の構造論」、「中庸思想の実現方法論」、「中庸思想の実現の必要条件と機能論」において卓見を述べたい。また中庸思想の政治思想的意義については、既に卓見を詳細に展開しているので、これらの論考を参照して頂きたい(二一九)。

最後に中庸思想を両極端への両面思考Ⅱ対の思想との関係において、解決するための具体的方法論について、問題の提起をしたい。

中庸思想には、中和Ⅱ調和論には収まり切らない、もう一つ別な構造化を持つ中庸思想が存在した。それは、孟子が子莫を批判した際に中庸思想Ⅱ執中有権論を展開している資料に端的に表現されていた。全ての極端思想を満足させた上で中を執る、有権の中庸思想が存在する。従って中庸思想の構造論を考察するためには、全く相異なる二つの中庸思想の成立過程の理論がある以上、中庸思想の構造論の考察については、全く逆方向の性格を持つ中庸思想の構造論の考察を行うことが、多くの成果を得る方法論だということできるであろう。

金谷氏が中庸思想の研究で真摯に追求してきた重要な問題提起は、個人と全体の調和を如何に解決したらよいのかという、今日的な問題であった。この問題は、現代の我々の真剣に考えなければならない重要な課題でもある。これは、国家論で言うなら、全体Ⅱ公権力と個人Ⅱ私権力という重要な問題を、一体、どのように理解したらよいのかという問題を、金谷氏が中庸思想研究で探求していることを意味していた。

中庸思想の抱えている重要問題は、島田虔次氏が宋学の第二の特徴に、修身・

齊家・治国・平天下の理想を挙げ、士大夫は二重の原理により行動する、儒教的世界(天下)は、国家と家族(個人)の二つの中心を有する楕円形の世界である(三〇)、という問題にも深く関係して行くのである。

このような国家Ⅱ公権力と家族Ⅱ私権力という、両極端の権力構造と中庸思想との関係についての問題については、全面的に中庸思想の構造論と中国の国家論的特色との相互関係論において、詳細に論証しなければならない、非常に重要な大きな問題なのであるが、その一端は既に発表している卓見(二一九)を参照して頂きたい。

注

(二〇一三年十月二十六日 稿了)

- (一) 「中国思想の特質」(宮崎市定 『岩波講座 世界歴史』第四巻 月報 一三 一九七〇年 五月 参照)
- (二) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 「中庸」 中公新書一二〇一九九三年 参照)
- (三) 「中庸思想研究の課題と展望(一)——対の思想より考察した宮崎市定氏の中庸思想の構造学説の批評」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四七 二〇一四年 参照)
- (四) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 「中庸」 一二九頁—一六二頁 中公新書一二〇一九九三年 参照)。
- (五) 『大学・中庸』(金谷治訳注 一五一頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (六) 『大学・中庸』(金谷治訳注 一五三頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (七) 『論語』(金谷治訳注 二九頁 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 参照)
- (八) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 三七五頁 岩波文庫 一九九五年 参照)

金谷氏の中庸説は、中庸Ⅱ和Ⅱ礼Ⅱ調和として調和論の構造論の探求と、古代より李大釗に至るまで、中国ではいかに調和の精神が重要な思想であり、中庸が何故に中国思想の精髓になったのかを中心テーマにして、詳述した本格的な研究だった。金谷氏の中庸論は、調和論なのである。

しかし中庸の中心思想は、和気を中心とする人間関係における調和の精神Ⅱ和Ⅱ礼Ⅱ樂だけであつたのであろうか。なぜならば金谷氏自身が、調和の精神と全く相反するような、権Ⅱ臨機応変性という融通性のある中庸思想が存在することを挙げているからである。さらには時中の存在を指摘して、状況の変化に対応する中庸思想の存在を挙げているからである。問題なのは、権と時中を、直線状における右と左との直線状の間での融通性のあるほど良い中であるというように、調和の中庸思想の構造論の中に一本化してしまっていることである。しかしよく考えてみると、中和の中庸は、人々の和合や調和を説くものであり、そこに融通性や状況の変化を考慮すれば、一方に偏った方向に行く危険性が生じて、中和Ⅱ調和の精神が総崩れしてしまう。

また礼制度下の中庸は、人間社会における等差によりきつちりと規定された遵守すべき規則であり、それは融通性のある中庸ではない。だから中〈本体〉Ⅱ和〈作用〉の中庸と有権の中〈本体〉Ⅱ時中〈作用〉の中庸は、同一方向性の性格を持つ中庸思想とみなすことは、絶対に不可能であろう。

現に孟子は、「男女授受不親、礼也、嫂溺援之以手、權也」といい、注釈者の小林氏は、「權、方便の意。がんらいはハカリの分銅。おもうに、経は常の道で、常道を制するのは礼である。故にこの章の權は礼と相対しているのである。」「(二七)と、解説している。従って素直に普通に考えれば、中庸には、和Ⅱ調和を説く中庸思想と、権Ⅱ臨機応変を説く中庸思想という、全く相反する、両面思考

Ⅱ対の思想を持つ中庸思想が存在したと考えるのが妥当であろう。

四 結語―問題解決の方法論提起

結語においては、どのような方法論を提起すれば、中庸思想の構造論がより理解できるのか、その問題の提起をしておきたい。

金谷氏の指摘した三角形や円錐形の頂点説という中庸思想の内面的な構造的な理解も、対の思想が持っている多重性の原理論の中で、その時の状態により何次元の問題であるかを考察する必要がある。だから朱子は、「中は定まった体(かたち)がなく、時に従ったあり方をする」(二八)と、時間的変化により中の内容が変化すると言うのである。時間的変化により前後のみ動くことも、前後と左右が動くことも、前後と左右と上下が動くことも考えられる。

従って中庸の中は、中庸思想それ自身には構造論的な特色を持つ物ではない。歴史上の時代的性格における両極端―両端の否定と肯定という対の思想Ⅱ両面思考性の持っている、その時々歴史的な両極端の状態によって規定される、特殊具体的な歴史的な制約的性格をもつものであった。

⑨中の定義に就いて、折角、両端の否定と両端の肯定の対の思想Ⅱ二元性があると指摘しながら、否定論を肯定論に吸収して、中庸思想は調和論であると規定した金谷氏説の誤りの根本的原因是、朱子が述べた「対には対待(両端の相互依存性)と循環(両端の相互対立性・敵対性)で説く場合がある」との対の機能の二元性の指摘を無視して、対待機能に一元化して対の思想の内容を展開した所に存在する(二九)。何故ならば、対の機能を対待機能に一元化すれば、対立する語句を繋ぐ逆接の接続詞である「而」を順接の接続詞として読ま

と一方だけを取り上げて断言して言う事が問題なのである。

最後に金谷氏の中庸論の特色と、その誤りの原因について要約して、金谷氏の問題点を解決する方向性を述べておきたい。

中庸の中は、アリストテレスの中庸と同じく、融通性のあるほど良い中であるというが、この主張は、孟子の子莫の中道批判に引用した資料の誤訳であり、中国思想の中庸は、「不偏不倚」と規定されているように、融通性のない非常に正確な真ん中なのである。中庸思想の中の位置は、構造的には三角形ないし円錐形の頂点であり、これは真ん中であるというが、この学説は、実は一つの極端の位置である。図示化して見れば、一目瞭然である。

何故に「右でもなければ左でもない」という両極端の否定論を「右でもあれば左でもある」という両極端の肯定論に吸収してしまったのか、全く論理的な説明が無い。両極端の否定と肯定は、全く逆方向の性格であり、両極端の肯定論には、否定論は吸収できない問題である。しかし両極端の否定を両極端の肯定論に吸収しなければ、中庸の底辺である両極端は存在しなくなり、中の位置を三角形の頂点説に議論を誘導していけない。これが両極端の否定を肯定に吸収してしまった原因である。従って両極端の否定と両極端の肯定した場合の中庸の構造論は、両面思考―対の思想との関係において考え直す必要がある。

金谷氏の中庸思想論の最大の特徴と最大の誤りは、中庸思想の前提である両極端の肯定を前提として、全ての議論を強引に進めた事である。

両極端を肯定して中庸思想の構造論を組み立てるから、両極端を生かしてこれを底辺とした三角形の頂点に中が存在することになる。また引用資料に解釈においても、対立する言葉を結ぶべき接続詞である「而」は、本来は「しかるに」と逆説に解釈すべき所を、順接の助詞として「そして」と言う意味に解釈

して、中国語法の基本的原理に矛盾する解釈に陥ってしまったのである。

中庸思想を調和論として理解する上においても、両極端の存在をそのまま認めてしまうから、自己ないし自己主張という極端を認めてしまうのである。だから和Ⅱ調和論も、力の釣り合いの執れた力学的平衡論に陥ってしまった。

この方法論的な誤りが、和Ⅱ養の正確な資料の解釈である筈の、両極が消去されて初めて成立する両極の混じり合った「ごった煮」論から外れてしまう結果に陥った理由なのである。

また李大釗の「両譲に始つて両存在に安んずる」の解釈について、「調和の境地は我れも人も生かされるところにある」と述べている事を、主体性を保持しながらの調和論に誤訳してしまう結果に陥ったのである。譲り合えば自己の主体は、一旦は消えてしまう。この消えた上に新しく他者と調和して混じり合った中に、新しくなった形で自己が生かされるのである。これが和Ⅱ養Ⅱ調和論の正しい理解である。両極が生のまま生きて存在しておれば、多様な物の中に混じり合うことは決して起り得ない現象なのである。養も調和も成立しない。

結論的に言うならば、中庸思想の資料に見られる両極端の肯定と両極端の否定という、相矛盾した両極端が存在するにも関わらずに、金谷氏は、これを肯定論に吸収して一本化して、和Ⅱ調和論を主張したことが、立論に多くの矛盾した内容が出てくる原因があったのである。

従って金谷氏の中庸思想論を批判して受け継ぐべきことは、中庸思想には両極端の肯定と否定という相矛盾する前提が存在する以上、中国人の基本的な思考方法に立ち帰って、両面思考―対の思想を導入することによって、中庸思想を両極端の否定した場合と、肯定した場合に区別して、新しく中庸思想の構造論を見直す必要があるのである。

従って金谷氏の調和論は、晏子の羹論、史伯の資料「和は実に物を生ず、同なれば継かず」(鄭語)の和の意味と甚だ異なり、結果論的には両極が生きている「同」になってしまうことになるのである(二二)。

五―中庸思想と現代 この節で問題となる重要点を述べると、以下のようになるであろう。

金谷説の中庸思想の真髄は、対立するものが自己を主張しながら全体と調和する、状況が変化する中で安定した調和の中を求める所に、中庸思想の真髄がある、と主張していることである。

この問題については、『論語』にある孔子の言葉を引用してみたい。「先生がいわれた、『譲りあう心(礼譲―筆者注)で国を治めることができたとしよう、何の(むつかしい)こともおこるまい。譲りあう心(礼譲―筆者注)で國を治めることができないようなら、礼のさだめがあつてもどうしようぞ。』(二三)とある。礼は中を制度化したものであり、孔子は自己抑制した礼譲による調和論を、如何に重視していたのか理解できるであろう。

和調和は羹であり、「ごった煮」の意味である以上、自己の主体性、つまり極端にある個人の尊重は消去されていなければならない。しかし両端を生かすのが中庸だと言うのであるから、両端に存在する個人や他者の主体性は生きていなければならない。金谷説では、資料の解釈と理論とが矛盾していると言う以外にない。

つまり自己の主体性＝極端を無くして、周囲と調和して生きるのが、中和の中庸思想なのである。以下に三つの事例を紹介してみたい。

孟子は、儒教の始祖・孔子の人格について、

「孟子は言われた。『孔子は極端なことを決してなさらぬお方であった』(二四)

と、決して極端なことをしない中庸の人であったと、評言している。

孔子は特異なこと＝極端なことをしないと云う。『中庸』には、孔子の言葉として、次のような発言がある。

「先生はいわれた、『わかりにくいはっきりしないことをむりにさぐり出したり、風変わりな奇怪なことを行ったりすると、(人の注意を集めて、)後の世にそれを誉めて受け継ぐものも出るだろう。だが、わたしはそういうことをしない。君子は道を規準として行動するものだ。たとえ『力及ばず』途中で挫折することがあっても、わたしは『道を守るのを』やめることはできない。君子は中庸に依りそつてゆくのである。・・・』(二五)と、孔子は言うのである。

中庸を守る人は、実戦の過程において途中挫折することはあつても、極端な行動をして、一時的に人口に膾炙されるような、そういう常識外れの奇行人の行動はしないという。

北宋・仁宗朝の名宰相・杜衍の門下生に言い渡す治世の要点は、「門生、県令となるあり。公、これを戒めて曰く、『子の才器は、一県令は施すに足らざるなり。しかれども切にまさに韜晦して、圭角を露すことなかるべし。方を毀り瓦合して、中に合せんことを求めて可なり。しからずんば、ことに益なくして、いたずらに禍を取らんのみ』と。」(二六)とあり、門下生に注意をしている。

自己の才能を周囲の人々に見せびらかして批判を浴びるな、角を無くして円満な人格に努め、周囲と協調＝調和して、中和の精神を固く守りて禍を招くなと、人生の過福は中和を実践するか否かに係っていると、忠告するのである。

両端の否定と肯定という両者の矛盾関係を、金谷氏は、どのような関係にあるのか、何も説明しないで、中庸の中の位置を三角形や円錐形の頂点と述べていた。それと同じように、ここでも両極を生かそうとする両端の肯定が中庸だ、

書いて、調和の重要性を訴えているのです。」として、

「李大釗はこういうのです。調和と言うと、一般にはたがいに譲りあうことだと考える、おたがいに自分を抑えてへりくだって相手を立てて、それで全体が調和してゆけるというようにです。しかし、それは間違っているのではないが、それだけに止まっていはいけない。「両譲に始つて両存在に安んずる」で、調和の境地は我れも人も生かされるところにある。」と述べている。

次に金谷氏は、「調和のためには、自分を抑制して相手を受け容れる包容性が確かに必要です。しかし、そうだからと言って自分が消えてしまったのでは、合一の形は立派でも本当の調和にはなりません。・・・前のこった煮の話のように、おいしいスープができるためには雑多な材料の味がそれぞれに生かされていなければだめですね。違った味がすっかり消されてしまったのでは、それを混ぜ合わせた意味がありません」と、述べている。

最後に「中庸の中は、確かに対立する両端があつてこそその中です。そして、その両端を切り捨てるのではなくて、それぞれの立場を生かしながら包容的に中ほどに接収することによって、調和的な構造化を持った中が完成するのです」と言い、「李大釗の説くのは中庸ではなくて調和なのですが、完成された中庸の境地は真の調和の境地と一致する、つまり中和の世界だと言つてよいでしょう。」と、述べている。

ここで問題なのは、金谷氏の主張する和 $\parallel$ 調和論は、「自分が消えてしまったのでは本当の調和になりません」と、自分を生のまま存在させて相手と調和することだ、と言う点にある。これでは、晏子の言う和 $\parallel$ 羹の意味とは、はなはだ異なる内容になる。

雑多な材料の違った味を生のまま残すのではなく、異なつた生の味をすつか

り消すためにそれらを混ぜ合わせるのが、和 $\parallel$ 羹なのであり、両極端が生のまま肯定されては、かき混ぜた雑多な物が融合した複合的な味にはならない。

「いろいろな音声が集まりあい助けあつて音楽の調和ができて上がり、心も平安になると言います」と言うように、色々な音声が混じり合えば、元来の生そのまま極端な音が消えていくのである。新しい多くの音色が創造された中に、新しい自分が生き変えることになるのである。従つて「両極があつてこそその中で、両極を切り捨てないで、それぞれを生かした包容的な中に、調和的な構造化を持つ中が完成される」と言う、両極端を肯定した金谷氏の中 $\parallel$ 調和論の学説は成立しない。両極端の否定した上に、中 $\parallel$ 和 $\parallel$ 羹 $\parallel$ 調和論が成立するのである。

それでは両極端を肯定した中庸とは、どのような構造なのか、金谷氏の主張する調和論とは別個に検討する必要性がでてくる。

金谷氏は、一体、調和と言うことを、どの様に考えているのであろうか。金谷氏は、「二人の意見に付和雷同しているだけでは、何も変わったことは起こりません。違った意見が入つてきて議論が起こつて、そこで初めて新しい進展が出てくるのです。そのように違ったものどうして平衡を得ることになる、それを和というのだと言っています。調和とはそういうものなんです。変化のない一枚板の同ではない、つまり、みんな仲良くしようというだけの集合ではないということ。」と、平衡を得ることが調和であると、平衡 $\parallel$ 調和と理解して調和論の特色を述べている。

問題なのは平衡の内容である。平衡には力学的平衡、化学的平衡、熱学的平衡がある。金谷氏のイメージする平衡は、両極端の肯定の上に調和が成立するという考えであり、両極端の力のバランスが執られている力学的平衡を想定している。化学的平衡や熱学的平衡論では、生の材料が消えてしまうからである。

四―中庸の調和 この節で問題となる重要点を述べると、以下のようなになるであろう。

金谷氏は、「両端がなければ中も和ありません。両端がひつこんで消えてしまえば和にならないのです」と述べて、両極端が存在しなければ、中も和も調和も存在しないと断定する。しかし『春秋左氏伝』の資料に引用する晏子の羹の意味は、「材料が多すぎたら減らす、足りなければ増やす、―中庸ですね。そうして得られるのが味の調和です。音楽も同じことだと言われています。五声・六律・七音・・・、清濁大小、長短高下、いろいろな音声がまじりあい助けあって音楽の調和ができ上がり、心も平安になると言います」と、述べている。

「材料が多すぎたら減らす、足りなければ増やす、―中庸ですね」と言うならば、「多いと少ない」の両極端がひこんでしまつて存在しないことになる。また「いろいろな音声がまじりあい助けあって音楽の調和ができ上がり」と言うならば、両極端が消えていて、混じり合っているのである。

従つて金谷氏の主張する中と和には、「両極端が存在」する必要があるという理論上の調和論説と、引用した資料にある「晏子の羹」に言う「両極端が存在しない、混じり合う」という資料上の調和状態、この二つが食い違っているのである。金谷氏の主張する理論上の調和論と、引用資料の内容にある調和論が、全く正反対なのである。果たしてどちらが正しいのであろうか。

『中庸』には、中と和の関係について、以下のように述べていた。

「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆な節に中す。これを和と謂う。中なる者は天下の大本也。和なる者は天下の達道なり。中和を致して天地位し、万物育す。」とある。金谷氏は、この文章を訳注して、

「喜・怒・哀・楽などの感情が動き出す前の平静な状態、それを中という。〔そ

れは偏りも過・不及もなく中正だからである。〕感情は動き出したが、それらがみな然るべき節度にびつたりとかなっている状態、それを和と言う。〔感情の乱れがなく、正常な調和を得ているからである。〕こうした中こそは世界じゅうの「万事万物の」偉大な根本であり、こうした和こそは世界じゅういつでもでも通用する道である。中と和を実行しておしきわめれば、「人間世界だけでなく、」天地宇宙のあり方も正しい状態に落ちつき、あらゆるものが健全な生育をとげることになるのだ。」（二二）と、述べていた。

この訳注の文章によれば、中とは喜怒哀楽の感情に偏りも過不及の無い状態と言うのであるから、中とは喜怒・哀楽の両極端の存在しない、どちらにも偏りのない状態を意味している。和とは喜怒哀楽の両極端が節度に中つている調和している状態にあることを言う。

つまり両端が消去されている状態を中と謂うと、述べているのである。両端の存在を否定した中が表れて節度に適っているのが、和＝調和であると謂うのである。和は両極の否定の延長上に成立する概念である。

従つて金谷氏の主張―「そして右でもあり左でもあるというように違った両端を中央に接収して、そこに調和ができるといふことになります」―という両極端の肯定の上に調和が成立する、また両極端の肯定の上に中と和が存在する、と言う学説は全く成立しない。

しかし「右でもあれば左でもある」という両端を肯定した中は、存在することとは確かなのである。またこれは調和論でないことも確かなのである。だからこの両極端を肯定した中とは、果たしてどのような中庸なのであろうか。これが未解決な問題として残るのである。

金谷氏は、「中国共産党の創立者である李大釗は「調和の法則」と言う論文を

であると言っているのである。現実の社会的正義論として別異による調和の必要性を説いているのである。従って単に中を制度化した礼制と礼の別異を同次元では扱えない、異次元の問題であることは明瞭であろう。

では中Ⅱ調和と礼の関係は、一体どのように理解すればよいのか。

有子では中和の和(調和)と礼の関係について、以下のように述べている。この資料も宮崎説の批判において、既に引用したが、

「有子がいった、「礼のはたらきとしては調和が貴いのである。むかしの聖王の道もそれでこそ立派であつた。〔しかし〕小事も大事もそれ調和によりながらうまくいかないこともある。調和を知って調和していても、礼でそこに折りめをつけるのであれば、やはりうまくいかないものだ。」(一九)と言う。

中和の中庸は、世間の人々との和合や調和をめざす思想であるが、中和は普遍的な原理論である。社会生活していく上においては、現実には貴賤の等や親疎の差が存在する以上、一般原理論は直接には適応できない。中和の中庸に差等を付けて制度化した礼制Ⅱ別異がなくては、円滑に現実の社会的問題は解決できないのである。

つまり中Ⅱ中和は、調和の一般原則論であり、これを現実の身分制社会に適用していく際には、中和Ⅱ調和の一般原則論を、社会的身分の親疎上下において具体的に展開した個別具体的規範が必要になるのである。これが礼制なのである。礼の別異による調和論は、ここに存在するのである。

音楽の和についての問題は、金谷氏の説明には、「調和の観念は、音楽のハーモニ―から初めて得られたよう考えます。・・・「楽は天地の和なり」(同上)とか、「楽なる者は天下の大斉(整)なり、中和の紀なり」(『荀子』楽論篇)・・・」と、楽Ⅱ中和の資料を引用して、音楽の作用は和Ⅱ和にある、と言っている。

孔子や孟子も音楽について、そのようなことを述べているし、確かに正しい指摘であると思う。しかし音楽には、交響曲の調和Ⅱハーモニ―とは異なる、もう一つの作用が存在するようである。

孟子は、万章章句下で、孔子の人格を「聖の時なる者なり」Ⅱ時中の名人と言いい、諸聖人の人格を総合した集大成の人物である、と述べている。続いて孟子は集大成の言葉を説明して、

「集めて大成するとは、「どんなことか」というと、音楽を奏するときに、まづ鐘を鳴らしてはじめ「それを合図に笛や太鼓などの八音(衆音)が合奏され」、さいごに玉磬を打ってしめくくりをつけることである。はじめに鐘をならすのは、「この一声で衆音を引きおこして」条理の糸乱れぬ調和を合奏しはじめるものであり、磬を打ってしめくくりをつけるのは、「この一声で乱れずにきた衆音の」条理をまとめて合奏をおわるのである。このように糸乱れぬ合奏をはじめるのは智の働きであり、見事に合奏を終わるのは聖(徳)の力である。すなわち集大成するには、智と聖とを兼ね備えなければならぬ。またこれを弓術にたとえてみると、智とは弓を射る技であり、聖とは弓を射る力量である。たとえば百歩もはなれた所から弓をいるようなもので、矢が的にとどくのは射手の力量よるが、的にうまく命中するのは射手の力量ではなくて、全くその技巧によるものだ。」(二〇)と、述べている。

音楽における衆音の和Ⅱ調和を引き出す音として鐘があり、調和してきた衆音を締めくくる音として磬があるのである。つまり鐘を鳴らして楽Ⅱ調和は始まり、磬を打って楽Ⅱ調和を締めくくる。楽Ⅱ中和Ⅱ調和論を挟み込む鐘と磬は、両極端の音色なのである。この鐘と磬の両極端の音色の肯定と楽Ⅱ和Ⅱ調和論、という相異なる二つの音色を基礎にして、音楽が初めて成立するのである。

でちように中ほどを採って三年と定めたのだと、こういうふうに言われます。ですから、三年の喪は賢者もそれより過ぎることはできず、愚か者の及ばないわけにはゆかず、つまり喪における中庸だとされるのです『荀子』礼論篇、『礼記』三年間、喪服四制篇(一七)と、両極端の行為を抑えるために、人為的に三年の喪服制度を作成した、と述べていた。

それは、賢者と愚者の両極端を否定するために中を制度化したのであり、礼制度は両極端の否定した中を制度化したものであるといえる。この問題については、中庸思想の構造論において検討してみたい。

礼について二つ目の問題は、中と礼がどのような関係にあるかという問題である。金谷氏は、礼は中を制度化したものといい、礼は別異だとしている。そして「礼の中と礼の別異の関係」についての説明を以下のようにしている。

「中と別異とは、確かにその働きが逆になる観念です。中は過ぎもせず及ばないこともないということで、真ん中に寄りあつて一つになる方向ですが、別異は区別をはっきりさせて分けてゆく方向です。まるで違っているように思えます。同じ礼の性格あるいは作用にこんなに違って説明されるのは、不思議だとも言えますが、実はそこに、分けることによって逆に一つになる、別異によって調和が得られるという考えがあつて、それで別異も実は中と一致することになるのです。分けることによって一になる、調和するというのは、ややわかりにくい複雑なことで、中国的な思考だといってよいかも知れませんが、『荀子』のなかには、はっきりそう言っているところがあります。

「義を以て分かつては則ち和し、和すれば則ち一、一なれば則ち力多く、力多ければ則ち強く、強ければ則ち物に勝つ」(王制篇)

ここで初めて「分かつては」というのは、階級区別のことです。人間の優秀性は

社会生活群を営むところにあり、それがうまく行われているのは、社会正義(義)にもとづく階級分別(分)があるからだというのは、荀子の思想です。・・・分かれるということは、全体がばらばらになってけんかをするように取られやすいのですが、実は分かれることですっきり秩序だって全体が調和的に統一されるという面も大切なところですよ。礼の作用が別異だというのは、こちらの面を見ているのです。・・・(一八)と、礼の中と礼の別異は、求心性と遠心性という逆方向の考えなのであるが、二つの作用は同じ調和論であると、同一次元での調和論であると述べている。

この金谷氏の「礼の中と礼の別異の関係」についての別異の説明は、荀子の階級区別の正当性を説明しているように思える。つまり荀子の主張は、「社会正義により階級区別すれば、人々は和合し調和して、全体が一つになる。一つになれば、多くの人々が団結して、強くなり相手に勝てる」という意味であり、荀子は別異し階級区別をすれば、結果論として人間を和合し調和に導いていくと言う、現実の社会実践論による求心性し調和論を言っているのである。

礼は中を制度化した調和論を意味しているのであり、礼の別異は実際の社会的生活面での調和論を展開しているのであるから、礼の中と礼の別異し階級区分下での調和論を同一次元で議論することが、そもそも問題なのである。

金谷氏の引用した『荀子』の後半には、以下のように述べている。

「故に人は生まれれば群する無きこと能わず、群して分なければ則ち争い、争えば則ち乱れ、乱るれば則ち離れ、離るれば則ち弱く、弱ければ則ち物に勝つこと能わず、故に宮室にも得て居るべからざるなり。〔是れ〕少傾も礼義を舍つるべからざるの謂いなり・・・」(一八)とあって、別異による社会の調和による団結論と社会の争乱による混乱を防止するために、礼義が絶対に必要なの

常識的に考えて見て、中国語法上において無理のない解釈であろう。

つまり両極端の否定の場合には、両極端を肯定した場合と同じように、水平面あるいは直線面において君子の人格を表現しているのである。君子の人格を高次の統合的表現とする理解方法は誤りであり、金谷氏が言う様な三角形や三角錐の頂点説は成立しないのである。

だとすれば、「過ぎたるは猶及ばざるが如し」と「文質彬彬」のような両極端を否定した場合には、金谷氏説が成立しないとすると、中庸思想の内面的な構造的な説明が、改めて問題になるのである。

以上に例証したように、金谷氏は、両極端を否定した場合も両極端を肯定した場合も区別することなく、三角形や円錐形の頂点に中が存在すると、資料解釈をしていた。両極端の否定と両極端の肯定は、水と油の関係であり、同一の論理では理解できない問題なのである。

最後に金谷氏の中庸思想の構造的な理解の結論を纏めておきたい。

金谷氏は、中庸の構造的な理解する場合、「発想の転換が必要」だとして、両極端の否定を無視して、「而」が使用されている両極端の肯定の場合に吸収して、中庸の中の位置について、三角形や円錐形の頂点説を主張してしまった。

両極端を否定した場合と肯定した場合を区別することなく、無視ないし混合して理解していた所に、一番重大な誤りが存在した。

従って両極端の否定論と肯定論は、別の問題として区別して考察する必要がある、同一方向で理解することはできない。つまり両極端の肯定と両極端の否定という、中庸思想の構造的な、全く相異なる二つの構造的な存在する、との論証を展開する必要がある。

両極端の否定した場合の中庸を、「而」の資料のある場合に吸収してしまい、

中庸思想を高次の統合論として理解している。しかし引用資料の「而」を順接の接続詞として理解するには、中国語法上においては無理があり、「而」を逆説の接続詞として理解する必要がある。

従って金谷氏の主張する「両端を執りて」という舜の政治や、対立する言葉を「而」で結合した孔子や君子の人格的表現を、三角形や円錐形の頂点説に導いていく中庸思想の中の位置説は、根本的に資料解釈が誤っている以上、全く誤りと結論することができる。

つまり孔子や君子の育成や人材抜擢の人格を、対立・矛盾した両面を併せ持つ複雑な人格として理解する事が大切である。両面思考―対の思想を駆使して、全く相異なる二つの中庸思想の構造的な検討し直す必要がある。

三 「中庸」研究の問題点(二)

三―礼の中と楽の中 この節で問題となる重要点を述べると、以下のようになるであろう。

金谷氏は「礼は中を形にあらわしたもの」というが、中には、両極端を否定した場合の中と、両極端を肯定した場合の中が存在したのであり、金谷氏自身は、一体、どちらの中を意味して使用しているのか、概念規定が不明確である。

すでに宮崎氏の中庸思想説の批判において引用したが、金谷氏は、

「礼とは中を形にあらわしたもの、中を標準として定められたものだということです。その説明としては、たとえば親が死ぬと三年の喪に服するということがありますが、情の厚い子供はいつまでも親のことを思つてふつうの生活に戻ろうとはしません、しかし薄情な子供はすぐに忘れてしまうというわけで、そこ

果たして「而」を順接の接続詞として理解して、強引に孔子の人格を矛盾する正反對の両者の統合体と理解するのは、正当な中国語法なのであろうか。以下に両極端の肯定と否定の場合に分けて検討して見たい。

〔両極端を肯定した場合〕

例①—金谷氏が最初に「矛盾」と述べているように、而を対立した概念を結合する、逆説の接続詞として理解して、孔子の人格を、「温かいが、しかし同時に厳しい」として解釈して、矛盾・対立する両方の人格を合わせ持つ複雑な人間と理解するのが、常識的に考えて見て、中国語法上の無理のない理解であると思うのである。

孔子の人格について、原文の漢文は「温而厲、威而不猛、恭而安」となっている、この「而」は、「そして」と言う順接の接続詞ではなくて、「温であるけれどもしかし厲であり、威であるけれどもしかし猛ならず、恭であるけれどもしかし安なり」と、「しかるに」と言う逆説の接続詞と解釈して訳すべきである。

例②—また『書経』にある「直するどくして温、寛にして栗(きびし)、剛くして虐(むご)さなく、簡(大)にして傲恣・ほしいままなし」、「寛にして栗、柔(や)わらかにして立ち、愿(そぼく)にして恭との資料解釈は、正確な中国語法によりて訳すると、「而」は、「そして」という順接の接続詞ではなく、「直なれどもしかし温、寛なれどもしかし栗、簡なれどもしかし傲なし」、「寛なれどもしかし栗、柔なれどもしかし立、愿(そぼく)なれどもしかし恭」と、逆説の接続詞として解釈すべきなのである。

つまり、舜は子弟の教育において、相異なる全く逆の性格を求めていたものであり、禹王に進言した皋陶の言葉も同様に、全く逆の性格を持つ両面的人物の拔擢を求めていたのである。金谷氏の言うような高次の統合体的人格を要求し

ていたのではないであろう。

従って孔子の人格を、「一段高くなった所に孔子の人格がある」と言う、高次の統合的性格として理解するのは無理がある。つまり孔子の人格、舜の人材教育、禹王の拔擢方法における正反對の人格的表現は、両極端の人格を肯定した、逆方向性の性質を持つ両面的な人格を要求した表現として、水平面あるいは直線的な方向で理解すべき、文章表現方法なのである。

だとすれば両極端を肯定した場合の中庸思想の内面的な構造論の問題は、金谷氏の三角形・円錐形の頂点説が成立しないとすると、改めて中庸思想の内面的な構造論の解明が問題になってくるのである。

〔両極端を否定した場合〕

金谷氏は、『論語』の「文質彬彬」として、然る後に君子なり」を、「文(飾)と質(朴)とどちらに偏つても十分でない、両者が適度にまじりあつてうまくつりあいのとれた状況が得られて、それでこそ君子だというわけです。・・・文と質という対立した観念が、そのどちらにも偏らないでうまくまじりあつて、高次の統合的な一つの観念を表しているのです。」(二六)と、言う。

この両極端の否定の場合でも、金谷氏は対立した両極の観念を、「而」が存在した時と同じように解釈して、高次の統合体として君子の性格を、三角形や円錐形の頂点として理解している。

しかし「文質彬彬」—文と質という対立する性格が、「彬彬」と混じり合うと言うのは、両極端の否定である。両極端の否定の上に、そのどちらにも偏らない所に、中庸という一つの観念が表れるのである。従って両極を否定した場合には、「裝飾的でもなければ素朴的でもないが、この対立する二つの性格が上手く溶け合い混合した複合的性格を持つのが君子だ」というように理解するのが、

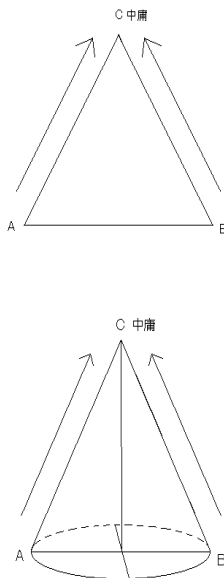
的な高まりを見せなければならないのか、中の実現方法において、資料的な実証性がなく、その論証過程において説明が不足しているのである。

金谷氏は、中庸思想の内面性にある構造論について、三角形の頂点とか円錐形の頂点というように、平面形の頂点や立面形の頂点であると理解している。しかし三角形や円錐形の頂点は、実は三極端の一つの極端の位置である。しかし中庸の中は、「不偏不倚」の「真ん中」なのである。金谷氏の主張するような頂点説では、「真ん中」にならない。

金谷氏は、アリストテレス的中庸思考Ⅱ直線的思考Ⅱ量的問題と、構造的理解Ⅱ質的問題の関係について、「矛盾関係を克服する弁証法との関係ということも考える必要があるわけですが、中国の伝統思想では矛盾関係をつきつめて考えると言う姿勢は乏しいようです」(二四)と、述べている。

しかし金谷氏の両極端の中という構造論説Ⅱ三角形の頂点説は、構造論的には西洋式の「正—反—合」の統一的理解であり、弁証法的な理解方法である。左記に図式化した金谷氏の中庸思想説の中心Ⅱ真ん中説は、よく見ると、本当の真ん中でなく、両極端を底辺にした頂点である事は、一目瞭然であろう。

金谷説＝三角形・三角錐の頂点説



ところで何故に、金谷氏は中庸思想の構造論において、このような間違いを

犯したのであるうか。その理由は簡単であり、中庸思想の構造論の理論化の過程と資料の解釈にある。

先ずそれは、「右でもなければ左でもない」という両極端の否定思考と、「右でもあれば左でもある」という両極端の肯定思考を混同して、つまり否定と肯定という全く正反対の対立する両極端思考を持つ両者を、肯定論に吸収Ⅱ一本化して統一的に理解しようとした所に、論理上の無理があり、理論化の誤りの根本的な原因が存在している。

否定と肯定を統一的に一本化して統合的に理解しようとすれば、どうしても金谷氏の主張するような頂点説Ⅱ極端説になってしまう。

それでは金谷氏の指摘した中庸思想の構造論説を正すには、金谷氏説の核心である「而」の解釈について、どのような資料的解釈と方法論を提起すれば、中庸思想の内面的構造論が正確に理解できるのであろうか。

つまり三角形や円錐形の頂点説で理解する場合の問題点は、正反対の両極端の言葉を繋ぐ「而」を、順接の接続詞として理解している所に、重要な誤りと矛盾が存在する、と思うのである。

孔子の人格表現について、「温而厲」の而を矛盾した両者をつなぐ順接の接続詞として理解している。金谷氏は、「この前後の言葉は本来結びつきにくい。対立するような概念です。「温」は温かく穏やかなこと、「厲」はその反対で厳しくて鋭いことです。これが結びついているということは、そうした矛盾とも見えるような性格が、孔子の人格として渾然と一つになっているのを表そうとしているのです。単なる温かさでもなければ激しさでもない、温かくて厳しいというその両者を包みこんだ、ある意味で一段高くなったところに孔子の人格があるということです。」(二五)と、述べているのである。

統的思考は、両面思考―対の思想であると、指摘しているのである(一一二)。

金谷氏は、中国人は、「ものごとを考えるときに、必ずその裏側の対者のことをも考えて、表からの一方的な見方だけではなくて逆の方からも考える」という総合的な態度をとることです(一二三)と述べて、「一 貧者の一灯、長者の万灯、二 易の陰陽、三 塞翁が馬、四 虚と実と、五 建前も本音も、六 両面と選択と」との節立てをして、豊富な具体的資料を引用して、中国人の両面思考について、あらゆる側面から累説している。そして最後に、「その歴史を考えただけでも、対待の両面思考という考え方にわれわれが学ぶべき点が多いことは明らかでしょう」と、話を結んでいる。

折角、金谷氏は、中国思想の特色に、両面思考―対の思想を指摘しながら、中庸思想の考察に関しては、両極端の否定と両極端の肯定という、中国人に伝統的な両面思考―対の思考が生かされていないのである。

だから中庸思想を考察する場合でも、中庸思想は中国人の最も重要な思想である以上、中国人の立場に立つて、中国人の基本的思考である両面思考―対の思想を中庸思想の構造的な理解に適応して考察すべきである。しかし金谷氏は、中国人的な複雑思考を拒否して、日本人的な発想である明快な議論を持ち出して、論証を続けているのである。

そして中庸は、「直線的であるよりは構造的に考えたほうがよく、「右でもなければ左でもない」というのが、実は「右でもあり左でもある」ということになりますと、右と左が均等に中央に歩み寄ってきて、そこで質的な高まりを見せる、いわば頂点を形成する、といった構造で考えるのが適切です」と述べて、中庸思想は、直線的に考えるのではなく、三角形や円錐型の頂点であるという様に構造論的に考える必要がある、と言う。

金谷氏の中庸思想を直線で理解する場合の問題点は、孔子の過不及なき点を直線状のほど良い真ん中の中として理解するだけでなく、両極端を生かす孟子の有権の中をも、同一方向の性格として直線的に理解する。

しかし過不及なき中は、「行き過ぎと及ばない」両極の否定であり、孟子の子莫批判の有権の中は、博愛主義と個人主義の両極の肯定である。両者を混同して理解している。否定と肯定は、水と油の関係であり、両者を同一方向で理解したり、混同したりはできない性格なものである。

両極端の否定から肯定への切り替えに、「実は」という切り返した方法論性が、この中庸思想の構造的な考える時に問題となるのである。中国人の両面思考―対の思想を考え併せると、否定は否定と、肯定は肯定と、明確に区別して、中国人の基本的思考である両面思考―「対の思想」を適用して、全く別個の二つの問題として考える必要がある。

二つ目の問題は、対立した言葉を「而」で結合した場合における而の解釈である。金谷氏は、「対立した二つの観念を而という言葉で結合して、より高次の統合的な意味をあらわすことは、決して特殊なことではなかったのです。」と述べ、「右でもあれば左でもある」との両端の中を、「而」で結合した資料解釈の場合は、高次の統合的表現と理解している。この場合、以下の問題が生じる。

第一の疑問は、金谷氏の主張するように「而」で結合すれば、高次の統合的表現になるのだろうか。実際は、果たしてそうだろうか。

第二の疑問は、何故に、「実は」「右でもあり左でもある」ということになりますと、右と左とが均等に中央に歩み寄ってきて、そこで質的な高まりを見せる、いわば頂点を形成する」へと、立論をもっていかなければならないのか、この論理を理解するのに苦しむのである。つまり、何故に中央に均等に歩み寄り質

つまり中を執っても、有権―臨機応変性あるいは融通性―がなければ、一つの極端思想と同じだ」と、批判しているのである。

金谷氏の学説への批判の一つ目は、孟子は中間を執るのはよいと肯定して、無権だから一極端と同じだと批判するように、子莫は両極の本当の真ん中を執っているであり、曖昧な中を執っていたのではないと言うことである。

金谷氏の学説への批判の二つ目には、孟子の権の使用方法である。金谷氏は、「孟子のいう「権」のある中とは、真ん中の一点をきっちりとする固定的な窮屈なものではなくて、おおよその中ほどとして、はばのある融通性を持った中なのです。」(一〇)と、述べている。

つまり金谷氏は、直線状の一―一〇の間における曖昧性の残る中間を執る融通性の言葉と解釈する。しかし孟子は、そのように言っているのではない。「中間を執るのに無権―臨機応変性や融通性がないならば、一つの極端思想と同じだ」と、子莫の中道は極端だと批判するのであり、一つの極端のみに拘るなど、批判するのである。つまり全ての極端の長所を生かせと言うのである。孟子の子莫批判について、金谷氏は誤解していることは、これで明らかであろう。

従ってこの資料は、金谷氏の融通性ある「両端の中」説には利用できない。秤に分銅を釣り下げて重さを正確に測り、五分五分の均衡ある状態が中なのである。曖昧で融通性のある「中」説は成立しない。

そもそも宇野哲人氏によれば、「朱子是不偏を「偏らず倚らず、過不及無き名」と注釈して、「庸」を「平常なり」と解している」(一一)と言う。中は、「不偏不倚」であり、ほど良い、幅のある、つまり曖昧な中では不可なのである。

もう一つ重要な問題は、「時中」を「その時その時にぴったりと当てはまる中です」と、解釈していることである。実は「時中」は、実は「状況に的中する行

動」のことなのであるが(執筆予定拙稿「中庸思想の実現方法論―対の思想から考察した中庸思想の構造論研究(二)―」に於いて詳述したい)、「時に中する」ためには、その時の全体の状況を的確に把握する必要がある、と言う。

ここで気になるのは、金谷氏は、中を「ほど良い中」というが、しかし「時中」において、「その時その時にぴったり当てはまるのが中」というのであり、それならば中は、一―一〇の中間点の五でなくてはならない筈である。

また状況の変化を、全体の変化と理解している様だが、全体の状況ではなく、両極端の状況である。何故ならば金谷氏が言う様に中は両端の真ん中であるとなると、状況は全体でなく、両端の状況と規定されてくるからである。

二―中の包容性・統合性 この節で問題となる重要点を述べると、以下のようになるであろう。先ず金谷氏は、中庸を「右でもなく左でもない、その真ん中」と言い、両端の中として直線的状態の下で中庸思想を理解する。しかし舜の「両端を執りて」の資料解釈においては、発想の転換が必要です、と言う。

確かに「右でもなく左でもない」と言う両極端を否定から、「両端を執りて」の両極端の肯定の場合には、発想の転換が必要であろう。

しかし金谷氏が、「そして中庸は、「つまり「右でもない左でもない」といった両端の中が、実は「右でもあり左でもある」という形へと転換するのです。」と言うように、何故に両極端の否定から肯定へと転換するのか、資料的証拠と理論的説明がないので、これでは金谷氏の論理が理解できない。

第一の疑問は、両極端の否定の場合が切り捨てられて、両極端の否定が両極端の肯定の場合に吸収されてしまっているということである。これは果たして、どういうことを意味しているのであるか。

金谷氏は、本書の第三章「対峙―両面思考」において、中国人の基本的で伝

世の難事では、中庸を守り続けることが、一番難しい事だというのである。

つまり金谷氏の言うように、「おおよその中、はばのある融通性を持った中」ならば、普通人なら中庸を守り通すことが容易であろうが、知者でもできない難事だと言うから、中庸は、よほど厳密的で窮屈なものであったのであろう。

『論語』には孔子の言葉として、以下のような礼についての発言がある。

「孟懿子が孝のことをたずねた。先生は「まちがえないように。」と答えられた。「そのあと」攀遲が御者であつたので、先生は彼に話された。「孟孫さんがわたくしに孝のことを問われたので、わたくしは『まちがえないように』と答えた。」攀遲が「どういう意味ですか。」というと、先生はいわれた、「親が生きているときは礼のきまりによってお仕えし、なくなったら礼のきまりによって葬り、礼のきまりによってお祭りする」「万事、礼のきまりをまちがえないということだ。」(七)と、述べている。周礼の規定は、「礼儀三百・威儀三千」

『中庸』(第一章)と言われる様に、社会的身分に応じた冠婚葬祭等について詳細を極めた規定であるから、礼に精通した人でないと礼制を的確に実践できなかったものと思われる。礼の規定は、ほど良い融通性のあるものではない。

孟子も中庸思想の教育において、金谷氏の言う様な幅のあるほど良い中を、中庸であるとは言っていない。実は全くその逆なことを言っている。

「公孫丑が「とうとう弱音を吐いて」いった。「先生、聖人の道は高尚でもあり、偉大でもあります、なにぶん高大すぎて、まるで天に昇るようなもので、とても我々にはついて行けそうもありません。どうか一つ我々にもついて行けそうな程度にまで調子(水準)をさげて、毎日の勉強が張り合いのあるように手加減してはいけませんか。」孟子はこたえられた。「いやいや、そんなわけにはいかん。・・・いったい、君子が道を教える態度というものは、ち

ようど弓の名人が弓を力一杯引きしぼって満を持してまだ矢を放たぬとき、この瞬間には必ず金的に当てようとする気魄が全身に躍動して溢れているように、気合いをこめて最高の目標である中庸の道に立つて人を導くので、ただよく忍耐して学ぶ者だけがついてくることができるのである。(したがって、その努力をしない者のために道をかえるわけにはいかぬ。)(八)と、最高の目標である中庸の道で教育するので、これを緩める訳にはいかず、門下生には困難性と忍耐が必要であると言う。金谷氏が主張するように、融通性のあるのが中ならば、公孫丑の言うように少し手加減してやったらよい。しかし孟子はそれを否定している。従ってほど良さや融通性のない、絶対的な真ん中が中庸なのである。

次の問題は、孟子の子莫批判に使用されている権の解釈を、臨機応変性ではなく、直線状における融通性と解釈していることである。

しかし権とは、秤の分銅であり、秤を使用して両極の重さを量ると言うことは、正確な重さの計量を期待するためであり、曖昧な中を期待して秤に分銅を吊るすのではない。また金谷氏は、「中庸」第一節・両端の中で、孟子の子莫批判において、「孟子は子莫という人物の思想を批評して、博愛主義の墨翟と自己本位の楊朱とのその中間の立場を守っているのはよいが、融通性がないからだめだ、と言っています(尽心上篇)。融通性がないと一点を守ることになり、結局一点に執着して百事を廢することにもなる、とも申します。」との孟子の主張を、一一〇の中間の五を中心とした四でも六でもよいというように、直線状における融通性のある中と、解釈している。

しかしこの金谷説は、資料の解釈が間違っている。よく読めば理解ができる。孟子は子莫の「中道主義」について、「子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也」(九)と原文にあるように、「子莫は中をしつかり執る、これは中庸に近いが、し

る。もう一つの困難は、「自己を主張して主体性をつらぬきながら、対立する相手を容認して譲りあう、そして中に近づいていくことである」と、述べている。

最後に「対立するものがその対抗性を失わないで「競い立ち」ながら、相手を容認して譲るべきは譲るというあり方、個を貫きながら全体の調和の理想を追求する姿勢、絶えず変動する情勢のなかで広く情報を集めて安定した中を求める態度、そうした複合的なあり方のなかに中庸の真髓がある」と、結論する。

以上に述べてきたように、金谷氏の中庸思想論は、「ほどよい融通性のある中」なのであり、本論を首尾一貫して流れている主張は、両極端を肯定して、自己も他者も同時に生かすという、調和の思想論なのである。その調和の内容は、「そのように違ったものどうしで平衡を得ることになる、それを和というのだと言っています。調和とはそういうものなんですね」と述べているように、「異なるものが和＝平衡を得ることだ」と、言うのである。

二 「中庸」研究の問題点(一)

金谷氏の中庸思想研究は、個人と全体をどのように包括的に理解したらよいのか、現代の我々の直面する社会生活における重要問題を、中国思想の精髓といわれている中庸思想の構造論において考察した、日本の中国哲学史上における最初の研究であると思う。金谷氏自身が最終節において、「以上、中庸思想についての内部構造を吟味してきたわけですが」と述べているように、金谷氏の論考は、中庸思想の内部構造論を意欲的に追求した考察なのである。

しかしまたそれだけに、金谷氏の中庸思想の構造論には問題点も多く存在しているように思われる。以下に重要な点について、前節で行った要約に準拠し

て、金谷氏の展開した中庸思想の構造論学説を再検討して、その「疑問点と問題点」を指摘して、矛盾した問題点の解決方法の視角を提起してみたい。

〔疑問点と問題点〕

金谷氏が論証を展開している章立てと行論に従い、最初において「一節―両端の中と、二節―中の包容性・統合性」という、金谷氏の主張で最も重要な問題になるであろう、中庸思想の内部構造論を中心にして検討する事にしたい。金谷氏の中庸思想の構造論の最大の特徴は、三角型あるいは円錐型の頂点に、中庸の中が存在するという点にある。

一 両端の中 この節で問題となる重要点を述べると、以下のようになる。

先ず金谷氏は、両端の中とは、一一〇の中で五を中心にしてみて、四でも六でもよい、幅のある中であると言う。しかし中国の中庸思想の中は、西洋のアリストテレスの言うような曖昧で幅のある中なのだろうか。前引した資料・『中庸』には、以下の様な孔子の言葉の記述がある。

「先生はいわれた、「・・・人びとはみな「自分は知者だ」といつているが、中庸「がよいとわかってそれ」を選び出したとしても、それを守りつづけることはただの一月でさえできないものである。「どうして、それで知者だといえるのか。」(五)と、知者だと自画自賛する人でも、一カ月もたないというのである。また以下のようにも孔子は言う。

「先生はいわれた、「天下や国や家」をうまく治めるのは難事であるが、それ」でさえ公平に治めることはできる。高い爵位や厚い俸禄「を断わるのも難事であるが、それ」でさえ辞退することはできる。白刃「をふみ破って敵陣を攻めるのも難事であるが、それ」でさえふみ破ることはできる。だが、中庸「を選ぶ」として実際に守りつづけるの」は、なかなかできないことだ」(六)と、この

三―礼の中と樂の和 この節では、「中とは中和である」として、「礼とは中を形にあらわしたものを、中を標準として定められたものだということです」と、言う。「音楽と和は密接な関係があり」と言い、「音楽と儀礼とは並んで行われ、たがいに助けあうもの」であり、「樂の働きが和同であるのに対して、礼の働きは別異である」として、「礼の中と礼の別異との関係」は、「別異によって調和が得られるという考えがあつて、別異も実は中と一致することになる、と述べている。荀子が、「上は天子から下は門番まで、それぞれの分際に応じて欲望を満たすようにすると、奪いあいの争いは起こらず、全体が調和的に発展できる」と言うように、「礼は分けることにより全体の調和をはかり、中を標準とするその形によって調和を実現する」と、述べている。

四―中庸の調和 この節では、「本当の調和とは何か」と言う問題について、『論語』子路篇の「君子は和して同ぜず、小人は同して和せず」を引用して、「ところが和の方は、全体が統合されて一つになる点では同と似ていますが、実はその中身は多数の意見で満たされているのです。同は同一で、初めから終わりまで単なる一ですが、和の方は雑多なものがまず混在していて、それがまとめられて統合されたものです・・・違っているものがたくさんでもみあってこそ和になるのです」と述べ、同と和は似ていても、質的な違いが大きい、和と同は違う性質だと、和の意義を述べている。

更に重要な発言をしていて、「中庸で言えば、右でもない左でもない」と区別してその中ほどを選ぶ、そして右でもあり左でもあるということのように違つた両端を中央に接収して、そこで調和ができるということになります。両端がなければ中も和ありません。両端がひっこんで消えてしまえば和にならないのです」と、言うのである。

この調和の内容を説明しているのが、斉の晏子であると言う。『春秋左氏伝』にある晏子の「和は羹の如し」の資料を紹介して、「羹というのはスープの一種ですが、汁けの多いごつた煮です」と、述べている。

羹とは、「料理のことを考えていたなければ宜しいのです。水だけ、あるいは塩だけでは、よい味はできません。鹹いもの甘いもの酸っぱいもの、いろいろな味をまぜ、雑多な具を煮てこそそこにより味がぐんがえられます。材料が多すぎたら減らす、足りなければ増やす、―中庸ですね。そうして得られるのが味の調和です。音楽も同じことだと言われています。五声・六律・七音・・・、清濁大小、長短高下、いろいろの音声がまじりあい助けあつて音楽の調和ができ上がり、心も平安になると言います(昭公二十年)」と、述べている。

そしてまた、史伯に関する資料―「和は実に物を生ず、同なれば継かず」(鄭語)を紹介して、「和であると新しいものが生まれるが、同であると新しいものは出てこない」、「違つた意見が入ってきて議論が起こつて、そこで初めて新しい進展が出てくるのです。そのように違つたものどうしで平衡を得ることになる、それを和というのだと言っています。調和とはそういうものなんです」と、中庸思想の和と調和の特色を述べている。

五―中庸思想と現代 この節では、中庸思想が尊重されてきた原因は、「第一には現実的世俗的な処世の徳として、中国思想の現実尊重の立場と一致している。第二には、中国思想の基本的思想である对待の両面思考と一対立する両端両面を視野に入れてこそ、中庸が得られる立場とは一致している。だから中庸の調和が尊重されるのは、ごく自然である」と、言う。中庸思想の難しさは、「両端の中」という目標を定める難しさであり、状況は絶えず動いているから、その時その時の状況の変化に的中する中の立場をみつける必要がある。」と述べ

これは、アリストテレスのメソテス(中庸)と同様の考えとして、「両端の中というのは右と左とのほど良い中ほどであって、それを守っていくには柔軟な融通性が必要だということ」と結論して、中庸の「両端の中」とは、どのような内容を持つているのかという、中の語句的な意味を説明している。

二—中の包容性・統合性 この節では、「さて、以上は、「右でもない左でもない」という両端の中ということを軸に考えてきたことですが、中庸の内容をさらに詳しく見るためには、ここで一つの発想の転換をしなければなりません。」と述べて、『中庸』に述べている舜の政治を紹介して、「両端を執る」とは、「両端を捨て去るのではなくて両手でしっかりと持つという点です」と述べている。そして中庸について、「つまり「右でもない左でもない」といった両端の中は、実は「右でもあり左でもある」という形へと転換するのです。そうしてそうなる、右と左の真ん中というように直線で考えられていたものが、右と左とを包みこんだ頂点の中というように、三角型あるいは円錐型の立体的構造で考えられることになるのです。」と述べて、中庸思想の構造は、三角型ないし円錐型の頂点論として理解する。

金谷氏は、自己の構造論説の証拠として、先ず孔子の人格を表した『論語』の資料を紹介する。「原文の漢文では「温而厲、威而不猛、恭而安」となっていて、「而」という接続詞でそれぞれ前後の二つの言葉をつないでいるのですが、この前後の言葉は本来結びつきにくい、対立するような概念です。・・・これが結びついているというのは、そうした矛盾とも見えるような性格が、孔子の人格として渾然と一つになっていることを表そうとしているのです。単なる温かさ目もなければ厳しさでもない、温かくて厳しいというその両者を包みこんだ、ある意味では一段高くなったところに孔子の人格があるということです。・・・

さてそうだとすると、それは温と厲という両端をふまえて、而という真ん中の頂点に腰をおろした形になって、それはちょうどこれまで述べてきた中庸の説明とびつたりということになるでしょう。・・・「温にして厲」と同じ表現は他の文献にもしばしばあらわれます。『書経』では舜が楽官に命じて子弟の教育を行なうのに、「直(す)るどくして温、寛にして栗(きび)し、剛くして虐(む)さなく、簡(大)にして傲(おご)ろし(いま)まなし」という人格が求められています(舜典篇)、禹王に進言した皋陶の言葉には「寛にして栗、柔(や)わらか)にして立ち、愿(そぼく)にして恭、・・・」などという人材があげられています(皋陶謨篇)。・・・と、述べている。

そして「対立した二つの観念を而という言葉で結合して、より高次の統合的な意味をあらわすことは、決して特殊なことではなかったのです。・・・文と質という対立した二つの観念が、そのどちらにも偏らないでうまくまじりあって、高次の統合的な一つの観念を表しているのです。やはり、「両端を執りて」用いる中だと言えるでしょう。」と、述べている。

次に金谷氏は、「そこで、こうした中庸の包容的な意味、あるいは統合性というものがわかりますと、前にもちよつとふれたように、それは直線的であるよりは構造的に考えた方がよいことになります。過ぎることもなく及ばぬこともない、一過不及がないこと、つまり「右でもなく左でもない」という両端の中ですと、・・・直線で考えることができます。しかし、中庸はそんなに簡単ではない。「右でもなく左でもない」というのが、実は「右でもあり左でもある」ということになりまして、右と左とが均等に中央に歩み寄ってきて、そこで質的な高まりを見せる、いわば頂点を形成する、といった構造で考えるのが適切です。」と、中庸の構造性は、質的な高まりを見せる頂点説であると、説明している。

一「中庸」研究の要約

金谷氏の中庸学説は、先ず本書の章立て―「はじめに 一 両端の中、二 中の包容性・統合性、三 礼の中と樂の和、四 中庸の調和 五 中庸思想と現代」―を見ると、中庸の語句規定より始まり、古代より現代に至るまでの資料を紹介していて、中庸思想について、ほぼ網羅的に問題点を指摘した論考の組み立てになっている(四)。今、その章立てごとにその内容を要約して見ると、同氏の主張がよく理解できる。金谷氏は、凡そ以下のように述べている。

はじめに この節では、中庸とは、「中道と同じような意味」だと述べて、堯・舜の聖王相伝の「中」は、伝統的に中庸のことだと解釈されてきた、そして『論語』の資料を引用して、中道とは、積極的な狂者と消極的な狷者との中間の道であり、それが理想的なのだ、と紹介している。

一―両端の中 この節では、孔子の「過ぎたるは猶お及ばざるがごとし」の語句を引用して、中庸とは、「過ぎた状態と及ばない状態という対立があつて、それらの真ん中という意味です」と述べて、両端の真ん中であると説明する。朱子の「中庸の中とは偏らないことで、過不及の無いことだ」との注釈を紹介して、庸は「平常なり」との朱子の解釈が正しいとして、中と庸を分離解釈するのは間違いで、中に重点があり、中庸とは、「過不及のない両端の中がそのまま平常でもあること」という意味としている。

そして両端の中という中とは固定的で窮屈なものではなく、アリストテレスの言うように、「両端をかりに二と十とすると、真ん中は六です。しかし中庸とはそういうものではない、五でもよいし七でもよいようなそうした融通のほば

がある」と、言うのである。融通性のある中庸を説明するのに、孟子の子莫の中道批判で使った権―融通性―のある中の実現が大切であるという。

この子莫批判論が、金谷説の議論の展開においてキーポイントになるので、重要部分を引用しておきたい。金谷氏は、孟子の子莫批判について、

「孟子は子莫という人物の思想を批評して、博愛主義の墨翟と自己本位の楊朱とのその中間の立場を守っているのはよいが、融通性がないからだめだ、と言っています(尽心上篇)。融通性がないと一点を守ることになり、結局一点に執着して百事を廃することにもなる、とも申します。……融通性という意味は「権」という言葉で言われていますが、「権」というのは秤の分銅です。……孟子のいう「権」のある中とは、真ん中の一点をきつちりと守る固定的な窮屈なものではなくて、おおよその中ほどとして、はばのある融通性を持った中なのです。」としている。融通性のある中が、何故に必要なのかの理由について、

「そもそも、その両端の極端そのものが動いていると言う観点も必要ですね。事態は絶えず動いていて、決して静止的ではない。そうだとすると、今、中だと思っている立場もいつの間にか変わってくる、真ん中が真ん中でなくなつて、すっかり偏つた立場にもなりかねないということになります。固定的でない融通性のある、柔軟なおおよその中、ほど良い中ほどが、そこで必要になるわけです」と、説明している。

そして次には、おおよその中とか、ほど良い中ということで、推移する事態に対応していくには、『中庸』に述べている「時中」について、その時その時にぴったりと当てはまる中が必要であり、自分の立場を固定して、それにしがみついて融通がきかないような態度では、周囲の状況についていけないわけで、つまり真ん中が真ん中でなくなつてしまふことになる、との要旨を述べている。

中庸思想研究の課題と展望（二）

―対の思想から考察した―

金谷治氏の中庸思想学説の批評―

小倉正昭

現在の日本の中庸思想研究において、考証学的研究―テキスト・クリテック―の域を脱した構造学的研究の始りは、金谷治氏の「中と和」である。同氏の中庸思想の構造学的研究は、「中庸」に集約して述べられている。金谷氏の研究方法論は、中国人の基本的で伝統的な思维方法である対の思想を導入して解決しようとした端緒である。また現代日本人に、個人と全体との調和論の問題を提起した研究であり、唯一の具体性に富む実証的研究である。しかし同氏の労作を詳細に分析すると、多くの疑問点や問題点が存在する。同氏の研究の疑問点や未解決な問題を解決する重要な研究視角は、対の思想を中庸思想の展開や構造論研究へ全面的に導入して、その具体的な問題点を分析する事である。

キーワード： 中庸思想 中庸の構造論 対の思想 調和論 現代的意義

一 初めに―「中庸思想」研究の概観

現在日本の『中庸』研究は、考証学的研究が主流という状況の中にあつて、中国思想史上における歴史学的意義に興味を持つ筆者にとって、魅力のある中庸思想の哲学的、構造論的、歴史学的意義についての研究は、管見の限り、中国歴史学者の第一人者である宮崎市定氏の『中国思想の特質』（二）、更に

は金谷治氏の「中庸」（二）という、二つの研究論文である。

金谷氏の論文は、中庸思想の内面的な構造論の探求という、中庸思想の核心的問題に迫る論考である。豊富な資料を基礎にして具体的かつ平易に中庸思想の構造論的な理解方法について述べたものであり、現在の中国思想史研究者に、如何にして中庸思想を把握すればよいのか、一つの問題の提起をしたものである。そして樂の和や礼の別異についての具体的資料を提示して、中庸思想と調和論との関係についても述べており、更には個人と全体という現代的な問題についての歴史的意義にも言及した意欲的研究である。

また前稿で述べた宮崎氏の中庸思想の研究（三）に見られた多くの論理的欠点を乗り越えていて、また具体的資料を多く引用して、中庸思想の基本的性質、構造論、歴史的意義について深く掘り下げて論証している。また両面思考―対の思想との相互関係にも言及した最初の研究である。それ故に金谷氏説の内容について検討して批評する価値が、宮崎説を批評する以上に重要性が存在する。

本稿では、中国哲学の大家である金谷氏の中庸思想の構造論研究について、その問題点を指摘して、どの様に対の思想を適応して分析すれば、中国思想の精髓と言われている中庸思想が、より深く理解できるのか、中国の政治思想史の構造論的理解に興味を持つ筆者の卑見を述べて、今後の中庸思想の研究の発展に少しでも寄与したいと思う。大方の御叱正・御批判を乞い願う次第である。

(Original Article)

Problems and Prospects related to Study of the Doctrine of the Mean (1)

—Criticism of Ichisada Miyazaki's structural theory of the Doctrine of the Mean examined from a perspective of the thought of *Dui*—

Masaaki OGURA*

The full-scale structural study of the Doctrine of the Mean, which went beyond the bounds of evidential research – text criticism in present-day Japan, started with Dr. Osamu Kanaya's series of discussions, including *Chu to wa* (Middle and Harmony). The subsequent structural study of the Doctrine of the Mean is Dr. Ichisada Miyazaki's study of *Chugoku shiso no tokushitu* (Characteristics of Chinese Thought). His study is the one and only challenging work that raised questions about the structural study of the Doctrine of the Mean from the perspective of a historian of Oriental history. Nevertheless, it leaves many questions and unsolved problems. Therefore, an important research perspective to solve questions and unsolved problems in his study of the “Doctrine of the Mean” is to analyze the problems by introducing the dualist thought, “the thought of *Dui*”, as a basic, traditional mode of thinking of Chinese people, into the study of the Doctrine of the Mean in full scale.

Key words: Doctrine of the Mean, spatial principle, temporal principle, *rei seido* (etiquette system), thought of *Dui*

* Department of General Education (Humanities and Social Science)

〇 三三頁 一九九三年 参照)

(二二)『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 巻第八 一三〇頁 一九八九年 第四〇刷 参照)

(二四)『中国思想を考える』(金谷治 第六章 天人合一 一九四頁中公新書一二〇 一九九三年 参照)

(二五)『中国思想を考える』(金谷治 第六章 天人合一 一二〇頁 中公新書一二〇 一九九三年 参照)

(二六)『中国思想を考える』(金谷治 第六章 天人合一 一九四頁 中公新書一二〇 一九九三年 参照)

(二七)『荀子(下)』(金谷治訳注 天論篇 第一七 二九頁—三〇頁 岩波文庫 二〇〇六年 第一四刷 参照)

(二八)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一四五頁—一四六頁 中公新書一二〇 一九九三年 参照)

(二九)『武内義雄全集 第三巻 儒教篇二』(角川書店 「礼記の研究」二五頁 昭和五四年 初版 参照)。なお「称とは「かなう」の意味で、適当なほどあいに合するの意である」と言う(武内義雄 同書 二四頁 参照)。

(三〇)『孟子(下)』(小林勝人訳注 四三頁—四四頁 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 参照)

(三一)『論語』(金谷治訳注 巻第一 学而第一二三頁—二四頁 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 参照)。金谷氏は、礼に注釈して「主として冠・婚・葬・祭その他の儀式のさだめをいう。社会的な差別をするとともに、それによって社会的な調和をめざすのである」と説明している。

(三二)『日中律令論』(曾我部静雄著 ▲日本歴史叢書四V 一九〇頁 吉川弘文館 昭和三八年 初版 参照)

(三三)『日中律令論』(曾我部静雄著 ▲日本歴史叢書四V 四三頁—一八頁 吉川弘文館 昭和三八年 初版 参照)

(三四)『唐令拾遺』(仁井田陞著 東京大学出版会 一九六四年 復刊 参照)

(三五)『大学・中庸』(金谷治訳注 一二六頁—一二九頁 岩波書店 二〇〇一年 第五刷 参照)

(三六)『武内義雄全集 第三巻 儒教篇二』(『礼記の研究』 第四章 礼の古経とその精神 二四九頁 角川書店 昭和五三年 参照)

(三七)『礼記(上)』(竹内照夫著 新釈漢文大系二七 礼器第十 三五六頁—三七四頁 明治書院 平成五年 一九刷 礼器第十 参照)

(三八)「対の思想と中庸思想—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(五)」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』 第四五巻 二〇一二年 参照)。「対の思想の政治思想的意義—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(終章)」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』 第四五巻 二〇一二年 参照)

(受付日 二〇一三年 九月 九日)
(受理日 二〇一四年 一月 九日)

- (二)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一一二〇 一九九三年 参照)
- (三)『論語の新研究』(宮崎市定 岩波書店 一九九四年 第十九刷 二二三頁 参照)
- (四)拙稿「対の思想と中庸思想—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(四)—」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』 第四五巻 二〇二二年 参照)
- (五)『武内義雄全集 第二巻 儒教篇一』(角川書店 昭和五三年 初版 第三章 窮理 一 中 五三頁—五四頁 参照)
- (六)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一一二〇 一三五頁 一九九三年 参照)
- (七)『程伊川哲学の研究』(市川安司 第六章 実践過程に示された理の意義 第六節 義理・定理・常理等の語 第三項 定理・常理・中理・実理 市川安司 東京大学出版会 二六五頁—二六七頁 一九六四年 参照)。
- (八)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一一二〇 一三五頁 一九九三年 参照)
- (九)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一一二〇 一三五頁 一九九三年 参照)
- (一〇)『武内義雄全集 第二巻 儒教篇一』(角川書店 第三章 窮理 二 中庸 五六頁—五七頁 昭和五三年 初版 参照)
- (一一)『中庸』(宇野哲人全訳 講談社学術文庫 「学術文庫への序文」 三頁 一九八三年 参照)
- (一二)『中庸』(宇野哲人全訳 講談社学術文庫 四三頁—四五頁 一九八三年 参照)
- (一三)拙稿「対の思想と中庸思想—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(五)—」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』 第四五巻 二〇一二年 参照)
- (一四)『大学・中庸』(金谷治 岩波書店 一四四頁 二〇〇一年 第五刷 参照)
- (一五)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 一四四頁 二〇〇一年 第五刷 参照)
- (一六)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 『中庸章句』序 二五〇頁 二〇〇一年 第五刷 参照)
- (一七)『武内義雄全集 第三巻 儒教篇二』(『礼記の研究』 第四章 礼の古経とその精神 二四九頁 角川書店 昭和五三年 参照)
- (一八)『程伊川哲学の研究』(市川安司 第三章 第五節 第一項 権の意味 一四四頁 東京大学出版会 一九六四年 参照)
- (一九)『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 三八頁 九八九年第四〇刷 参照)
- (二〇)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 一五一頁 二〇〇一年 第五刷 参照)
- (二一)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 一五三頁 二〇〇一年 第五刷 参照)
- (二二)荀子の「天人の分」説は、『荀子』天論篇(金谷治訳注『荀子下』巻第一 天論篇第一七 二九頁—四五頁 岩波文庫 一九六二年)参照。『中国思想を考える』(金谷治 第一章 現実の尊重 中公新書一一二

Ⅱ対の思想に規定される思想である。

従って中が両極端の有様に規定されて決定されるとすれば、中は空間的原理だと言ふ説明も付くはずである。何故ならば、両極端思想Ⅱ対の思想は、結論的には前後・左右・上下という、三次元レベルの問題であり、その三次元的な対の思想の真ん中を採る中なのであるから、前と後の真ん中、右と左の真ん中、上と下の真ん中が、中なのである。

中庸の中は、前後の中だけならば一元的原理、前後と左右の中ならば二次元的原理、前後と左右と上下の中ならば三次元的原理、つまり空間的原理になるのであり、両極端の状況により、一元的原理にもなれば、二次元的原理にもなり、三次元的原理にもなり、どの様にも変化する可変的原理なのである。決して無前提的な空間的原理ではない。両面思考Ⅱ対の思想における、その時々々の両端の具体的な状況や有様に規定される可変的原理なのである。

従って中庸の中は、中庸思想自身に構造論的特色を持つ物ではない。歴史上の時代的性格における、両極端Ⅱ対の思想の持っている、その時々々の歴史的な両極端の状態によって規定される、歴史的な制約的性格をもつものであった。

宮崎氏の未解決の問題点と未解決である歴史的意義の問題点については、今後に発表する予定の「中庸思想の構造論」、「中庸思想の実現方法論」、「中庸思想の実現の必要条件と機能論」において卑見を述べて見たい。また中庸思想の政治思想的意義については、既に卑見を詳細に展開しているので、この論考をも参照して頂きたい(二三八)。

最後に中庸思想を両極端への両面思考Ⅱ対の思想との関係において、解決するための具体的方法論について、問題の提起をしたい。

第三節においては、宮崎氏の中庸思想論の問題点を指摘して、同氏の説は中Ⅱ

礼であり、礼は中庸を具体的に人間社会に実践して行く制度であり、中庸思想は礼のみで規定できないと述べた。また同氏は、中を空間的原理と規定するのみで、中を礼制に切り替えて論旨の展開を行ない、中Ⅱ礼制度の具体的構造論を提示していないことが、最大の欠陥であることを述べた。

しかし礼制度は、政治・経済・社会状況の変動によりその規定を受けており、時代状況にそぐわない制度になって来ると、中庸思想はデフォルメを受けて、時代にミスマッチしてくるのは必定であり、このデフォルメを是正するために新たに時代状況に相応した新しい礼制の作成が必要不可欠になって来るのである。この様な問題は、歴史学研究者であれば、深く追求しなくてはいけない筈であるが、宮崎氏の中庸思想研究においては、この点についての歴史学的考察が甚だ曖昧になっていたのである。

ところで宮崎氏の主張する様に中Ⅱ空間的原理であれば、当然に「中」の意味する具体的な構造論を深く追求して考察しなければならないのであり、また中庸思想を実現するための必要条件や礼制度の機能や目的についても、その構造論的考察を行う必要性が存在する。しかしこれらの問題については、宮崎氏の論考では、全て今後に解決する未解決の課題として残されているのである。

(二〇一三年十月二十六日 稿了)

注

- (一) 「中国思想の特質」(宮崎市定 『岩波講座 世界歴史』 第四巻 月報 一三 一九七〇年 五月 参照 『中国に学ぶ』(朝日新聞社 一九七一年) 所収 参照) なお本文中に引用する宮崎氏の主張の要点の頁数の引用は、煩雑になるので、割愛させて頂くことにする。

跡をしのぶことができる」(三七)と、述べている。

この説明でも理解できるように、礼制は、毎年の豊凶でも治乱でも変化しており、また王位や王朝の交代時でも変化しているようであり、礼は時勢により変化する、と言っているのである。時勢に応じた弾力性のある物なのである。

従って宮崎氏の中庸説についての結論を述べると、宮崎氏の学説は、結局は中庸思想の中と庸の語句についての概念的な構造論の説明に過ぎないのであり、半ば言葉遊び的な論考に帰結して行く危険性を持つものであったのである。

では宮崎氏説において、今後の中庸思想研究の発展のためには、一体、何を吸収して継承すればよいのだろうか。宮崎説に於いて唯一受け継ぐべき収穫は、一〇分の一税を輕税と重税の間である中庸税としたことである。

中は「不偏不倚」であるから、両極端の有様に規定される概念であり、中庸思想の研究は、両極端への両面思考⇨対の思想との関係で考察しなければ、正確な理解できない思想であるということである。また儒教の中庸政治思想も、礼と権の二元論的な政治であり、この問題も両面思考⇨対の思想を適用して考察しなければならないのである。

△中庸思想の歴史的意義▽ 宮崎氏の主張する「礼⇨自然法則的次元⇨中国思想の特質」という立論は成立しないと述べたが、金谷氏も「中国思想の精髓」として中庸思想の特質を指摘しているのであり、両氏の指摘する様に中庸思想は中国思想の最重要な問題であったのである。では中庸思想の特質⇨歴史的意義は、何処にあったのであろうか。これが最も重要な問題なのである。この問題の一端については、既に拙稿において、卑見を述べておいたので、それを参照して頂きたい(三八)。

四 結語—要約と展望

中庸は中国思想⇨儒教思想の中心思想であることは、金谷氏も異論がない。宮崎氏が、庸の意味について、朱子の新注を無視して、程伊川の注釈を採用した理由は、中⇨空間的原理、庸⇨時間的原理と、中庸を二元論的に捉えて、キリスト教の一元論的思想と比較して、中国哲学の人間的特徴を中国思想の特質として説明するためであったのあろう。

中庸の語句理解において、宮崎氏の言うように中と庸はシノニムである以上、中と庸を区別して二元論的に理解する方法論には無理がある。庸を「常」と理解するにしても、中の補足的説明語として理解する必要がある、従って「不偏不倚」の中は、「不易⇨常」の状態を意味していて、「中の状態が何時も変わらない状態」を意味する程度に過ぎないのである。

中庸の「中」が、単独で歴史上の資料に出てきて、中庸を意味している以上、「庸」には特筆すべき格別な意味がない。武内氏・宇野氏・金谷氏の指摘したように、中に力点がある。中庸は、中や和とも言え換えられ、和は「調和」の意味であり、庸には時間的原理の意味はない。

また中それ自身に時間的原理が内包されている以上、庸がなくても中庸思想は成立する。宮崎氏の主張する庸の特質斉の学説は、間違いである。また中庸を二元論的思想として理解するのも、資料的に無理があった。

筆者が言いたい事は、以下の諸点に存在する。

礼が中を得たものか否かは、庸⇨常により規定されるのではない。中は「不偏不倚」という意味で、両極端の真ん中を採る思想であるから、真ん中であるか否かは、両極端の状態に規定される思想である。つまり両極端への両面思考

年一昔と言うように、政治情勢や経済社会の変動は、十年単位で動いていくもののである。仁井田氏の著書を見ると、唐代の玄宗皇帝の開元時代においても、律令は二度も改変されている(三四)。

このように唐代において、何度も律令の改変があった事でも、この事実は理解できるであろう。時代が変化するたびに、即応して礼制も変化するのである。

だから孔子の時代においても、冠婚・葬祭・射御・朝聘等の礼制が時代の変化に即応して変化しており、何時の時代のどのような礼制度を適用して実行したらいのか、戸惑うほどだった、と思われる。

その証拠として、以下に二つの事例を紹介したい。

孔子は、礼制と時勢との関係について、次のように述べている。

「先生はいわれている、「徳のない愚かなものでありながら自分かつてな行動をしたがり、位のない低い身分でありながら独断を通したが、今の時世のなかにおりながら古代のやり方にかえろ」とする、こういう者には、その身に災難がふりかかるものだ」と・・・

先生はいわれている、「わたしは夏の礼について話をするが、「その後裔である」杞の国では「今の世に明らか」実際の証拠がたりない。わたしは殷の礼を学んでいるが、「その後裔である」宋の国にはいくらかの伝承がある。わたしはさらに周の礼を学んでいるが、これは現在ひろく行なわれている。わたしは周に従うことにしよう」と。「先生自身が天子の位につかなかったので、礼樂の改制はしないで今の礼に従われたわけである。」

天下の王者として「徳と位と時という」三つの重要なことを備えておれば、過ちをおかしことはほとんどなくなるであろう。古い時代の礼は、たとい「徳が備わって」りっぱであつても「今の世にふさわしい」実際の証拠がなく、実

際の証拠がなければ信用がなく、信用がないと民衆は従おうとはしない。「また反対に、時に応じた」新しい礼は、たとい「徳が備わって」りっぱであつても「孔子のばあいのように位の」尊厳がなく、尊厳がなければ信用がなく、信用がないと民衆は従おうとはしない。」(三五)と、述べている。

孔子は、昔の証拠の足りない礼制度は、たとい立派であつても信頼できない、世の流れである時勢を重視して、証拠の存在する今の時代Ⅱ周代に従った礼制を実行しなければならない、と言うのである。

先に引用したが、武内氏は、「礼器篇には「礼は時を大なりと為す、順これに次ぎ、体これに次ぎ、宜これに次ぎ、称これに次ぐ」と言っているが、ここに礼の時というのは時世を意味し、時代とともに礼の変化することを意味し・・・その形式が中庸を得て居る点を称というのである」(三六)と述べ、礼は時勢の変化を最も重要視する、と説明していた。

同氏の引用した『礼記』の条文に武内照夫氏は、以下のように述べている。

「それゆえ礼の形式を定めるには、まずその国の建国の基準に照らし、かつ土地の広さに相応するように原則を設けるのであり、なおまた毎年の豊凶に従って礼の行ない方を変えるのである・・・礼の形式を定めるには、まず時(時勢)に合わせることに、次に順(礼を行う人の分際に対応すること)次に体(礼を行う対象に適合させること)、次に宜(行礼の費用の程度を適宜にすること)次に称(行礼者の身分と行礼の規模とが釣り合うこと)、これらを充分に考えなければならぬ。一むかし、堯は位を舜に譲り、舜は位を禹に譲ったが、湯は桀を追放し、武王は紂を討伐した。(このように王位の受け継ぎ方という一種の礼・習慣にも変化があるわけで、)これは時勢である・・・従って礼と音楽にはそれぞれの設けられた時勢が反映しておつて、礼を見、樂を聞けば、治乱の

それ以後は、庸に全く言及していないのである。

△礼論の批判▽

①宮崎氏の中庸学説の最大の欠点は、中は空間的原理というのみで、何故に中は空間原理になるのか、具体的説明がないことである。

②宮崎氏の立論に拠れば、中＝礼なのであり、礼は人間が無理なく行なえる自然法則等と言う様な性質の物ではない。礼制は、人間の無限的な欲望の抑制のために人為的に作爲された社会的規範であり、社会的規範は自然法則ではない。

③中と礼は、別次元の問題である。宮崎氏は荀子の礼論を引用して、「この礼は中の点を体現した所に意義がある」としている。しかし礼は、人間の生活する社会秩序概念であり、中は直ちに礼であると規定することはできない。中は一般的原理であり、中を制度化して人間社会の親疎上下の等差に応じて具体的に制度的に規定したのが、礼なのである。

④そこで中＝和と礼との相関関係について、具体例を挙げて見よう。

有子は和(調和)と礼の関係について、以下のように述べている。

「有子がいった、「礼のはたらきとしては調和が貴いのである。むかしの聖王の道もそれでこそ立派であった。」「しかし」小事も大事もそれ(調和)に依りながらうまくいかないこともある。調和を知って調和していても、礼でそこに折りめをつけるのでなければ、やはりうまくいかないものだ。」(三二)と、述べる。

『中庸』より引用したように、中(本体)＝和(作用)なのであり、中＝和の中庸は―世間の人々との和合や調和をめざす思想であるが―これは普遍的な一般的原理論である。社会生活においては貴賤の等や親疎の差が現実問題として存在する以上、一般的な原理論は直接には適応できない。それ故に現実問題に適応するために中庸に等差を付けて制度化した礼制がなくては、社会的問題

は上手く解決できないことを述べているのである。

ここで大切なのは、中＝和であるから、宮崎氏の中庸思想説においては、中＝和とは、一体、何なのかという問題について、説明する必要性があるが、全く具体的な実証が為されていない。宮崎氏には想定外な問題であったと思われる。

⑤宮崎氏は礼制について、「孔子が周は殷の礼により、殷は夏の礼により損益する所があるというように、時間的に永遠といっても、個人が経験できない長時間の意味で、礼には一定の通用期間があった」と、述べている。

しかし一王朝の中でも、また一皇帝の時代においても、世は流れて歴史は動くのである。宮崎氏が『論語』を典拠にして夏礼・殷礼・周礼と言うように、一王朝においては、礼制が全く変化しないならば、これを守り実行することは簡単であつたであろう。しかし現実には、そうは簡単にいかない。曾我部静雄氏は、令が礼典より発生してきた経緯について、

「令が儒教的あることは、その内容が儒教の成文法である『周礼』や『礼記』の王制篇などの内容と相類似することからしても分かるであろう。『周礼』や『礼記』の王制篇は、その内容が民政法典的な部分が多く、この民政法典的要素を多く持つ成文法が、漢武帝の儒教採用によって法令に作用するようになったから、それまで未確立であつた令が、その影響によってこれらの成文法を手本として編纂され、系列の異なる刑法典の律から離れるに至つたのである。」(三二)と、述べている。

曾我部氏の指摘するように、令が礼典より発生して法制化されたものであるとすると、魏晋南北朝時代や隋唐時代の律令が、時代の変化に即応するように、新皇帝が即位することに改変されている理由も理解されるであろう(三三)。時代の変化は、宮崎氏の言うように、百年以上の単位で動くのではない。十

自然法則的次元の原理である礼には、また歴史的制約が存在したというが、これも理論的には矛盾した話であり、宮崎氏は、何故に礼に歴史的制約が存在するのか、その論理的、資料的な根拠を明示していない。この問題については、既に拙稿において、卑見を述べておいたので、それを参照して頂きたい(二三)。

宮崎氏は、礼(中)には一定の時間的な通用期間があると言うが、しかし宮崎氏説では時間的原理は、「庸」であつた筈である。同氏の主張は、礼Ⅱ中と庸とをすり替えて説明した議論であり、自ら論理破綻する説明をしている。従つて宮崎氏「中国思想の特質」の立論は、殆どが成立しないことになる。

四 「中国思想の特質」の継承方法

一 宮崎説の中庸思想の結論と問題点

以上、宮崎氏の特異な中庸思想説の欠陥を述べて、その立論の殆どが成立しないことを述べてきた。金谷氏の中庸の持つ語句的特質に就いての学説を検討するためにも、今一度、宮崎氏の論点を簡単に整理して、どのような問題を宮崎氏説から継承するべきなのかについて、述べておくことにする。

△宮崎説の主張の要約▽ 宮崎氏の主張する中国思想の特質とは、中庸思想であり、何故に中国思想の特質になるかといえば、中Ⅱ礼であり、礼が人間界における自然法則的次元であり、これが中国思想の特質という。従つて宮崎氏の中国思想の特質Ⅱ中庸思想の研究に欠落している問題点は、以下の三点である。

△庸の批判▽ 宮崎氏は、中庸を中と庸に分離して、庸は常Ⅱ一定不変であり、「中を得た行為は永遠に繰返しても決して支障を来たさぬ事により、証明される。中は庸があつて初めて真の中たりうる概念である」としている以上、庸Ⅱ常

は、「永遠に繰返して支障を来たした場合には、中でなくなる」のであり、中庸の中は、庸Ⅱ常に規定される概念であるとする。

しかし中は、程伊川によると、「偏らざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う」とあり、庸は「不易」という意味である。「両極端に偏らない真ん中は、永遠に変わらない」という意味である。中は、両極端の存在に規定される概念であり、庸には規定されない。伊川によれば、庸は中を説明する補足語であり、中と庸とは連続的關係にあり、分離關係を示す言葉ではない。

そしてまた庸は常と理解すれば、不易の意味であるから、時間的原理だと主張するのは理解できる。しかし何故に、朱子の新注Ⅱ「庸は平常の意」を無視したのかである。朱子の説明する庸の意味は、平常Ⅱ日常性の意味であり、これに従えば宮崎氏の時間的原理、つまり人間世界での縦系列的に推移していく歴史的推移・変化論は成立しなく、「中国思想の特質」の立論が成立しない。この事実が、宮崎氏に朱子の新注にある庸の解説を無視させた理由なのである。

そしてまた宮崎氏は、武内氏の中庸思想の研究の成果を、何故に無視したのかであるが、このことについても理解し難い。

中庸の中には、空間原理のみならず時間的原理が内包されていた資料的根拠や、武内氏、宇野氏、金谷氏の庸の字義についての見解―平凡さ、凡庸さ―という説明、朱子の「平常の意味」という字義の解釈を踏まえれば、宮崎氏の庸の字義Ⅱ時間的原理説は成立しないと断定してよい。

△中の批判▽

宮崎氏は、「不偏不倚」の中について、空間的原理の内容を説明して、何故に中が庸に規定されるのか、について述べる必要がある。中は空間的原理といいつながら、中の具体的展開になると荀子の礼論を引用して、中を礼に置き換えて、

っているのである。

荀子は礼制定の目的について、「欲望と混乱の抑制」にあるという。荀子の説を引用した宮崎説と、『荀子』の主張では、事実関係が食い違っている。武内氏は、時と義と称によって礼を説明する古礼経義と考え方によく似た荀子の「礼論篇」を引用して、

「礼は何くより起こるか、曰く、人生まれて欲あり、欲して得ざれば求むる無きこと能はず、求めて度量分界無くんば争はざる能はず、争へば乱れ、乱れば窮す。先王其の乱を憎み、故に礼儀を制して之を分ち、以て人の欲を養ひ人の求めを給し、欲をして必ず物を窮めず、物をして必ず欲に屈せず、両者相持して長ぜしむ。是れ礼の起こる所なり」（二一九）と、述べている。

礼は、人間の無制限な欲望を放任した結果、生じてくる混乱や争いを抑止するために生まれてきたといい、分界を設けて、欲望と物質の需給のバランスをとるために制定された、というのである。

武内氏は続けて、「荀子はまた「礼なるものは養なり」と言ったあと、「君子其の養を得て又其の別を好む。何をか別と言ふ。曰く、貴賤に等あり、長幼に差あり、貧富輕重に皆称あるなり」と言っている。ここに礼の別を認めて等差と称のあるべきことをのべて居るのは、礼運三篇と通じて居る」（二一九）と述べている。身分社会における人間の分界を満足させるのが、礼なのである。荀子においては、礼の定めた理由は、人間社会の混乱を防止して、人間の等差に応じて欲望を満足させるために、礼が生じてきたのである。

宮崎氏によれば、中庸は、中_{II}礼_{II}空間的原理、庸_{II}常_{II}時間的原理という、全く別個の二元論で成立する。そして中_{II}礼_{II}空間的原理↓人間界の自然法則_{II}「中国思想の特質」と主張する。しかしそれならば、庸_{II}常_{II}時間的原理は、一体、

どういう法則や特質を持つのか、全く不明になるのであり、「庸」の歴史的意義が、中庸の意義から浮いてしまう結果になる。

つまり「中国思想の特質」として中庸思想を指摘して、とりわけ庸_{II}時間的原理を強調した宮崎氏は、その結末において庸の意義を自己否定してしまふ結果になったのである。また礼は、人間界の自然法則次元でない以上、礼_{II}自然法則次元_{II}中国思想の特質という立論は成立しない。

宮崎氏は、「中国思想の特質は、西洋思想—キリスト教と比較した場合に一層明瞭になる。キリスト教は通常一神教といわれるが、実は神と悪魔の対立する二元論である。儒教の中庸思想の善と悪は西洋と異なり、最上の善は礼に規定され、悪が起きるのは人間の欲望による」と述べ、更に「中国の中国たる所以は、その政治が礼により行われる点にあり、礼は古代の聖王が中庸の点と定め、後世永遠に遵守すべきことを命じたものである」と述べている。

このことから推測されるように、西洋のキリスト教は、神と悪魔の二元論思想であるが、中国思想の特色_{II}儒教政治の思想は、礼による一元論であった、と言う。しかし果たしてこの学説は真実なのであるか。孟子は、「男女授受不親、礼也、嫂溺援之以手、權也」（三〇）と述べていて、礼と權は対立的に使用されている。つまり中国の儒教政治は、孟子によれば礼と權の二元論的政治であったと言うのである。従って詳細は続稿で述べることにするが、宮崎氏の礼による一元的政治論説は、明らかに誤りである。

礼は、一定の「通用期間がある」と時間的制約がある故に、これを限定的に扱う宮崎氏の主張は、前後関係において相矛盾する主張である。つまり礼は永久不変の自然法則的次元の原理と言いが、しかし歴史の實際を考えると、礼は実は永遠に不変なものといえない」と、述べているのである。

神秘や迷信で人を惑わすものだと考えたのです。」(二五)と、述べている。

そして金谷氏は、荀子の天人分離説の思想的位置付けとして、

「この天人合一の思想では、天の宗教的、政治的権威のために、人が圧迫されるという事態になることもあります。そこで、それを嫌って、天には天の法則(自然法則)があり、人には人の法則(社会規則)があるのだと、分けて考える立場も生まれています。戦国末の荀子に代表される「天人の分別」の思想がそれであって、それはそれで、人間主義、合理主義の展開として重要なことです。その方が現代の私たちには理解しやすいでしょう。ただ、それはむしろ異端的であって、思想としての影響の範囲も狭いのです」(二六)と、述べている。

荀子の思想は、中国思想全体において、異端思想であり、一般的な思想でないと言っているのである。しかし天人の分離を主張する荀子においても、

「天行、常あり、堯の為に存せず、桀の為に亡びず。これに應じるに治(道)を以てすれば則ち吉、これに應ずるに乱(道)を以てすれば則ち凶なり。本を彊めて用を節すれば則ち天も貧ならしむること能わず、・・・時を受くることは治世と同じきに、而も殃禍は治世と異なれり。以て天を怨むべからず、其の道然るなり。故に天と人の分に明らかなれば即ち至人と謂うべし」(二七)と述べているように、荀子も、全く天人相関説を否定しているわけではない。

この本文を金谷氏は、「・・・自然の時を享受することは平和な時代と変わりが無いのに、禍害を受けることは平和な時代と違っている。[しかしこれは天の意識的な愛憎によるのではないから]天を怨むべきではない。」と訳している。

このように荀子は、有意者としての天命思想を排除しているだけであり、人間の作為的な吉凶の行為―治乱には、天は吉凶で以て感応すると言う。従って樹ン氏の思想では、人為の帰趨に強く規定された「無意志者としての天人相関

思想」を持っていたのと言うべきであろう。従って荀子においても、全く天人の分離を主張していたわけではなく、宮崎氏の「儒教は人間的な教え」というような、純粹に神と全く分離した人間の行為の独自性や天人非相関説は、中国思想では成立しないであろう。

宮崎氏は、「礼は中庸の徳を持つ故に、自然法則と同じ次元にまで高められた事を意味する」と言うが、礼は人間が行うべきモラルとして、意識的に制度化して当為として規定したものである。自然法則と同じ次元ではない。自然法則であれば、放任しておいても自然と行われるモラルとなる。自然に行われないから、意識的に人為的に制度化したのである。金谷氏は、礼制定の経緯の説明について、

「礼とは中を形にあらわしたものの、中を標準として定められたものということです。その説明としては、たとえば親が死ぬと三年の喪に服するということがありますが、情の厚い子供はいつまでも親のことを思っつゝの生活に戻ろうとしませんが、しかし薄情な子供はすぐに忘れてしまうというわけで、そこでちょうど中ほどを採って三年と定めたのだと、こういうふうに言われます。ですから、三年の喪は賢者もそれより過ぎることはできず、愚か者も及ばないわけにはゆかず、つまり喪における中庸だとされるのです[『荀子』礼論篇、『礼記』三年間、喪服四制篇](二八)と述べている。荀子は、礼制度の経緯について、人間の賢者と愚者の行なう両極端の行為を強く抑制するために、人為的に三年の喪服制度を作成したと述べている。

つまり荀子は、人為的にそして意識的に、礼制度は、人間の奔放な行為を抑制する為に制定したと言うのであるから、宮崎氏の主張する様な、「自然法則のように無理なく行えるように定めたのが礼である」という主張とは、全く異なる

会では礼儀が最も明らかなものである」等と言う荀子の「天人の分」説が大きく影響を与えていると思われるが（二二）、中国思想においては、果たして自然界と人間界との無関係を主張する「天人非相関説」が成立するのであろうか。

ところでまた宮崎説では、中庸Ⅱ礼は「人間的な教え」と述べながら、何故に自然法則の地位にまで高めることが可能なのか、この問題についての説明が不足している。人間的行為である中庸Ⅱ礼制を自然的法則にまで高めようとするれば、どうしても人間界に自然界と同じような法則や原理が流れていることを証明しなければならぬのである。

『中庸』の「中和」で言う「中和を致して、天地位し、万物育す」との句を引用して、人間界の中庸と自然界の天地万物との相関関係Ⅱ「天人相関説」を提起すれば、自然界と人間界を包み込んだ自然法則説が成立するし、宮崎説にも、一応尤もな説明が着くが、宮崎氏はこれを提起していない。

では何故に宮崎氏は、天人相関説を持ち出さないのであろうか。その理由は簡単で、天人相関説を持ち出せば、有意者としての神がかり的な天命という神秘性や迷信を認めなければならなくなり、キリスト教のような宗教と同一次元の性質を持つことになり、宮崎氏の儒教思想が「人間的な教え」という理解とは、大きな食い違いが生じてくる。つまり宮崎氏は、天界と人間界との非相関説を展開しているからである。

確かに宮崎氏の主張するように、儒教は、「人間的な教え」と言う学説も一理はある。金谷氏は、孔子の思想について、

「神秘的なことや理性的に判断しにくいことは、なるべく門答をさけようとしたのです・・・また、孔子は、人間を超えた偉大なものを「天」としてあがめていました。運命を左右するような重大な局面で、孔子の口をついて「天」と

いう言葉はほとばしり出ます。「天」の存在は、孔子にとって重く深い存在でした。しかし、孔子はその「天」について、それを表立って語ろうとはしません。」（二三）と、述べている。

孔子の最大の関心は、現実の人間であるが、しかし天を避けようとしただけであり、有意者としての天の存在を認めている、と金谷氏は言うのである。

例えば、孔子は、以下のように述べている。

「孔子の曰わく、君子に三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る。」（二三）とある。ここで展開している天は、人間のように意志を持つ天であり、君子は有意者としての天命を恐れるものだ、と言う。

宮崎氏は、儒教思想の特質の一つとして、「人間的な教え」を挙げるが、金谷氏は、天と人の関係について、以下のように述べている。

「天と人との間には緊密な連係があつて、両者は同じ法則のもとに動いていると、そのように考えるのが天人合一の思想というものです。中国ではそれが正統な思想で、また一般に広く流行した思想でもありました。」（二四）と、述べている。つまり中国思想の特徴には、天人合一論があり、天と人間は切り離せないというのである。

ところで宮崎氏の自然法則としての根拠として、礼を引用した荀子の思想は、金谷氏によると、「中国の歴史でも天と人との伝統的な関係を断ち切ろうとした思想家はおりませんでした。荀子は孔子を尊ぶ儒家でありましたが、道徳は聖人が人間社会に対応して作作的に作ったものだととして、その根源に天の存在を考えることに反対しました。天は自然の存在であつて、人間界とは違った法則で動いている、それを人間界に持ちこむことは、人間独自の合理的な営みを破つて、

人の体格に差のあることを論じた点については、すでに第一章第二節第一項で触れた。それは古今の差を認定した上で論を伊川の態度を示したものであるが、その根底には時に従う思想があると見てよいであろう(一八)と、述べている。

市川氏によれば、宋学者の程伊川も、礼における時の流れ、つまり時間的制約を重要視していたのであり、従って礼Ⅱ中は、時間的原理を含んでいる。

武内氏や市川氏の引用した資料に依るとすれば、宮崎氏の言うように庸に独特な意味があり、「空間的原理である中は、時間的原理たる庸に裏打ちされて、初めて真の中になる。礼が中庸の徳を有するとは、中庸の徳が自然法則の地位にまで高められたことを意味する」という学説は、全く成立しないことになる。

宮崎氏の言うように、礼Ⅱ中庸の徳は、果たして自然法則の地位にまで高めることができるのであろうか。高められるという、その根拠として宮崎氏は、『礼記』などに記されている内容は、・・・人間の行為において自然法則のように無理なく行なえる中庸の点があるはずだという、礼すなわち中庸の学説はすこぶる示唆的で、これが中国思想の特質となつて後代に受けつがれて変わることがなかった。」とか、「古代帝王の定めた礼も、尽きることのない永遠性を有すると見なされたからだ。」と言うのである。

しかしながら自然法則ならば、孔子等の聖人も、何も四苦八苦して、礼を学ばなくてもよさそうなのであるが、現実とは全く違うのである。

そこで以下に、宮崎氏が言う様な礼が自然法則の様なものではない、その具体例を述べることにする。孔子は中庸の徳について、以下のように言っている。

「先生がいわれた、「中庸の道徳としての価値は、いかにも最高だね。だが、人民のあいだにとぼしくなつてから久しことだ」(一九)と、庶民には中庸の徳は失われて久しいと述べている。この句を注釈した金谷氏は、注にて「中庸―朱

子は「中とは過不及のないこと、庸とは平常の意」と解説して、「極端に走らぬほどよい中ほどを守つてゆく処世の徳」としている。

「先生はいわれた、「・・・人びとはみな「自分は知者だ」といつているが、中庸「がよいとわかつてそれ」を選び出したとしても、それを守り続けることはただの一月でさえできないものである。」「どうして、それで知者だといえようか。」「(二〇)と、孔子は、知者だと自画自賛する人でも、一月もたないというのである。そしてまた孔子は、

「先生はいわれた。「天下や国や家」をうまく治めるのは難事であるが、それ」でさえ公平に治めることはできる。高い爵位や厚い俸禄「を断わるのも難事であるが、それ」でさえ辞退することはできる。白刃「をふみ破つて敵陣を攻めるのも難事であるが、それ」でさえふみ破ることはできる。だが、中庸「を選びとつて実際に守りつづけるの」は、なかなかできないことだ」(二一)と、この世の難事は解決可能であるが、中庸を守ることが一番難しい事だと言う。

以上の資料を見ると、礼制度は、人間が定めたものである故に、中庸思想を守ることは大変難しいものなのであり、自然法則のように簡単に理解して実行できない、実行するのが困難な思想なのである。

宮崎氏は、『礼記』などに記されている内容は、・・・人間の行為において自然法則のように無理なく行なえる中庸の点があるはずだという」であり、「儒教の中庸思想の善と悪は西洋と異なり、最上の善は礼に規定され、悪が起きるのは人間の欲望による。儒教は人間的な教えであり、キリスト教のような神を信じる宗教でない」と言う。このように、中庸Ⅱ礼Ⅱ人間界の自然法則と述べ、中庸Ⅱ儒教は宗教ではなく、人間的な教えであるという。

この宮崎説には、「天にあるものでは日月が最も明らかであり、・・・人間社

宮崎氏は、中と庸はシノニムと言い、同一方向を意味する同義語という言葉であると述べながら、他方では中は空間的原理で庸は時間的原理として、二元論で扱うべき事と言い、全く方向性の異なる内容を持つ言語であると主張するのは、同氏の主張は自己矛盾している。それでは、宮崎氏の言うように、中には本来、時間的原理が存在しないのであろうか。『中庸』には、

「思うに、上古のすぐれた聖人たちが「天子の位について」天の道を受けつぎ、人の守るべき法則を樹立してからこのかた、道の伝統の継承にははっきりした淵源があった。その經典にみえるものでは、『論語』堯曰篇の「まことにその中をしっかりと守れ」というのが、堯から舜に天下を授けたときに伝えられたことばであり、『書経』大禹謨篇の「人の心は「欲がまじっているから」危険なものであり、道の心は「純粹精妙であるから」微妙なものである。精密に考え純一につとめて、まことにその中をしっかりと守れ」というのが、舜から夏の禹王に天下を授けたときに伝えられたことばである。堯の「その中を守れ」という」一言は、もうそれだけで十分なものである。それなのに舜がまたそこに三句を加えて語り伝えたのは、その三句のことばのように解釈してこそ、あの堯の一言の正しい実現が期待できるということを、明らかにするためであった」（二六）とあり、堯↓舜↓禹へと、中を執る政治の大切さを、聖王相伝の言葉として、朱子は述べている。

金谷氏は、注に於いて、「三 道の伝統の継承―『道統』の考えは唐の韓愈（原道篇）に発したとされる。堯から舜、舜から禹、そして殷の湯王、周の文王・武王・周公、孔子とつづいて孟子で絶えたとされたが、朱子はさらに上下に広げて、宋学につないだ。」と述べている。つまり朱子は、中庸Ⅱ中を守る伝統は、堯・舜・禹の伝説時代から近世の宋代にまで時空を超えて中を守る中庸思想の

伝統が、延々と継承されてきたと言うのである。

この資料に示されているように、宮崎氏の言う様な空間的原理である中の言葉自身には、時間的原理も内包されているのである。では何故に堯や舜の聖人は、「精密に考え純一につとめて、まことにその中をしっかりと守れ」と懇ろに論したのであろうか。それは、中庸の中の実体が、時代とともに変化して行くからなのである。変化して行く時代に対応しながら、中を守るこの大切さを教え諭しているのである。そこで以下に中Ⅱ礼が時間的原理であることを示す資料を挙げて見て見たい。武内氏は、『礼記の研究』・「礼の時と宜（義）と称」において、以下のように述べている。

「礼器篇には「礼は時を大なりと為す、順これに次ぎ、体これに次ぎ、宜これに次ぎ、称これに次ぐ」と言っている。ここに礼の時というのは時勢を意味し、時代とともに礼の変化することを意味し、順とは天地の命、人間の情に順うものであるべきを意味し、この順がすなわち宜となつて表れるのである。体とは礼の具体的形式で、その形式が中庸を得て居る点を称というのである」（二七）。つまり礼記の礼論においては、中Ⅱ礼なのであり、礼が時間的制約のある制度というのであるから、中は時間的原理なのである。

また市川氏は、礼の持つ時間的制約について、「時流の変化に伴う新方向への進展を率直に認める態度が、伊川の議論から窺い知られるからである」と述べている。続いて伊川の発言を引用して、

「礼とは何が大切なのか。時が大切だ。やはり時に従うべきであらう。随うべきときは随い、治めるべき時は治めるといふように、時に応じて事を行えば、時に随うことになる（程氏遺書一五）。周易随釈による解釈である。時に随うとは、時の流れを無視しないことである。伊川が古今風氣の差を認め、昔と今とは

しかし市川氏が述べているように、伊川の「不易」と朱子の「平常」は同義であり、「変わらないことが、平常の意味にもなる」のであり、両者は不即不離の関係にあり、「どちらにも偏らない中は、永遠に変わらないモラル」という事を意味しているのであり、宇野精一氏・武内氏・金谷氏が既に述べていたように中と庸は並列的な同様の意味である。

従って宮崎氏の言う庸の語句は、「中は庸があつて初めて真の中になる」という、中の裏打ち的な言葉にはならない。

宮崎氏は、空間的原理である中は、時間的原理である庸に裏打ちされて、「中は庸があつて初めて真の中になる」というが、この説には素朴に考えて、三つの疑問がある。

まず宮崎氏が、「庸があつて初めて真の中になる」と言うなら、形式論理的に言うと、中庸には、「真の中」と「嘘の中」の二つがあることになる。

宮崎氏の想定する「嘘の中」とは、どのような中なのか、その内容についての具体的な議論を展開していないので、その内容が不明である。

ところで「嘘の中庸」とは、真の中庸にならないつまり真ん中にならない中庸のことで、何故にそのような「嘘の中庸」の問題が生まれてくるのか。このことは、大変に重要な問題であるが、その解答については、本稿の結語や、拙稿(一二三)の結論で詳細に述べているので、これらを参照して頂きたい。

次に宮崎氏は、中庸思想を具体的に表す例として、白圭と孟子の税率への議論を引用して、これによって、「十分の一の租税こそ先王の道で中庸に合するが、それより重いのは夏の桀王の暴虐の道、それより軽いのは文化のない貉の道だと説破している」と、言う。この引用文に於いて、中庸の庸は、宮崎氏の言う様に、果たして中を規定しているのであろうか。

しかしここで中庸を規定しているのは、夏の重税と貉の軽税という両極端の税率である。従って両極端に中庸の中を規定する前提条件があり、宮崎氏の主張する庸は、中を規定していないのである。宮崎氏の学説では、庸は中を規定するといえながら、宮崎氏が引用した具体的事例に於いて中を規定する説明語句は、両極端の税率なのである。

つまり宮崎説では、庸による理論的な中の規定と、宮崎氏が事例で挙げた庸が中を規定することの資料は、実は両極端による中の規定であつて、論理と事例での主張の乖離が大きすぎるのである。従って事例による中庸税の規定が正しいとすれば、理論面における時間的原理であると言う「庸」によつて中は規定されるという宮崎氏の学説は、全く自己矛盾するのである。

最後に宮崎氏の主張に拠れば、庸がなければ、中庸が存在しないことになる。しかし中庸は、中の一字で表現されている場合がある事から考えて見ると、武内氏や金谷氏の言うように、中に力点があり、中の内容を補足的に説明しているが、庸なのである。だから中庸は、補足語である庸を省いて、中Ⅱ和と換言しても、成立する思想なのである。

『中庸』に、「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と言う。発して皆な節に中る、これを和と謂う。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して 天地位し、万物育す」(一四)とある。

中は大本、和は達道、中Ⅱ和である。和は「調和」の和であり、達道は、「世界中心いつでもどこでも通用する道である」という意味で、中の概念を具体的に補足説明している。従つて中庸は、別に庸がなくても、中Ⅱ和という言葉でも成立する思想であり、金谷氏は、「中も和も中庸のこと意識されている」(二五)と、述べている。

庸は常と解するのは、程伊川の解釈であり、不易という意味である。朱子の新注は平常の意味である。

市川安司氏は、程伊川の中庸の解釈を、「中とは偏らないことである。偏れば中でなくなる。庸とは常である。これは、中とは大中であり、庸とは定理である」と言うのと、同じである。定理とは天下不易の理、つまり経である。」と言う。

そして市川氏は、「・・・庸」を一字の「常」に置きかえるのは、いわゆる訓詁の法である。庸は従って「平常」と言う意味にもなるうし、常あること則ち「不易」と言う意味にもなるであろう。伊川はこの二者のうちから後者を取っている（七）と、どちらにも解釈できるが、伊川は後者＝常を採った、と言う。

金谷氏の説明する朱子説（新注）は、「朱子の注釈では、確かに「庸とは平常なり」とかかれています。中庸の庸には異説もありますが、朱子の注釈は正しいでしょう。」（八）と述べており、また「中とは不偏不倚過・不及のないこと、庸とは平常の意」（九）と、庸を「平常の意味」と解している。

つまり宮崎氏は、市川氏の言う程伊川の意見のみを採用して、朱子や金谷氏の意見も無視しているのである。

また武内氏は、庸の字義について、「孔子は中の下に庸の字を添えているが、下文の「庸徳をこれ行い、庸言をこれ謹む」の句から推測すると、庸は庸常の義で、「夫婦の愚も与り知るべく夫婦の不肖も行い得る」ところの中であることを示すのであろう。従って中庸とは、日常行われ得る中の道をいうものであって、堯・舜以来伝統の中とさしてかわるものではない。」（一〇）と、言うのである。

庸を中の添え字的に扱い、「平凡」の意味に解して、中と中庸はさして変わらず、庸常の意味は、「普通の庶民でも行い、ごく当たり前の通常のこと」と述べて、朱子や金谷氏と同様な意味に解釈している。

また宇野精一氏も、「けれども一面、中庸の庸は、普通のこと、当り前のこと、と言う意味もあって、平凡な、当り前のことの中にこそ、中庸はあると考えられているから、どんな人間でも中庸を得ることはできると言っている」（一一）と、述べている。

また程伊川の庸の説明を紹介した市川氏にしても、「どちらにも解釈できる語である」としているのだから、ますます宮崎氏の、庸＝常という立論は、通常の説からはみ出てくるのである。

宮崎氏は、何故に庸は常と読む必要があるのか、その必然性に係わる根本的資料を提示していない。宮崎氏の立論したい最重要の語句であるにも関わらず、その根拠となる資料を挙げていないのには、実証的学問の立場から言って、理解し難いと思うのである。

程伊川に拠ると、庸＝不易＝常＝経である。このことは、宇野哲人氏は『宋朱熹章句』の『中庸』に、二程の中庸の規定を紹介して、「子程子曰く、偏らざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」（一二）とあり、庸は不易であり、定理であると述べていることから理解できるであろう。

「経書」の経は、縦糸の意味あり、「経」は「永久に変わらない人間の踏み行すべき普遍的な原理を述べた物」であり、「人間の常なる道を示す」の意味である。だから庸＝常には、宮崎氏が庸に就いて規定して言うように、「中を得た行為は永遠に繰返しても決して支障を来さぬ事により証明される」という意味にはならないはずである。宮崎氏の言う「中＝礼は庸があつて初めて真の中たりうる概念である」という説は、中＝礼と庸を分離して、相互に独特の意味を持たせないと成立しない学説なのである。

『礼記』などに記されている内容は、・・・人間の行為において自然法則のように無理なく行なえる中庸の点があるはずだという、礼すなわち中庸の学説はすこぶる示唆的で、これが中国思想の特質となつて後代に受けつがれて変わることがなかった。つまり中庸は、人間の行為における自然法則的な思想であり、これが中国思想の特質と言うのである。

中国思想の特質は、西洋思想―キリスト教と比較した場合に一層明瞭になる。キリスト教は通常一神教といわれるが、実は神と悪魔の対立する二元論である。儒教の中庸思想の善と悪は、西洋と異なり、最上の善は礼に規定され、悪が起さるのは人間の欲望による。儒教は人間的な教えであり、キリスト教のような神を信じる宗教でない。

中国の中国たる所以は、政治が礼により行われる点にあり、礼は古代の聖王が中庸の点と定め、後世永遠に遵守すべきことを命じたものである。しかし歴史の實際を考えると、礼は実は永遠に不変なものといえない。孔子が周は殷の礼により、殷は夏の礼により損益する所があると言う。時間的に永遠といつても、個人が経験できない長時間の意味で、礼には一定の通用期間があった。

以上、宮崎氏の論考の要約をしたが、以下にその疑問点と問題点を述べたい。

三 「中国思想の特質」の問題点

〔疑問点と問題点〕

歴史的資料では、「允執其中」(論語)、「執其兩端、用其中於民」(中庸)、「不得中行而与之」(論語)、「湯執中立賢無方」(孟子)等の事例で分るように、中庸の中の一字や中行で説明する場合が多くあり、中庸の字句は、『論語』には一か所

のみである。

宮崎氏が「庸」に独特な意義があると言うように、それほど重要なキーワードの語句ならば、「庸」を絶対に資料から欠落できない言葉である。しかしながら「庸」を欠落させて中庸を説明している所に、「中」に意味があり、庸はシノニム(同意語・類語)と、当時の中国人は認識していたと、言えるであろう。

武内義雄氏も、『論語』「堯曰篇」の「允にその中を執りて」や、『中庸』の「其の両端を執つてその中を民に用す」との例を引用して、「堯・舜の道は結局は「中」の一字に帰するものごとくである」と言い、「独り堯・舜の教えが「中」の一字であるだけでなく周公制礼の標準もまた「中」の一字にあつたらしい。」「(五)と述べ、以下に幾個の事例を紹介している。

また金谷氏は、「ただ、中庸という言葉は、チュンユンと発音して二字ともngで終わる畳韻の語で、そういう場合は二字が緊密に結びついて一つの意味をあらわすことになります。ですから「中は過不及のないこと、庸とは平常の意味」といつて、中と庸とをばらばらに分けて考えるのは誤りです。意味の重点は中であつて、過不及のない両端の中がそのまま平常でもあること、つまりほど良い中ほどということ、穏やかな日常性という意味も入っていると見て宜しいのです。」(六)と、述べている。つまり中庸は、中に重心があり、中と庸を区別して考えるのは誤りであり、中を補足的に説明するのが庸―平常の意味と述べて、宮崎説を完全に否定している。

従つて中庸の語句は、『論語』、『孟子』、『中庸』等において、中の一字で表現される場合も多くあることを考えて、さらには武内氏や金谷氏の主張を参考にすると、宮崎氏のように、「庸」にも独特の意味があり、中の意味を助けていると言うのは、首肯し難い主張であろう。

である。従来の中国哲学研究者には存在しなかった問題意識と研究視角より、東洋史学研究者の大家である宮崎氏ならではの壮大なスケールで中庸思想の構造論的研究を行なったものであり、中庸思想の構造論的な理解方法について、考証学的研究に注視している現今の中庸思想の研究者に、東洋史学者の立場から一つの問題の提起をしたものである。

宮崎氏の『岩波講座 世界歴史』の「月報」に掲載されているこの小論考は、その後『中国に学ぶ』に所収されている。東洋史学研究者の大家と一般的に認識されている宮崎氏が、広く日本の一般的読者にも、中国思想の特質性についての問題の提起をしている以上、この問題は後学の中国思想史研究者にとっては、絶対に看過できない中国思想史上の重要問題なのである。

従って本稿では、中庸思想研究史の中で特異な地位を占めている東洋史学研究者の大家である宮崎氏の中庸思想の構造論的研究について、その問題点を指摘して、どの様に対の思想を適応・分析すれば、中国思想の精髓と言われている中庸思想が、より深く理解できるのか、中国の政治思想史の構造論的理解に興味を持つ筆者の卑見を述べて、今後の中庸思想の研究の発展に少しでも寄与したいと思う。大方の御叱正・御批判を乞い願う次第である。

二 「中国思想の特質」の要約

宮崎氏が『論語の新研究』(三)で主張する中庸思想の解説については、資料的にも研究史から考えてみても無理があり、金谷氏の中庸説が妥当との見解を、既に拙論において述べた(四)。

ところで宮崎氏は、「中国思想の特質」において、中国思想の特質として儒教

の中庸思想を指摘して、中庸思想の内容について、『論語の新研究』より踏みこんで構造論的に展開している。宮崎氏の中庸の解釈の批判をした『論語の新研究』に対する批判と多少重複する箇所もあるが、同氏の主張を要約して、その疑問点を挙げて、問題を解決するための結論を述べておきたい。今、同氏の「中国思想の特質」の要約点を述べると、凡そ以下になるであろう。

〔要約〕

儒教思想は、最も中国的な思想であり、儒教思想の中心思想は、中庸の学説である。中庸という思想は、神の道でなくすぐれて人間的な常識の産物である。

中庸の語は、中と庸という二つのシノニムを結合した連文であるが、庸にも独特な意義があり、中の思想を助けている。普通には庸は常なりと訓読みする。

常とはなにか。荀子によれば、礼は古代の帝王が制定、子孫人民に永く遵守することを要求した法則である。この礼は、中の点を体現した所に意義がある。礼が中を得たものであることを証明できるのは、中を得た行為は永遠に繰返しても決して支障を来たさぬ事により証明される。つまり宮崎氏は、中 $\parallel$ 礼は、庸 $\parallel$ 常があつて初めて真の中たりうる概念であると、言うのである。

空間的原理である中は、時間的原理たる庸に裏打ちされて、初めて真の中になる。礼が中庸の徳を有するとは、中庸の徳が自然法則の地位にまで高められたことを意味する。

昼夜の交代、四季の循環のような自然法則は、永久に繰返しても尽きない所に中庸の徳を具えたことが実証されるが、古代帝王の定めた礼も、尽きることのない永遠性を有すると見なされたからだ。

つまり宮崎氏によると、中庸は、中 $\parallel$ 礼 $\parallel$ 空間的原理、庸 $\parallel$ 常 $\parallel$ 時間的原理の二元論で成立していて、中は庸の助けにより真の中になる、と言う。

中庸思想研究の課題と展望（一）

―対の思想から考察した―

宮崎市定氏の中庸思想の構造学説の批評―

小倉正昭

現在の日本の中庸思想研究の考証学的研究―テキスト・クリテック―の域を脱した本格的な構造論的研究の始まりは、金谷治氏の「中と和」を初めとする一連の論考である。それに続く中庸思想の構造論的研究は、宮崎市定氏の「中国思想の特質」の研究である。宮崎氏の研究は、東洋史学者の立場から中庸思想の構造論的研究について問題の提起をした唯一の意欲作である。しかしそこには多くの疑問点や未解決な課題が存在する。従って同氏の「中庸思想」研究の疑問点や未解決な問題を解決するための重要な研究視角は、中国人の基本的で伝統的な思维方法である両面思考Ⅱ対の思想を中庸思想研究へ全面的に導入して、同氏の研究の問題点を分析する事である。

キーワード：中庸思想 空間的原理 時間的原理 礼制度 対の思想

一 初めに―中庸思想の研究史概観

現在の日本で出版されている『中庸』研究は、宇野精一氏、武内義雄氏、赤塚忠氏、島田虔次氏、宇野哲人氏、金谷治氏に至るまで、中国哲学研究者により数多くの書物が上梓されている。また最近、市来津由彦氏編集による『中庸』研究が出版された。このように近代日本の中庸思想の研究は、宇野精一氏の研

究に始まり市来氏編集の研究に至るまで、多くの研究蓄積がある。しかしこれらの多くは、『中庸』の成立年代の特定、作者の特定、『中庸』の文章内容や構成要素の詳細な研究、事実関係の特定という考証学的研究が主流であった。またこれらの研究は、多くは『中庸』の解説書・注釈書・研究史の紹介であり、中庸思想の構造論的な特質について、中国哲学史上や中国思想史上において、近代的な問題提起をするまでには至っていない、と言っても過言ではない。

ところで現在日本の『中庸』研究は、考証学的研究が主流という状況の中にあつて、中国思想史上にける歴史学的意義に興味を持つ筆者にとって、魅力のある中庸思想の哲学的、構造論的、歴史学的意義についての研究は、管見の限り、中国歴史学者の第一人者である宮崎市定氏の「中国思想の特質」（一）、さらには金谷治氏の「中庸」（二）という、二つの研究論文である。

両氏の論文は、すぐれて近代的発想を持つ中庸思想についての構造論的な哲学研究であり、中庸思想の歴史的意義に及ぶ意欲的な論考であり、大いに学ぶべき内容の深みある研究になっている。

宮崎論文は、中国思想の特質は中庸思想であると指摘した上で、中庸の語句の意味を中心とした中庸思想の構造論的な内容についての論文である。中は空間的原理であり、庸は時間的原理であると、中庸の語句規定をして、庸Ⅱ時間的原理に中Ⅱ空間的原理が規定されていると、理論的に問題の提起をした作品

(Original Article)

History of Study of the Structural Theory of the Doctrine of the Mean

—The present stage of study of the “Doctrine of the Mean” examined from a perspective of the thought of *Dui* (3)—

Masaaki OGURA*

Traditional researchers of the Doctrine of the Mean understood the mean in a structural way that it was the apex of a cone or a spatial principle. Such a mode of understanding seems to have been impossible for Chinese intellectuals in the period before the modern era to have a clear image and use for actual political fighting. To make use of the Doctrine of the Mean, which is said to be an essence of Chinese thought, for actual political practice, it is important to raise a structural theory which gives a concrete image of it reflected in the *shi-taifu* (scholar-official) class that practiced actual political fighting in the period prior to the Chinese modern era. The structural theory of the Doctrine of the Mean cannot be applied unless the internal structure of the Doctrine of the Mean is revealed chemically or mechanically in the either case of *chu* (middle) equal *rei* (etiquette) equal *wa* (harmony) or *chu* (middle) equal *ken* (authority) equal *jichu* (a condition when something is happening) in terms of a mutual relation of the Doctrine of the Mean with both ends of a spectrum and *chu* (middle), which has a relation that is neither too close nor too remote. The structural theory of the Doctrine of the Mean must be clarified with concrete terms as issues of political thought by an examination that introduced the thought of *Dui*, which is a traditional, basic thought of Chinese people.

Key words: Doctrine of the Mean, structural theory, apex of a cone, thought of *Dui*, *chu* equal *rei*, *chu* equal *ken*

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

― (八二〇〇九年七月三十一日)

(九)『論語』(金谷治訳注 一八三頁 岩波文庫 一九六三年 参照)

(一〇)『論語』(金谷治訳注 一八三頁 岩波文庫 一九六三年 参照)

(一一)『孟子下』(小林勝人訳注 七三頁 岩波文庫 一九七二年 参照)

(一二)『孟子下』(小林勝人訳注 三五頁 岩波文庫 一九七二年 参照)

(一三)拙稿「対の思想と中庸思想研究―対の思想から考察した中庸思想研究史の現段階(二)」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四七巻 二〇一三年 参照)

三年 参照)

(一四)『中庸』(宇野哲人全訳注 四四頁 講談社学術文庫 一九八三年参照)

(一五)『大学・中庸』(金谷治訳注 一五〇頁 岩波文庫一九九八年参照)

(一六)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一四〇頁―一四三頁 中公新書一二二〇 一九九三年 参照)

(一七)『論語』(金谷治訳注 八三頁 岩波文庫 一九六三年 参照)

(一八)拙稿「中庸の定義と其の政治思想的意義―「中庸思想」研究史の現状と課題(一)」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四七巻 二〇一三年 参照。

(一九)拙稿「対の思想から見た中庸思想研究―「中庸思想」研究史の現状と課題(二)」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四七巻 二〇一三年 参照。

(二〇)『孟子下』(小林勝人訳注 三五三頁 岩波文庫 一九六八年 参照)

(二一)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四八頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(二二)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 一三六頁―一三七頁 中公新書 一九九三年 参照)

(二三)拙稿「対の思想と中庸思想研究―対の思想から中庸思想研究の現段階」

(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四七巻 二〇一四年 参照)

(二四)拙稿「対の思想と中庸思想の歴史的展開―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(五)」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四五巻 二〇一一年 参照)

(受付日二〇一三年 九月 九日)

(受理日二〇一四年 一月 九日)

従って中国歴史学者の第一人者である宮崎市定氏の「中国思想の特質」、さらには金谷治氏の「中庸」という二つの研究論文が、とりわけ中庸思想の構造論的研究では、現在の所、最高レベルの研究内容に成っている。

両氏の論文は、すぐれて近代的発想を持つ中庸思想についての構造論的な哲学研究であり、中庸思想の歴史的意義に及ぶ意欲的な論考であり、大いに学ぶべき内容のある研究になっている。

宮崎論文は、中は空間的原理であり、庸とは時間的原理であるとして、とりわけ庸の時間的原理を詳述しており、中については礼制度の内容を詳述している論考である。とりわけ中庸の語句の意味を中心とした中庸思想の構造論的内容について、これまでの中庸思想研究史に存在しない斬新な研究であり、中国哲学研究上においての最初の哲学的論文である。

これに反して金谷氏の論文は、宮崎氏の主張する中庸思想の言葉上の構造的な理解を乗り越えようとする、中庸思想の内面的な構造論という核心的な問題に迫る実証主義的研究の立場よりの論考である。豊富な資料を基礎にした中庸思想の構造論的な理解方法について、具体的に平易に詳述しており、現今の中庸思想の研究者に一つの問題の提起をしたものである。

そして楽の和や礼の別異についての具体的資料を提示して、中庸思想の調和論との関係についても述べており、更には個人と全体という現代的な問題についての歴史的意義にも言及した意欲作品である。

中庸思想の構造論を考察した論考は、日本では宮崎氏と金谷氏の論考以外に存在しない、また対の思想と中庸思想の相関性を追求した論考は金谷氏以外に存在しない。従って中庸思想の構造論の問題点が何処に存在するのかを一層詳細に検討するためには、宮崎氏と金谷氏の論考を詳細に検討して、その問題点

を分析するところから出発しなければならないであろう。

従って以後の続稿では、壮大なスケールで中庸思想の構造論を追求した中国史学と中国哲学の研究者ある宮崎氏と金谷氏という両氏の中庸思想についての疑問点を指摘して、どのような方法論を提起すれば、中国思想の精髓と言われている中庸思想が、より深く理解できるのか、中国の政治思想史の構造論的理解に興味を持つ筆者の卓見を述べて、今後の中庸思想研究の発展に少しでも寄与したいと思う。大方の御叱正・御批判を乞い願う次第である。

(二〇一三年八月三〇日 稿了)

注

- (一) 金谷治「中と和」『文化』十五卷四号 一九五〇年 参照
- (二) 金谷治「中庸について―その倫理としての性格」『東北大学文学部研究年報』第四号 一九五五年 参照
- (三) 赤塚忠『大学・中庸』(赤塚忠 新釈漢文大系 第二卷 明治書院 昭和四二年初版 平成六年 三五版 参照)
- (四) 『大学・中庸』(島田虔次訳注 中国古典選四 朝日新聞社 一九六七年、朝日文庫 上・下 一九七八年 参照)
- (五) 「中国思想の特質」(宮崎市定 『岩波講座 世界歴史』 第四卷 月報一三 一九七〇年 五月 参照)
- (六) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書二二〇 一九九三年 参照)
- (七) 杜勤「「中」のシンボリズムに関する一考察…宇宙論からのアプローチ」(七 『大阪大学言語文化学五』 一三五―一四八 一九九六年)、
- (八) 真儒協会会長 高根秀人年・個人ブログ『儒灯』・「美の思想二―中庸

従ってこの二つの中庸思想の対の思想の原理論の存在の指摘を考慮において、中庸思想の構造論を説明しようとすれば、両端を否定して中央に求心化していく中和の中庸思想の構造性とは、一体、如何なる具体的内容をしているのか、逆に中央を否定して両端に遠心化して行く中庸思想の構造性とは、一体、如何なる具体的内容をしているのかについて、その各々の具体的構造性を説明することが必要なのである。相異なる方向性を持つ中庸思想の両者について、全く別個に区別して探求して行くこと、つまり中国人の伝統的で基本的思考である対の思想Ⅱ両面思考を考慮して考察する必要性があると言う事である。

結語と展望

一 本稿の結語

中国思想の精髓と言われる中庸思想を現実の政治実践に活用するためには、是非とも具体的に政治実践のイメージができる構造論的理解が必要である。従って金谷氏の述べる様な三角形や円錐形の頂点が中庸であると、図形論的に立体的に理解する事や、直線状の幅のある程よい真ん中と理解するのも不可である。宮崎氏・島田氏・杜勤氏の言う様に空間的原理であると理解するにしても、その主張は具体性と現実性を欠いており、不可である。高根氏の様に直線状の重さの程度を計測する天秤の分銅の動きが中庸であるとする力学的理解が、最も中庸の深意に近いようであるが、中和の中庸と動的概念である中庸との相違を区別せずに、混乱していて、これも不可である。

つまり中庸思想の構造論は、中庸思想と不即不離の関係にある両極端と中との相互関係について、未発の中Ⅱ和の場合も執中有中Ⅱ時中の場合も、化学

的・力学的に中庸思想の内面的構造論を明らかにしなくては、中庸思想を政治実践に応用できない。以上の様な諸氏の中庸思想の構造論的理解の方法では、前近代の中国知識人は現実の政治実践において、どれ程の人物が具体的なイメージを具有することができたのか、甚だ疑問と言わざるを得ないし、中庸思想を政治に応用する事は不可能であったと思われる。従って現在の日本における中庸思想研究史においては、中庸思想の具体的な構造論的内容の理解が未だ曖昧で未熟であり、中庸思想の構造論の内容が解明されていない、と結論することができであろう。

金谷氏は、中庸は構造論的原理、島田氏・宮崎氏・杜氏は、中庸は空間的原理と主張しているが、では何故に中庸思想は、構造論的原理や空間的原理なのであろうか。この様な重要問題は、中国人の基本的特色である対の思想を導入した考察により、政治思想史上の問題として、中庸思想の構造論と実現方法論を具体的に解明して導き出されなくてはならない問題なのである。

二 中庸思想の構造論的研究のための今後の課題

最後に中庸思想の構造論的研究のための予備的作業として、是非とも事前に検討して解決しておかなければならない課題について述べておきたい。

中庸の構造論的研究は、既に本稿で紹介した様に、現在まで所、金谷氏の「中和」・「中庸について―その倫理としての性格」、赤塚氏・島田氏の『中庸』の解説、宮崎氏の「中国思想の特質」、金谷氏の「中庸」、杜勤氏の「中」のシンボリズムに関する一考察」、高根秀人年・個人ブログ【儒灯】・「美の思想Ⅱ―中庸―」の合計六氏の論考・論文のみである。

この中で杜氏の論考は、島田氏・宮崎氏の論考に包摂される主張であり、赤塚氏・高根氏の論考は、金谷氏の構造論的研究範囲に包摂されるものである。

しかし中庸の深意は、「状況・変化に対応した動的なバランス [Balance: 均衡]」と規定して、動的概念⇨動的バランス論⇨両端の中での動的均衡論として力学的に説明した所に、従来の中庸思想研究者が指摘していない新知見があるのである。政治力学的に中庸思想を実践する場合には、これは大いに評価するべきであろう。高根氏の問題点は、中庸の「動的概念」を資料的に実証していない点にあり、これを具体的に論証することが大切なのである。

最後になるが、中庸思想の構造論の解明への問題の提起をしたい。金谷氏の提起した中庸思想の構造論の理解方法では、「中庸とは、三角形の頂点、円錐形の頂点」と思いながら、中庸思想を現実の政治活動に活用する事は、到底、できないことは明白であろう。従って金谷説では、前近代の中国士大夫の政治実践には活用できない性質の物であるとすれば、一体、どのような方法で中庸思想の構造論性を解明すれば、最も実りある成果が期待できるのであろうか。

そこで、ここにおいては、中庸思想の構造論解明の本論に入る前提として、中庸思想の構造論解明のための方法論について、問題の提起をしておきたい。

既に拙稿において、「中庸には、未発の中⇨礼制度⇨和と已発の中⇨執中有権⇨時中の二つの異なる概念が存在する事になる。体用の論理で展開して言う」と、本体にも未発の中⇨礼制度と已発の中⇨執中有権の中があり、作用にも和と時中の二つに分類できるのである。前者の中⇨和は両極端の否定であり、後者の執中有権⇨時中は両極端の肯定である。中庸は同じく不偏不倚と言っても、この不偏不倚の中庸には、両極端の否定と肯定という、全く二つの相異なる対の思想の概念が存在すると言うことである。両極端を否定した中庸⇨礼制(本体)の作用は和⇨調和であり、両極端を肯定した中庸⇨執中有権(本体)の作用は時中である。」(二三)と述べて、中庸思想の構造論解明のために、その一

つの方法論のヒントを提起した。

つまり中庸思想には、「中庸の本体と作用には、未発の中⇨和と、執中有権の中⇨時中の二つの相異なる概念が存在する事になる。つまり中庸思想には、中国人の伝統的で基本的思考である対の思想⇨両面思考が働いているということである。」(二三)と、中和の中庸と執中有権の中庸という相異なる二つの中庸思想が存在する事を指摘したのである。

また既に上梓した拙稿に於いて、「中庸思想の実現方法には、両端より中央への求心性と、中央から両端への遠心性という、互いに相異なる二つの政治力学的ベクトルが働いていることを心に銘記しておく必要がある、ということである。中庸思想は、これを政治権力構造論に展開すると、楊朱の個人主義⇨家族制度⇨私権力と、墨翟の博愛主義⇨国家社会⇨公権力とが、両極端から中央への求心性⇨公私の融合性と、中央から両極端への遠心性⇨公と私の両極端への分裂的存在という、権力構造性の相違を持ちながら、公私の両権力を五分五分に存在させて均衡ある二重権力支配構造の実現と維持を目的としていたのである。」(二四)と述べて、両端を否定して中央に求心化して行く中和の中庸と、子莫の中間主義という真ん中論を否定して両極端を肯定して、それに遠心化して行く執中⇨権の中庸思想という、全く相異なる凡そ逆方向の政治ベクトルが存在している事を指摘した。つまり中庸思想は、全く相反する凡そ逆の方向性を持つ構造性を具有している政治思想なのである、と言う事である。

両端を否定した中和の中庸思想は、いわば方円形の真ん中、つまり中心に求心化する政治思想であり、逆に方円形の中央を否定して両端に目が行く執中有権の中庸思想は、いわば楕円形の遠隔地の二つの中心点が中庸思想の真ん中であり、この両端という二つの中心に遠心化しようとする政治思想なのである。

しかし金谷氏の中庸思想の構造論の追求と展開については、傾聴する点が非常に多く存在しているので、金谷氏の中庸思想の理解についての方法的欠点については、金谷氏の中庸思想の理解方法の批評の別稿の専論において、詳細に論証する事にする。

高根秀人氏は、「中庸の徳といえますのは、過・不足の両極端を廃して“ホド〔程〕”よくあんばい〔塩梅〕する、“中和”することです。中庸を美の学として、西洋的に表現しますと、バランス〔Balance〕”の概念が一番近いのではないかと思います。さて、この中庸は、ともすると単純・浅薄に、中央・平均と捉えられがちです。・・・中庸には、もっと深意があります。

中庸を理解するために、例として“棒ばかり〔秤〕”について述べてみましょう。・・・この皿に、例えば 魚をのせます。反対の端には、おもり（分銅）を引っ掛けます。はかるモノは、重さが異なりますので おもりの（重さではなく）位置を調節して、棒の水平を実現します。その水平になった時、棒の目盛りを読むと重さがわかるという仕組みです。この おもり（の動き）にあたるものが、中庸を示していると考えられます。つまり、はかるモノ（＝状況、価値基準など）が変化すれば 中庸は動きます。中庸の深意は、この動的概念にあります。・・・中庸の美を、私なりに定義すると、「状況・変化に対応した動的なバランス〔balance: 均衡〕」といったところでしょうか。中庸の考え方は、全陰と全陽をその両端と考え、陰陽の動的バランスの中にあるべき姿（美）があるとするもので・・・」（八）と述べている。

高根氏は、資料の出典を明記しておらず、中国哲学の研究者ではないので、恐らくは金谷氏の『中国思想を考える』の「中庸」を読んで、自分なりに解釈しての主張であると思う。

中庸思想を、両端を否定した中和論と両端を肯定したバランス論の両者を区別してではなく、中和論をバランス論に吸収してしまい、また中和論とバランス論を各々論証していない欠点があり、中和論とバランス論がどの様な関係にあるのかを説明していないのである。中庸とは、単純な中央・平均を意味するのではなく、計る物の変化に応じて直線状にて左右に動いて、重さの水平バランスを執る分銅Ⅱ「動的概念」が中庸だと言う。結局的には「融通性のあるのが中庸の中」との金谷説と同一の結論に帰結するのである。

同氏の主張は、孟子の子莫批判を引用して「権ある中」を直線状の水平バランスを執る分銅的役割を持つのが、中と解釈した金谷説と同様の考え方によく似ている所に特徴がある。しかし金谷氏の説明する「権」のある中とは、

「融通性という意味は「権」いう言葉で言われていますが、「権」というのは秤の分銅です。横にした棒の片方に量ろうとする物をぶら下げ、棒の真ん中で吊り上げて反対の片方に分銅をつけます。量る物が重ければ分銅を端の方に遠ざけ、軽ければ分銅を真ん中へ寄せて、天秤のつり合いをとります。重さに応じて分銅は左右に動くわけで、そこで分銅ということで融通性をあらわしたのです。孟子のいう「権」のある中とは、真ん中の一点をきつちりと守る固定的な窮屈なものではなくて、およその中ほどとして、はばのあるある融通性をもった中なのです。」（二二）と言うように、権Ⅱ分銅の動きを中庸だと言うのではない。中とは、天秤ばかりの重さを計る分銅Ⅱ権を持った中の動きの様に、融通性のあるのが、中庸の中概念だと言うのである。

金谷氏は、権Ⅱ分銅Ⅱ融通性を持つのが中庸の中であるというのであり、高根氏は、権Ⅱ分銅Ⅱ動的概念Ⅱ中庸と理解していて、金谷説とは理解方法が少し異なるものと思われる。

無權、猶執一也」―筆者注）わしがただ一つの立場だけを固執して融通のきかないのをにくみきらうのは、正しい中庸の道をそこねるからだ。それではただ一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所（百事―筆者注）を捨ててしまうことになるからだ。」（二〇）。

両端を肯定した場合の中庸思想の構造論について、孟子は、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義の長所を肯定して、子莫の楊子と墨子の直線的な中間を執る様な一極点の執中に拘らずに、臨機応変に墨子の博愛主義と楊子の個人主義の長所を完全に一〇〇％活かして、その真ん中を執れ、それが儒教の中庸なのだ。そうしないと、楊子の為我主義と墨子の兼愛説の全ての物の長所を放棄する事になる、と批判している。金谷氏の構造論の三角形や円錐形の頂点が中庸とすれば、執中有権の中は両端から浮き上がっている以上、孟子の言う様な臨機応変に両端を百パーセント生かした中庸思想にはならないであろう。

ところで金谷氏の両端を肯定した中庸思想の構造論である三角形や円錐形の頂点説は、どの様に円錐形の足場を動かしても、頂点は一定不変で固定的である。これは、孟子が子莫を批判した「執中無權、猶執一也」の一極点と同じで、臨機応変性や融通性のある中庸思想ではないのである。

だから孟子の子莫批判Ⅱ両端を肯定した中庸思想の構造論の主張から考えてみて、三角形や円錐形の頂点が中庸という様な構造論的な理解方法では、近代の中国知識人達には、中庸思想を实践する上において、一体、どの様に人民に応用して行ったらよいのか、見当が付かないであろう。従って中庸思想を政治実践に生かすためには、金谷氏が述べる様な形式論議的な構造論ではなく、中庸思想の構造論を政治力学的に把握する必要性が存在するのである。

一方で金谷氏は、中庸思想の語義の規定において、「融通性のある幅のある

真ん中」とも主張していた。この語義の規定の学説は誤りであり、中庸思想の中とは、両極端の真の真ん中であり、曖昧でいい加減な中でないことは既に述べた。しかしながら金谷説において、そもそも中庸の中とは、五を中心とした直線状の四でもよいし、六でもよいと言う様な融通性のある中庸の中の語義規定と、中庸の構造論においての三角形や円錐形の頂点Ⅱ固定的な一点が中庸の中とする学説とは相矛盾するであろう。

三角形や円錐形の頂点は、どの様に図形を動かしても、動きが変化するものでない以上、融通性や幅のある構造体ではないのであり、金谷氏の中庸の語義の規定と、その構造論の主張は自己矛盾しているのである。

金谷氏は、中庸の説明として、「三 時に中す―その時その場の状態に應じて中庸を守る、朱子いう、中は定まった体（かたち）がなく、時に従ったあり方をする」と、『孟子』万章下篇で孔子のことを「聖の時なる者」とするのも同意。（二二）と引用して、中とは定体Ⅱ定まった形がないものであると、朱子の中庸の内実を紹介して、時中を「その時その場の状態に應じて中庸を守る」と理解している。

朱子の説明では、中庸には定体が無い筈なのに、三角形や円錐形の頂点が中であると形式化して図形化・立体化する金谷説は、自己の中庸の語句説明や朱子の説明と相矛盾することになるであろう。

従って以上の理由から考えても、中庸思想を政治実践に応用するためには、中庸思想の構造論は、金谷氏の述べる三角形や円錐形と言う様な図形的・立体的に構造論を理解するのでは不可能なのであり、政治力学的に理解して把握する必要性が存在する。従って改めて両端を肯定した場合においても、中庸思想の構造論の内容を明らかにする必要性が出てくるのである。

以上の様に金谷氏の中庸の図形的な構造論提起の前提になった三点は、全て資料の解釈において成立しないのである。従って金谷氏の三角形や円錐形の頂点が中であると言う立論は成立しない。その事は、暫く置いて、金谷氏の構造論の問題点は、以下の様に要約できるであろう。

結論—金谷氏は、「右でもなければ左でもない」のが中を中庸としたが、舜の政治方針である「其の両端を執りて、其の中を用いる」との文章の引用を通して、「右でもあれば左でもある」のが中庸として、両端の否定論を両端の肯定論に吸収して、両端を統合した立体的な頂点—真ん中が中であるとした。三角形や円錐形の頂点が中庸であるとするのが、金谷氏の構造論的な理解であった。この様な構造論を導き出した思考方法は、両端を包み込んだ包容性や統合性の中心に中庸が存在すると主張した所に由来している。

原因—この結論を導き出した原因は、両端の否定論と肯定論という全く異なる二つの概念を区別しないで—中国思想の基本的思考である対の思想を考慮しないで—両端の否定論を両端の肯定論に吸収して一本化してしまった必然的帰結としての中庸思想の構造論的な理解方法にある。

誤解の原因—この様な誤った結論を導き出した根本的原因は、金谷氏の中庸思想の理解方法にある。即ち中庸思想は、両端の存在を肯定した上に成立するとする以上、どうしても両極端を一点に統合化しなければならない。しかもその統合体は、両極端の真ん中でなければならないから、中庸の構造論は、両極端を統合する中心として位置付けた結果、三角形や円錐形の頂点説の主張に結論するに至ったと思われる。従って金谷氏の中庸思想の構造論の問題点は、以下の様になる。

中庸思想には、両端の否定と肯定という、対の思想が存在するにも関わらず

(一九)、金谷氏の構造論理解は、否定論を肯定論に吸収してしまい、底辺としての両端の存在を前提にして三角形や円錐形の頂点説を導きだしたものである。しかしこの議論は、両端を否定論した中庸思想の構造論の場合には、底辺である両端が存在しない故に成立しない議論である。両端を否定した場合の中庸思想の構造論は、如何なる内容であるかを無視している。従って金谷氏の構造論理解は、両端の否定論の場合には、当て嵌まらないであり、改めて両端を否定した場合の中庸思想の構造論を説明する必要がある。

三角形や円錐形の頂点説は、舜の「両端を執りて、その中を用う」との両端の存在を前提にした中の解釈から導き出されたものである。しかしこの「両端をしっかりと手に持つ」という、両端の肯定論から導き出されてきた金谷氏の中庸の中の位置についての構造論である三角形や円錐形の頂点説は、果たして正しいのであろうか。舜の「執其両端」の中庸政治と同じ様な議論を孟子は述べている。孟子は、子莫の「執中無權」批判で、儒家の中庸政治の長所の理由を以下の様に明確・詳細に述べている。

「孟子がいわれた。『楊朱は「極端な個人主義者であるから」、万事自分本位にしか考えない。だから、たとえわずか髪の毛一本抜くぐらいのことで大いに天下の為になるとしても、決してそれをしない。ところが、墨翟は「これと反対で、無差別の博愛主義者であるから」、たとえ頭の天辺から足の踵まですりへらしても、天下の為とあればそれをするのである。魯の賢人子莫は子の中ほどを執る中道主義である。この中道主義は聖人の道である中庸にまず近いといえるが、しかしあくまでも中道ということだけにとらわれてしまって、臨機応変の処置がなかったなら、これまた楊朱や墨翟のようにただ一つの立場だけを固執して他を忘れてしまうのと全く同じだ(子莫執中、執中為近之、執中

らして動いているのですから、真ん中が固定してはひっくり返ります。融通性を持ったほど良い中ほどということ、いつも円の中心にいるように自在に柔軟に動いてゆくわけです。円周の両端に足をふまえて、その中央に腰をおろしているかっこうです。」（一六）と述べている。

以上に紹介した金谷氏が『中国思想を考える』の「中庸」において主張する三角形・円錐形の頂点が中庸であるとの構造論の立論には、以下の様な中庸思想についての金谷氏の独自認識が背景にある。

舜の政治である中庸の中は、両端の存在を肯定して、これを包む込んだ包容性や統合性を持つものである。

子莫の「執中無權」批判をした孟子の権のある中は、〇―一〇の真ん中が五という固定的なものでなく、四や六でも中であるという、中庸思想の中は融通性のある真ん中である。

時中とは、「その時その時にぴったりと当てはまる中です。現実の世界は絶えず動いて状況はいろいろと変化しますが、そのなかで自分の置かれている立場を自覚して、そこで中を守るという主体性をつらぬくのです。」（一六）と解釈して、時中とは中を守ることである。

以上の三点が前提となつて、三角形や円錐形の頂点が中庸の中との認識が導き出されてきたのである。しかしこの立論には多くの無理がある。以下に金谷氏の立論の三点の是非について検討して見たい。

金谷氏は資料的根拠に、「温而厲、威而不猛、恭而安」となつていて、「而」という接続詞でそれぞれ前後の二つの言葉をつないでいるのですが、「と述べる。」「而」の接続詞を順接詞として理解して、孔子の人格を「温かくて厳しい」というその両端を包みこんだ、ある意味で一段高くなったところに孔子の人格

がある」と解釈したのである。しかしこの「而」の解釈は誤りである。対立する温と厲という対義語を繋ぐ接続詞である「而」は、「温かいが、しかし激しい」との逆接詞に理解しなければならぬ。つまり孔子の人格には「温かい性格であるが、しかし厳しい性格でもある」と、対立する両面性がある―つまり対の人格を持つのが、孔子の自己分裂的な性格であつたということである。従つて孔子の人格は、統合性の高みにあるという金谷氏の主張は是認できない。

また「文質彬彬」の君子像の解釈も誤解である。金谷氏は、文と質の「両端を執りて」の中だと解釈する。しかし『論語』には、「先生がいわれた、「質朴さが装飾よりも強ければ野人（野―筆者注）であるし、装飾が質朴さよりも強ければ文書係（史―筆者注）である。装飾と質朴さがうまくつけあつてこそ、はじめて君子だ。」（一七）とある。この文章は、「文質彬彬」の君子像の前提にある野と史の両端を否定しているのである。つまり「野人も不可だが、文書係も不可である」として、文と質の両端を否定した上で、「君子は文と質が混じり合つてとけていなければならない」というのである。従つて孔子の言う君子像は、金谷氏の言う様な文と質の統一した高度な統合性一つの観念を表わしているのではない。文と質の両端がなくなり、両者は、上手く混じり合い溶け合つていなければならないと言うのである。

金谷氏は、子莫の「執中無權」を固定的な中であると批判して、孟子の「執中有權」の中庸は、融通性のある中であると言うが、この主張は誤りである。孟子は、絶対的な真ん中の中を執る方法論として、権＝臨機応変性を主張しているのである。中庸の中は、絶対的な真ん中である（一八）。

金谷氏は、時中とは、その時その時に応じて中を守ることと言うが、この主張は誤りである。時中とは、状況に適中する行動を意味する（一九）。

「子は温にして厲、威ありて猛ならず、恭にして安なり」(述而篇)

原文の漢文では、「温而厲、威而不猛、恭而安」となっていて、「而」という接続詞でそれぞれ前後の二つの言葉をつないでいるのですが、この前後の言葉は本来結びにくい、対立するような概念です。「温」は温かく穏やかなこと、「厲」はその反対で厳しく鋭いことです。これが結びついているというのは、そうした矛盾とも見えるような性格が、孔子の人格として渾然と一つになっていることを表わそうとしているのです。単なる温かさでもなければ厳しさでもない、温かくて厳しいというその両端を包みこんだ、ある意味で一段高くなつたところに孔子の人格があるということです。さて、そうだとすると、それは温と厲という両端をふまえて、而という真ん中の頂点に腰をおろしたという形になって、それはちょうどこれまでに述べてきた中庸の説明とびつたりということになるでしょう。興味深いというのは、そのことです。

温かい人というのは、つい甘くなるものですが、そうならないで厳しい。威厳のある人というのは、つい威勢にまかせて粗暴になるものですが、そうはならないで、どこまでも慇懃である。恭敬で礼儀正しい人というのは、どうしても窮屈で固苦しいものですが、そうはならないで、安らかにゆったりしている。孔子の人格はそうした統合的な高みにあるというわけです。・・・

ここで、『論語』の有名な言葉、「文質彬彬として、然る後に君子なり」(雍也篇)というのを想い起していただきましょう。生地の素朴さが強く表面に出るのは野人である、逆に表面の飾りが強くなつて生地の素朴さが消えるのは書記である、という言葉を受けています。そこで、文(飾)と質(朴)とどちらに偏つても十分ではない、両者が適度にまじりあつてうまくつりあいのとれた状況が得られて、そこでこそ君子だというわけです。これはどうでしょう、「文

而質」という表現こそありませんが、言おうとしている内容は同じだと考えてよろしいでしょう。文と質という対立した二つの観念が、そのどちらにも偏らないでうまくまじりあつて、高度な統合的な一つの観念を表わしているのです。やはり、「両端を執りて」用いる中だと言えるでしょう。

そこで、こうした中庸の包容的な意味、あるいは統合性というものがわかりますと、前にもちよつとふれたように、それは直線的であるよりは構造的に考えた方がよいということになります。過ぎることもなく及ばぬこともない、過不及がないこと、つまり「右でもなく左でもない」という両端の中ですと、たとえば一本の紐がずっと延びてこちらの端とあちらの端とがある、その両端を区別した中間というように、直線で考えることができます。しかし、中庸はそんなに簡単ではない。「右でもなく左でもない」というのが、実は「右でもあり左でもある」ということになりますと、右と左とが均等に中央に歩み寄つてきて、そこに質的な高まりをみせる、いわば頂点を形成する、といった構造で考えるのが適切です。

私の勝手な考えかたになりますが、円錐形、つまりとんがり帽子の形で説明すると、よく理解していただけるかと思えます。まず下部の底辺は円形です。その円周の線上の向こうの一点とこちらの一点とを結んで中心を通る直線が縦に引けます。どういう方向にも引けて、円の周辺が皆それぞれ端です。相対立するものを反対側に持つていると見るわけです。そして、この底辺の対立がたがいに歩み寄ることによつてその距離を縮めてゆく、それに応じて質的な高まりができてくる、上へ上へと上がつてとんがり帽子のさきが真ん中だというわけです。中を守るというのは、このとんがり帽子のさきに坐ることです。この腰をおろした真ん中は絶えずゆれ動いています。円錐形の全体がその足場か

る両端の統一を支える超越的性格をもつのが特徴で、原始社会における宗教的人間が切望した中心観念の理念化であると考えられるでしょう。宇宙論的次元で、「中」の確定はカオスからの脱出とコスモスの確立を意味するのに照応して、儒家が唱えている社会倫理の次元で、対立する両極を超越した中庸の実践は社会秩序の確立を意味することになります。したがって、中庸の理念は宗教神話的「中」と同じ流れを引いたものであり、「中」のシンボリズムが形而上学的に拡大敷衍されて、理念化され、遂に政治的倫理、行動的規範にまで転化したものと考えられます」と述べていて、「中庸」思想とは、平面を図式化した幾何学的な中ではなく、「対立する両極を支える超越的中心である」と結論している。

つまり同氏の「中」説は、宇宙的に展開した空間原理という物であり、宮崎説・島田説の空間的原理論や金谷氏の対立する両端を合した構造論説と同様なのである。しかしまた同時に同氏においては、中庸の中＝空間原理の具体的内容も明示されていない欠点を持つのである。

四 金谷説の再検討

壮年期の金谷氏は、中庸思想は包容性や統合性を持ち、構造論的に理解しなければならなかったが、未だその具体像は明示していなかった。しかし中国哲学者の第一人者となられた晩年期の金谷氏は、中庸思想の構造論の具体像を明示する事になったのである。管見の限り中国哲学者の中において、具体的に構造論を提起しているのは、金谷氏以外に存在しない。一般の読者にも理解できる様に平易に中庸思想の具体像を明示している。何よりも先ず金谷氏の

中庸思想の構造論を理解しようと、長年に渡り中庸思想の構造性を追求してきた真摯な研究姿勢に敬意を表したい。

金谷氏は、『中国思想を考える』（六）において、金谷治「中と和」（一）、金谷治「中庸について―その倫理としての性格」（二）における論考の主張の結果として、中庸思想を構造論的に明示しようとして、三角形や円錐形の頂点に位置するとの立体的頂点説を展開する。この中庸思想の構造論の展開は、現代日本の中国哲学研究者の中において、中庸の構造的内容の理解について、初めて図形化や立体化して具体的に表現した論文である。

金谷氏は、「二 中の包容性・統合性」において、『中庸』にある舜の政治方針である「其の両端を執りて、其の中を民に用いた」を引用して、

「ここで注意しなければならないのは、両端を捨て去るのではなくて両手にしっかりと持つという点です。実際に働かせるのはその中ほどですが、その両端もまた捨てないで中の働きのなかに接収されて生かされているという、そういう形が考えられているわけです。つまり「右でもなければ左でもない」といった両端の中は、実は「右でもあれば左でもある」という形へと転換するので、そしてそうになると、右と左との真ん中というように直線で考えられていたものが、右と左とを包み込んだ頂点の中というように、三角形あるいは円錐形の立体的構造で考えられることになるのです。

それについて興味深い資料は、『論語』のなかに孔子の人格を述べた言葉です。孔子の人格と言えば、『孟子』にも「仲尼（孔子）は已甚だしきことを為さざる者なり」（離婁下篇）とあって、いかにも孔子自身が穏やかで平情な、極端を避けた中庸の人であったことを思わせる言葉がありますが、今、とくに大切なのは『論語』の次の言葉です。

あると解説している為である。また朱子は「中とは一定の実体がない」と、島田氏は解説していた。このことから考えても「時中」の意味は、「状況に適した行動をする」と解釈しなければならない。

島田氏が明確にしていない孟子の主張する中庸Ⅱ「執中有權」論とは、一体、どのような構造的な内容なのであるのかを明確にすることで、島田氏の言う空間原理たる中の意味や時中の内容は明らかになって来ると思う。このことについては、今は暫く置いて、中庸思想の構造論研究の本論において、詳細な検討を行いたい。少なくとも島田氏は、中は空間原理と言いながら、その内容を具体的に説明していない故に、中庸思想の構造論の説明にはなっていない。

中国史学専攻の宮崎市定氏は、中庸思想の構造論について、

「この礼は中の点を体現した点に意義がある。然らば如何にして礼が中を得たものであることを証明しうるかといえば、およそ中を得た行為というものはこれを永遠に繰返しても決して支障を生ぜぬことによつて実証されるとするのである。いわば空間的な原理たる中は、時間的な原理たる庸によつて裏打ちされて、初めて真の中たりうる。」(五)と述べている。

この一文を何度読んでも、筆者には、宮崎氏の言わんとする中Ⅱ空間的原理と言う構造論の内容を理解することが困難なのである。宮崎氏の中庸の中の構造論性の主張を、一体どれだけの研究者がすっきりと理解できるのであろうかととても疑問になのである。以下にその構造論性についての疑問点を述べる。

宮崎氏によれば、中庸の実践は事前に学習して体得できないのであり、実践の結果、その行為に何らかのトラブルや支障がなかった場合のみ、自分が中庸を実践し得たと結果論的に理解できるものであった。これでは、何故に前近代の中国知識人は、『中庸』・『論語』・『孟子』等の中庸に関係する書物を事前に

学習する意義や意味が何処に存在するのか理解できないであろう。

例えば『中庸』に「子曰く、……人は皆な予は知あると曰うも、中庸を捉ひて、期日も守ること能わざるなり」と。(二五)とある。金谷氏は、「人びとはみな「自分は知者だ」といっているが、中庸〔がよいわかってそれ〕を選び出したとしても、それを守りつづけることはただの一个月でさえできないものである。」と訳している。選択できたと言うのは、中庸を体得出来たからであり、このように中庸は学習して体得出来ても、それを維持することは困難だというのである。資料的に判断しても明らかに宮崎氏の主張は誤りであろう。

宮崎氏は、中庸は空間的原理と述べるが、例えば金谷氏が「三角形乃至円錐形の頂点」と具体的に定義している二次元や三次元の問題として具体的に明示している様な空間的原理の具体的内容が明示されていない。

中Ⅱ真ん中が何故に空間的原理となるのか、その理由が明示されていない。これでは前近代の中国知識人は、中庸を空間的原理として理解しても、政治実践に於いて、一体どの様にこれをどの様に活用して善いのか理解できないことは明白であろう。中庸思想を政治実践に応用する事は出来なかったであろう。宮崎氏の中庸思想の特質の提起である中の空間的原理は、その構造論が明示されていない故に、中庸思想の構造論の説明にはなっていないのである。

しかし宮崎氏の中庸思想研究の意義は、これまでの中国哲学研究者の枠を破って中庸を宇宙論的に解説した所に存在する。スケールの大きい研究であるので、別稿において、宮崎氏の中庸思想の説明論を詳細に検討してみたい。

杜勤氏の主張は、「中庸の「中」は単なる一直線の両極端の中ほどというような幾何学的中心ではなく、相対する両極の統一を支える超越的な中心です。」(七)と述べて、「「中」は幾何学的中心ではなく、「中庸の理念は相対立す

孟子の資料を引用して見ると、「孟子曰、楊子取（衍字？）為我、拔一毛而利天下、不為也、墨子兼愛、摩頂放踵、利天下為之、子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也、執中為近之、執中無權、猶執一也、所惡執一者、為其賊道也、舉一而廢百也」（二二）とある。この資料は、金谷氏が中庸の意味の規定において、權を分銅の意味であり、融通性を示すものとして、「ほどよさ」に使用したものであるが、島田氏は、執中の中を「中庸には定体、つまり一定の実体がない」の意味に解釈している。

しかしこの資料には、島田氏が言うように時中の文字や内容が一つも明示されていない。資料に明記されているのは、「權」の字句であり、従って孟子の子莫批判で展開している「執中無權、猶執一也」が、何故に一定の実体がないことになるのか、具体的な説明が必要なのである。

島田氏の時中の説明では、禹も顔淵も極端に一方に偏った行動をしているのであり、これでは「時中」にならないのではないか。何故に禹も顔淵も時中の行動をしたと結論できるのか、もう少し詳しい内容の説明が必要である。

従って一体、『中庸』や孟子の言う「時中」とはどのような意味なのであるか。時中の意味を再検討する必要があるであろう。

筆者は、その場その場の自己の置かれた状況によって、全く異なった行動をして、その状況に適した行動をすることができることが、時中の意味と考える。このことは、拙稿（一三）において具体的事例を挙げて、島田氏・金谷氏説の時中Ⅱ「時に応じて中庸に居る」との学説を批判した。

ここでもう一度、時中の意味を資料に基づき検証しておきたい。時中の資料が『中庸』第二章に現れているのは、「仲尼曰く、「君子は中庸し、小人は中庸に反す。君子の中庸は、君子にして時に中すればなり。小人の中庸に反するは、

小人にして忌憚るなければなり。」と」の一文である。この一文の「時に中す」を、島田氏・金谷氏は「中庸に居る」と解釈したのであるが、これは以下の理由により、決定的な誤読であろう。

「君子の中庸は、君子にして時に中す」は、「君子の中庸」は主語であり、「君子にして時に中す」は述語である。述語は主語の内容を説明する補足語彙であるから、中庸Ⅱ時中とイコールで結合できない。従って時中は中庸の内容を説明する立場から考えて、中国語法上では動詞に読まなければならないから、「時に中（ちゅう）す」Ⅱ中庸とは読めないはずであり、「時に中（あた）る」と、適中の意味に読まなければならないのである。

この一文の「時中」と「忌憚」の述語は、君子と小人の行動様式において対比的に使用されている。従ってこの二語は、対比的に読まなければならない。忌憚は「いみはばかり・きらいいやがる」の意味であるから、「小人はどんな時や場合でも、いみばかりことなく、きらいいやがることなく、何でもかんでもやってしまう」との意味である。従って「時中」は「どんな時や場所でも、いみはばかり、きらいいやがり、自分の置かれたその時の状況に応じて適した行動をとり、自分の行動を慎む」と解釈しなければならないであろう。

朱子の「時中」の解釈を、宇野哲人氏は、「君子にして時に中（ちゅう）す」と読み下して、「通解」では、「時に従い変に処してその宜しきに叶うのである」と、適中に意味に解釈しているのである。宇野氏は、金谷氏・島田氏の解釈と異なり、「中庸に居る」とは解釈していない。それは、「不偏不倚の四字はいわゆる未発の中すなわち中の体をいつたもので、無過不及の四字はいわゆる君子の時中の中すなわち中の用をいつたものである。或問には朱子が委しくその意を述べておらるるが、」（一四）と、朱子説に忠実に従い、時中は中庸の作用で

ついで考察が無視されている。

この事実を論証する好個の事例を挙げておく。孟子は、大人〓君子〓中庸人について、「孟子がいわれた。『言行一致は美徳にはちがいが無いが』、大徳の人は言ったことを必ずしも実行するとはかぎらないし、やりかけたことを是が非でもやり遂げるとはかぎらない。ただ義に従って適宜に行なうまでだ。』」(一一)と述べている。中庸の人物とは、言行一致の人間ではなくて、正義に基づいて適宜に行動する人物なのである。

赤塚氏の論理は、中庸の意味を特定するのに、中と対立する両極端・過不及という否定の論理を設定して、今度はこれを証明するのに両極端を肯定する資料を持ち出して、更に結論では両極端の半分を肯定して半分の否定して中庸人を設定するのである。これこそ、両極端の否定と肯定という折衷主義・追従的機会主義なのであり、同氏は二重―三重の誤りを犯しているのである。

中庸人の規定において、理論においては否定論、引用資料においては肯定論、結論においては肯定論と否定論を融合する、自己矛盾した主張する赤塚氏には、中国人の基本的思考が自己分裂的思考性を生来的に持つこと、つまり両面思考〓対の思想を持っている民族であることが全く理解されていない。

従って赤塚氏の規定した中庸人の構造論的理解の主張は、対の思想〓両面思考の特性や内容を理解していない所に由来している中庸思想の構造論的理解方法への誤りであると言えるであろう。

三 島田・宮崎説の検討

次に島田虔次氏の中庸思想の構造論を検討してみたい。島田氏の中庸思想の

構造論についての問題点は、以下の様になる(四)。

島田氏は、未発の中について、「在中の中」の意味と言い、「在中」とは空間的・「静」的な中央に位置するとの意味と言うが、中の空間的意味を具体的に説明して、その構造論的内容を明示していない。つまり中は、左右・前後・上下の三次元的に理解して、中庸思想は初めて空間的原理になるが、それを具体的に明示していない。

島田氏は、『中庸』第二章の「君子の中庸は、君子にして時中す、小人の中庸〔に反する〕は、小人にして忌憚なくものなり」との解説で、時中について、「君子は君子たる徳を有しその上にさらに時に応じて中に処することができからであり、・・・」と述べて、「時中」というのは、元来、「中」というのは定体が無い、すなわち一定の実体があるものではなく『孟子』四五四ページの「子莫が中を執る云々を参照」。「時」に依じて―中江藤樹・熊沢番山ふうにいえば、「時・処・位」に依じて―定まるのである。中が「中庸」と熟して平常の理だとされるのは、まさにこの意味に他ならない。程子のたとえによれば、禹が治水工事に献身して「わが門を過ぎて入らなかつた」のは禹における時中であり、顔淵が「陋巷に在った」のは、顔淵における時中であつた『孟子』二七三ページ離婁下。と、朱子の中庸の解説を引用して説明している。

島田氏の主張する時中というのは、自己の置かれた状況―時に依じて中に居ることを意味しており、これは、金谷氏の「時中」の説明と同様である。

また島田氏は、「中」は、一定の定体がないと言う―これが空間的原理との主張の根拠となつていゝと思われ―が、何故に中は一定の実体がないのか、孟子の「子莫の中を執る云々」を参照することと述べるのみで、その根拠が具体的に明らかにされていない。

い」両極端を否定した真ん中という思考と、「右でもあれば左でもある」両極端を肯定した真ん中という両面的な思考も、ある程度は存在するのであり、赤塚氏の中庸の論理的規定論は、金谷氏説だけでなく、中国人の基本的で伝統的な思考様式である対の思想Ⅱ両面思考を無視した一面的理解なのである。

赤塚氏は、中庸の規定論理において両極や過不及を否定論で扱う。しかし同氏の引用している中行の資料は、「中行者と交際できなければ、次は狂・狷か」というのである。志望ばかり大きくて実行の伴わない積極的人間である狂者と一身を廉潔に保つだけの消極的人間の狷者の両方を肯定する資料である。最初の論理で両極を否定しながら、引用資料では両極を肯定する資料を挙げている。同氏の主張と引用資料での主張は、全く自己矛盾している。従って「志望と実行と修身と教化を兼備したのが中庸の人物」とする同氏の主張は、狂・狷を肯定する引用資料を曲解して、狂・狷を肯定した上で更にこの両者の欠点を否定した上で、赤塚氏が推測して人工的に作成した完全無欠の大聖人が、中庸Ⅱ中行の人物像なのである。両端の真ん中の人が中庸人であるのに、この議論では、一つの極端な人物が中庸人になってしまうのである。

赤塚氏の引用する文章を正確に読めば、孔子が交際したい人は、中行の人がいなければ、狂者Ⅱ志望ばかり大きい実行性のない積極的人間と、狷者Ⅱ廉潔だけの消極的人間と交際したいというのであり、中行人は、積極性と消極性の両方の性格を持つ人間だったのである。完全無欠の人間ではない。その証拠に、『論語』子路篇に孔子は、「言うことはきつと偽りなく、行なうことはきつといさぎよい。こちこちの小人だね、でもまあ次にできるであろう。」(九)とあり、言行一致は小人だと言う。言行一致の人間は、君子ではないのである。そもそも赤塚氏の引用資料の解釈は、拡大解釈である。『論語』には、「子の

曰わく、中行を得てこれに与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所あり」とある。金谷氏の訳注には、「先生はいわれた、「中庸の人をみつめて交われないとすれば、せめては狂者か狷者だね。狂の人は「大志を抱いて」は進んで求めるし、狷の人は「節義を守って」しないことを残しているものだ。」(一〇)とあり、孔子は、狂・狷の長所を述べるだけで、狂者と狷者には、欠点までも存在するとは言っていないのである。

また同氏は、「中行者は、中道を行なうものであり、志望と実行と、修身と教化とを兼備している人格者である」と、言行一致の人と言う。赤塚氏の論理は、両極端を否定した論理であれば、或いは是認されるかも知れない。しかし実際の両極端を否定した中庸の場合は、「積極的でもないが消極的でもない」、どちらでもないのが中庸人なのであるから、同氏の説は是認できない。

また他方での同氏の引用資料は、狂・狷を肯定しているのであるから、中庸と両極端は対立しないのである。従って両極端と中は対立すると言う同氏の主張は、両端を否定する場合のみに適合する論理である。両端の否定論は、中庸思想の半面の真理であり、同氏の中庸人の規定の主張は認められない。

「孔子は、中庸の人をみつめて交際できないのであれば、その次は積極的な狂者か、消極的な狷者と交際したい」というのであり、中庸人は狂者と狷者を兼備した人物ということになるであろう。しかしまた積極者の狂者と消極者の狷者とは、同時に交際を実行する事は出来ないのも明白である。

従って中庸人とは、ある時は積極的であるが、ある時は消極的である人間であると思われる。これが、孔子の言う中行人像なのである。赤塚氏の中行人の交際相手像である狂・狷は、狂と狷は同時に交際できない以上、狂者と狷者との様に交際して中庸を実現するのか、という中庸思想の構造論の理解方法に

彬彬とは、両端の性質が消えて、その上で両端が融合する状態であり、金谷氏の言う様な両端を兼ね備えて平衡を得た人間と言う意味ではない。この場合は、両端は否定されているのであり、金谷氏の言う様な包容性≡構造化を持つ様な性質の中庸論ではない。金谷氏の論考で気になるのは、両端が否定された場合の中庸思想の構造論の探求が全く欠落していることである。この時期における金谷氏の中庸の構造論研究の問題点は、両端の否定論と肯定論が区別されていなく、また中庸思想の構造論の具体像が明示していないことが問題なのである。またどの様にして対立する両極端の性格を融合して中庸を実現するのかという、中庸思想の構造についての実現方法論が欠落していたのである。

二 赤塚説の検討

次に赤塚忠氏の中庸思想の構造論の問題点について、以下に検討したい。既 на上梓した拙稿に引用した文章であるが、再度引用して検討して見てみたい。

「だが、中庸は、過不及の中間をとりさえすればよいというような生易しいものではない。ただ中間をとるのでは、全く自主性を失った折中主義・追従的機会主義となるであろう」と、単純に両端の中間を取った中庸は、折衷主義・追従的機会主義であると、厳しく武内義雄氏の学説を批判した赤塚氏の中庸思想論とは、一体どの様な構造論的な具体的内容を持っているのであろうか。『論語』に典拠している孔子の中行に、『中庸』の中の概念の始原を求める根拠として、次のように述べる。

「また、中、ないしは中庸を主張するには、それに反する両極端・過不及・奇僻が存在することがはつきりと予想されており、その予想されるものが強度

であればあるほど、中の要求も強くなる。そのような対立するものなしに中を説くことは無意義である。この点から注目すべきものは、『論語』子路篇に「子曰く、中行を得てこれに与せざれば、必ずや狂・狷か。狂者は進んで取り、狷者は為さざる所あり、と」とある文である。孟子の解説によれば、狂者とは、古聖人の道を行なう志望ばかり大きくて、実行がこれに伴わないものであり、狷者とは、一身を廉潔に保つに汲汲として、他人を善導するには及び得ないのである。して見れば、中行者は、中道を行なうものであって、志望と実行と、修身と教化とを兼備している人格者である。孔子はこのような人格者とともに道を行なうことを最も希望していたのである。・・・『中庸』の中の概念の始原を求めるならば、この中行にこそ基づけるべきであろう。ただ孔子・孟子の中行（中道）は、同じく道を求めるものの徳行を主としていつており、かつ『中庸』のような理論的整備を欠いている。」(三)と述べている。

赤塚氏は、狂者と狷者という両極端人を包摂・包容した所に中庸人が存在すると、中庸思想を構造論的に理解しようとしている。この理解方法は、金谷氏が「中と和」や「中庸について―その倫理としての性格」で述べた「両端を包み込む包容性のあるのが中庸」とする理解方法と同一方向の思考である。

赤塚氏の主張は、金谷氏の学説を更に一步踏み込んで、中庸人を言行一致する人物であると、内面的に具体性を以て、構造論的に中庸人を理解しようとしたところに意義がある。しかしこの赤塚氏の中庸人の構造論の理解方法の主張には、以下の三つの問題点が存在する。

赤塚氏は、中庸には、「それに反する両極や過不及が存在する事が予想される」というが、これは、中庸を規定する上で、両極端を否定的に扱う一面的な思考である。中庸には、金谷氏が述べているように「右でもなければ左でもな

(二)の論考は、前稿の「中と和」の続稿であり、上古の資料に基づいて中庸思想を倫理面から考察し直した論文である。金谷氏は、この論考の中で、

『中庸』古本について先ず知られることは、「中」が過不及のない「両端の中」として意識せられていることである。……過ぎた状態、及ばない状態という両極端を意識したうえで、その何れにもかたよらないかほどに真正の道があるとするものである。それは、最もみやすい意味であると共に、又はじめて中庸という言葉のあらわれる『論語』からの伝統をも受けつく最も本質的な概念であった。ところが又「舜、問うを好み、好んで邇（卑近な）言を察し、悪を隠して善を揚げ、その両端を執りてその中を民に用う」（第六章）というのは、なるほどこれも両端の中であるが、右でもなくひだりでもないなかほどというよりは、むしろ、右の言い分も左の言い分もとりにいれてそのなかほどを用いてゆこうとするもので、もろもろの極端を一つに集中しようとする心の動きをみることができる。してみると、前にみた過不及のない「両端の中」は、実は単なる直線状のなかほどの一点というようなものでなく、むしろ両端をかねそなえた包容的な立場にある。ある意味では構造性を持ったものと考えられるであろう。そもそも「中」という言葉のうまれるには、消極的にせよ、端というものが意識されており、更にその端がなければ、中の存在も亦考えられないという事情を想うならば、以上のような関係は、容易に理解できるであろう。「温かにして厲しく、威ありて猛々しからず、恭しくて安らか」というのや、『書経』のなかで「直くして温かく、寛やかにして栗しく、闔くして虐なく、簡（大）にして傲（恣）なることなし」（堯典）などというのも、やはり中庸の表現であることがわかる。有名な「質、文に勝てば則ち野なり。文、質に勝

てば則ち史なり。文と質と彬彬として然る後君子なり」（雍也）というのは、文と質との両端を考えたうえで、君子はそのいずれにもかたよらず両者をかねそなえた人、即ち「中立して倚らぬ」人であることを説いたものであるが、それは又文質両端の平衡をえた調和の上に場を占めるものとみることができる。「中」の世界はそのまま「和」の世界に通ずるものであった。」と述べている。

金谷氏は、前稿「中と和」で述べた中の包容性的、構造的な意味を再度指摘している。しかし中庸思想は、包容性や構造性を持つと言う金谷氏の主張も、中庸の構造論の具体的内容については、この時点では未だ明らかにしていない。更に金谷氏の中庸の構造論の指摘で重要な問題点は、後半に展開している孔子や君子の人格論である。金谷氏は、両端の肯定論と否定論を区別することなく、両者を混同して、中庸＝調和論の論旨を展開している。

孔子の人格の「温かにして厲しく、威ありて猛々しからず、恭しくて安らか」との表現や、『書経』の「直くして温かく、寛やかにして栗しく、闔くして虐なく、簡（大）にして傲（恣）なることなし」（堯典）は、「温と厲」等の両端の肯定論である。この文章は、孔子や君子は、対立的な両極端の人格性を持っていたと言うのみである。つまり孔子や君子は対立する両面的な人格を具有していたということであり、対の思想の人格的表現である。従ってこれが何故に中庸＝調和論の表現になるのか、もつと中庸思想の構造性の説明する必要がある。また対立する性格は、同時に発現できない。従ってどの様にして中庸を実現するのかという、中庸の実現方法論も欠落しているのである。

逆に「質、文に勝てば則ち野なり。文、質に勝てば則ち史なり。文と質と彬彬として然る後君子なり」（雍也）は、「文と質」の両端の否定論である。孔子や君子の人格の場合の両端の肯定論と同時に扱えない性格の人格表現である。

に融通性がなくて一点に拘わった「中」であれば、集中統一の意を全うし得ず、従って真の正しい立場ではないと言うのである。孟子自身の思想的立場が「權」を含む「中」にあったことは勿論であろう。「權」というような特別な言葉で表せられることは「孟子」にはじまるとしても、そうした融通性、即ち大凡のところという考え方は、時の宜しきに従う随順性と一つになって、「詩経」や「論語」のなかに屢々あらわれ、古くから一般的に広く行なわれていたものであった。

「中」の持つこうした本質、即ち融通性を含む包容的な意味に注目すると、先に見たような「中」の論理的表現、右でもなく左でもないという否定的なそれは、実はそのまま、右でも左でもあるという肯定的な表現に、通ずるものであることが考えられる。・・・『詩経』商頌の長發では「剛ならず柔ならず、政をおこないてよく和らげばもろもの福祿はここに聚らん」といい、烈しいゆき過ぎを避けて、剛柔宜しきを得た「優々」たる調和的政治をよしとしているが、これこそ剛ならず柔ならざる「中」の立場がそのまま「和」と見られていることを示すものである。

思想家による「中」の論理的表現ははなはだ貧困であったが、そのめざす所は実は「和」の世界にあったのである。調和の持つ構造性を理解しながら、ただか極端に走らぬなかほどとしか言えなかったことは古代中国に於ける論理の限界を物語るものであろう。・・・」

金谷氏の主張の骨子は、両端を包容した総合的な、おおよその中ほどが、中庸の「中」であり、それが調和を意味すると言う、両端を肯定した中Ⅱ和という論理的な結論である。両端が存在しなければ、両端の和合も成立しないと言う論理である。従来一般的に中庸の意味として考えられていた、『論語』にあ

る「過ぎたるは及ばざるが如し」という両端を否定した真ん中が中庸であるとする通説に対して、舜の「執其兩端」を引用して、中庸の「中」は両端を包容した総合的な意味があると指摘した点は、金谷氏の斬新的で先進的な卓見であったのである。つまり金谷氏は、中庸の「中」は、「執其兩端」にある様に確かに手にとり持つ意味で、両端を包み込む立場で、構造性を持ち、包容的・総合的な意味があると言う。しかし本稿には、問題点も多く存在する。

先ず資料の誤読である。『論語』のなかで、「質、文に勝てば即ち野なり。文、質に勝れば則ち史なり、文と質と彬彬として然る後君子なり」（雍也）は、質と文の過ぎた野と史の両端を否定した上で、その両端が彬彬Ⅱ混じり合った人間が君子だ、とする文章である。また『詩経』商頌の長發では「剛ならず柔ならず、政をおこないてよく和らげばもろもの福祿はここに聚らん」の資料は、明らかに剛と柔の両極端を否定した上に、和が成立する文章である。

金谷氏が、両端の肯定論の資料に挙げた諸例は、実は両端を否定した上に「和」が成立するという資料である。従って両端を肯定した上には、両極端の調和論Ⅱ「和」は成立しないのである。

特に疑問なのは、金谷氏は、何故に、「右でもなければ左でもない」と言う両端の否定論が、「右でもあれば左でもある」と言う両端の肯定論の中に、否定論が吸収されて転化して行くのか、その理由を述べていない事なのである。蓋し、その理由は、金谷氏の考えている中庸思想は、包容性と総合性のある構造であると想定していたからに他ならない。両端の否定論を肯定してしまえば、中庸思想に包容性や総合性が消失して、両端を統合した和合にならなくなってしまうからであろう。

そして続いて発表した金谷氏の「中庸についてーその倫理としての性格」

する学派であった。今日に伝わる「礼記」のなかの中庸篇は、その考え方を窺がわせる主要な資料である。……しかしそれにもかかわらず、そのなかで「中」の意味を我々に明らかに示してくれているものはきわめて少ない。中庸思想といえど直ちに連想せられる中庸の書としては、これははなはだ意外なことである。いまそうしたなかから、その意味内容の比較的明らかなものを選んでみると、次ぎの五カ条が得られる。……「中」の説明としては、相対するものを持ち出してその右でもなく左でもないというものが、典型的な説明法であった。中庸という言葉がはじめて表れる「論語」のなかでも、理想的な中行の人を説明するのに、先走った狂者と引き込み思案の猖者とを揚げ（子路）、又真の道のありかを示すのに、過ぎたものと及ばぬものとをそれぞれに掲げたうえで、そのいずれでもないかほどにありとしている（先進）。中庸の本質として、相対するもののなかほどという概念は確かに最も見易いものである。しかしそれは、実は「中」という言葉そのもののなかに、既に暗示されているのではない。中庸の意味に於ける「中」という言葉は、端というものが消極的にせよ意識せられて、はじめて生まれてきたものであったろう。「中」について思索をこらしたと思える子思学派に於いても、その表現が結局こうした状態、即ち右でもなく左でもないという否定的表現で、「相対するもののなか」であること示すに止まっているのは、どうしたわけであろう。即ち「中」の論理的表現は、かれらの思惟にあつては、もはやそれ以上に進むことができなかったのである。それは、そのまま、古代中国における論理の貧困さを示すものであった。それでは、かれらの言わんとして言い得なかった中庸の本質とは何であったか。それをみる為の手掛かりを与えてくれるのは、前掲の第二条に見られる、舜の政治についての記事である。即ちそれは、舜がよく世俗の言をも聴き容れ

あちらの言い分もこちらの言い分も、善も悪もともに受け容れ、極端に走らぬなかほどを民の政治に用いたというのであるが、かかる考え方には、もろもろの極端を一つに集中しようとする心の動きが見られる。両端を予想した過不及のない「中」には、実はそうした包容性のあることが知られるであろう。「執其両端」の執は確かに手にとり持つことで、けっして一概に否定して除き去ることではなく、「隱惡而揚善」の言葉にも興味が深い。そのような両端を兼ねそなえた状態はむしろ両者を包む立場であり、それは構造化を持つもので、単なる直線状の両極端のなかほどというようなものではないことが考えられる。「論語」のなかで、「質、文に勝てば即ち野なり。文、質に勝れば則ち史なり、文と質と彬彬として然る後君子なり」（雍也）とあるのも、文と質の両端を考えたらうで、君子はその何れにもかたよらず両者を兼ねそなえた人、即ち「中立して倚らぬ」人であることを説いたもので、その立場は、まさしく「両端を執りて用いる中」に当たるものであろう。「中」には確かにそうした包容的総合的な意味があるのである。更に又このような包容的な「中」は、もとより固定した数学的な「中」、例えば二と十との中間としての六というような絶対的なものでないことは自ら明らかで、融通性のある相対的なものであることは当然であろう。「孟子」のなかには、そうした意味を最も明らかに物語る文章がある。即ち孟子は子莫の学問を批評して、その立場が当時の顯学である楊朱と墨翟との中間を得ていることはほぼ当たつていえると言え、そこには「權」がないから一極にとらわれているのと同じで、其のみちを傷うものであり、唯一事を挙用して百事を廢する事になると言っている（尽心上）。この「權」とはかりの錐（ふんどし）で、それが物の重さにつれて左右するから、融通性の概念を示すものとして用いられており、両極端の「中」を選んでも、それ

中庸思想の構造論研究史の考察

Ⅰ 対の思想から考察した中庸思想研究の現段階 (三) Ⅰ

中庸とは、円錐形の頂点説や空間的原理等の従来の中庸思想研究者の構造論的理解の方法では、前近代の中国知識人には具体的なイメージを抱き政治実践に活用する事は不可能であつたと思われる。中国思想の精髓と言われる中庸思想を現実の政治実践に活用するためには、政治実践を實行した前近代中国の士大夫階級に具体的にイメージができる構造論の提起が必要である。中庸思想の構造論は、中庸思想と不即不離の關係にある両極端と中との相互關係について、中Ⅱ礼Ⅱ和の場合も中Ⅱ權Ⅱ時中の場合も、化学的や力学的に中庸思想の内面的構造論を明らかにしなくては、政治実践に応用できないであろう。中庸思想の構造論は、中国人の伝統的で基本的思考である対の思想を導入した考察により、政治思想上の問題として具体的に解明しなくてはならないであろう。

キーワード…中庸思想 構造論 円錐形の頂点 対の思想 中Ⅱ礼 中Ⅱ權

はじめに

中庸思想の構造論に言及している論考は、発表年代順に述べると、管見の限り、金谷治「中と和」(一)、金谷治「中庸について―その倫理としての性格」(二)、赤塚忠『大学・中庸』(三)、島田虔次『大学・中庸』(四)、宮崎市定「中国思想の特質」(五)、金谷治「中国思想を考える」(第四章 中庸)(六)、

小倉正昭

杜勤「中」のシンボリズムに関する一考察…宇宙論からのアプローチ(七)、真儒協会会長 高根秀人年・個人ブログ【儒灯】・「美の思想―中庸―」(八)である。ここに列挙した諸氏の研究の中において、中庸思想の構造論を深く追求した構造論研究は、金谷氏のみと言っても過言でない程なのである。

ところで筆者は、「中庸思想研究の問題の提起―「中庸思想」研究史の現段階と課題(序章)―」に於いて、中庸思想の構造論の問題解決方法論は、政治思想史の問題として取り扱う事が最も重要問題であると主張してきた。

そこで現在日本の中庸思想の構造論研究史は、この問題に關係して、どの程度、進展しているのだろうか。その現状と課題について、本稿では、金谷氏の中庸思想の構造論研究の現状と課題点を中心にして、前近代の中国知識人や為政者がどの様に中庸思想を理解していたのだろうか、という問題と關係して論じて見たいと思う。

一 金谷説の検討

現在日本の中庸思想の構造論的研究は、一九五〇年に発表された金谷治氏の「中と和」の論考より始まる(一)。金谷氏は、第一節の「中の論理」において、以下の様に述べている。

「中」について、自家の哲学をうち立てようとしたものは、子思を中心と

Thought of *Dui* and Study of the Doctrine of the Mean

—Present stage of study of the “Doctrine of the Mean” examined from a perspective of the thought of *Dui* (2)—

Masaaki OGURA*

An examination of the history of study of the Doctrine of the Mean from a perspective of the thought of *Dui*, which is a traditional, basic mode of thinking of Chinese people, shows that the present status of study of the Doctrine of the Mean in Japan is in a very poor stage. Dr. Kanaya pointed out that the mean has the two-sidedness, with denial and affirmation, of both ends. However, he took a monistic standpoint by absorbing the denial theory into the affirmation theory. Dr. Shimada indicated that there were two kinds of *chu* in the mean, “*mihatsu no chu* (middle of a condition before something happens)” and “*jichu no chu* (middle of a condition when something is happening)”. Nonetheless, he unified them into a thing and its functions by adapting the *ti-yong* theory. When carefully reexamining and analyzing the Doctrine of the Mean from a perspective of the thought of *Dui*, results show that the denial theory and the affirmation theory of both ends have a relation like oil and water, which cannot be discussed at the same level. Consequently, it becomes readily apparent that two completely different Doctrines of the Mean exist: “*mihatsu no chu*” equal *wa* (harmony) equal the harmonization theory, which denied both ends, and “*yuken no chu* (middle of a condition when something has authority)” equal *jichu* equal the situational middle theory, which affirmed them.

Key words: thought of *Dui*, Doctrine of the Mean, denial theory, affirmation theory, harmonization, *jichu*

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

金谷氏の解釈と同様な意味に「時中」を解釈していると見なしてよい。

- (一一)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中の包容性・統合性 一三九頁 中公新書一一二〇 一九九三年 参照)
- (一二)『中庸』(宇野哲人全訳注 四四頁 講談社学術文庫 一九八三年参照)
- (一三)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四四頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (一四)宇野哲人氏は、朱子の説明に依り解説している『中庸』(宇野哲人全訳注 五五頁 講談社学術文庫 一九八三年 参照)。
- (一五)『孟子下』(小林勝人訳注 三五二頁 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (一六)『朱子学と陽明学』(島田虔次 第一章 新しい哲学の出発 岩波新書 六三七 一九六七年 二八頁 参照) 拙稿「対の思想」研究史の現状と課題―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(序章)―(『鈴鹿工業高等専門学校』第四四卷 二〇一〇年 参照)。
- (一七)『中庸』(宇野哲人全訳注 四五頁 講談社学術文庫 一九八三年参照)
- (一八)『中国思想を考える』(金谷治 一五一頁 中公新書一一二〇 一九九三年参照) 宮崎氏の「中」批判は、拙稿「対の思想と中庸思想―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(四)―」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四五卷二〇一一年)の注(二三) 参照。
- (一九)『孟子(下)』(小林勝人訳注 一〇三頁 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (二〇)『孟子(下)』(小林勝人訳注 三五二頁 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (二一)『孟子下』(小林勝人訳注 三五三頁 「六 権の注釈」―「権はハカリのおもり。称鐘(分銅)。動詞にしてハカル。ハカリにかけて物の軽重を知る。ここは臨機応変に処置すること」岩波文庫 一九六八年 参照)
- (二二)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四六頁―一四九頁 岩波文庫 一九九

八年 参照)。

- (二三)板野長八「中庸篇の成り立ち」(『広島大学文学部紀要』二二卷二号 一九六三年 参照)
- (二四)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四五頁 岩波文庫 一九九八年 参照) なお赤塚忠氏も、「喜怒哀楽」を「○喜・怒・哀・楽 物ごとにふれておこる感情。」として、バラバラにして単音節に読んでいる(『新釈漢文大系第二巻 大学・中庸』赤塚忠 二〇五頁 明治書院 昭和四二年 初版 平成六年 三五版 参照)。
- (二五)『新釈漢文大系第二巻 大学・中庸』(赤塚忠 明治書院 昭和四二年 初版 平成六年 三五版 参照)
- (二六)『論語』(金谷治訳注 七二頁 岩波文庫 一九六三年 参照)
- (二七)『孟子下』(小林勝人 四三頁 注三権 岩波文庫 一九七二年 参照)。
- (二八)『孟子下』(小林勝人 三五三頁 注六 権 岩波文庫 一九七二年参照)
- (二九)『孟子下』(小林勝人訳注 四三頁 岩波文庫 一九七二年 参照)。
- (三〇)拙稿「対の思想の政治思想的意義―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(終章)『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四五卷二〇一一年 注(二五) 参照」拙稿「中庸の定義と其の政治思想的意義」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四七卷二〇一三年注(三三) 参照)
- (三一)『大学・中庸』(金谷治訳注 一八五頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (三二)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一四六頁 中公新書一一二〇 一九九三年 参照)
- (三三)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四六頁―一四九頁 岩波文庫 一九九

(受付日二〇一三年 九月 九日)

(受理日二〇一四年 一月 九日)

の著書について「日本の近人の著作も多いが、……島田敬虔次『大学・中庸』(朝日新聞社、中国古典選)は純粋な朱子学的解釈として詳密であり、山下龍二『大学・中庸』(全釈漢文大系)は陽明学派の解釈に詳しいという特色がある。その他、一般に朱子の『章句』に従った訳書は多いが、ここでは省略する」(『大学・中庸』金谷治訳注 岩波書店 一九九八年)と述べて、島田氏の著書と述べている。

(五)『新釈漢文体系 大学・中庸』(赤塚忠 新釈漢文大系 第二巻 明治書院 昭和四二年 初版 平成六年 三五版 参照)、

(六)『武内義雄全集第二巻 儒教篇一』(武内義雄 二 中庸 五四頁―五六頁 角川書店 昭和五四年 初版 参照)

(七)「時中」とは状況に適中することである。拙稿「対の思想と状況の変化―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(二)―」

(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四四巻 二〇一〇年 参照)

拙稿「対の思想と中庸思想の歴史的展開―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(五)―」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』

第四五巻 二〇一一年 参照)

(八)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四四頁 岩波文庫 一九九八年 参照)。

(九)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四六頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(二〇)拙稿「対の思想と状況の変化―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(二)―」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』第四四巻 二〇一〇年 参照)拙稿「対の思想と中庸思想―対の思想生まれてきた歴史的背景(四)―」拙稿「対の思想と中庸思想の歴史的展開―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(五)―」(『鈴

鹿工業高等専門学校紀要』第四五巻 二〇一一年 参照)

時中の解釈については、赤塚忠氏は、「君子の中庸や、君子にして時(とき)じく中(あた)る。」と読み下して、「時中 どんなときにもその節度になつて中正であること。前段の「発して皆節に中る」にあたる。『孟子』の「孔子は聖の時なるものなり」(万章下篇)の「時」は、時中とほぼ同意」と語釈して、「君子の中庸は、君子の人がら通りにどんなときでもその節度になつてゐる」と通釈する(『新釈漢文大系第二巻 大学・中庸』 赤塚忠 二〇六頁―二〇七頁 明治書院 昭和四二年 参照)。しかし中を中(あた)ると動詞として読み下す以上、「中正」と語釈するには無理がある。

宇野哲人氏は、「君子の中庸は、君子にして時に中(ちゅう)す。」と読み下して、「時に中(ちゅう)す」時に随い変に処してその宜しきに叶うの意。未だ発せずの中は名詞なれども、ここの中は動詞として解釈すべし。時は孟子に孔子を称して「聖の時なる者」といった時と同じ意味である」と字義して、「君子の徳あるが故に、時に随い変に処してその宜しきに叶うのである。」と通解している(『中庸』宇野哲人全訳注 六〇頁―六二頁 講談社学術文庫 一九八三年 参照)。

宇野氏は、中を動詞として解釈しなければならないと言う以上、「中(ちゅう)す」と読み下して、「その宜しきに叶う」と名詞的な意味に字義するのは、無理がある。動詞として読む必要があるという以上、中は、「中(あた)る」として読み下して、「適中する」との意味に通解しなければならない。従つて赤塚氏も宇野氏も、後述するが島田虔次氏も、読み下し文、注釈、通解において、多少の異同は存在するが、

② 島田氏は、中庸には、「未発の中」と「時中の中」の二つが存在するとした。朱子の主張に従った島田氏は、中庸は、未発の中＝大本＝体＝不偏不倚、時中＝達道＝用＝過不及に分類できると規定していた。この指摘は、金谷氏が指摘している中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想＝両面思考から考えてみても誤りである。

③ 赤塚氏は、先ず中庸を説明するのに、武内氏・金谷氏の引用した「過ぎたるは及ばざるがごとし」の両端を否定する中庸と、「その両端を執って、その中を民に用ふ」の両端の肯定論の中庸を、共に否定する。次には「狂・狷」の肯定論のみを引用して中庸人を説明・定義するが、他方の「狂・狷」の否定論を無視している。両端の否定論と両端の肯定論を、同時に共に否定して、そして次に肯定論を引用して、否定論を無視している。中庸を説明するのに、論理矛盾が甚だしい。従って対の思想を理解した中庸思想の議論であるとは言えない。

④ 中庸思想には、正確に体用の論理で展開して言う、本体にも「未発の中」と「執中有権の中」があり、作用にも「和」と「時中」の二つに分類できるのである。前者の未発の中＝和は、両極端の否定であり、後者の執中有権の中＝時中は、両極端の肯定である。中庸は、同じく不偏不倚と言っても、この不偏不倚の中庸には、両極端の否定と肯定という、全く二つの相異なる対の思想の概念が存在すると言う事である。

⑤ 島田氏が言うように時中は「過不及なし」であるが、和も「過不及なし」である。しかし体用の論理で理解しても、時中は状況に適した行動様式であり、和は両端が程よく融合した調和の概念であり、両者は全く異なる概念である。⑥ 従って中庸の本体と作用には、未発の中と和と、執中有権の中と時中の二つの相異なる概念が存在する事になる。つまり中庸思想には、中国人の伝統的

で基本的思考である対の思想＝両面思考が働いているということである。

注 (二〇一三年八月三〇日 稿了)

(一) 金谷治「中と和」『文化』 十五卷四号 一九五〇年 参照

(二) 金谷治「中庸について―その倫理として性格」『東北大学文学部研究年報』第四号 一九五五年 参照

(三) 金谷治『中国思想を考える』(第四章 中庸 中公新書一一二〇 一九九三年 参照)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 一三七頁 中公新書一一二〇 一九九三年 参照)

(四) 島田虔次『大学・中庸』(吉川幸次郎監修 中国古典選四 朝日新聞社 一九六七年、朝日文庫 上・下 一九七八年 参照)

島田氏は、本書の冒頭に於いて、「まず最初におことわりしておきたいのは、本書はけっしてわたくし独自の研究、見識にもとづく独自の注釈書ではないということである。そうではなくて徹頭徹尾、朱子学の、否、朱子その人の注釈、解釈の紹介、万やむえを得ずしてわたくし自身の解釈をするさねばならぬとしても、できるだけ朱子その人の立場に立とうと試みての注釈―それが本書のめざしたところに他ならない」と述べている。この様に島田氏は、本書は朱子の注釈に忠実に従った詳解書と述べているので、島田氏説を検討するに際しては、朱子自身の注釈の説明を敷衍した島田氏独自の見解に相当する部分のみに限定する。なお本書は、「朱子注釈、島田虔次訳注」ではなく、「島田虔次著」となっている。従って朱子学に従った島田氏独自の見識に基づく著書と見做さなければならない。なお金谷治氏は、『大学・中庸』

相対しているのである」(二七)と述べている。従って権のある中は、經Ⅱ常道Ⅱ礼Ⅱ中と、相対立した中庸の概念のものであると指摘している。また子莫の言う「執中無権」の権は、小林氏が言う様に「臨機応変性」という意味である(二八)。従って小林の指摘に従えば、中庸には、常道Ⅱ礼と、非常道Ⅱ権という、相異なる二つの中庸思想が存在する事を意味しているのである。この事実を、『孟子』より引用して確認しておきたい。孟子は、淳于髡に、以下の様に礼と権の相違について説明している。

「淳于髡曰く、男女授受するに親らせざるは礼か。孟子曰く、礼なり。曰く、嫂溺るれば則ち之を援うに手を以てするか。曰く、嫂溺るるに援わざるは、是れ豺狼なり。男女授受するに親らせざるは、礼なり。嫂溺れ、之を援うに手以てするは、権なり。曰く、今天下溺る、夫子の援わざるは何ぞや。曰く、天下溺るれば、之を援うに道を以てし、嫂溺るれば、之を援うに手を以てす。子手もて天下を援わんと欲するか。」

男女間の授受について、日常普段に使用する礼制と、非常事態に遭遇して止むを得ず採る権道が、対比的に述べられている(二九)。ところで礼とは、仁と義を程よく融合した徳目で、これを制度化した物である(三〇)。また礼の起源は、『中庸』には、「仁とは人なり、親を親しむを大と為す。義とは宜なり、賢を尊ぶを大と為す。親を親しむの殺(差)、賢を尊ぶの等は、礼の生ずる所なり」(三二)とある様に、親を親しむⅡ家族制度秩序と賢を貴ぶⅡ国家・社会制度秩序という、公・私の秩序を維持するために設定した徳目であった。そして礼とは、「過ぐる者は俯(伏)してこれに就き、至らざる者は跂(こ)ちてこれに及ぶ」(三三)とある様に、過者と不至者の両端を否定した中和の中庸思想の制度であった。礼制度とは、以上の様な内容を持つものであったとすれば、これで礼制と権道は、平常時と非常時という対比的状態に於いて使用する二つの中庸思想の方法論であった事が判明したであろう。

しかし先に引用した小林の注にある「三 権、方便の意。がんらいはハカリの分銅。分銅は物の軽重をはかるもの。それ故、事に当たって軽重をはかり、軽きを捨てて重きに就くのが権の道である。」との説明は、重要性を考慮して大事な物の方を採用するとの説明であるが、この部分の説明は誤りであろう。礼制と権道が対比的に使用されている以上、権道は軽重を計り重い方に就くことではなく、小林氏が、礼Ⅱ常道と権Ⅱ非常道は相対していると述べ、そしてまた子莫の執中無権論において述べている様に、臨機応変の対応方法であったのである。このことは中庸思想には、中国人の基本的思考である対の思想Ⅱ両面思考が、中庸思想の内面に存在している事を示唆しているのである。従って中庸思想の未解決な諸問題の分析には、中国人の伝統的な基本的思考である対の思想Ⅱ両面思考、つまり中国人の自己分裂的思考を基本に据えた考察が、最も有効であり、大きな成果を挙げると確信する所以である。

結語

以上に述べた対の思想から考察した中庸思想の現段階と問題点について、その内容を簡潔に要約すると、凡そ以下の様になるであろう。

①金谷氏は、中庸には「右でもなければ左でもない」面と「右でもあれば左でもある」面の両面が存在するとしたが、結局は「右でもあれば左でもある」面の肯定面に一元化してしまったのである。否定論と肯定論は、水と油の関係である以上、両面は区別して、その内容を論じる必要性が存するのである。

思想を、「右でもあれば左でもある」両極端の肯定した真ん中の中庸思想に吸収して、中庸思想は包容性を持つという、肯定論の一元的思想だと主張した。

島田氏は、朱子の指摘に従い中庸思想について、「未発の中」と「時の中」という、全く相異なる二つの中庸思想が存在すると、巻頭において注意を喚起しているのは、対の思想についての見識を持つ中国思想史の大家である島田氏ならではの卓見である。しかし「未発の中」＝本体には、「時の中」と「和」の二種類の作用が存在すると言う。一つの本体に、全く異なる二種類の作用が存在するというのは、論理的に辻褄が合わない。自己矛盾した主張していた。赤塚氏は、中庸人の説明において、『論語』にある狂者と狷者の肯定論を用いて、中庸人とは狂狷の両端を兼備した人物と説明するが、同じく『論語』にある狂簡の否定論を無視していたのである。

従って対の思想―両面思考より考察した中庸研究の現段階の問題点は、以下に述べるような内容になるであろう。

対の思想を導入して中庸の構造性を探求した論考は、殆ど皆無に等しい。その中でわずかに金谷氏が、中庸の意味内容について、「右でもなければ左でもない」と直線状に考えられている中庸の内容は、孟子の子莫の無権批判で展開している「権ある中」を参考にすると、「右でもあれば左でもある」との肯定論に考えるのが妥当であると述べているに過ぎない。また島田氏が指摘しているのであるが、中庸には、「未発の中」＝本体と「時の中」＝作用の二つがあると指摘している。中庸には相異なる二種類が存在すると指摘するのは、島田氏のみである。しかし島田氏においても、相異なる二つの中を、体用の論理で、本体と作用の両面で理解しているのみであった。

ところで本体にも相異なる二つがあり、作用にも相異なる二つが存在すると

言うのが対の思想―両面思考の思惟方法である以上、先に述べた金谷氏・島田氏の学説は、真の意味での対の思想―両面思考より考察した中庸思想の解説書ではなかったのである。金谷氏・島田氏・赤塚氏が自己矛盾した曖昧な結論に帰結した根本的理由は、全く異なる性質を持つ物は、各々区別して論じる必要性が存在するという、中国人の基本的思考である両面思考―対の思想についての不完全な理解に原因が存在する。中庸思想を考察するに当たっては、中庸規定の文章に存在する両端の肯定論と両端の否定論を区別して、二つの全く相異なった中庸思想が存在するという、基本的な視点が欠落していたことである。従って中国思想の精髓と言われる中庸思想の研究には、中国人の基本的思考である対の思想より考察した本格的な研究が未だ存在しないと云えるであろう。しかしながら上述した欠点を持つ両氏の中庸思想の研究においても、これを引き継ぐべき重要な成果も存在する。

金谷氏は、中庸思想には、「右でもなければ左でもない」真ん中と、「右でもあれば左でもある」真ん中があるという指摘している。中庸思想には両端の否定論と肯定論の二種類が存在すると言う。また島田氏が解説した朱子の『中庸章句』には、中庸思想の作用には、「時の中」と「和」という―同じか否かは別にして―二種類の作用が存在すると指摘していたのである。更に小林勝人氏は、重要な指摘をしている。礼と権は、対立する概念だと述べている。

つまり権の本義は、「三 権、方便の意、がんらいはハカリの分銅。分銅は物の軽重を計るもの。事に当たって軽重をはかり、軽きを捨てて重きに就くのが権の道である。三桓公十一年公羊伝には、「経に反して然るのち善ある者なり（権とは、手段は道に反していても、結果は道に合すること）」とあるが、おもうに、経は常の道で、常道を制するのは礼である。故にこの章の権は礼と

赤塚氏は、中庸人を説明するに際して、「狂者と狷者」の両端人を肯定的に援用して、その両極端人を包摂・兼有した人間と言う。この限り対の思想―両面思考を念頭において中庸を説明したものと理解してよいであろう。

しかしこの説明では、狂者と狷者の両極端の肯定した論法であり、狂者と狷物を同時に兼有することは、論理的にも実際にも不可能である。狂≡積極性と狷≡消極性を、一体、どの様にして同時に実行するのだろうか。両者の同時実行は、絶対に不可能なはずである。両端を肯定した対の思想の場合は、そこにはタイムラグが存在しなければならない。この点を赤塚氏は無視している。

『論語』に記載する「狂・狷」は、赤塚氏の引用した両極端の肯定論だけではない。同時にその否定論も存在するのである。公治長篇は「子、陳に在りて曰わく、帰らんか、帰らんか。吾が党の小子、狂簡、斐然として章をなす。これを裁する所以を知らざるなり。」(二六)とある、金谷氏は、注釈して「帰ろうよ、帰ろうよ、うちの村の若ものたちは志が大きく、美しい模様を織りなしているが、どのように裁断したらよいか分らないでいる。『帰ってわたしが指導しよう。』」としている。狂簡は、狂者のことであり、これを否定して、教育しなければならぬ、と孔子は言うのである。赤塚氏は、孔子の狂者の肯定論を引用して、そこに中庸人の成立する根拠を求めたのであるが、他方の孔子の狂者の否定論を無視しているのである。

赤塚氏は、先ず中庸を説明するのに、武内氏や金谷氏の引用した「過ぎたるは及ばざるがごとし」の両端を否定する中庸と、「その両端を執つて、その中を民に用ふ」の両端の肯定論の中庸を否定する。次には「狂・狷」の肯定論のみを引用して中庸人を説明・定義するが、他方の「狂簡」の否定論を無視している。両端の否定論と両端の肯定論を、同時に共に否定して、そして次に肯定

論を引用して、否定論を無視している。赤塚説は、論理矛盾が甚だしい。従って赤塚氏の中庸思想の考察は、対の思想―両面思考を念頭に置いた説明にはなっていないと結論することができよう。従って中庸思想を考察するに当たっては、両極端についての肯定論と否定論という対の思想―両面思考を導入して考察する必要性が生じてくるであろう。

四 中庸思想研究史の要約と展望

『中庸』には、「舜は両端を執りてその中を民に用う」とある。善悪・是非・好悪等の両極端―つまり対の思想―両極端への両面思考と中庸思想とは切っても切れない不即不離の關係が存在する。このことが明白であるにも関わらず、現在までの所、中国人の基本的思考方法である対の思想―両面思考を念頭に置いて中庸思想の内容を具体的に分析して展開していると思われる研究者は、わずかに上述した金谷氏と島田氏のみであった。

金谷氏は、中庸思想には「右でもなければ左でもない」両端の否定論と「右でもあれば左でもある」肯定論の二つが存在すると主張する。また島田氏は、中庸の中には、「未発の中」と「時中の中」の二つの中が存在すると主張する。しかしながら両氏においても重大な問題点が存在した。対の思想は、中国人の基本的思考であるとする金谷氏においても、儒教的世界観は個人・家族と国家の二つの中心を持つ楕円形の世界―対の機能の世界観を持つと言う島田氏においても、中国人の伝統的な対の思想―両極端への両面思考を完全に消化して、この事を念頭に於いて中庸思想を分析した考察していないのである。

金谷氏は、「右でもないし左でもない」両極端の否定した真ん中である中庸

三 赤塚説の検討

最後に赤塚忠氏の述べている中庸の規定と対の思想の関係について検討して見たい（二五）。繰り返し引用することになるが、赤塚氏は、中庸の内容について、「中庸解説」において以下のように述べていた。

「孔子の人格が中庸の徳をきわめていたことはいうまでもない。また『論語』のうちには、「過ぎたるは及ばざるがごとし」（先進篇）のような中庸と関連する教えが存在する。その後、儒家は中庸をめざして学んでいたともいえる。だが、『論語』に中庸の教えが存在する事実と、これを『中庸』のように理論化することは同日の談ではない。人の行いが中庸であるということは、何時、何処でも、誰にとつても願わしいことである。アリストテレスも中庸を徳の根本としていた。そして、中庸とは極端に走らない「ほどよさ」であつて、誰にもわかりやすいことであると考えられ勝ちである。『中庸』にも比喩的に「その両端を執つて、その中を民に用ふ」（第六章）といっている。だが、中庸は、過不及の中間をとりさえすればよいというような生易しいものではない。ただ中間をとるのでは、全く自主性を失つた折中主義・追従的機会主義となるであろう。それ故に『中庸』には「中庸はそれ至れるかな」（第三章）といい、また「中庸は能くすべからざるなり」（第九章）といっているのである。『中庸』は中庸を目標として、その根本に立ち入つて道を求め、人間の本質を探っているものである。『論語』の中庸と『中庸』のそれを単純に結合しようとするものには、中庸がわかりやすいことであるとする思索の不徹底があろう。」と述べている。

それでは赤塚氏は、『中庸』の中庸の語句の意味内容をどの様に規定するのであろうか。同氏は、孔子の「中行」主張に『中庸』の中の概念の始原を求める根拠として、次のように述べる。

「また、中、ないしは中庸を主張するには、それに反する両極端・過不及・奇僻が存在することがはっきりと予想されており、その予想されるものが強度であればあるほど、中の要求も強くなる。そのような対立するものなしに中を説くことは無意義である。この点から注目すべきものは、『論語』子路篇に「子曰く、中行を得てこれに与せざれば、必ずや狂・狃か。狂者は進んで取り、狃者は為さざる所あり、と」とある文である。孟子の解説によれば、狂者とは、古聖人の道を行なう志望ばかり大きくて、実行がこれに伴わないものであり、狃者とは、一身を廉潔に保つに汲汲として、他人を善導するには及び得ないものである。して見れば、中行者は、中道を行うものであつて、志望と実行と、修身と教化とを兼備している人格者である。孔子はこのような人格者とともに道を行なうことを最も希望していたのである。・・・『中庸』の中の概念の始原を求めるならば、この中行にこそ基づけるべきであらう。ただ孔子・孟子の中行（中道）は、同じく道を求めるものの徳行を主としており、かつ『中庸』のような理論的整備を欠いている。」

赤塚氏の主張を要約すると、以下の様になる。つまり『論語』の子路篇に出典する孔子の「中行の人」を引用して、両極にある狂者と狃者を批判して、『中庸』の中庸人とは、狂者について肯定と否定をした「志望と実行」と、また狃者について肯定と否定した「修身と教化」の二つの人格を兼備した完全無欠の立派すぎるほどの超越的な完全人格者であると言う。この赤塚氏の主張には、以下のような素朴な疑問点が存在する。

中を理としての性に解したり偏倚する所なき意味に解することは出来ない。この未発の中は、未だ外に発しない中であるものと云う意味で中なるものことである。……そして和なるものは喜怒哀楽の節に中ることによって得られるものであるが、それは中正なるものであり、……と述べている(二三)。

中庸の語句の意味に対しては、朱子の性情説・理気説を退けて、喜怒哀楽の感情が表面に出ないで、心の中にある状態を中と言うと、板野氏は言う。つまり喜怒哀楽の感情が無い状態ではなくて、未だ表面に発しないで、心の中にある状態を意味すると言う。喜怒哀楽の未発の状態も、感情の心の中に存在する情だと言うのである。中庸思想史研究者の中では特異な中の解説である。

板野氏の本文の理解の問題点を述べると、以下の様になる。

板野氏は、その根拠に、「何となれば「発而皆中節、謂之和」と云う所から考えると、発して節に中るものと、必ずしも然らざるものとあることが認められているのである。」と述べる。この論理に従えば、板野氏は、喜怒哀楽の感情を喜・怒・哀・楽の単独の感情と理解して、その個別の感情が「五分喜ぶ所を五分喜べば節度に中る和となり、七分喜べば節度中にらざる不和となる」と理解しているのである。しかし和とは、金谷氏が既に指摘している様に調和の意味であり、調和とは雑多な感情がバランスの採れている状態であるから、和の意味からして、板野氏の説は首肯できない。つまり島田氏は、板野氏と同様に「喜怒哀楽」を、個別感情の単音節に考えていたのである。

しかし既に金谷氏が述べているように、中とは両極端が前提となって成立する概念であるから、一字ごとにバラバラに単音節に解して、喜・怒・哀・楽のない中である、と考えることは不可能である。また和とは調和の意味であるから、島田氏の中と和の説明は成立しない。

なお和を調和の意味とする金谷氏においても、「喜怒哀楽」を「喜・怒・哀・楽」と、個別の感情の概念として「喜・怒・哀・楽などの感情が動き出す前の平静な状態、それを中という。〔それは偏りも過・不及もなく中正だからである。〕……」と和訳している。しかしこの考え方は誤りである(二四)。

従ってこの一文は、中国人の伝統的で基本的な思考様式が対の思想であることを踏まえると、「喜怒や哀楽の両極端の感情が発生していない状態を中と謂い」、「喜怒」や「哀楽」の感情が発生して、両極端の感情が皆な節度に適中している状態を調和と謂う」と和訳するのが正しい解釈であろう。

つまり「喜・怒」「哀・楽」の単音節が、対義語を組み合わせた二音節を形成する熟語として、「喜怒」と「哀楽」の両端が発しないのが中であり、この両端の感情が発現して、節に中っている―喜怒の調和と哀楽の調和している―状態を和と謂う意味であると、資料解釈上は理解しなければならない。

従って以下の様に結論できる。金谷氏の説や古典資料にある和の意味から考え見ると、島田氏は明らかに和の意味を誤解している。従って中庸の作用には、和と調和論と時中と状況的中論の二つの相異なる概念―対の思想があると言うことができるであろう。中庸の作用に相異なる二つの概念があるとすれば、本体である中庸にも島田氏が主張する「未発の中」とは異なる、もう一つの「已発の中」があると考えなければならないであろう。島田氏も「時中の中」の説明において、『孟子』四五四ページの「子莫が中を執る云々を参照」と述べていたのである。つまり中庸の本体には、金谷氏が既に指摘していたように「執中有権の中」が存在する。つまり中庸の中と本体には、両端を否定した「未発の中」と、両端を肯定した「執中有権の中」という、全く異なる二つの中庸思想の本体―対の思想が存在すると言うことである。

また時中は、『中庸』の本文に、「仲尼曰、君子中庸、小人反中庸也、君子而時中、小人而無忌憚也」とある。訓読すると、「仲尼曰く、君子は中庸して、小人は中庸に反するなり。君子は時に中り、小人は忌憚することなければなり」となるであろう。和訳すると、「孔子は言った。君子は中庸を守るが、小人は中庸に違反する。何故ならばそれは、君子は時々状況に適した行動をするからであり、小人は忌み憚ることがなく、どんな事でもするからである」となるであろう。従って時中とは、君子が中庸を守る理由の説明なのである。

金谷氏は、この時中に注して、「三 時に中す―その時その場に應じて中庸を守る」、訳して「君子が中庸を守るといふのは、いかに君子らしいりっぱなふるまいでいて、そのうえどんな時でもその場に應じて中でおられるからだが、・・・」と、島田氏と同様に解釈するが、このように注訳すれば、本文の文意が不通となる。「小人無忌憚也」の也は、上文を受けた理由を説明する終助詞であるからであり、金谷氏の訳注は誤りである（二二二）。時中は、君子が中庸することの内容説明であり、中庸の作用なのである。だから孟子の子莫批判の執中有権の中庸思想は、臨機応変に両極端の中間を執ることの意味であり、これが本体となって、状況に適中する意味の時中は、その作用となるであろう。他方の「喜怒哀楽の未だ発せず」の未発の中は、喜怒・哀楽の両極端の感情の無い状態の中であるから、この中は無感情の中＝「未発の中」であり、その作用は両極端の感情が調和している「和」であるとする事ができる。

従って本体である中庸の中は、両極端を否定した「未発の中」と、両極端を肯定した「執中有権の中」の二つがあると言うことができる。これを体用の論理で纏めると、両端を否定した未発の中＝本体の作用は和であり、両端を肯定した有権の中＝本体の作用は時中であると推測できる。

それはさて置き、以上に述べてきたように、「時中の中」と「和」の意味は、朱熹や島田氏自身の説明においても、また金谷氏が指摘した一般的な資料解釈においても、全く異なる二つの概念であると言うことができるであろう。

島田氏が「和」の解釈を誤らって、「時中」と同様の意味に解釈した根本的な原因は、「喜怒哀楽は「情」であるが、性がまだ情として現象しない以前（論理的な意味での以前）、心は静かな、本来的な、「性」の状態にある。この静かな「性」の有り方は、不偏不倚であるから「中」と呼ばれる」と述べている様に、「喜怒哀楽」の未発の中の説明において、「喜・怒・哀・楽」として、一つ一つの感情の概念を単音節に区別して理解して、その個別感情が発露しない状態を中であるとして、中の説明をした為であると思われる。しかしながら、もし喜怒哀楽をバラバラに単音節に解釈して、その真ん中の状態を説明すれば、不偏不倚にはならない。論理的に考えれば、喜怒・哀楽の両端が同時に存在していて、そのどちらでもない状態が、不偏不倚の真ん中となるであろう。

既に板野長八氏は、この一文に疑問を呈して、「中庸の「中」については、『中庸』の「喜怒哀楽之未発、謂之中、発而皆中節、謂之和」を解説して、「朱子は未発の中を解して、それは喜怒哀楽の情の未だ発しないものであるから性であり、且つ性の偏奇する所なき点より見てこれを中と謂ったと云う。喜怒哀楽、即ち情の未だ発しないものであるから性であると云うのはもつともであるが、朱子に於いては性は理である筈である。だとすればこの事は許されない。何となれば「発而皆中節、謂之和」と云う所から考えると、発して節に中るものと、必ずしも然らざるものとあることが認められているのである。従って未発の中則ち性には必ずしも節にあたらぬもの、偏奇する所の情があることになる。さればこそ皆節に中るべきことが要請されたのである。故に、未発の

る待遇状況に応じた特定行動をして、更に賢者という者は、状況が変化すれば、柔軟性がある豹変した逆の行動をする、つまり両面的な政治行動を、当然の如くして執り得る人間なのだ、という主張である。これが時中の意味なのである。このように自己置かれている状況に応じて適中した特定行動＝時中の行動と、そして状況の変化に対応して全く異なる対の行動＝両面行動してこそ、禹も顔淵も極端に一方に偏らない不偏不倚の中庸の行動をしたと言うことができるのである。従って島田氏の「時中の中」の理解は、全く誤っているのである。

ところで和と時中の内容を区別していない島田氏の思考の中では、和と時中とは同じ内容を意味していたと思われる。それは和の説明において、和とは「発して節に中る和とは、例えば喜怒哀楽についていえば、三分ほど喜ぶ合きであるのに四分喜んだり、四分ほど怒るべきなのにただ三分しか怒らない、ような反対をいう」とか、「人・事物との接触・処置にいささかの齟齬誤謬もない」事と言うと述べていることでも理解できる。このように和とは、思考と行動において齟齬誤謬のないことと、特異例外的な和の解釈をしているのであり、この限り島田氏が勘違いして理解している「過不及無きことを意味する」という、「時中の中」と同じ意味になるからである。

しかし島田氏の和と時中の解釈は、既に述べた様に中国哲学研究上において特異例外的な解釈であり、是認できるものではない。『論語』に述べる「君子は和して同せず」とか、「礼の用は和をもつて貴しとなす」との資料上の和の意味は、周囲との調和の意味であり、理論と行動の一致をいうのではない。島田氏は、明らかに和の意味を誤解している。従って中庸の作用には、和＝調和論と時中＝状況的中論の相異なる二つがあると言うことができるであろう。

島田氏の解釈の誤りの根本的原因是、喜怒哀楽の和の説明において、喜・怒・

哀・楽の一つ一つの感情の概情を、独立・区別して理解しようとしたことである。しかし和とは、調和の意味であるから、両極端の概念である喜怒哀楽の調和と哀楽の調和を和と言うのである、と理解しなければならぬであろう。

ところで中庸の作用に相異なる二つの概念があるとすれば、本体である中にも、島田氏が主張する未発の中とは異なる、もう一つの中があると推測されるであろう。島田氏も、孟子の述べる中と権の相関性の理解の重要性を述べていたのであり、今、これを引用して孟子の説く中の概念規定を述べてみたい。

「孟子がいわれた。「楊朱は〔極端な個人主義者であるから〕、万事自分本位にしか考えない。だから、たとわずか髪の毛一本抜くぐらいのことで大いに天下の為になるとしても、決してそれをしない。ところが、墨翟は〔これと反対で、無差別な博愛主義者であるから〕、たとい頭の天辺から足の踵まですりへらしても、天下の為とあればそれをするのである。魯の賢人子莫はこの中ほどを執る中道主義である。この中道主義は聖人の道である中庸にまず近いといえるが、しかしあくまでも中道ということだけにとらわれてしまつて、臨機応変の処置がなかったら、これまた楊朱や墨翟のようにただ一つの立場だけを固執して、他を忘れてしまうのと全く同じだ。わしがただ一つの立場だけを固執して融通のきかないのをにくみくらうのは、正しい中庸の道をそこねるからだ。それではただ一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所〔百事一筆者注〕を捨ててしまうことになるからだ。」(二〇)と述べている。

「中を執りて権なければ」とは、両極端を握り、その中を権＝秤ではかつて真ん中を執る事である。だとすれば「両極端を生かした執中」とは、「有権の中」であり、執中有権が本体なのである。権とは、小林氏の指摘によると臨機応変の意味である(二一)から、臨機応変に中を執ることが、本体なのである。

また島田氏は「中」には一定の定体がないと言うが、既に述べたが宮崎氏は「中」は空間的原理だとしていたのは（一八）、島田氏の「中」の構造的な主張を構造的に言い換えたものである。

しかし島田氏の説明では、禹も顔淵も極端に一方に偏った行動をしているのであり、これでは時中＝中に処るにならないのではないか。何故に禹も顔淵も時中の行動をしたと結論できるのか、もう少し詳しい内容の説明が必要である。

島田氏の言う「時中の中」の意味を検討するために、島田氏の引用した『孟子』に述べる禹と顔淵の行動の資料を、以下に引用することにしたい。

そこでは、孟子は、平和時に家に帰らず政治に東奔西走した禹や稷と、乱世に会い閉門蟄居した顔回の三人を、ともに賢人として称賛している。平和時と乱世という、全く正反対の待遇状況の違いに、全く逆の行動をした三人について、孔子と孟子は、

「むかし、禹や稷は上には名君堯・舜をいただく泰平の世ではあったが、水を治め農事を教える職務に忙しく、三たびも自分の家の門を通り過ぎたが、一度も家の中に入る暇とてなかった。孔子はこの二人を賢者として称賛された。孔子の門人の顔回は春秋の乱世に出あい、うす汚れて狭い路地裏に住んで、日に一碗の飯と一瓢の飲物という質素な暮らし、凡人ならとても耐えられない貧乏生活なのに、顔回は相変らず平気で聖人の道を楽しんでいた。孔子はこれを賢人として称賛された。これについて孟子が批評していわれた。「禹と稷と顔回の三人は一見行為の形は違っているが、その心は一つでみな同じ道を履んでいる。そもそも禹は職務柄、もし天下に一人でも溺れる者があれば、自分が溺らせたかのように責任を感じ、稷は天下に一人でも餓死にする者があれば、自分が飢えさせたかのように責任を感じた。だからこそ、あのように忙しく東奔西

走したのである。禹や稷や顔回も、もしお互いに立場をかわて見れば、みな同じようなことをしたに違いない（原文は「禹・稷・顔子、易地則皆然」。たとえば今、同じ屋根の下に住む者が喧嘩をはじめたとしたら、乱れ髪に冠の紐を結びながら大急ぎでこれを仲裁してもよい。（これは禹・稷の場合に喩えた）だがもし、同じ村の中で喧嘩がはじまったとき、やはり乱れ髪に冠の紐をろくろく結ばずに大急ぎで飛びだしていつて仲裁したら、それは大変な心得違いである。そんな時には、戸を閉めて「怪我せぬように」引っ込んでいてもよい。（これは顔回の場合に喩えた）「立場が違えば、つれてその責任もそれぞれに違ってくるものだ」（一九）と、述べている。

孔子は、平和時の家庭生活を犠牲にして公務に奔走した禹と稷と、乱世に遇い隠者のような私的な個人生活を楽しんだ顔回という全く相異なる両者を賢者として称賛している。つまり孔子は、措かれている状況の違いに応じて、全く異なる行動をした二人を称賛する。禹＝公的行動と顔回＝私的行動という、全く正反対の両極端行動を肯定する両面思考——「対の思想」を展開している。

この孔子の批評について、孟子は、禹・稷と顔回の両者は、各々が自分の立場を執り替えていれば、みな同じ行動を当然したであろう、と言うのである。自己の措かれている状況の違いに応じて、各自が状況の相違に応じて適した行動をする事を時中というのである。時中の説明には、このような具体的事例についての内容の説明が必要なのである。この引用資料の内容の展開から考えても、時中とは、自己の置かれている状況＝時に適した特定の行動様式と規定する事ができるであろう。

従って孟子の指摘で重要なのは、平和時と乱世という外部的政治状況の相違と、自分の置かれている政治的立場の相違によって、つまり自己の置かれてい

意味を兼ね備えているというのは、道の「体」と「用」の両面を統一的に表現する言葉にほかならない。一編の題目を「中和」としないで「中庸」としたのも、この意味からである。」と述べている。中和の「中」は道の体で、「和」は道の用であるが、中庸の中は、和の意味を兼ね備えていると言うのである。

島田氏が『中庸』の中「和を、第一章の「中・和」の説明において、和を中に吸収して和が中の作用であることを軽視して、又曖昧にしてしまい、明確に体用の論理で説明していない理由の一つは、「未発の中」＝「時中の中」＝「和」との論理矛盾を回避する所に意図が存在したと言われても仕方ない。

島田氏は、この和と時中という二つの作用は、どの様に關係しているのか、何も説明しておらず、和と時中は同じ意味・内容なのか、文字が違う以上は、内容も異なると思うのであるが、どちらの用が正しいのか、二つとも正しいのか、このままでは不明である。しかしながら一つの本体に異なる二つの作用が存在する事は考えられない以上、明らかに論理的な自己矛盾を示している。

島田氏の議論の疑問点を素朴に考えると、作用には、和と時中の中という二つがある以上、本体にも「未発の中」以外に、もう一つの本体が存在しなければ、島田氏の主張の論理矛盾を解決できないであろう。

島田氏の思考の中では、和と時中とは、どのような内容を意味していたであろうか。和の説明において、和とは「発して節に中る和とは、例えば喜怒哀楽についていえば、三分ほど喜ぶ合きであるのに四分喜んだり、四分ほど怒る合きなのにただ三分しか怒らない、ような反対をいう」とか、つまり「人・事物との接触・処置にいささかの齟齬誤謬もない」事と言う。つまり予測的な感情の度合いと実際の感情の度合いとが一致することと述べている。このように和とは、予測的思考と実際の行動において、齟齬誤謬のないことであると言う。和

＝調和と述べる金谷氏等の一般的解釈とは異なる和の解釈をしている。

しかし島田氏の「和」の解釈は、中国哲学研究史上においては、特異例的な解釈であり、とても是認できるものではない。『論語』に述べる「君子は和して同せず」とか、「礼の用は和をもつて貴しとなす」との資料上の和の意味は、周囲の多様な異物が程よく混じりあっている調和の意味であり、理論と行動の一致をいうのではない。既に金谷氏は「中と和」において、中＝和であり、和は調和を意味すると述べており、また晏子の「和は羹の如し」との発言を引用して、和＝調和を羹＝ごった煮＝ほど良い融合物を意味すると、具体的に説明しているのである(一八)。

他方で島田氏は、「時中」については、第二章に於いて、「君子は君子たる徳を有しその上にさらに時に応じて中に処ることができからであり、・・・」と述べて、「時中」というのは、元来、「中」というのは定体が無い、すなわち一定の実体があるものではなく『孟子』四五四ページの「子莫が中を執る云々」を参照)「時」に於いて「中江藤樹・熊沢番山ふうにいえば、「時・処・位」に於いて一定まるのである。中が「中庸」と熟して平常の理だとせられるのは、まさにこの意味に他ならない。程子のたとえによれば、禹が治水工事に献身して「わが家の門を過ぎても入らなかった」のは禹における時中であり、顔淵が「陋巷に在った」のは、顔淵における時中であつた『孟子』二七三ページ「離婁下」と言うのである。この主張の限りでは、島田氏は、「時中」とは、その場その時に於いて中を採ると言う金谷氏が説明した「時中の中」と同じ意味に使用していると思われる。

島田氏の主張する時中というのは、自己の置かれた状況に時に応じて中庸の中に居ることを意味しており、これは、金谷氏の「時中」の説明と同様である。

であり、時中の中は作用である。」と述べている。

宇野哲人氏は、「不偏不倚の四字はいわゆる未発の中すなわち中の体をいったもので、無過不及の四字はいわゆる君子の時中の中すなわち中の用をいったものである。或問には朱子が委しくその意を述べておらるるが、文が長いから、略することにして、ここには簡単に最も要領を得たる新安陳氏の説を引くこととする。いわく「不偏不倚は、未発の中、心をもつて論ずる者なり、中の体なり。過不及無きは、時中の中、事をもつて論ずる者なり、中の用なり。」（一七）と、その詳細を説明している事でも、島田氏の引用原典は理解できる。

次の問題点は、未発の中と和についての理解方法である。

島田氏は、第一章での「喜怒哀楽の未だ発せざる、之を中と謂う。発して皆な節に中る、之を和と謂う。中なる者は、天下の大本なり、和なる者は、天下の達道なり」の解説について、以下の様に述べている。

「喜怒哀楽は「情」であるが、性がまだ情として現象しない以前（論理的な意味での以前）、心は静かな、本来的な、「性」の状態にある。この静かな「性」のあり方は、不偏不倚であるから「中」と呼ばれる。もともとたとえ情が現象・発動しても（性が情という現象をおこさないことはありえない）、能くしかるべき節度にびたりとあたつて過あるいは不及におちいらぬならば、それは情の正常状態であつて理→道に背くものではない。この点が「和」と呼ばれる。・・・中は天下の大本というのは、「いわゆる天命の性」であつて、一切の理はここから出る。つまり道の「体」なのである。達道は、性に率う道であつて、達といったのは空間的には天下じゅうの、時間的には古今じゅうの、何ものも、その道を通らないものはない、それで達といった（詳しくは第二十章第七節参照）体用のカテゴリでいうならば、道の「用」といふべきである。・・・

要するに未発の中とは、思慮が未だ萌さず、一毫の私欲も無いので、おのずからなる結果としていかなる偏倚もない、いわゆる「寂然として不動」〔易〕繫辞伝上〕なることをいうのである。「偏らず倚らず」は、時中の中が「過なく不及なし」であるのに対して言うので、東に倚りすぎもせず、西、南、北、に倚りすぎもせぬ、ちょうど中央、という空間的・「静」的なイメージである。・・・と述べている。そして和とは、「発して節に中る和とは、たとえば喜怒哀楽についていえば、三分ほど喜ぶ合きであるのに四分喜んだり、四分ほど怒る合きなのにただ三分しか怒らない、ような反対をいう。」とか、「人・事物との接触・処置にいささかの齟齬誤謬もなく（和）」事と言う。

以上を要約すると、未発の中＝性＝不偏不倚＝大本＝体であり、和＝情＝過不及無し＝達道＝用と規定する。また和とは、例えば喜怒哀楽の感情において、喜怒哀楽のそれぞれの処置において齟齬誤謬がないことと規定する。

ところで島田氏は予備的な指摘において、中庸の中は二種類あり、未発の中＝大本＝体＝不偏不倚、時中＝達道＝用＝過不及と規定していた。しかしここにおいては、未発の中＝大本＝性＝不偏不倚＝体、節に中る和＝達道＝情＝過不及無し＝用と説明する。従つて朱子の注釈に基づいて、それを敷衍した島田氏の説明によると、本体の中は、不偏不倚である未発の中の一つであるが、過不及無し＝作用は、時中の中と和の二つが存在する事になる。一つの本体に二つの異なる作用が存在すると言うのである。どう見ても不思議な説明である。

実際に第二章の巻頭の説明では、島田氏は、「つまり中庸という時の「中」は、中・和のふたつの意味を兼ねているものに他ならないのである。ところで首章によれば、中和の「中」というのは道の体を指す言葉であり、中和の「和」というのは道の用を指す言葉であるから、けっきょく、中庸の中が、中と和の

四)。金谷氏は、体用の論理で説明する朱子の解釈が、中庸の古義に反しているとの立場から朱子の説を採用していないのである。

既に述べた様に島田氏は、「このように中は本来、あくまでも実態ではないことに留意すべきである」としていた。この説明は、筆者が金谷説を批判した時に引用した「朱子いう、中は定まった体がなく、時に従ったあり方をする」との朱子の説明を受けたものであろう。確かに一定の固定した中は存在しないことは認めるが、しかし中には実体は存在するのである。またこの説明は、『中庸』の「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う」との両極端を否定した「未発の中」を踏まえただけの論議である。武内氏・金谷氏の引用した、孟子が子莫の「執中無權」批判で展開する「楊氏の個人主義と墨子の博愛主義」は実態が存在する。「子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也」(一五)の子莫の執一も実体が存在する。

また金谷氏が引用した「舜、問うを好み、好んで邇(卑近な)言を察し、惡を隠して善を揚げ、その両端を執りてその中を民に用う」との善と惡も実体が存在する。つまり中の本体には、喜怒哀楽の「未発の中」と子莫批判の「執中の中」という、相異なる二つの中が存在するのである。中にも対の思想―両面思考が存在する。島田氏の主張は、両極端を肯定した「執中の中」を無視した見解であると言えるであろう。従って「中」の本体には、実体のない「喜怒哀楽の無い「未発の中」と実体のある「執中の中」」「已発の中」の相異なる二つ―対の思想が存在すると言わなければならない。

ところで朱子の指摘に従い中庸思想について、「未発の中」と「時中の中」という、全く相異なる二つの中庸思想が存在すると、巻頭において注意を喚起しているのは、対の思想についての見識を持つ中国思想史の大家・島田氏なら

ではの卓見である。島田氏がこのような指摘をしたのは、中国思想の特質についての、次のような思考方法が背景に存在していたと思われる。

つまり宋学の第二の特徴に、修身、齊家、治國、平天下の理想を挙げ、士大夫は二重の原理により行動するという。儒教的世界(天下)は、国家と家族(個人)の二つの中心を有する橢円形の世界であるという。そして修身、齊家、治國、平天下の理想は、「この橢円を橢円たらしめる理想主義で、日本の「忠孝一致」の様に、いずれか一方の中心に収斂させて円にしようとするのではない。」と述べている。つまり儒教的世界は、家族(個人)と国家の橢円形の世界―「対的な世界」であるという。(一六)。

しかし中国人の基本的特色である対の思想を良く理解していると思われる島田氏の中庸思想についての主張にも、以下の様な基本的欠点が存在する。

中庸の中は、「未発の中」と「時中の中」の二つに分類できると言うが、島田氏の説明する第一章第四節と第二章を参照しても、このように論理的に分類した中についての資料的根拠の指摘がなく、説明不足である。何故に二つに分類できるのか、根拠が不明であるが、島田氏の二つの中についての説明は、恐らく朱子の『中庸章句』や『或問』に由っての説明であろう。

既に金谷氏は、の「中庸について―その倫理としての性格―」において、朱子の『中庸章句』を引用して、「中庸の一書はもともと時(の宜しき)に随う「実践的な」中を説くものに外ならない。けれどもこの時に随う中が実現されるわけを見ると、それはかの「喜怒哀楽の」未だ発しないときの「理念的な」中によっているのである。」「中庸の中とは、もともと過ぎもせず及ばぬこともないという中で、大意は時に「随う」中にある。もしその中を更に考えるなら、喜怒哀楽の未だ発しない中から時中の中になるのであつて未発の中は本体

次に島田虔次氏の中庸思想についての思考方法の特色について、同氏はどの様に述べているのか検討して見たい（四）。島田氏は、朱子の「中なるものは不偏不倚、過不及無きの名、庸は平常なり」の解説・説明について、

中庸の規定の由来について、「中を「不偏」すなわち偏らない（もしくは偏らず倚らない）ことしたのは程子であり、「過ぎたると及ばざる」との無いこと」としたのは呂大臨であった。朱子はそれをまとめてこのように注釈したのである」と、中庸思想の解釈は中国哲学者において発展してきたと指摘する。

島田氏は、「中」は中国哲学できわめて重要な根本概念として、中と権とを結びつけた『孟子』の説は最も有名であるとして、『中庸』の解題の冒頭に於いて、以下の様に注意を喚起している。「中もしくは中庸について、さしあたり、ただ二つの点のみを予備的に指摘しておきたい。第一、中庸は単に右でもない左でもないという消極的なものでは決してなく、積極的な概念、例えば庸が「平常」と注せられるとき、その平常というのは、・・・ほとんど意外といってもよいほどの事態までも含意していること。」「第二、中は「時中の中」（第二章）と「未発の中」（第一章第四節）との二つに分類することができる。後者が体についての中（大本）とすれば、前者は用についての中（達道）、後者が不偏不倚（したがって「在中の中」ともいう）とすれば、前者は過不及なしである。」と言う。また「在中」とは、空間的・「静」的な中央に位置するとの意味と言う。この説明は、朱子の『或問』に依る解釈であろう（注二一 参照）。

つまり未発の中＝体＝不偏不倚＝「在中の中」＝空間的原理＝「静」的中央であり、時中の中＝達道＝用＝過不及と規定している。島田氏の指摘は、朱子の解釈を説明・敷衍した主張である。朱子・島田氏の体用の論理に従うと、「未

発の中」（本体）＝「時中の中」（作用）となるであろう。しかしこの説明は真実なのであるか。

この朱子の論理については、既に金谷氏は、一九五五年に発表した「中庸思想について―その倫理としての性格」で紹介して、「けれども、そうした中庸の意味は、朱子の独自の哲学的解釈によるものであつて、決して中庸の本来の意味でもなければ、又一般的な意味でもなかった」と述べて、朱子の学説の誤りを指摘していた。しかし金谷氏のこの説明は、説明不足の嫌いがあることは既に指摘した。ところで島田氏は、既に述べた金谷氏の批判をどの様に受け止めて、朱子説に従い『中庸』を注釈する際に自説に吸収していったのであろうか。程子や中江藤樹・熊沢番山の注釈の説明は存在しても、この金谷説を批判した文章がないので、島田氏の真意や意図は不明である。この点の指摘の欠落が、島田氏の説明において説得不足に繋がるのである。

ところで『中庸』本文には、「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆な節に中る、これを和と謂う」（二三）とありて、中＝「未発の中」＝体、和＝「已発の中」＝用であり、体用の論理を持ち出すのならば、中＝和でなければならぬであろう。従って島田氏は、『中庸』解題に於いては、朱子の『或問』の解説に従うだけで、『中庸』本文の展開を体用の論理に取り入れないうで、これを無視していることになる。

この文章を訳注した金谷氏は、「作者にとつては「中」も「和」も「中庸」のことと意識されている。「中」は過・不及なく偏りのない中正の状態、「和」は雑多な物を包摂する調和均整の状態。朱子では、「中」を天命の「性」で道の本体、「和」を正常な「情」で道的作用と考え、「未発」と「已発」との違いをその哲学上の重要問題としているが、ここでは採らない。」と述べている（一

者がかねそなえた人、即ち「中立して倚らぬ」人であることを説いたものであるが、それは又文質両端の平衡をえた調和の上に場を占めるものとみることができる」と言う主張も、納得して理解する事は困難である。文意は、質と文の両極端を否定しているのであり、「兼ねそなえた人」を意味していないし、「文質両端の平衡」を得た人の意味でもないであろう。両端の平衡を得た人の意味であるならば、文と質の両端を肯定している文章表現が必要である。

金谷氏の誤解で重要なのは、「文と質と彬彬として然る後君子なり」との表現にある。文と質の両端を否定した上で、文と質の彬彬調和している状態が、中庸の君子なのである。両端の肯定と否定を混同して議論を展開しているのが、金谷氏の問題点なのである。

結論的に言えば、金谷氏の思考方法は、「右でもなければ左でもない」真ん中という両極端を否定した中については、両極端を拒否した直線状の一点と考えている。他方、「右でもあれば左でもある」真ん中という両極端を肯定した中については、両極端を包み込んだ包容性のある中央と考えている。

従ってこの二つの中は、本来全く性質の違う中であり、別個に論じる必要があるのに、両極端を否定した中を、両極端を肯定した中のなかに吸収してしまい、肯定論に一元化して議論した思想構造体であると言うのである。本来二元論的に考える事を、一本化して中庸を理解している所に、四〇年前当時の金谷氏の思考の不徹底さがあるであろう。

金谷氏は、この論考の約四〇年後に執筆した本稿においては、前引の資料と同じく舜の「両端を執りて」の解釈においても、「ここで注意しなくてはならないのは、両端を捨てることではなくて両手にしっかりと持つという点です。実際に働かせるのはその中ほどですが、その両端もまた捨てないで中の働きに

接収されているという、そういう形が考えられているわけです。つまり「右でもない左でもない」といった両端の中は、実は「右でもあれば左でもある」という形へと転化するのです。」(一一)と、述べている。

この主張でも、やはり同じ疑問点が存在する。それは、何故に両極端の否定論が肯定論に転化していくのか、そしてまた否定論が何故に消滅していくのか、その必然的な説明がないのである。否定論と肯定論は、本来、別次元の問題である、しかし金谷氏は、否定論を肯定論に吸収して一本化して議論を展開して行くのである。ここにおいて金谷氏の中庸思想の研究方法において、中国人の伝統的で基本的な対の思想―両面思考が消滅してしまったのである。

金谷氏は、「右でもなければ左でもない」真ん中の中庸と、「右でもあれば左でもある」真ん中の中庸という、中庸には、否定的側面と肯定的側面の両面を考える必要性が存在すると言いながら、両者を区別して議論しないで、結果論的ににおいては、否定論を肯定論に吸収してしまい、結局的には両端の肯定論のみの一面的思考に陥ってしまったのである。

そもそも対の思想とは、両極端の否定論と肯定論を、不連続的に切離して、対立した両面性を同時に考える、自己分裂的な思考方法である。ここにおいて金谷氏の言うように否定論をそのまま肯定論に吸収して、一本化した肯定論において理解する事ではない。金谷氏説では、両端の否定論が消去されてしまっている。これでは、中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想―両面思考を中庸思想の研究に完全に生かした上での中庸思想を理解する思考方法であるとは言えないであろう。

二 島田説の検討

てしまっている。このことが、中庸思想と対の思想の関係を考える上で、問題なのである。朱子の考えも誤りであるが、金谷氏の考えも誤りなのである。

ところで『中庸』第一章には、「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆な節に中る、これを和と謂う。」とある。

金谷氏は、この文章の意味を、「作者にとつては、「中」も「和」も「中庸」のことと意識されている。「中」は過・不及なく偏りのない中正の状態、「和」は雑多なものを包摂する調和均整の状態。朱子では、「中」を天命の「性」で道の本体、「和」を正常な「情」で道の作用と考え、「未発」と「已発」との違いをその哲学上の重要問題としているが、ここでは採らない。」(八)と注する。金谷氏は、本稿での説を、四三年後も、そのまま踏襲して再論している。

たしかに中と和は、共に中庸の意味に違いないが、しかし喜怒哀楽の両端が発現しない前の未発の「中」と、喜怒哀楽が発露して調和している已発の「和」とは、全く異なる二つの感情の状態なのであり、同一次元で扱えない性質の物である。朱子は中庸を体用の論理で説明するならば、この中と和の議論を展開するべきであり、時中を用として説明するのは、場違いであるのである。『中庸』に明確に述べている様に喜怒哀楽の「未発の中」＝本体＝中であり、「已発の中」＝作用＝和と理解しなければならないであろう。

また『中庸』第二章には、「仲尼曰、君子中庸、小人反中庸、君子而時中、小人而無忌憚也」(九)とある。

金谷氏は、「君子が中庸を守るといふのは、いかにも君子らしいりっぱなふるまいでいて、そのうえどんな時でもその場にに応じて中でおられるからだが」と訳して、時中を「時に中すーその場その場の状態に応じて中庸を守る。朱子いう、中は定まった体がなく、時に随ったあり方をする」と、『孟子』万章下篇

で孔子のことを「聖の時なる者」とするのも同意。」と注釈している。

しかし『中庸』に引用されている「時中の中」は、感情の実体のない「未発の中」＝本体＝中と、その発現である作用＝和とは、全く別次元の「実体のある中」＝本体の作用なのである。「時中」や「聖時」とは、例えば喜怒哀楽の両端が、一つの特定状況に的中した特定行動をすることであり、何時でもどんな時でも中間を守る中のことではないのである。金谷氏の説は、朱子の「時中」説明の誤解であると言える(一〇)。

金谷氏の「未発の中」と「時中の中」の朱子批判は、中国人の伝統的で基本的思考である対の思想ー両面思考を念頭に考慮していない。つまり「未発の中」＝両端を否定した中と、「時中の中」＝両端を肯定した中という、相異なる二つの中の存在を無視していて、その存在に気づいていない。つまり両端を否定した中と両端を肯定した中を混同しているのであり、否定と肯定を区別する対の思想ー両面思考を十分に理解した上での説明であるとは言えないであろう。

二つ目の問題は、中国人の基本的思考である対の思想ー両面思考に対する不十分な理解方法である。金谷氏は、中庸思想と対の思想を混乱している。

本文中において、「温かにして厲しく、威ありて猛々しからず・・・」とあるのを中庸の表現であると言う。しかし文意は、「孔子は温かさと厳しさ、威厳さと温厚さ」の対立的な両面的な人格性ー対の性格を持つていたというだけなのであり、この両端性が何故に「ほどよい真ん中」である中庸の人格になるのかについては、もっと詳細な説明が必要である。何故ならば温厚さと厳しさというような両極端の感情は、同時に発現できず、両極端の感情はしばらく時間的な落差を置いてのみでしか、発現することは不可能だからである。

また「文と質との両端を考えたらうで、君子はそのいずれにもかたよらず両

きるであろう。中庸の正しい意味は、以上の朱熹の解釈を離れて、先ず何よりも『中庸』古本の部分を手がかりとしながら、直接上代の文献について究められねばならない。」として、朱子の「未発の中」と「時中の中」を体用の論理で説明することを、朱熹の独自の解釈として退けて、中庸の古義にて解釈する必要性があるとしている。そして金谷氏は、

『中庸』古本について先ず知られることは、「中」が過不及のない「両端の中」として意識せられていることである。……過ぎた状態、及ばない状態という両極端を意識したうえで、その何れにもかたよらないなかほどに真正の道があるとするものである。それは、最もみやすい意味であると共に、又はじめて中庸という言葉のあらわれる『論語』からの伝統をも受けつく最も本質的な概念であった。ところが又「舜、問うを好み、好んで遷（卑近な）言を察し、悪を隠して善を揚げ、その両端を執りてその中を民に用う」（第六章）というのは、なるほどこれも両端の中であるが、右でもなく左でもないなかほどというよりは、むしろ、右の言い分も左の言い分もとりにいれてそのなかほどを用いてゆこうとするもので、もろもろの極端を一つに集中しようとする心の動きをみることができる。してみると、前にみた過不及のない「両端の中」は、実は単なる直線状のなかほどの一点というのではなく、むしろ両端をかねそなえた包容的な立場にある。ある意味では構造化を持ったものと考えられるであろう。そもそも「中」という言葉のうまれるには、消極的にせよ、端というもの意識されており、更にその端がなければ、中の存在も亦考えられないという事情を想うならば、以上のような関係は、容易に理解できるであろう。両端の「中」のもつこうした包容的な意味に注目すると、孔子の人格について「温かにして厲しく、威ありて猛々しからず、恭しくて安らか」というのや、『書

経』のなかで「直くして温かく、寛やかにして栗しく、闊くして虐なく、簡（大）にして傲（恣）なることなし」（堯典）などというの、やはり中庸の表現であることがわかる。有名な「質、文に勝てば則ち野なり。文、質に勝てば則ち史なり。文と質と彬彬として然る後君子なり」（雍也）というのは、文と質との両端を考えたうえで、君子はそのいずれにもかたよらず両者をかねそなえた人、即ち「中立して倚らぬ」人であることを説いたものであるが、それは又文質両端の平衡をえた調和の上に場を占めるものとみることができる。「中」の世界はそのまま「和」の世界に通ずるものであった。……と述べている。

以上の金谷氏の論理を総合して要約すると、以下の二つの問題点がある。一つ目の問題は、朱子の言う喜怒哀楽の無い状態の「未発の中」と、喜怒哀楽の時―状況に随って存在している中の状態である「時中の中」という、異なる二つの中庸が存在するという主張について、その批判の不十分性である。

「未発の中」と「時中の中」という本来異なる二義を持つ―つまり対的思想を具有する中庸思想を、朱子は、本体と作用との関係に混同して、つまり一義的に見做して、それを体用の論理という朱子独自の二元論的な哲学的理解に理論化してしまった。金谷氏は、このような朱子の中庸思想の理論化は誤りであるとして、これは朱子の独自の哲学思想であり、古代の資料に見える本来のこの意味でもなく、また一般的でもない、と退けているのである。

金谷氏の体用の論理で説明する朱子の一義的解釈への批判は、確かに正しい説明だと理解できる。しかし喜怒哀楽の感情の未だ存在しない状態の中―「未発の中」と、喜怒哀楽の感情の現れた已発の中―「時中の中」―状況に適中した中庸の状態（七）は、全く異なった二つの中庸思想なのであり、朱氏の解釈は本来の中庸の意味ではないと、二つの異なる側面を持つ中庸の存在を否定し

文学や歴史や政治経済の研究にまで拡大して発展できない限界性や、中庸思想を応用した政治思想史研究に対する研究の限界性を持っていたのである。

一 金谷説の検討

金谷氏の「中と和」の論考（二）は、武内氏の「中」の規定の発想を発展させたものである（六）。この論考における対の思想と中庸思想の関係についての金谷氏の主張を、以下に簡単に紹介して見たい。

金谷氏は、第一節の「中の論理」で、以下の様に中庸の中を説明している。「中の意味は、「礼記」の中庸篇では、相対するものを持ち出してその右でもなく左でもないというのが、典型的な説明方法であった。中庸の意味における「中」という言葉は、端というものが消極的にもせよ意識せられて、はじめて生まれたものであつたろう。「中」を右でもなければ左でもないという否定的表現で「相対するもののなか」との論理的表現は、古代中国に於ける論理の貧困さを示しているが、中庸の本質は、舜の政治にある「両端を執りて用ふる中」という、いずれにも偏らず両端を兼ね備える包容的総合的な意味がある。これを代表する事例が孟子の子莫の「執中」批判で展開する「権」——融通性——ある中の必要性の展開である。この「中」の持つこうした本質、即ち融通性を含む包容的な意味に注目すると、先に見たような「中」の論理的表現、右でもなく左でもないという否定的なそれは、実はそのまま、右でも左でもあるという肯定的表現に通ずるものであることが考えられる。」

金谷氏によると、中庸の中とは、「論語」先進篇にある「過ぎたるは及ばざるが如し」に代表される、「右でもなければ左でもない」という否定的表現だ

けではなく、舜の「執両端」政治や孟子の子莫批判に見える「執中無権」批判を見ると、「右でもあれば左でもある」という肯定的表現に通じて行く、と言うのである。中庸の中には、両極端の否定と肯定が存在するとした。斯界での最初の論考である。対の思想から見ると、非常に貴重で重要な指摘なのである。そして「中と和」の発表した五年後に発表した論考である金谷治「中庸について」その倫理としての性格」では、金谷氏は、中庸思想について、以下の様に述べている。

「第一章 中和の倫理」で、南宋の朱熹の「中庸の中とは、もともと過ぎもせず及ばぬこともないという中で、大意は時に〔に随う〕中にある。もしその中を更に考えるなら、喜怒哀楽の未だ発しない中から時中の中になるのであつて、未発の中は本体であり、時中の中は作用である」との主張を引用して、以下の様に批判している。

「朱熹の考えた中庸は、たしかに日用の人倫としての実践的なそれと、それを生み出す根源としての、性とか命とかさらには彼のいわゆる理ともかわるような、形而上的なもの、との二重の意味を荷っていた。それは、日用の卑近な実践性を持ちながら、高遠な形而上的基礎の上に立つものである。けれども、そうした中庸の意味は、朱熹の独自の哲学的解釈によるものであつて、決して中庸の本来の意味でもなければ、又一般的な意味でもなかった。・・・そうすると、朱熹が、中庸の「中」について、「未発の中」と「時中の中」との二義をあわせ持つとし、前者を本体、後者を作用とみたのは、本来異なつた立場にある二つの書物の内容を一つのものとして把握し、自己の哲学的体系に照らして理解したものとなるわけで、中庸の倫理性は深められたといえるであろうが、それは決して本来の意味でもなく、又一般的な意味でもなかったことが理解で

対の思想と中庸思想研究

―対の思想から考察した中庸思想研究の現段階（二）―

中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想から中庸思想の研究史の現状を検討すると、現在日本の中庸思想の研究は、全く貧弱な段階である。金谷氏は、中庸には両端の否定と肯定の二面性があると指摘したが、肯定論に否定論を吸収して、一元論化してしまった。島田氏は、中庸には、「未発の中」と「時の中」の二つがあると指摘しながら、体用の論理で本体と作用に一元化してしまった。しかし対の思想から中庸思想を詳細に再検討して分析すると、両端の否定論と肯定論は、水と油の関係であり、同一次元で論じられない。従って中庸思想には、両端を否定した「未発の中」Ⅱ和Ⅱ調和論と、両端を肯定した「有権の中」Ⅱ時中Ⅱ状況的中論という、全く相異なる二つの中庸思想が存在する事が判明するのである。

キーワード…対の思想 中庸思想 否定論 肯定論 調和 時中

はじめに

中庸思想に関する論考の中で、中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想―両面思考から中庸思想を考察した現在日本の中国思想史者の研究や論考は、現在までの所、極め貧弱である。管見の限りにおいては、このような視角を持った研究は、できるだけ広い目に集めて見ても、金谷治「中と和」（一）

小倉正昭

（一）金谷治「中庸について―その倫理として性格」（二）、金谷治『中国思想を考える』（三）の三論考、島田虔次『大学・中庸』（四）、赤塚忠『大学・中庸』（五）のみである。総論として言えば、この分野での研究の貴重な指摘をしている研究は、金谷氏の独壇場に近いと言えそうである。そこで以下の行論では、金谷氏の一連の著作の検討を中心にして、対の思想から考察した考察した現在の日本の中庸思想の研究の現段階の到達点と課題点について、研究論文の発表した年代順に、それらの論考の是非について、その問題点を検討して行きたい。

金谷氏は、「中庸」研究の論考において、「そこで、両端の中ということも、両端の右と左とがあつてその右と左との真ん中ということですが、・・・そもそも、その両端の極端そのものが動いているという観点も必要ですね。事態は絶えず動いていて、決して静止的でない。・・・中庸の難しさはこの辺から出て参ります。」（三）と述べるように、中庸の内実性規定の困難性は、固定でない両端の中という特性に由来しているからである。

ところで陰陽、善悪、好悪、是非、公私等の両極端への両面思考―対の概念は、政治、経済、社会、思想等のあらゆる場面において成立する思想概念である。従って対の思想と両端の真ん中思考である中庸思想は、不即不離の密接な相互関係を有するにも関わらず、全く従来の中庸思想の研究史においては、看過されて、従来の研究者に於いて少しも触れられていない（二〇 拙稿参照）。

だから今までの対の思想の観点を欠落した中庸思想の研究は、中庸思想の研究は単に中国哲学の―主に考証学的研究にのみの―範疇に止まり、それ以上の

Definitions of the Mean and their Significance for Political Thought

—Present stage of study of the “Doctrine of the Mean” examined from a perspective of the thought of *Dui* (1)—

Masaaki OGURA*

For definitions of *chuyo* (mean), Neo-Confucianists in the Sung dynasty of China specified *chu* (middle) as the name of neutrality without excess or deficiency. They had two definitions of *yo* (way): constancy and normality. In Japan, researchers in Chinese philosophy generally see *chu* as ambiguously poised halfway between both ends, and have two definitions of *yo* (way), constancy and ordinariness, which they have not resolved yet. Detailed examination of the word of *chuyo* suggests that *chu* is the exact midpoint and *yo* is an additional character which has the meaning of ordinariness. *Chuyo* is not “morals to practice the ambiguous middle on a daily basis or constantly”, but “morals that not at all lean to either end of extremes and practice the rigorous middle in everyday life in an ordinary way”. In the philosophical background of such definition of *chuyo* as the rigorous middle, the consciousness of the thought of *Dui* had been working. It is peculiar to Chinese society, which tries not at all to sacrifice either end of the spectrum of humanitarianism equal *gi* (justice) equal public authority and individualism/ familism equal *jin* (humanity) equal personal authority and maintain them equally and impartially with the dual power structure.

Key words: mean, *chu*, *yo*, definition, humanitarianism, familism, thought of *Dui*

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

- 年、朝日文庫 上・下 一九七八年 参照)
- (一一)『中国思想の特質』(宮崎市定 『岩波講座 世界歴史』 第四巻 月報一三 一九七〇年五月 参照)
- (一二) 島森哲男『中庸』篇の構成とその思想…個のあり方をたずねて(『集刊東洋学』第三二 一九七四年 参照)
- (一三) 木村英一『中国哲学における中庸思想』(『日本中国学報』三一 一九七九年 参照)。なお「時中」の意味規定に就いては、鈴鹿高専紀要四七巻拙稿「対の思想と中庸思想研究―対の思想から考察した中庸思想研究の現段階(二)―」の本論並びに注(七)(二〇)参照。また執筆予定拙稿「中庸思想の実現方法論―対の思想から考察した中庸思想の構造論研究(二)―」に於いても詳述したい。
- (一四)『中庸』(宇野哲人全訳注 三頁 講談社学術文庫 一九八三年 参照)
- (一五)『中庸』(宇野哲人全訳注 四四頁 講談社学術文庫 一九八三年 参照)
- (一六) 杉山一也『孟子の「中」について』(『待兼山論叢』第二二号 哲学篇 一九八八年 参照)
- (一七) 浅野裕一「受命なき聖人・『中庸』の意図」(『集刊東洋学』第六一 一九八九年 参照)
- (一八) 田中正樹「北宋に於ける中庸と皇極―契嵩と蘇軾」(『集刊東洋学』六二 一九八九年 参照)
- (一九)『武内義雄全集第二巻儒教篇一』(武内義雄 角川書店 儒教の倫理 一 第三章 究理 中 五四頁 参照)
- (二〇)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 参照)
- (二一) 土屋裕史「中庸についての一考察―『孟子』と中庸との関係から」(『中央大学大学院研究年報』二六号 一九九六年 参照)
- (二二) 杜勤「「中」のシンボリズムに関する一考察…宇宙論からのアプローチ」(『大阪大学言語文化学五』一三五頁―一四八頁 一九九六年)
- (二三) 真儒協会会長 高根秀人年・個人ブログ『儒灯』・「美の思想」―中庸―(二〇〇九年七月三十一日) 参照
- (二四)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四七頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (二五)『孟子下』(小林勝人訳注 四三頁 注三 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (二六)『孟子下』(小林勝人訳注 三三三頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (二七)『中庸』(金谷治訳注 一五〇頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (二八)『論語』(金谷治訳注 二七二頁 岩波文庫 一九六三年 参照)
- (二九)『大学・中庸』(金谷治訳注 一六二頁―一六四頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (三〇)『大学・中庸』(金谷治訳注 一五七頁 岩波文庫 一九九八年 参照)
- (三一)『孟子下』(小林勝人訳注 三三三頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (三二)『孟子上』(小林勝人訳注 二五八頁以下 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (三三) 仁と義を融和したのが礼であり、礼は中庸なのである。(拙稿「対の思想の政治思想的意義―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(終章) 鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻二〇一一年 参照」)
- (三四) 拙稿「対の思想の政治思想的意義―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(終章) 鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一一年 参照」)
- (三五) (受付日二〇一三年 九月 九日)
- (三六) (受理日二〇一四年 一月 九日)

的な対的思考から考えると、両方を対等平等に両立させなければならない。ここに、絶対的な真ん中を強烈に主張する中庸思想を最高の政治的徳目として賛嘆する、儒教の政治思想的意義が存在すると言えるであろう。

結語

以上に述べた事を簡単に要約すると、凡そ以下の様になるであろう。

中の定義―南宋の朱子は、中庸の意味を「不偏不倚、過不及無きの名。庸は平常也」としたが、この規定が一番妥当である。この意味をもっと具体的に展開すると、中庸の中とは、両端の中央の意味である。それは、両端よりの五分五分の真ん中であり曖昧さを一切排除した中央の意味であり、金谷氏の主張するような「ほど良さ」曖昧さを包容したアリストテレス的な中央ではない。

庸の定義―中庸の庸とは、武内・金谷・熊谷氏・島田氏等が言う様に、中庸の中を補足説明する添え字であり、中の補足語である。その意味は、平常性や平凡の状態を意味する。従って中庸は、中・中行・中道等と同意語である。

中庸の定義―中庸とは、両端のどちらにも少しも偏らずに、両端の真ん中を日常的に平凡に生きて行く徳目である、と定義することができるであろう。

中庸思想の政治思想的意義―中庸の厳密な定義から導き出される中庸思想の政治思想的意義は、博愛主義Ⅱ国家・社会的正義Ⅱ公権力と、個人主義Ⅱ自己・家族愛Ⅱ私権力の両極端思想を、五分五分に緊張関係を持って、バランスよく保持して行く所であり、公私の緊張関係という二重権力構造を国家権力上に永久に反映していく事を希求して行く所に存在するのである。

(二〇一三年八月三〇日 稿了)

注

- (一)『武内義雄全集第二巻 儒教篇一』(武内義雄 二 中庸 五四頁―五六頁 角川書店 昭和五四年 初版 参照)
- (二)『武内義雄全集第二巻 儒教篇一』(武内義雄 二 中庸 五八頁 角川書店 昭和五四年 初版 参照)
- (三)『孟子下』(小林勝人訳注 三五三頁 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (四)拙稿「対の思想と中庸思想―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(四)―」(鈴鹿工業高等専門学校紀要第四五巻 二〇一一年参照) 金谷治「中と和」『文化』十五巻四号一九五〇年参照)
- (五)金谷治「中と和」『文化』十五巻四号 一九五〇年 参照)
- (六)熊谷尚夫「中庸之研究」『横浜国立大人文紀要』第二類 語学・文学 二一九五三年 参照)
- (七)金谷治「中庸について―その倫理としての性格」(東北大学文学部研究年報第四号 一九五五年 参照)
- (八)吉田賢抗氏は、中行を、「中正を得た行。中庸の徳にかなった行。過ぎることもなく、及ばないこともない、中道にして正しい理想的行。」(新釈漢文大系第一巻『論語』吉田賢抗 明治書院 昭和三八年 二〇四頁参照)と注釈しているが、中庸の定義はしていない。
- (九)板野長八「中庸篇の成り立ち」『広島大学文学部紀要』二二巻二号 一九六三年 参照)
- (一〇)『新釈漢文大系第二巻大学・中庸』(赤塚忠 明治書院 昭和四二年 初版 平成六年 三五版 参照)
- (一一)『大学・中庸』(島田虔次訳注 中国古典選四 朝日新聞社 一九六七

きつれて人間を食らわすことにもなり、やがては人間同士お互いに食いあうようなあさましいことにもなりかねないのだ。……父を無視し主君を無視する禽獣にもひとしい野蛮人は、これこそ周公が討ち懲らしたもうたところなのだ。私もまた天下の人心を正し、間違つた学説を排撃し、片寄つた行いを防ぎとめ、でたらめな無責任きわまる言論を追放して、そしてこの禹・周公・孔子の三聖人の志をうけ継ぎたいと思つておる。……私にかぎらず、誰でも言論をもつて、楊朱・墨翟の邪説を排撃するものは、すべて聖人の仲間なのである。」(三二)と言う。

孟子は、墨子の博愛主義と楊子の個人主義を、一面的に偏向した極端思想と批判して、仁義〓礼〓中庸(三四)を尊重する儒教思想は、墨子の博愛主義は家族制度を無視するから不可であり、楊子の個人主義は国家・社会を無視するから不可であると批判している。だが孟子は他方では、墨翟の博愛主義と楊朱の個人主義の長所も認めている。儒教は、墨子の博愛主義〓国家・社会〓義と楊子の個人主義〓個人・家族主義〓仁の両者を兼ね備えたものであると言う。従つて儒教は、墨翟の博愛主義と楊朱の個人主義の短所を批判しつつ、両思想の長所を認め包摂した複合的思想であり、儒教思想は、博愛主義の否定と肯定、個人主義の否定と肯定という、両面思考―「対の思想」を持つ懐の深い政治思想であつたのである。従つて一方のどちらかに少しでも偏つてしまうと、或いは過不及があると、他方の存在が霞んで沈んでしまい、両方の実体が一〇〇%生かされないのであり、それは、仁〓自己愛・家族愛〓私的愛と義〓国家・社会的正義〓公的愛の両方を対等平等に実現することを標榜する儒教には絶対に許容できない性質の思想であつた。

中庸の語句的規定の厳格さへの回答は、既に拙稿でその概略を述べたように、

政治論レベルで言えば、中国社会は、家族・個人と国家・社会という、二つの相異なる二つの中心を持つ特異な二元論的社会なのであり、この二つの中心を持つ世界観を、どちらにも少しも偏らずに維持して堅持する事が、中国人の伝統的な理想的世界観であつたからである。もし万が一、一元論的にどちらかに傾けば、家族―個人と国家―社会のどちらか一方が必ず犠牲になり、やがてその制度が破滅に繋がるからである。両端のどちらもしも犠牲にせずに、両者を安定的に両立して対等平等に保持して行きたいという信念の現れが、両端の真の中央を執ることを理想にした一般的な中国人や儒教特有の中庸の世界観であつたためであると言えるであろう(三五)。

従つて絶対的な真ん中といった中庸思想を実現する理想が主張された理由は、自己・家族と国家・社会という公と私の相互関係を、ある種の緊張関係で持つて、対等平等な関係を保持して、中庸思想の相反する二つの機能である相互依存や対立関係を保持しようとした所に存在した。中庸思想の中は、金谷氏が主張する様な今日的・日本人的感覚の融通性や曖昧性のある中を排除して、絶対的な真ん中が要求され、また必要とされたのであると結論することができ。孔子・孟子・宋学者は、中を絶対的な真ん中と規定していたのは、家族と国家の二元論的構造で成立する中国社会の伝統的な特殊性に起因していた。

博愛主義〓公と個人主義〓私の両者を、どちらにも少しも偏りなく、五分五分に緊張関係を持つて保持して行こうとする儒教の中庸思想が国家権力構造上に展開されると、公権力と私権力の二重権力構造状態を、対等平等に緊張関係を持つて、互いに反発する両権力を保持して行こうとする、儒教の政治思想的立場に帰結して行く。どちらか一方に少しでも偏ると、他方がそれだけ犠牲になる。それは儒教には許容できるものではなかった。中国人の基本的に伝統

て隠遁し（遯世―筆者注）、だれにも知られずにも悔いても悔いることがないというの、これはただ特別の聖者だけにできることだ。「それもわたしの望むことではない。」（三二）。

孔子は、中庸とは、奇抜な言動者や隠者の両極端を排除して、両端の中央である日常生活の平凡な道を弛まずに毎日実践して行くのだと言うのである。従って中庸思想とは、両端のどちらにも少しも偏らずに、両端のど真ん中を日常的に平凡に生きて行く徳目である、と定義することができであろう。

最後に中庸の語句規定の結論である。何故に絶対的な真ん中でなければならぬのか。問題なのは其の政治思想的意義であり、国家権力構造の意義である。

ここで問題なのは、何故に中国古代より中国近世の朱子の時代に至るまで、中庸とは厳密な律法的な絶対的な真ん中でなくては行けなかったのか、その理由である。何故に中庸は、曖昧なほどよき中央では不可なのであり、両端の五分五分状態の真正の真ん中でなければならなかったのか。孟子は、子莫の「執中無權」批判で、その理由を以下の様に明確・詳細に述べていたのである。

「孟子がいわれた。「楊朱は〔極端な個人主義者であるから〕、万事自分本位にしか考えない。だから、たといわずか髪の毛一本抜くぐらいのことで大いに天下の為になるとしても、決してそれをしない。ところが、墨翟は〔これと反対で、無差別な博愛主義者であるから〕、たとい頭の天辺から足の踵まですべへらしても、天下の為とあればそれをするのである。魯の賢人子莫はこの中ほどを執る中道主義である。この中道主義は聖人の道である中庸にまず近いといえるが、しかしあくまでも中道ということだけにとらわれてしまって、臨機応変の処置がなかったなら、これまた楊朱や墨翟のようにただ一つの立場だけを固執して他を忘れてしまうのと全く同じだ。わしがただ一つの立場だけを融

通のきかないのをにくみきらうのは、正しい中庸の道をそこねるからだ。それではただ一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所（百事―筆者注）を捨ててしまうことになるからだ。」（三二）。

孟子は、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義の長所を肯定的に評価して、一極点の執中に拘らずに、臨機応変に墨子の博愛主義と楊子の個人主義の長所を完全一〇〇％活かして、そのど真ん中を執れ、それが儒教の中庸なのだ。そうしないと楊朱・墨翟の全長所を放棄する事になる、と批判していたのである。

また孟子は、墨翟の博愛主義と楊朱の個人主義を、逆に以下のように徹底的に嫌い激しく批判して、両極端思想について否定的な評価を下している。

「在野の学者は勝手気ままに無責任な言論を唱えて世間をまどわし、中でも楊朱や墨翟の説が広く天下にみちあふれて、天下の言論は楊朱の説に賛成しなければ、必ず墨翟の説に賛成するという有様。いったい、楊氏の説は、自分のためだけしか考えない自分本位の個人主義で、つまり君主を全く無視するものである。墨氏の説は、自分の親も他人の親も平等に兼ね愛する無差別の博愛主義だから、父があってもないのと同然、つまり父を全く無視するというもの。このように、自分の父を無視し自分の主君を無視するのは、これこそ、とうてい人間とはいえない禽獣のふるまいである。」（三三）と述べる。

孟子は、楊朱の個人主義は君主や国家を無視し、墨翟の博愛主義は家族を無視する、到底人間とはいえない禽獣の行為である、と言うのである。続いて孟子は、以下のように楊朱と墨翟の両極端思想を激しく批判する。

「今もし、楊朱・墨翟の説が鳴りをひそめなければ、孔子の正しい道はとうてい世に顕われわせぬ。かくして邪説が人々を欺き眩まして、仁義の心をさし塞いでしまうのである。仁義の心がさし塞がれてしまうと、けだものどもを引

のである。程子や朱子の「不偏不倚、過不及無き名」とした絶対的な真ん中の規定が正しい解釈なのである。

次ぎの問題は、庸の学説史の整理と規定についての疑問と、その定義である。

浅野氏は、鄭注も朱子注も、同じく常の字を使用しているから、古注も新注も同じく恒常性の意味だと言う。既に金谷氏が詳細に検討していた様に、恒常と平常の解釈には意味の相違があり、浅野氏の理解方法には問題がある。

そこで浅野氏の引用した資料に見える庸の意味について検討して見たい。庸徳之行、庸言之謹、有所不足、不敢不勉、有余不敢尽」（『中庸』第三章）とあるが、その下文に「言顧行、行顧言、君子胡不慥慥爾」とあるから、「庸徳や庸言は、不足があれば、不足なきまで努めて、余りあれば、余る所まで尽くさない、言行一致が大切である」という意味である。庸徳・庸言は、不偏不倚・過不及無き「中」の実現を補足説明する言葉であり、庸は中の添え字である。

浅野氏は、この文章を「庸」がやはり恒常・一定の意で使用されていたことの裏付けと言うよりこの「庸」は、各人が不断に維持すべき恒常性、即ち各人が宿す天命・性の一定した水準に準拠した言行・進退を指す」と述べるが、浅野氏の恒常・一定の意味との「庸」の解釈には、やはり無理がある。恒常・一定と規定すると、余りと不足が無い事になる故に、文意が通じないのである。

金谷氏は、「四 庸徳・庸言―庸は常の意。高遠でない平凡な日常性と永続的恒常的であることを兼ねる」と注して、この文章を「平凡で恒常的な日常の徳を実行し、平凡で恒常的な日常の言葉を慎重にして、・・・」（三〇）と訳している。庸に平常と恒常の二つの意味を重ねて注釈して、どちらにも採れる解釈をしているのである。果たしてどちらの意味が正しいのであろうか。

ところで庸を恒常の意味で訳すと、「恒常なる徳や恒常なる言葉」となり、

これは一定不変となるのであるから、不足を補い余りを削り、中にすることは不可能である。しかし庸を平常・平凡の意味で訳すと、「平常の徳や平常の言葉」となり、これは一定不変でないから、補足の場合は補い、余れば削り、中に戻すことが可能である。従ってこの文章の文意が通じるようにするには、庸を平常の意味に訳する以外に考えられない。従って古代資料でも庸は、朱子や武内氏の言う様に平常・平凡の意味で使用していた添え字と言えるであろう。

従って中庸の字句は、中に重心があり、古注も新注もまた古代資料を検討しても、庸は中を補足説明する日常性や平凡さを意味して、中の添え字である。不偏不倚・過不及無き中は、そのまま平常で日常的な道理という意味になるであろう。武内氏が日本で最初に定義して、更に金谷氏が「中庸について―その倫理としての性格」で詳細に検討した中Ⅱ両端の中央と庸Ⅱ平常の字義が正しい解釈なのである。類型を異にする各人における「自己の水準に的中した」とする浅野氏の規定には無理がある。中庸は、類型によつて落差がない、全ての人間に共通に適応する普遍的道德なのである。従って古代資料に見える中庸の語句は、中・中行・中立・中道と同様の意味であり、全て中庸を意味している。

次に中庸という熟語の意味を定義してみたい。孔子は中庸思想について、その意味はどの様なものか、以下の様に明瞭に述べている。

「先生はいわれた、「わかりにくいはずきりしないことをむりにさぐり出したり、風変わりな奇怪なことを行なったりすると（索隠行怪―筆者注）、（人の注意を集めて）後の世にそれを誉めて受け継ぐものも出るだろう。だが、わたしはそういうことはしない。君子は道を規準として行動するものだ。たとえ力及ばず」途中で挫折することがあるとしても、わたしには（道を守るのを）やめることはできない。君子は中庸に依りそつてゆくのである。世間に背をむけ

ところで執中という以上、中の語義は、絶対的な「真ん中」であり、宋学者の指摘が正しい解説である。そもそも権 $\parallel$ 秤の分銅は、絶対的な正確さを求めるために使用する重さを量る道具である。従って孟子の言う「権のある中」は、両端の「絶対的な真ん中を図る臨機応変性のある道具」の意味である。この意味では、両端の絶対的な中を得るために権 $\parallel$ 秤が必要であるという武内氏説が正しい。孟子は絶対的な中を実現する方法論として権を主張しているのである。小林氏は、子莫批判の一節を、「魯の賢人子莫は子の中ほどを執る中道主義である。この中道主義は聖人の道である中庸にまず近いとはいえるが、しかしあくまでも中道ということだけにとらわれてしまつて、臨機応変の処置がなかったなら、これまた楊朱や墨翟のようにただ一つの立場だけを固執して他を忘れてしまふのと全く同じだ。わしがただ一つの立場だけを融通のきかないのをにくみきらうのは、正しい中庸の道をそこねるからだ。それではただ一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所(百事一筆者注)を捨ててしまうことになるからだ。」(二七)と訳している。孟子の融通性 $\parallel$ 臨機応変性は、文章を詳細に読めば理解できる。孟子が子莫の「執中無権」と批判して、「執中有権」と言うのは、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義の両端を完全に生かした上で、臨機応変にその真ん中を執れというのであり、直線状における曖昧な真ん中 $\parallel$ 幅のある融通性を実現する事を主張しているのではないのである。

三氏の主張の結論としては、中庸の中が宋学者や武内氏の言う様な両端の絶対的な中間なのか、金谷氏や熊谷氏が主張する様な融通性のある相対的な今日的な意味の程良い真ん中であるのか、という問題である。

但し武内氏は、中の概念は曖昧であるために、孟子は権を使用して厳密な中の概念に規定したのであるが、この主張は資料的に見て誤りである。また既に

述べたが、金谷氏や熊谷氏が、融通性のある中の根拠とした孟子の子莫批判の「権のある中」とは、執中を実現するための方法論であり、中庸の「中」自身には融通性は存在しない。従って武内・金谷・熊谷氏説の問題点である中の概念は、絶対的、或いは相対的かの実証は、今後の課題に残る。

そこで以下に中国古代の資料により、中の語句の規定を検討して見たい。

『中庸』には「子曰わく、舜は其れ大知なるか。舜は問うことを好み、而して邇言を察することを好み、悪を隠して善を揚げ、その両端を執りて、その中を民に用う」(二八)とある。「執其両端、用其中於民」とは、両端をしつかり手に持ち―邇言つまり細部まで詳細に確認して、其の中間を人民に適応したと言うことである。中自身に幅のある融通性があるのなら、重箱の隅を突く様に両端を細部まで搜索する様な詮索行為をする必要がない。そうしなければならぬのは、厳格に真正の中を発見・確認する必要性が存在したためである。

堯が舜に申し渡した言葉に、「堯の曰わく、咨、爾舜、天の曆数、爾の躬に在り、允に其の中を執れ、四海困窮、天禄永らく終えん。舜も亦た以て禹に命ず」(二九)とある。允にとは、辞典では「調和がとれて誠実なさま・穏やか・ゆるす・かどをたてずに・相手の意見を聞き入れる」との意味であるから、両端の意見を聴き容れた上での真の真ん中を意味する。曖昧さは存在しない。

孟子の子莫批判には「子莫執中、執中為近之、執中無権、猶執一也」(尽心章句上)とある。文章を正確に読むと、権のない執中は、執中 $\parallel$ 執一と言うのである。従って中 $\parallel$ 一点であり、一つの極端なのであり、ここの中には「幅のある融通性」などは存在しないであろう。

以上の三つの事例を見ても、中には、およその中ほどとか、幅のある中間の意味は確認できない。従って中庸の中の語義には、絶対的な真ん中を意味する

高根秀人氏は、「中庸の徳といえますのは、過・不足の両極端を廢して“ホド〔程〕”よくあんばい〔塩梅〕する、“中和”することです。中庸を美の学として、西洋的に表現しますと、バランス〔Balance〕”の概念が一番近いのではないかと思います。」と述べる（二四）。しかし中庸の語句の定義をしていない。

五 中庸の定義と其の政治思想的意義

以上に検討してきた様に、近代日本の中庸思想の研究は、武内義雄、金谷治、熊谷尚夫、赤塚忠、島田虔次、宇野哲人、宮崎市定氏等の多くの碩学の研究が存在して、各自が独自に中庸の語句を規定してきた。今、諸氏の研究内容の問題点を逐一検討した結果、中庸の語句の意味や内容を規定することになると、武内氏・金谷氏・熊谷氏の学説を修正して乗り越える研究者は存在しない。従って中庸の語句の意味や内容を定義する事になれば、この三者の問題点を整理して結論する事に作業は絞られる。三氏の学説の意義を述べて、その問題点を指摘すれば、凡そ以下のようなことになるであろう。

中庸の語義は、武内氏が「中庸とは日常行なわれる中の道をいうものであって、堯・舜以来伝統の中とさしてかあるものではない」とした定義が、大筋では正しいであろう。また中の意味は両端の中間であり、庸は平凡の意味とした語義の規定が、最も妥当で正しい結論であろう。金谷氏が中庸を解説して、「二中庸―鄭玄（古注）は「庸」を作用と解し、「中和の働き」をいうとしたが、朱子（新注）は「中とは不偏不倚で過・不及のないこと、庸とは平常（平常恒常）の意」とした。朱子の解釈でよいが、「中」と「庸」との二字は疊韻であ

るから二字を切り離して考えるのはよくない。「中」の一字に重点がある。偏りのない平常で程よい中正の徳をいう。」（二五）と述べているのは、武内説を大筋で継承したものであった。しかし両者の説には、問題点も存在する。

先ず中庸の中の規定である。結論的に言うと、中は絶対的な真ん中である。金谷氏が宋学者の厳密な中の定義の学説を批判して、今日的な「中ほど」の意味合いが正しいとして、「程よい中正の徳」と解釈したが、二程は、「子程子曰く、偏らざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」（二五）と述べ、朱子の中庸の規定には、「不偏不倚、過不及ないこと」と、明確に絶対的な中間であると規定している。

二程や朱子の中の規定には、武内氏・金谷氏・熊谷氏の言う様な融通性や曖昧さは存在しない。中国人の意識では、中の語義には、曖昧さは存在しない。武内氏が中庸の中を曖昧な中でない真正の中であるとの根拠に孟子の権のある中を引用したのに対して、金谷氏や熊谷氏は中庸の中が数学的な絶対的な中でなく、直線状における五を中心とした四でもよいし六でもよいという様な融通性のある中の証拠に孟子の権のある中を理解する。しかし武内氏・金谷氏・熊谷氏の主張は、孟子の「権のある中」の「権」の資料解釈の誤解である。

権には、金谷が主張するように「融通性」の意味がない。権の本義は、小林氏が言う「桓公十一年公羊伝には、「経に反して然るのち善ある者なり（権とは、手段は道に反していても、結果は道に合すること）」とあるが、おもうに、経は常の道で、常道を制するのは礼である。故にこの章の権は礼と相對しているのである」（二六）の意味である。従って「権のある中」の権は、経＝常道＝礼＝中と相い対立した中庸の概念であるとの指摘が正しい解説である。従って孟子が子莫を批判した「執中無権」の権は、臨機応変性という意味である。

金谷氏の中庸の語句規定の特徴は、単純に「両端の中央」とした武内氏を継承発展させて、両端の中央を「ほどほど」の中とする点にある。この論考では、赤塚忠氏の引用したアリストテレスの中庸論を援用して、自己の学説を補強した所に新しい意義がある。しかし問題は、アリストテレス＝西洋哲学の中の解釈が中国哲学にもそのままに適用できるのかどうか、検討する必要がある。

金谷氏は、中庸の融通性の証拠に、孟子の子莫批判＝無權論を引用して、孟子の「權」＝分銅＝融通性を、直線状に於ける一と一〇の五を中心とした上で、孟子の言う真ん中は四でもよいし六でもよいのだ、という意味に理解している。

金谷氏の主張は、既に同氏の前掲の二論文批判で述べた様に、孟子の批判した子莫の「無權」論＝中を執るための方法論としての權の意味を、直線状における融通性と誤解した結果である。孟子の述べる「有權」論の内容は、金谷氏自身が独自に理解している融通性の説明から導き出されているのである。

しかし楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義の真ん中を、四でもよいし六でもよいよう、直線状の上での融通性ある中であるという解釈は、結局は楊朱や墨翟の色彩がどちらかがより強いだけであり、一点を守る固定的な窮屈なものになるのであり、孟子の批判している「權」なき子莫の中間主義に陥るのであり、孟子の言う「權」ある中の意味ではないであろう。

土屋裕史氏の主張を簡単に要約すると、凡そ以下の様になる(二二)。

同氏は「中庸とは、過不及(その場、その時において最も適切妥当な)行ないをし、普遍的な行動をする意味がある。この普遍的な行ないとは、決して高遠で行ない難いものではない。常という語には、普遍という意味と同時に、日常という意味があるように、日常の行為も言うのである。日常の行為という卑近なものであるからこそ、いつの時代・どこ場所でも変わることのない普遍

性を持ち得るのである。」と述べる。この説明は、恐らく「時中」を引用して中庸を説明した宇野精一氏の解釈を取り入れて説明したのであろう。

同氏は『論語』に使用されている中の用例を検討して、「庸の意味を明確にするという点で、“平均”の意味が、もつとも中庸の中の解釈にふさわしいのである。なぜなら“平均”には、先に述べたように、ふつう・平凡という意味があり、この意味の中が庸と結びつくことにより、庸の意味が恒常不変と平常凡庸の二通りから、平常凡庸のみへと限定されるからである。」と述べている。

そして「『論語』の中庸とは、平常凡庸の意味であって、何か特別なものを示したのではなく、子思の根本思想であるはずがなく、また、『孟子』に中庸の語が存在しないのも、納得できるようになったのである」と結論する。

しかし中の語句自身には、「平均」の意味は存在しない。また平均は、何故に普通や平凡の意味に帰結するのか、理解できない。また庸の意味を原典資料により考証していない。従って中庸の意味は、平常凡庸の意味であるとの理解にも無理がある。中の意味を無視した庸の解釈論である。更に同氏は、先行論文の中庸の語句規定を参照していない。従って武内氏・金谷氏・熊谷氏等の中庸の語句規定を修正する見解ではない。

杜勤氏は、「中庸の「中」は単なる一直線の両極端の中ほどというような幾何学的中心ではなく、相対する両極の統一を支える超越的な中心です。」と述べて、「中」は幾何学的中心ではなく、「中庸の理念は相対立する両端の統一を支える超越的性格をもつのが特徴で、原始社会における宗教的人間が切望した中心観念の理念化であると考えられるでしょう。」と述べる(二三)。しかし中庸の語句の規定をしていない。また金谷氏の両端を包摂する包容性や構造性を持つとの中の説明を修正する学説でもない。

ていない。従って朱子・武内氏・金谷氏の中庸の語句説明に従うに過ぎない。

四 浅野氏・金谷氏等の学説検討

浅野裕一氏は、中庸の字義について、以下の様に説明する。

「「中」は、「過・不及、善・悪、喜怒哀楽など、いずれか一方に偏らぬ中正なる位置や状態を指し」と言い、「庸」は、「常の字が鄭玄も朱子も「常」の字を使用しているから、恒常・一定の意味」であり、「中庸」とは、「過・不及いずれにも偏らず、自己の水準に的中した、中正にして恒常・一定なる言動や処世を指す」と言う（一八）。

武内氏・金谷氏の解釈した「中庸」の字義を批判して、中と庸の二字をバラバラに解釈した上で両者を繋ぎ合せて、「中庸」を解説したのである。この見解に従えば、『論語』・『孟子』・『中庸』等の資料に見える中庸・中・中行等の字義は、各自相違する事になるが、この言葉の多様性を一体、どの様に解釈すればよいのか、浅野氏はこれに解答していない問題点が存在する。

浅野氏の引用した庸を規定した資料を検討すると、浅野氏は、両者は同じく常の字を使用しているから、『中庸』の鄭注も新注も同じく恒常性の意味だと言う。既に金谷氏が詳細に検討していた様に、恒常と平常の解釈には意味の相違があり、先行論文を検討していない浅野氏の理解には無理がある。

田中正樹氏の主張は、中庸の概念規定がなく、未発の中と中和も時中も区別しないで議論を展開している（一九）。そもそも中庸と皇極と規定するのは、田中氏が最初ではない。既に武内氏は、中庸と皇極と豊富な事例を基にして実証しているのである（二〇）。従って田中氏の説は、武内氏等の学説の域を

出る新見解とは言えないであろう。

金谷氏は、既に発表した「中と和」「中庸について―その倫理としての性格」の二論文の要旨を踏まえて、以下の様に中庸の語句を総括している（二一）。

「中庸とは何かということについて、ここで一つのはっきりした解答が得られました。それは、過ぎた状態と及ばない状態という対立があつて、それらの真ん中という意味です。朱子学の開祖である朱子も、「中庸の中とは偏らないで過不及の無いことだ」と注釈しています。過ぎた状態と及ばない状態とを両端とすると両端の中ということになりますが、これはまずもって中庸の意味として一番わかりやすい意味だと思います。」

「朱子の注釈では、確かに「庸とは平常なり」と書かれています。中庸の庸の解釈には異説もありますが、朱子の注釈は正しいでしょう。……ですから、「中とは過不及のないこと、庸とは平常の意味」といつて、中と庸とをばらばらに分けて考えるのは誤りです。意味の重点は中にあつて、過不及でない両端の中がそのまま平常でもあること、つまりほど良い中ほどということ、穏やかな日常性という意味も入っていると見て宜しいのです。」

「この日常的なほど良さということに注目すると、両端の中という中は固定的な窮屈なものではないということが考えられます。……この融通性がないとだめだというのは、ちょうどアリストテレスが数学的な中ではだめだと言いたのと同じです。融通性という意味は「権」という言葉で言われていますが、「権」というのは秤の分銅です。……孟子のいう「権」のある中とは、真ん中の一点をきつちりと守る固定的な窮屈なものではなくて、おおその中ほどとして、はばのある融通性を持った中なのです。」

以上に紹介した金谷氏の中庸規定の総括に於いては、以下の疑問が生じる。

は「適切妥当に事物を処理する日常生活の常道」を意味すると規定する(一四)。

同氏の主張は、中和も時中の意味も区別していなく、庸の二義も区別せず併記して、結局、言葉上の解釈論に終始している。問題なのは、「中庸」の「中」の字義を「適切妥当良識判断」と規定する資料的根拠として、以下の様な資料を挙げている。即ち「適切妥当に処理する」の根拠に「時中」と「発而皆中節」を引用して、「良識的判断」の根拠に「中立して倚らず」を引用して「この中は偏らないこと即ち公平である」(一四)の意味としている。

しかしこれらは中庸の中の意味ではない。辞書には中は適中するの意味があるが、「時中」状況に適中する行動」(一四)の解釈を中の解釈に転用している。到底、是認できない解釈論である。また庸の意味について鄭注・二程の規定した常道と朱子の規定した日常性を併記して、庸の字の意味を詳細に分析して規定していない。従って武内・金谷氏の中庸の規定を修正する見解ではない。何よりも先行論文を参照していないのが、最大の欠点である。学説史を整理すれば、この様な拡大的な解釈論の結論が出てくる筈がない。

宇野精一氏は、本書の巻頭での「学術文庫への序文」(三頁)において、「この場合の中庸とは、足して二で割ったような、一種の平均的な事を意味することが多いようだ。その中庸という言葉の出典がこの本である。ただしこの本でいう中庸とは、一般に考えられているのとは少し違って、その場、その時に、最も適切妥当なことである。だから本当の中庸は、生易しいことではなく、常に中庸を得ることのできるのには聖人だ、と言われる。けれども一面、中庸の庸は、普通のこと、当り前のこと、という意味もあって、平凡な、当り前のことの中にこそ、中庸はあると考えられているから、どんな人でも中庸を得ることができる」と述べている(一五)。

同氏の説明によると、中庸とは一般的には平均的な事をいうが、本書の中庸とは「その場、その時に、最も適切妥当なこと」と規定する。「最も適切妥当なこと」の説明には出典を明らかにしていない。しかし推測すると、朱子が『中庸章句序』で説明する「時中」の意味であり、庸は「庸とは平常なり」との解釈に従っていると思われる。従って同氏の説明は、中庸の語句の規定をした上での説明ではない。聴従する以外にないが、中には適切妥当の意味はない。従って武内氏・金谷氏・熊谷氏の語句規定を乗り越える説明ではないと言える。

また本書の「字義」に宇野哲人氏は、中とは何かについて、「朱子はおおこれを解して、「偏らず倚らず過不及無きの名」といえり。・・・すなわち分つていえば、不偏不倚の四字はいわゆる未発の中すなわち中の体をいつたものである。無過不及の四字はいわゆる君子時中の中すなわち中の用をいつたものである。或問には朱子が委しくその意を述べておらるるが、・・・と述べている(一六)。

庸については、「朱子は庸を平常なりと解している。平常なるが故に常にこれを行ないて易ゆべからず。もし世を驚かすがごとき非常の事ならば、一時は差し支えなくともこれをもつて常となすことは不可能である。すなわち平常なる故に不易、不易なる故に平常であつて、その意は同じ。但し不易といえれば久しきを待つて後知り、平常といえれば直ちにこれを今に験すべし。故に平常と解する方、切実ともいふべし。」(四五頁)と述べている。

宇野哲人氏は、朱子の解説を紹介して、朱子説を首肯するに止まる。従って武内氏・金谷氏・熊谷氏の中庸の語句の定義を修正するものではない。

杉山一也氏は、朱子・武内氏・金谷氏の学説を受けて、「かたよらず過不及がないこと」、「両端の中央」、「両端のなかほど」という意味と言う(一七)。

杉山氏は、朱子・武内氏・金谷氏・熊谷氏の中庸の語句の定義の相違を検討し

あり、中和の「和」というのは道の用を指す言葉であるから、けつきよく、中庸の中が、中と和の意味を兼ね備えているというのは、道の「体」と「用」との両面を統一的に表現する言葉にほかならない。……その場合、庸という字は、要するに中を強調しただけの言葉と考えてよいであろう。」と言う。中庸の中は、中と和の意味を兼ねており、庸は中を強調する添え字と規定する。

島田氏の主張には疑問が残る。平常の意味と言う朱子の庸の規定について、島田氏は、最初に意外な物まで含意する積極的な意味があると言いながら、ここにおいて庸には積極的な意味がない添え字と言うのは、自己矛盾した主張である。これでは、どちらが島田氏の主張したい意見なのか分らない。

従って島田氏の言う中庸の語句で、庸にはあまり意味がない添え字と言うのは一理がある。しかし中庸と熟語化されている場合には、中と庸は言葉が異なる以上、庸にも何らかの意味があると理解しなければならない。朱子の言うように平常と解釈すると、不偏不倚の中が、そのままそれが平常である事につながるのである。中↓平常なのであり、平常には積極的な意味があると言う島田氏の説には無理がある。また島田氏は、朱子の説明に従うのみで庸の定義を資料的に証明していない。

中国史学研究者・宮崎市定氏は、中庸の語句について、

「中庸なる語は、中と庸と二つのシノニムを結合した、いわゆる連文に他ならないが、ただしこの場合、庸にも独特な意義があつて中の思想を助けている。普通に、庸は常なり、と訓ぜられるが、然らばその常とは何か。……およそ中を得た行為はこれを永遠に繰返しても決して支障を生ぜぬことによつて実証されるとするのである。いわば空間的原理たる中は、時間的原理たる庸によつて裏打ちされて、初めて真の中たりうる。」と規定している（一一二）。

朱子・武内氏・金谷氏・島田氏等の学説を否定する主張である。最初に中と庸はシノニム＝同義語・類義語と言いながら、庸には独特な意義があり、鄭注により庸を常＝恒常性の意味に解釈した。宮崎氏は主張の前半と後半で自己矛盾した説明をしていると言えよう。鄭注により中庸の庸を積極的な意味に解釈した学説であるが、この学説は成立しないことは、既に武内氏・熊谷氏・金谷氏が中庸の語句規定の論考で指摘していた。特に熊谷氏は、「庸は常なり。中を用いて常道となすなり。」（礼記鄭注）との鄭注を引用して、中＝常道と説明していた。宮崎氏は先行論文の内容を吸収していない。独善的な主張に過ぎる。

島森哲男氏は、「もともと「中」（まんなか）という概念そのものは何ら価値的・客観的意味を持っていないその「中」が価値的意味を荷い得るのは、さまざま な状況のなかで、人間によりて「中」がよきものとして選択されるからである。更に「中」の選択に先だつて「中」にあらざるもの、すなわち過と不及の認識とその否定がなされなければならない」と言い、その根拠として「執其両端、用其中於民」（朱子章第六章）を指摘する（一二三）。

同氏の説は、中庸実現のための両端認識を提起した金谷説を受けた論考だが、しかし「両端を執る」というのは、既に金谷氏が述べていた様に、過と不及の両極端を否定する事ではなく、逆に肯定した上で「中」を択ぶ事である。島森氏の否定論説は誤りである。島森氏は、先行論文の中庸の語句規定を参照していない。また何故に中がよきものとして選択されるのかの理由を述べていない。

木村英一氏は、「中国人の哲学は、自然の哲学でも神の哲学でもなく、生き方の哲学である」と述べて、「環境適用行為の形式原理が中庸」であり、『礼記』『中庸篇』によりて、中と庸の意味を説明して、「中」とは「適切妥当良識判断」を意味して、「庸」は「常道と日常性の二義がある」と言い、中庸と

嵌まる概念であり、あくまでも半面の事実には過ぎない。中庸の中は、両極端を包摂した両端を肯定した所にも存在する。既に金谷氏は、両端を包摂した所の中に存在すると述べていた。この様な先行論文の内容を無視して両極端と中は対立する概念だと断定するのは、論理的にも資料的にも無理がある。

従って赤塚氏の資料の読解には、疑問に満ちている。孔子は、「中行の人を見つけて交際できないのであれば、次には必ずや狂者か、狷者である」と言うのである。志望ばかり大きくて実行の伴わない積極的な狂者と、一身を廉潔に保つに汲及として、他人を善導するには及び得ない消極的な狷者を積極的に肯定している。孔子が狂者と狷者の両極端を肯定した先に引用した資料について、狂者と狷者の長所である半面を肯定して、さらにその欠点である半面を否定して、中行人の全人格像を導き出すのは、自己に都合よい部分のみを選択する恣意的な資料解釈であり、引用した資料の曲解である、従って赤塚氏の中「中行の人格者像の規定は誤りである。

ところで赤塚氏は、中庸人を両端の兼備した完璧無欠な完成された人格者として描くのは、「それ故に『中庸』には「中庸はそれ至れるかな」(第三章)といい、また「中庸は能くすべからざるなり」(第九章)といっているのである」との孔子の中庸の絶賛が前提にある故の主張である。しかし中庸は最高の道徳であるとの孔子の主張と、中庸は両端の間であるとの孔子の主張は、何も二律背反や背馳するものではない。赤塚氏は、武内氏や金谷氏の中庸の規定を批判して、それが間違いだ証明する必要性がある。それを証明しないで、孔子の「狂・狷」を引用して自説を展開するのは、論理の飛躍であり、武内氏・金谷氏を批判するための独善的説明であると言わなければならない。

赤塚氏が中庸の始原として中行人を指摘して、完全無欠の最高の人格者とし

たのは、『論語』で完全無欠の人格者の主張を、「師や過ぎたり、商は及ばず」と、人格的に欠点の多い子夏の同様に批判した孔子の発言に矛盾する。「偏らず倚らず、過不及無きの名」と説明した朱子の中庸の規定にも反するのである。従って孔子の交際した中行の人物とは、積極的な狂者と消極的な狷者の両極端を肯定して、つまりしっかりと握り執った中間的人物なのであり、武内氏や金谷氏の言う「極端に走らないほど良い真ん中」の人物像なのである。赤塚氏の中庸論の規定は、武内氏や金谷氏の主張を乗り越えるものではない。

三 島田氏・宮崎氏・宇野氏等の学説検討

島田虔次氏は、朱子の規定した中庸の語句「中なるものは不偏不倚、過不及無きの名、庸は平常なり」の解説について、以下の様に述べている(一一)。

中庸の規定の由来について、「中を「不偏」すなわち偏らない(もしくは偏らず倚らない)ことしたのは程子であり、「過ぎたると及ばざるとの無いこと」としたのは呂大臨であった。朱子はそれをまとめてこのように注釈したのである」と述べる。そして「中」は中国哲学できわめて重要な根本概念として、以下の様に『中庸』の解題の冒頭に於いて注意を喚起している。

「第一、中庸は単に右でもない左でもないという消極的なものでは決してなく、積極的な概念、例えば庸が「平常」と注せられるとき、その平常というのは、・・・ほとんど意外といつてもよいほどの事態までも含意していること。なぜなら、平常とは「事理の当に然る可き」ところのものを意味するのであるから」と、中庸の庸「平常の意味には積極的な意味があると言う。しかし島田氏は、第二章の冒頭において、「中和の「中」というのは道の体を指す言葉で

に継承した武内義雄氏の中庸二分説や、朱子説・武内氏・金谷氏・熊谷氏の中庸の語句規定への通説批判でもある。

しかし問題なのは、赤塚氏は、『論語』の中庸と『中庸』の中庸の相違を提示していないのである。相違点を提示しないで、両者の相違点の問題の提起をするのは、具体性分析が欠如していて、論証の不徹底さがあり、首肯し難い。そもそも「論語」には、「中庸はそれ至れるかな」と孔子が述べているのであり、『中庸』の篇述者は、『論語』の孔子の言葉を引用して、中庸の意味を解説しているに過ぎないのである。

それは兎も角、赤塚氏は『中庸』の中庸の語句の意味内容をどの様に規定するのであろうか。同氏は前言に続いて、孔子の「中行」主張に『中庸』の中の概念の始原を求める根拠として、次のように述べる。

「また、中、ないしは中庸を主張するには、それに反する両極端・過不及・奇僻が存在することがはつきりと予想されており、その予想されるものが強度であればあるほど、中の要求も強くなる。そのような対立するものなしに中を説くことは無意義である。この点から注目すべきものは、『論語』子路篇に「子曰く、中行を得てこれに与せざれば、必ずや狂・狷か。狂者は進んで取り、狷者は為さざる所あり、と」とある文である。孟子の解説によれば、狂者とは、古聖人の道を行なう志望ばかり大きくて、実行がこれに伴わないものであり、狷者とは、一身を廉潔に保つに汲及として、他人を善導するには及び得ないものである。して見れば、中行者は、中道を行なうものであって、志望と実行と、修身と教化とを兼備している人格者である。孔子はこのような人格者とともに道を行なうことを最も希望していたのである。」

この赤塚氏の主張を要約すると、以下の様になる。

『論語』の子路篇に出典する孔子の「中行の人」を引用して、その両極にある狂者と狷者を批判して、『中庸』の中行人とは、狂者の肯定と否定をした「志望と実行」と、狷者の肯定と否定をした「修身と教化」の二つの人格を兼備した完全無欠の最高の人格者であると言う。これは、両端と中庸は対立すると言う赤塚氏特有の持論から導き出された中庸人の規定である。

しかし赤塚氏の主張には、以下のような素朴な疑問点が存在する。

先ず『論語』と『中庸』の中庸の意味が根本的に異なると言うのであれば、何故に赤塚氏は、『中庸』の中庸発言を引用して、これを批判して自己の中庸の意味を規定しないのか。『中庸』の中庸も喜怒哀楽の両極端が前提になっており、中庸の前提に両端の存在を強調する同氏の主張に合致しているのである。これを問題にせずに、引用するのは『論語』の「中行」のみで、「堯曰篇」の「中」は引用していない。何故に「堯曰篇」の中は、中の始原でないのか、説明不足であり、同氏の主張は、論理的に不十分であり、また自己分裂している。

次に赤塚氏は、単純に両端の間を取り中庸の語句内容を説明するのは、「全く自主性を失った折衷主義・追従的機会主義」と、激しく武内氏・金谷氏を批判する。そうであれば、両端の真ん中を中庸と規定しては、いけない筈である。しかし結果論的には同氏は、狂者と狷者について、肯定と否定をして、その両者を兼備した完璧無欠の人格者として、『論語』の中庸人を規定しているのである。両端を兼備した人物とは、両極と対立する概念ではない以上、赤塚氏の主張は、全く自己分裂した矛盾に満ちた発言である。

だから赤塚氏の議論において、中庸の中と両極端・過不及・奇僻は対立するという前提が、本当にそうなのかどうかという、事実関係が問題なのである。中と両極端は対立すると言う赤塚氏の主張は、両極端を否定した場合に当て

の誤りを批判して、朱子説が正しい事の証明していない。この点が今後の課題に残る。なお三氏の共通点は、庸は中の添え字であるとしている事にある。

中庸とは、武内氏は、中庸とは中と同義であり、日常行なわれる中の道の意味と規定している。金谷氏は、「中」は、極端過激にならず又変奇を排することとで、そこに平常であるべきことの意味も宿されていて、「中」と「庸」は、重なりあう概念で、「中庸」という一つの概念も生まれる契機があったと言う。熊谷氏は、中庸の中と庸は別離に考えるべきではなく、庸は中の添え字であり、中庸とは本質的な意味の相違がないと言う。従って三氏の主張では、中庸と中・中行・中道の意味は、本質的には同一という事である。

従って三氏の主張の結論としての問題点は、中庸の中が宋学者や武内氏の言う様な両端の絶対的な中間なのか、金谷氏や熊谷氏が主張する様な融通性のある相対的な、今日的な意味の程良い真ん中であるのか、という問題である。但し既に述べた様に武内氏は、中の概念は曖昧であるために、孟子は権を使用して厳密な中の概念に規定したと言うが、この主張は資料的に見て誤りである。また既に述べたが金谷氏や熊谷氏が、融通性のある中の根拠とした孟子の子莫批判の「権のある中」とは、執中を実現するための方法論であり、これは資料の誤読であり、中庸の「中」自身には融通性は存在しない。

二 板野・赤塚氏等の学説検討

板野長八氏は、中庸の語句の規定をしていない故に、同氏がどの様に中庸の意味を考えていたのか困難であるが、この論考の中では(九)、中庸とは「通常の人・乃至中人」「中正」「中人・通常」、中とは「中正」、「中・中る・中正・

過不及なきこと」、庸とは「常又は平常」の意味と言う。だから中庸とは、「中人・通常・過不及なき人」という意味と見做しているであろう。従って板野氏の中庸の語句の意味は、武内・金谷・熊谷・吉田氏(注八参照)の言う「両端の中央」、「極端を嫌ったありきたりの凡庸さ」と言う意味と同様であろう。

赤塚忠氏は、中庸の語句の内容について、以下のように述べている(一〇)。

「孔子の人格が中庸の徳をきわめていたことはいうまでもない。また『論語』のうちには、「過ぎたるは及ばざるがごとし」(先進)のような中庸と関連する教えが存在する。その後、儒家は中庸をめざして学んでいたともいえる。だが、『論語』に中庸の教えが存在する事実とこれを『中庸』のように理論化することとは同日の談ではない。人の行いが中庸であるということは、何時、何処でも、誰にとっても願わしいことである。アリストテレスも中庸を徳の根本としていた。そして、中庸とは極端に走らない「ほどよさ」であって、誰にもわかりやすいことであると考えられ勝ちである。『中庸』にも比喩的に「その両端を執つて、その中を民に用ふ」(第六章)と述べている。だが、中庸は、過不及の中間をとりさえすればよいというような生易しいものではない。ただ中間をとるのでは、全く自主性を失った折中主義・追従的機会主義となるであろう。それ故に『中庸』には「中庸はそれ至れるかな」(第三章)といい、また「中庸は能くすべからざるなり」(第九章)と述べているのである。『中庸』は中庸を目標として、その根本に立ち入って道を求め、人間の本質を探っているものである。『論語』の中庸と『中庸』のそれを単純に結合しようとするものには、中庸がわかりやすいことであるとする思索の不徹底があろう。」と述べている。この説は直接には、『論語』と『中庸』の中庸を直接に結合した孔子・孟子の血脈を識得することを標榜した伊藤仁斎への学説批判であるが、これを批判的

見ても最も適切である。中庸の「庸」が、平常の意味に解釈されて、はじめて「庸」と「中」の関係が明らかになる。「中」は両端のなかほどで、極端過激を避ける中和の状態であつたが、それはそのまま平常性を尊ぶ心、ふつうのありきたりの何の変哲もない境界をよしとする心に通ずるものがある。奇言奇行は極端であり、ありきたりの凡庸さに徹することこそ「中」であつた。「中」をよしとすることは、極端過激にならず又変奇を排すること、そこに平常であるべきことの意味も宿されているのであつた。「中」と「庸」は、重なりあう概念でもありえたわけで、「中庸」という一つの概念も生まれる契機もあつたのであり、中庸の倫理は、中和と調和の倫理であるとともに、平凡の倫理でもあつたのである。」と述べている。

以上、三点に纏めて紹介した様に、金谷氏は、宋代の儒学者である二程の中庸の規定「偏よらざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」や、朱子の中の規定「偏らず倚よらず、過不及無きの名」との説明や武内氏が主張する「中は絶対的な真ん中」とする説を批判して、中庸とは、「極端に走らぬほどよい真ん中である」との草稿「中」と「和」を再説した上で、武内氏の論考や金谷氏の前稿には述べなかつた「庸」の意味について詳細に考証的に検討した。

この庸の字義の解説は、鄭玄の常道や程子の不易と朱子の平常を同一の意味とした熊谷氏の庸の字義を批判して、自己の学説を再説した。後漢の鄭玄の「用」と「常道」の二解釈を吟味して、程子を批判した朱子が規定した常道＝平常凡庸の意味が正しい、庸は平常の意味で、中の添え字と結論した所に、熊谷氏説を一步前進させた意義がある。「庸は庸常の義」と言う武内説を是認・継承して、それを補強して解説した論考である。

金谷論考の成果は、武内氏では中庸の規定が、人間的な常識的標準である「両端の中央」の意味と、人間の本性たる忠＝まごころ＝誠とに区別されるとしていたが、金谷氏は、武内説を批判的に継承して、両者を区別しないで、朱氏の説明に従い庸を平常の意味に解釈した。これが正しい理解であろう。

また舜の政治の「執其兩端」に新しい解釈をして、「両端を兼ねそなえた両者を包み込む中央」の意味として、肯定論的に捉えて、包容性のある構造的な中の意味に理解している。中と庸は重なり合う概念であり中庸の概念が生まれる契機があつたと、中庸の語義を規定した所に意義があるであろう（八）。

以上、武内氏・金谷氏・熊谷氏の中庸の語句規定の学説を検討したが、その要点を述べると、凡そ以下の様になるであろう。

中庸の中は、武内氏は絶対的な両端の中央と解したが、金谷氏・熊谷氏は絶対的・固定的な中間ではなくて、融通性のある相対的な中間と解した。その分岐点は、孟子の子莫批判に引用する「権のある中」の解釈である。武内氏は権を分銅と解したのに対して、金谷氏・熊谷氏は権を融通性と解した。従つて今後の課題として、どちらが正しい見解なのか、その検討が必要になってくる。

中庸の庸は、武内氏は、「庸徳・庸徳」の句を引用して、庸は添え字であり、庸常の義で、平凡の意味とした。熊谷氏は、鄭注の常道や程子の不易と朱子の平常の意味は、経験的表現と直観的表現の違いのみで、同一の意味であり、「常に用い行なわれるべきもの」の意味であると言う。金谷氏は、「庸＝常道の意味は、恒常不変の意味と平常凡庸の意味の二通りの意味がある。鄭玄の解釈は恒常不変の意味であり、朱子は平常凡庸の意味に解釈した」と述べて、朱子の解釈に従い平常の意味に解釈して、庸徳・庸言の句も平常の意味に解釈した。しかし金谷氏は、朱子に従つた平常の意味について、古代資料に依りて鄭注

を引用して、有権の中には、単なる固定的な意味ではなくて、融通性あることも含むと言う。熊谷氏は、金谷氏の中「中庸」の融通性と同様の主張をしている。

また熊谷氏は、庸とは、鄭注の常道や程子の不易と朱子の平常の意味は、経験的表現と直観的表現の違いのみで、同一の意味であり、「常に用い行なわれるべきもの」の意味であると言う。常道＝平常と解した。この点は、庸を庸常と解説した武内氏や金谷氏の説明には無かった点であり、鄭玄の古注に従い、中庸の語義の解釈を一步深めたものであった。特に鄭注を引用して、鄭玄においても中＝常道と規定して、中と庸の二字で一義を形成したと解説した所に、中庸研究者の誰もが指摘していない意義が存在する。

熊谷氏は、中庸の中と庸は別離に考えるべきではなく、庸は中の添え字であり、中庸と中は本質的な意味の相違がないと言う。武内氏が「庸徳・庸言」の意味を、凡庸と解説した中庸の庸の語義や意義と同様の説明をしている。

そして熊谷氏の論考の二年後に発表された金谷氏の論考(七)では、金谷氏は、以下の様に中庸の語句の意味を提起した。

「はしがき」で、「中庸」という言葉は、およそ「ものごとを考え或は行なうにあたって、極端に走らぬほどよい中ほどを選んでゆこうとする、穏健な処世的立場」というのが、ふつうに考えられているところである。ところで、専門家による研究は、おおむね宋学者の伝統を受けて、それを厳しい倫理性において説くことが常であった。そこでは、「中」は、「ほどよいなかほど」というような、あいまいな概念に止らず、もっと厳粛な律法的存在であるとされた。中庸概念の内容は、確かに複雑なニュアンスを持つてはいるが、その言葉そもそもその起源から一貫している、最も本質的な概念についていえば、私には宋学者の説よりは、むしろ今日の常識的な見解の方に、より真実に近いものがある

ように想われる」としている。

「第一章の一」では「中庸」古本の「中」は、過不及ない「両端の中」として意識されて、「過ぎた状態、及ばない状態という両極端を意識したうえでその何れにもかたよらないなかほどに真正の道がある」とする。しかし舜の政治の「執其兩端」を見ると、「過不及のない両端の中は、実は単なる直線状のなかほどの一点というようなものではなく、むしろ両端をかねそなえた包容的な立場にある、ある意味では構造化を持ったものと考えられる」と述べる。

「第一章の二」では「中庸の「庸」の意味は、後漢の鄭玄によると、「庸」は「用」と、「庸とは常なり、中を用いて常道となすなり」とあり常道の二通りに解釈している。両方とも正しい訓詁であるが、前者の「用」の意味に解釈すると、「中の作用」と意味になり、この意味の事例は存在しなく、この意味に随うと本体の中と作用の庸のいう体用の論理に繋がるが、『中庸』古本に随う限り、中庸の概念に形而上学的な本体の意味はないので、後者の常道の意味の解釈に随うのが自然であろう。しかし常道には、恒常不変の意味と平常凡庸の意味の二通りの意味がある。鄭玄の解釈は恒常不変の意味であり、朱子は平常凡庸の意味に解釈した。北宋の程子は「偏らざるを中と謂い易らざるを庸と謂う」、「中なれば不偏なり常なれば不易なり」と恒常の意味に解釈したが、朱子は「中」の解釈はそのまま受け継ぎながら、「庸」は「平常なり」と解釈した。その理由を『語類』では、「ただ平常であればこそ改めることができないのだ。・・・庸は〔程伊川のいうように〕定理であるが、定理だと定めると、かの平常の意味を見ないことになる。いま平常といえは、易らざる定理という意味も自然にそこに含まれることになる」としている。『中庸』の庸徳・庸言も、朱子の解釈に従い平常の徳、平常の言と解釈するのが、他の資料の用法を

含んだ融通性を含んだ包容的な内容を持つと、否定的な意味でのみ中を理解した武内説に肯定論を付加して中庸の語義を理解した所に意義がある。

しかしながら金谷氏の「権」理解の問題点は、以下に述べる所に存在する。権Ⅱ分銅の重さは、物の重さにつれて左右されない性質の器具で、物の絶対的な重さを計測する器具なのであり、「融通性のある相対的な物」とは解釈できない。金谷氏は、孟子の子莫批判で使用している権の意味を誤解している。

「子莫執中、執中為近之、執中無權、猶如執一也」とは、「中を執るに、権なければ、猶如一を執るが如し」と言うのである。権は中庸の真ん中を実現する方法論なのである。「中」自身には、「融通性のある相対的なもの」の意味が無い。執中Ⅱ執一なのであり、中は一つの極点なのである。孟子は、執一Ⅱ固定的な中に拘らずに、権Ⅱ融通性を持つて中を実現せよと言うのである。従って中の語義自身には、金谷氏の言う様な融通性の意味は存在しない。

熊谷尚夫氏（六）は、中庸の中について、「中とは要するに過不及のないことになる。宋の程子が「偏らざる之を中と謂う。中は天下の正道なり。」といひ、更に朱子が「中とは偏らず倚らず、過不及なきの名なり。」といったのはその要領を得た説明である。但し過不及なしといつても単に両端の間という固定的なものをいうのではなく、正道の意と相俟つて事時の宜しきを得るということである。中間という固定的な中は孟子が「子莫中を執る。中を執るは之に近しと為す。中を執つて権なくんば猶一を執るが如し。」（尽心上）といつてゐる所謂執一の中である。権とは物の軽重や時の宜しきをはかることで時に従い変通することである。従つて融通のきかないような固定的な中であるならば真の中正の意義を失つて却つて一方に偏つたものと同じことになってしまうのである。」とあり、権のある中とは、意味を物の軽重や時宜を計ること

真の中は中間という固定的な中ではなくて、融通性のあるものである、と述べている。確かに有権の中は固定的でなく、融通性のある中であろうが、中の語句自身には融通性は存在しないことは、既に金谷氏批判で述べた。

また中庸の庸について、「爾雅の釈詁には「庸は常なり。」とあり、説文には「庸は用なり。」と解いている。鄭玄はこれをうけついで中庸の篇題には「その中和の用たるを記するを以てなり。庸は用なり。」（經典釈文引）といい、又本文の中では「庸は常なり。中を用いて常道となすなり。」（礼記鄭注）とも説いている。宋代になると程子は「不易之を庸という」といい朱子は「庸とは平常なり。」と説明しているが、不易といい平常というのも一は経験的に一は直感的に解説したのみで別の意味ではない。これ等のことから察すると、庸とは常に用い行なわれるべきものという意味であつて、或る特定な場合のみに通用するのではなく、如何なる場合でも通用するというのである。而して鄭玄が「中を用いて常道と為すなり。」と説いているのは中なるが故に庸となり得ることを表現しているのであつて、中と庸の二字を以て一義を形成しようとするものである。」と述べている。鄭注の常道と新注の平常は同じ意味と解釈して、庸の字義を「常に用い行なわれるべきもの」の意味と説明する。

続いて、「従つて中庸という熟した語の中と庸との結合関係は別に考えるべきものではなく明の郝敬（礼記通解）や太田錦城（九經談）もいつている如く、中そのものに庸の義を含み、庸も亦中の義を持つていてお互いに別離のものではない。即ち中庸の庸は中に附加されたと見るべきで所謂中と中庸とは本質的に意味の相違はない。伊藤仁斎は中庸發揮に於て中と中庸とはその義がはるかに別であるといっているが、これは中に対する見解の相違である。」と述べる。

熊谷氏は、中庸の中の意味を過不及なき両端の中間と言ひ、孟子の子莫批判

誠実とは規定できない。孟子の言う権とは、中を執る方法論の提起で、臨機応変の意味であり、孟子の真意を読み間違えた主張である。

③『論語』と『中庸』の中の意味に相違があると言うのは、資料的根拠は存在しないから、両者の中は人間的常識の中央と人間の本性たる忠・真心・誠に区別できない。両者は同じ両端の中央という意味であると言える。従って武内説で問題に残るのは、中とは曖昧な概念なのか否か、という問題である。

次に金谷氏の中庸の語句の意味を要約すると、凡そ以下の様になる(五)。

「過不及なしかたよらずというのは、もとよりかたよった状態、過ぎ又及ばない状態という極端、いわば両端を意識したうえでそのなかほどという意味に外ならない」、「中の意味は、相対するもののなかほどということであった」、「中の説明としては、相対するものを持ち出してその右でもなければ左でもないというのが、典型的な説明法であった」、「中ということばは、端というものが消極的にもせよ意識せられて、はじめて生まれたものであったろう」、「右でもなければ左でもないという否定的表現で、相対するもののなかであることをしめすにとどまっているのは、中国古代における論理の貧困さを示す」と述べている。

中庸の本質は、舜の政治についての「その両端を執りその中を民に用ふ」の記事に見られる。「舜がよく世俗の言をも聴き容れあちらの言い分もこちらの言い分も、善も悪もともどもに受け容れ、極端に走らぬなかほどを民の政治に用いたというのであるが、かかる考え方には、もろもろの極端を一つに集中しようとする心の働きの見られる。両端を予想した過不及のない中には実はそうした包容性のあることが知られるであろう。「執其両端」の執は確かに手にとり持つことで、決して一概に否定して除き去ることではなく、・・・そこで

この様な両端を兼ねそなえた状態はむしろ両者を包む立場であり、それは構造性をもつもので、単なる直線状のなかほどというようなものでないことが考えられる。」と、中庸の本質は、両端を包み込む肯定的立場であると述べている。

「更に又このような包容的な「中」は、もとより固定した数学的な「中」、例えば二と十との中間としての六というような絶対的なものでないことは自ら明らかで、融通性のある相対的なものであることは当然であろう。「孟子」のなかには、そうした意味を最も明らかに物語る文章がある。即ち孟子は子莫の学問を批評して、その立場が当時の頭学である楊朱と墨翟との中間を得ていることはほぼ当たっていると云えるが、そこには「権」がないから一極にとらわれているのと同じで、其のみちを傷うものであり、唯一事を挙用して百事を廢する事になると言っている(尽心上)。この「権」とはかりの錐(ふんどう)で、それが物の重さにつれて左右するから、融通性の概念を示すものとして用いられており、両極端の「中」を選んでも、それに融通性がなくて一点に拘わった「中」であれば、集中統一の意を全うし得ず、従って真の正しい立場ではないと言っているのである。孟子自身の思想的立場が「権」を含む「中」にあつたことは勿論であろう。・・・「中」の持つこうした本質、即ち融通性を含む包容的な意味に注目すると、先に見たような「中」の論理的表現、右でもなく左でもないという否定的なそれは、実はそのまま、右でも左でもあるという肯定的な表現に、通ずるものであることが考えられる。」と述べている。

金谷氏の主張の意義は、武内氏の引用した孟子の「権」の意味の解釈を批判して、中庸の中は、武内氏の主張するような絶対的な中でなく、融通性のある相対的な中ほどの意味であると言う。そして中とは、「右でもなければ左でもない」否定的意味のみではなく、「右でもあれば左でもある」肯定的意味をも

て考えると、堯・舜の道は結局は「中」の一字に記するものごとくである。……独り堯・舜の教えが「中」の一字であるだけでなく周公制礼の標準もまた「中」の一字にあったらしい。……そうしてその中に「知者は過ぎ、愚者は及ばざるなり」等の語によつて、孔子のいわゆる中も両端の中央の意味で、舜が両端を執つてその中を用いたといわれる中と同じ意義であることが判る。ただ孔子は中の下に庸の字を添えているが、下文の「庸徳をこれ行ない、庸言をこれ謹む」の句から推察すると、庸は庸常の義で、「夫婦の愚も与り知るべく夫婦の不肖も行なひ得る」ところの中であることを示すのであろう。従つて中庸とは日常行なわれる中の道をいうものであつて、堯・舜以来伝統の中とさしてかあるものではない。」(一)と述べている。中庸の中は、両端の中央であり、庸は添え字であり、庸常の義で、平凡の意味として、中庸とは、中と同義であり、「日常行なわれる中の道」の意味と規定している。

また武内氏は、「中」は忠の仮借で、後の「誠」にあたることとなろう。従つて中庸における「中」は両端の中であつたが、中庸説の「中」は忠の仮借で誠の意に転じている。申すまでもなく両端の中を執るということは極めて常識的な判断の標準であるが、はなはだ曖昧なものである。そこで孟子は「中を執つて権なきときは、猶ほ一を執るが如き也」といつて、真に中を得るためには軽重をはかる権（はかり）がなくてはならぬことを説いている。そうしてこの「中」を執るための権（はかり）となるものがすなわち「誠」である」(二)と述べる。両端の中は曖昧であるので、明確な真正の中を得るために権Ⅱ秤が必要となる、そしてこの権とは、「誠」であると言う。

この論理に従うと、真の中央を執るには、常に権Ⅱ秤が必要となることになるであらう。確かに第一義的には、権は権衡の意味であり、権Ⅱ分銅であり、

軽重を正確に計測するための器具であるから、武内氏の指摘が正しい。

しかしここで孟子の言う「権」のある中とは、「子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也」と述べるように、子莫は秤がなくても中を執っている事を孟子は肯定するが、それは無權である為に、一つの固定的な真ん中の立場に固執した一極端思想であり、執中無權Ⅱ執一は、儒家の中庸ではないと言うのである。つまり両極端思想を一〇〇%生かして楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義の真ん中を得るためには、有權Ⅱ臨機応変性が必要であると批判して、どの様にして固定的でない真ん中を執るかの方法論として、権の必要性が提起されているのである。また小林勝人氏も、権について、「六一権の注釈」「権はハカリのおもひ。称鐘（分銅）。動詞にしてハカル。ハカリにかけて物の軽重を知る。ここは臨機応変に処置すること。」(三)と説明している。

だから武内氏の指摘する様な、両端の中は甚だ曖昧なために、権Ⅱ軽重を量る秤が必要となつたのではない。武内氏は、孟子の真意を誤解している。従つて中を執るための物理的な秤Ⅱ「権」は、人間の倫理性である「誠」の意味に通じると言う武内氏の主張は、論理が飛躍しており、資料的根拠もないから成立しない。孟子が言いたいのは、本当の中を執るには、有權Ⅱ両極端の権衡Ⅱ臨機応変に両極端の釣合いを執る事が大事なのだと言う事である。

以上に述べた武内氏の主張で大切な問題点は、以下の点である。

- ①中庸の基本概念を提起して、中は両端の中間で、庸とは庸常の義で、平凡の意味の添え字であり、中庸は日常行なわれる中の道を言うが、中は曖昧な概念であり、真の中を得るためには権Ⅱ分銅が必要であると規定したことである。
- ②『中庸』巻頭に言う喜怒哀楽の未発の中は、両端の中央の意味で、和とは両極端が調和している状態である(四)。だから武内氏の主張する様に中Ⅱ忠Ⅱ

中庸の定義と其の政治思想的意義

―対の思想から考察した中庸思想研究の現段階(二)―

中庸の定義については、中国の宋学者は、中是不偏不倚・過不及なき名と規定して、庸には恒常と平常の両論があった。日本の中国哲学研究者は、中は曖昧な両端の中間とするのが一般的で、庸とは恒常と平凡の両論があり、未だ結論が出ていない状況である。中庸の語句を詳細に検討すると、中は厳密な真ん中で、庸は平凡の意味の添え字である。中庸は、「曖昧な中ほどを日常・恒常に実行するモラル」ではなく、「両極端に少しも偏らず厳格な真ん中を日常普段に平凡に実行するモラル」である。この様な厳格な真ん中という中庸の定義の思想的背景には、博愛主義Ⅱ義Ⅱ公権力と個人・家族主義Ⅱ仁Ⅱ私権力の両極端を、どちらも少しも犠牲にせず、対等平等に二重権力構造論を持つて維持して行こうとする中国社会に特有な対の思想の意識が働いていたのである。

キーワード：中庸 中庸 定義 博愛主義 家族主義 対の思想

はじめに

中庸に関する語句は、『論語』には、「中庸」の語句が一か所見えるだけであり、その他は「中」・「中道」・「中行」・「執中」の語句が散見する。『孟子』には、「中庸」の語句が無くて、それに近い「中」・「不中」・「執中」・「中道」の語句が散見する。『中庸』には、「中」・「中和」・「中庸」・「時中」・「中立」・「庸

徳」・「庸言」等の語句が散見する。

中庸思想を考察するに当たり、『論語』・『孟子』・『中庸』に現れた中庸思想に関する「中庸」・「中」・「中行」・「執中」・「中立」・「中道」等の語句や、中庸の内容を表していると思える文章を、同一の内容を示すものか否かを検討しなければ、今後の中庸思想研究に対して、これら「經書」を基本的資料として活用できないことになるであろう。従来の中庸研究者においては、ほぼ中庸と同一に使用されているとの研究史傾向があるが、中には見解の相違や異論も存在して、見解の一致を見ていない状況である。そこで今一度、従来の研究者の中庸の語句規定の研究史を検討して、中庸の語句を厳密に定義してみたい。

そして中庸の語句の厳密な定義が意味している所の歴史的背景としての政治思想的意義や国家権力構造論について、卑見を述べてみたい。

一 武内・金谷・熊谷氏の学説検討

先ず中庸の語句の意味の定義について、日本の中庸思想の研究者がどのように先人の研究成果を吸収しながら、自己の研究を進歩発展させてきたのか、その経緯や軌跡を探求してみたい。近代日本の中国哲学の先駆者である武内義雄氏は、中庸の語句の規定について、

「論語堯曰篇に、……といい、中庸もまた……といっているのを合わせ

小倉正昭

(Original Article)

Rise of Questions of Study of the Doctrine of the Mean

—The present stage and problems of the history of study of the “Doctrine of the Mean” (Introduction)—

Masaaki OGURA*

A considerable accumulation of reports exists in Japan on studies the Doctrine of the Mean. Nevertheless, most describe evidential research efforts. A number of separate papers have also been published, but their contents cover a wide range. Moreover, the studies have not developed in an expanding manner. In addition, the root problem of how the Doctrine of the Mean should be treated as a subject matter is obscure. The study of the Doctrine of the Mean must be dealt with, not from a perspective of social morals in everyday life of Chinese people as a whole, but from a perspective of political history issues as a basic core thought in Chinese politics. For that reason, this paper describes an attempt to organize the history of study of the Doctrine of the Mean in today's Japan, which leaves many questions and which raises the following questions, introducing the thought of *Dui*, which is a traditional, basic mode of thinking of Chinese people: (1) definitions of the mean and their significance for political thought; (2) current conditions and challenges of study of the Doctrine of the Mean; and (3) current conditions and challenges of study of the structural theory of the Doctrine of the Mean.

Key words: history of the Doctrine of the Mean, organization of history of theories, thought of *Dui*, political thought, structural theory

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

拙稿「対の思想と中庸思想―対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（四）―」（鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一一年 参照）。

拙稿「対の思想と中庸思想の歴史的展開―対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（五）―」（鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一一年 参照）。

拙稿「対の思想の政治思想的意義―対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（終章）―」（鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一一年 参照）。

拙稿「対の思想と孟子の理想国家論―対の思想から見た儒家思想の国家権力構造について」（鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一一年 参照）。

（二六）拙稿「対の思想と中庸思想の歴史的展開―対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（五）―」（鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一一年 参照）

（二七）拙稿「対の思想の政治思想的意義―対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（終章）―」（鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一一年 参照）。

（二八）『大学・中庸』（赤塚忠「中庸解説」一四九頁 新釈漢文大系 第二巻 明治書院 昭和四二年初版 平成六年 三五版 参照）

（受付日二〇一三年 九月 九日）
（受理日二〇一四年 一月 九日）

―両面思考を方法論的手段として、中庸思想の構造論的内容の解明を問題にする所以である。このためには、その前提作業として、

① 中庸の語句の内容規定の問題と其の政治思想的意義

② 対の思想から検討した中庸思想研究の具体的展開の現状と課題

③ 対の思想から検討した中庸思想の内面的な構造的な理解の現状と課題

以上の三点を中心課題にして、本稿では、二節に列挙した①から③の諸研究に於いて、中庸思想研究の現段階の到達点と問題点の整理を行うことを問題の提起とする。この作業は、現在日本の中庸思想史研究の現段階における中庸思想の構造論的研究の到達点とその問題点を解明するために、どうしても解決しておく必要性が存在するからである。中庸思想史や中国政治思想史に造詣の深い諸氏の御教示や御批評を仰ぐ次第である。

(二〇一三年八月三〇日 稿了)

注

(一)『論語』(金谷治訳注 「雍也第六」 八八頁 岩波文庫 一九六三年 参照)

(二)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四四頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(三)『大学・中庸』(金谷治訳注 『中庸』解説 岩波文庫 一九九八年 参照)

(四)拙稿「対の思想と中庸思想の歴史的展開―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(五)―」(鈴鹿工業高等学校紀要第四五巻 二〇一一年 参照)

(五)『論語』(金谷治訳注 二七二頁 岩波文庫 一九六三年 参照)

(六)『中国思想を考える』(金谷治訳注 一四四頁 中公新書 一九九三年

参照)

(七)『大学・中庸』(金谷治訳注 一四九頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(八)『孟子下』(小林勝人訳注 三五三頁 岩波文庫 一九六八年 参照)

(九)『大学・中庸』(金谷治訳注 一八五頁―一八七頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(一〇)『論語』(金谷治訳注 一三三頁 岩波文庫 一九六三年 参照)

(一一)『論語』(金谷治訳注 四三頁 岩波文庫 一九六三年 参照)

(一二)『大学・中庸』(金谷治訳注 二二八頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(一三)『大学・中庸』(金谷治訳注 二二三頁―二二四頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(一四)『大学・中庸』(金谷治訳注 二五〇頁―二五七頁 岩波文庫 一九九八年 参照)

(一五)拙稿「対の思想」研究史の現状と課題―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(序章)―」(鈴鹿工業高等学校紀要第四四巻 二〇一〇年 参照)

拙稿「対の思想と現実の尊重―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(一)―」(鈴鹿工業高等学校紀要 第四四巻 二〇一〇年 参照)

拙稿「対の思想と状況の変化―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(二)―」(鈴鹿工業高等学校紀要 第四四巻 二〇一〇年 参照) 拙稿「対の思想と広大な国土(多様な民族性)―対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(三)―」(鈴鹿工業高等学校紀要 第四四巻 二〇一〇年 参照)。

は両極が前提となつて存在する。つまり対の思想と中庸思想とは、不即不離な相互規定性の関係にある思想であるからである。従つて対の思想—両面思考を導入した中庸思想の研究がどの程度に進展しているのか、この点に注目して中庸思想の研究史の整理することは、中庸思想の研究史の整理方法には、必要不可欠な分析視角であるからである。

最後には、中庸思想の構造論研究が、現代日本の中庸思想研究において、どの程度に発展しているのかという問題である。中庸思想は、中国思想の精髓といわれており、中国古代の孔子や孟子を初めとする知識人においては必須の教養であつた。とりわけ宋代以後の『中庸』は、『論語』『孟子』『大学』と共に、『四書』の一つである。「四書」・「五経」は、科挙試験に出題される必須科目であり、政治実践に携わる宋代の知識人は、是非ともその内容に精通しなければならぬ中核思想であつた。

しかしながらこの様な重要な点については、従来の日本の『中庸』研究者にける指摘は、皆無の状態であり、今後の研究に於いては、この問題を解明する必要性が必然的に生じてくる。そしてその手始めとして、『中庸』の構造論研究が、絶対に必要になるであろう。思想の構造的な理解なくしては、『中庸』を本当に消化して理解したことにはならず、『中庸』を実際の政治実践に活用することは、不可能であつたであろう。

赤塚氏も述べる様に(一八)、漢唐の訓詁学者や近代日本の中国哲学研究者において重要な問題になつている中庸の成立年代や作者の特定や文章構成の特徴等の考証学的問題は、政治家である前近代の中国知識人・士大夫にはさほど重要な問題ではなかつた筈である。それよりも前近代の中国知識人にとって重要なのは、中庸思想の構造的な理解である。中庸思想の構造的な理解ができて

いなければ、中庸思想を現実政治に役立つ政治思想として生かせなかつた筈である。中国知識人にとっては学問をする事は、実際の現実政治に応用して実践することであつた。中国前近代の知識人にとっては、『中庸』の訓詁学的な意味内容の正確な理解よりも、『中庸』の文章の要点を正確に理解して、『四書』・「五経」に縦横無尽に展開されている中庸思想の構造的な理解に精通しなければならなかつた筈である。中庸思想についての具体的な構造的イメージができていなければ、中国思想の精髓といわれている中庸思想を現実の実務政治に応用できなかつたのであり、政治家として大成する事も不可能であつた。

従つて中国政治史や政治思想史の解明のためには、前近代の中国知識人たちが必ずや体得して実践したであろう、中庸思想の内面的な構成原理や構造論についての前近代中国知識人の理解方法を是非とも解明しなければ、個別具体的な中国政治史や中国政治思想史研究の進歩発展は期待できない、と言っても過言ではないのである。

結語

以上に述べてきた様に中庸思想は、中国哲学上の根本問題とか、日常性格の徳目であるという単純な倫理的範疇に止まらない、もつと現実的な問題を解決する前近代の中国政治の基本理念であつた。中庸思想が現実の政治思想問題として尊重された理由は、中国の政治理想があらゆる階層の人々の欲望を秩序内に調和させて満足させることに目的が存在したからである。それ故に中国政治の前近代の中国知識人が、どの様に中庸思想を理解して政治実践を行なつたのかを明らかにするために、中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想

の肯定と否定という、対の思想の二つの機能について、両者を明確に分類・区別しないで、曖昧にしたまま論旨を展開してきた。その理由は、拙稿では対の思想の生まれてきた歴史的背景についての諸要因を説明する事に主目的が存在したためである。特に相い矛盾・対立する二つの対立する機能を明確に区別して、論理展開をしなければならぬ中庸思想については、説明不足であったことを自覚している。それ故に「この対の思想の機能論の展開の不備については、今後中庸思想の構造論研究を本格的に展開する場合の課題としたい。」（一七）と、今後の中庸思想の研究については、対の思想より中庸思想の分析を行ないたいとの旨の展望を述べておいた。

本稿の最初に紹介したように、近代の中庸思想の研究史は膨大であり、またその主張や指摘も多岐にわたっている。それ故に多方面にわたる論旨を展開している中庸思想の研究史の場合には、どの様にして問題点を整理すればよいのかという、研究史の整理の方法論については、様々な角度からの整理の仕方が存在すると思われるが、一定の方向性を示すことが必要である。

そこで本稿では、近代日本の考証学研究を中心にして多岐にわたる方向性を持つ中庸思想の研究史の整理や問題点を説明するに對しては、中国宋代の政治史や政治思想史を専攻して、中庸思想の構造論に興味のある筆者としては、以下の三点に焦点を絞り研究史を要約して、その問題点を提起したい。

先ず中庸思想の構造論研究の予備的作業として、中庸とはどのような意味や内容なのか。中庸の語句の定義と其の政治思想的意義の問題である。

研究の出発点であるべき中庸の語句の意味・内容が明確にならない限り、中庸と明確に述べた資料のみだけが研究に使用できるのか、中や中行や中道という中庸とほぼ同意味の言葉の資料表現も中庸思想の研究に利用することがで

きるのか、或いは中庸という言葉が明確に存在しない場合でも中庸を意味する内容を述べた資料をも研究に利用してもよいのか等が判然として来ない。

またこの語句規定が明確にならない限り、『中庸』『論語』『孟子』等の古代思想の資料をどの様に取り扱えばよいのか、資料引用の方法論も明確にならない。更に言えば中庸思想の政治思想史レベルでの研究の発展も期待できず、中庸思想の政治思想的意義も曖昧に陥る危険性があるからである。

この中庸の語句的意味の規定の問題については、既に拙稿「対の思想と中庸思想―対の思想（両面思考）の生まれて来た歴史的背景について（四）―」（一四）において、その概要を述べたが、本稿では更にこの問題について、日本人の中庸思想の研究論文を管見の限りできるだけ多く紹介して、対の思想を導入して、中庸の語句の定義と其の言葉の持つ中国独自の政治思想的意味の問題について、その問題点の考察を行ないたい。言葉の意味や内容には、其れなりの歴史的必然性としての思想的背景が存在する筈だからである。

次に中庸思想の構造論研究の方法論的な作業として、中国人の基本的で伝統的な思想である対の思想―両面思考を導入して、近代日本における中庸思想の研究史の整理を行ない、中庸思想研究の現段階の到達点と未解決の問題点を提起して、中庸思想の構造論の解明への問題点の提起を行いたい。

何故ならば対の思想―両面思考こそは、中国人の思考方法の最も伝統的で基本的な思想方法である以上、対の思想が中庸思想の内容にも生きて存在していなければならないはずであり、中国思想の精髓―とりわけ儒教思想の最高の徳目といわれる中庸思想の問題点の整理について分析する場合、最も重要な分析視角だと確信するからである。また両極端への両面思考が存在して初めて両極の真ん中の概念が存在するのであり、他方、真ん中という概念には、その背後に

中国人の古来よりの伝統的で基本的な思考様式は、対の思想―両面思考であったとすれば、この思考様式は、当然に中国思想の精髓と言われている中庸思想にも貫徹しているはずである。この問題について歴史的考察については、既に拙稿を発表したのであるが、それは、対の思想の生まれてきた歴史的背景が中心課題であったために、対の思想を応用しての中庸思想独自の構造論的分析にまでは、深く立ち入り説明することができなかった。それ故にこの問題は、今後に説明すべき研究課題として残ってしまったのである。

中庸思想は、此れまでの多くの中国哲学者が指摘している様に最高の倫理道徳問題であったのであるが、この指摘に止まらず、中庸思想は、『論語』堯曰篇に「堯がいった、「ああ、なんじ舜よ。天のめぐる運命はなんじが身にあり。」「なんじ帝位につくべき時ぞ。」まことにほどよき中ほどを守れ。四海は苦しめ理。天の恵みの永久につづかんことを。」舜もまたその言葉を「帝位を譲る時に」禹につげた。」とあった様に、堯が舜に舜が禹に伝えた、三代聖王相伝という中国古代からの最高の政治原則上の徳目問題であったのである。

それ故に中国前近代の知識人政治家は、中庸思想を最高の政治徳目として実践してきたのである。従って前近代の中国知識人は、「四書」・「五経」の学習を通じて、それ故に中庸思想の構造論的内容についての理解を体得していたと思われる。そうでなければ、「論語読みの論語知らず」になり、中庸思想を最高の政治徳目として、現実の中国人世界において政治実践できないからである。従って本稿は、既にならした拙稿の「対の思想の研究」の諸研究の成果を踏まえて、中国人思想の伝統的で基本的発想である対の思想―両面思考を導入することにより、未だ説明されていない中国政治思想の精髓であるとされている中庸思想の構造論的特質について説明したく思い、斯界に問題の提起を試みた

次第である。

四 中庸思想の構造分析の三課題

筆者は既に、前掲の拙稿「対の思想と中庸思想―対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（四）―」において、「中庸は、「不偏不倚で過不及のない状態」という意味であり、常識の尊重、調和を重視する思想であり、中国思想の精髓である。中国人は、極端な理論を嫌い、バランスを尊重する民族である。この中国人の思想的バックボーンである中庸を実現して維持していくために、両極端を視野に入れた両面思考―「対の思想」が必要条件として生まれてきた。従って「対の思想」の生まれてきた歴史的背景の最大の要因は、中国思想の精髓であり、儒教の最高徳目である中庸思想の実現と維持する必要性のためである。」（一六）と、「中庸」の語句の規定を行ない、対の思想が生まれてきた歴史的背景には、その大前提に中庸思想が存在する旨の論考を発表して、中庸思想の構造論の歴史的・具体的な事例に論及した。

しかしこの論考では、対の思想の生まれてきた歴史的背景についての考察が主目的であったために、近代日本の中国思想史研究において、多くの研究蓄積のある「中庸思想」研究史の内容を整理する事や、これらの研究史の成果と問題点については、それ自身独自に考察するべき性格のものであるにも関わらず、多くの中庸思想の研究史の個別的な整理は、不完全のままに終わっている。

また前掲・注（一五）の拙稿の「対の思想の政治思想的意義―対の思想の生まれてきた歴史的背景について（終章）―」の結語では、「対の思想の生まれてきた歴史的背景に関する拙稿の各論では、対の思想の自己矛盾する両極端へ

ら」危険なものであり、道の心は「純粹精妙であるから」微妙なものである。精密に考え純一につとめて、まことにその中をしつかり守れ」というのが、舜から禹に天下を授けたときに伝えられたことばである。堯の「その中を守れ」という一言は、もうそれだけで十分なものである。それなのに舜がまたそこに三句を加えて語り伝えたのは、必ずその三句のことばのように解釈してこそ、あの堯の一言の正しい実現が期待できるということを、明らかにするためであった。……そもそも堯と舜と禹とは天下の大聖人である。しかも天下統治の大権を伝えるというのは天下の重大事である。天下の大聖人でいて天下の重大事を行なったのに、その大権の受け渡しに際してねんごろに告げ戒めたことが上述の四句のことばだけであつたというのは、天下の道理としてこれ以上のものはないということであろう。それから後、聖人たちはたがい「この四句のことばを」受けついできた。殷の湯王や周の文王・武王がりっぱな君主となり、舜の時の皐陶や殷の伊尹・傅説、周の周公・召公がりっぱな臣下となつたのは、いずれもすでにこのことばに従つてあの道の伝統の継承に参加したものである（サイドラインは筆者付記）。わが孔子先生のばあいには、聖人として当然つくべき「天子や宰相」位は得られなかったとはいえ、過去の聖人を受けついで未来の学徒を啓発するという点では、その功績はかえつて堯や舜より勝るものがあつた。けれどもその当時にあつて、孔子に親しく接してその思想を理解したものとしては、ただ顔氏（顔回）と曾氏（曾参）の継承だけがその正統を把握したのである。曾氏からさらに伝えられて、また孔子の孫の子思があらわれるころになると、聖人の時代からも遠く隔たつて、聖人の道でない異端の説が勃興することになった。子思は、聖人の時代から時がたつにつれてますますその道の真実が失われてゆくことを恐れた。そこで、堯・舜の時

代から伝承されてきた道の真意を推しはかり、ふだん教えられていた父の孔鯉や師の曾参のことばによつてそれを検討し、その両面からたがいにひきのべていって、この『中庸』の書を著わし、後世の学徒に示したのである。……子思からあと、またさらに伝えられて孟子の出現となつた。孟子はこの『中庸』の書物を深く究明して、古い聖人たちの伝統を継承したのであるが、彼が死没すると、ついにその伝承は絶えてしまった。……（一四）。

つまり朱子は、天下の重大事は天下の大権を継承する政治問題であり、中庸は、古代の聖人から子思の時代に至るまでの最高の政治徳目であり、それ故に為政者が守るべき最高の徳目であつたと言うのである。つまり孔子が中庸を絶賛した理由は、三代聖王相伝以来の中国政治史上での最高規範の徳目であつた故なのである。従つて中庸思想は、中国政治思想上の問題として扱う事が最重要課題なのである。しかしながらこの様な政治徳目として中庸思想を研究する姿勢が、従来の中庸思想研究史では欠如していたのである。

それ故に中庸思想の構造的性質とは、一体、どの様なものであつたのだろうか、前近代の中国歴代の知識人は、一体、どの様に、中庸思想を体得して実践してきたのか、といった根本的問題に一步足を踏み入れると、現在日本の中国思想研究においては、未だ明確な研究書が上梓されていず、甚だ曖昧模糊としているのである。

ところで中国政治思想史に長らく関心を持つて来た筆者が、金谷治氏等により「対の思想」―両面思考が、中国思想の伝統的で基本的な思想であるとの指摘に触発を受けて、これまで中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想―両面思考が生まれて来た歴史的背景について研究して、「対の思想」の歴史的な具体的展開について、幾つかの拙論を上梓して来た（一五）。

もわたしは話すことができるが、「その子孫である」宋の国でも証拠がたりない。古記録も賢人（「文献不足故也」―筆者注）も十分でないからである。もし十分ならわたしもそれを証拠にできるのだが。」（一一）とある。孔子は、夏の礼や殷の礼は文献が不足していて、証拠にできないと言う。古記録が不足して証拠にできればどのような結果になるのだろうか。『中庸』には、

「先生はいわれている。「わたしは夏の礼について話をするが、〔その後裔である〕杞の国では〔今の世に明らかな〕実際の証拠がたりない。わたしは殷の礼を学んでいるが、〔その後裔である〕宋の国にはいくらかの伝承がある。わたしはさらに夏の礼も学んでいるが、これは現在ひろく行なわれている。わたしは周に従うことにしよう」と。〔先生自身が天子の位につかなかったので、礼樂の改正はしないで今の礼に従われたわけである。〕天下の王者として〔徳と位と時という〕三つの重要なことを備えておれば、過ちをおかすことはほとんどなくなるであろう。古い時代の礼は、たとい〔徳が備わって〕りっぱであっても〔今の世にふさわしい〕実際の証拠がなく、実際の証拠がなければ信用がなく、信用がないと民衆は従おうとはしない。〔また反対に、時に応じた〕新しい礼は、たとい〔徳が備わって〕りっぱであっても〔孔子の場合のように位の〕尊厳がなく、信用がないと民衆は従おうとはしない。」（一二）とある。

夏や殷の古い時代の礼は、実際の証拠がなく信用されていないので、民衆は従おうとしないと言うのである。孔子は、夏の礼制度は整備されていて、現在広く実施されていると言うが、しかし夏の衰退した孔子の時代には、民衆には信用されないで実行されていなかったであろう。だから『中庸』には、

「偉大なことよ、聖人の道は、ひろびろとして満ちあふれて万物を發育させ、高々と天の極みにまで及んでいる。豊かに満ち足りて偉大なことよ。〔この人

間世界、〕礼の大綱は三百、その作法の細目は三千と整備されているが、すべて然るべき人物―聖人―がいてこそ、はじめて道は実現される。だから、「もし最高の徳を備えた人物がいなければ最高の道は完成しない」と言われるのである。」（一三）とあり、周代の礼儀は三百、威儀は三千と整備していたのであるが、偉大な聖人が出現してこそ、礼制度が完全に実行される物であると言うのである。偉大な聖人のいない春秋時代の孔子の生きた時代には、夏の礼制度は庶民階級には実施されていなかったということである。

中庸思想が、儒家の創始者の孔子に絶賛されて、中国における政治思想の最高の徳目とされたのは、どちらにも偏らないで両極端の考え方を生かした故に、また階級社会における全ての階層の人々の欲望を和し調和をもつて和合・満足させる故の政治徳目であったためである。前近代の中国の伝統的な政治理念が、現実に存在するあらゆる階層の人々の欲望を生かして満足させることを目標にしていたとすれば、中庸思想こそが、その理念に合致する唯一の政治思想といえるのである。士・庶の社会生活上のモラルである中庸の徳は、政治において強制されていたが故に、政治が弛緩して王朝が衰微すれば、それに応じて中庸思想も信用されないで衰微して行く性質のものであったのである。

ところで中庸思想は政治思想の最高徳目である、というこの問題について、南宋の朱子は『中庸章句序』において、以下の様に述べている。

「思うに、上古のすぐれた聖人たちが〔天子の位について〕天の道を受けつぎ、人の守るべき法則を樹立してからこのかた、道の伝統の継承にははつきりとした淵源があった。その經典にみえるものでは、『論語』堯曰篇の「『まことにその中をしつかり守れ』というのが、堯から舜に天下を授けたときに伝えられたことばであり、『書経』大禹謨篇の」〔人の心は〔欲がまじっているか

○%活かして、その真ん中を執れ、それが儒教の中庸なのだ。そうしないとあらゆる物の長所を放棄する事になる、と批判している。

個人主義と博愛主義は、全く逆方向の思想であるが、この両端の思想を満足させることが聖人の道だと言っているのである。全ても方向性を持つ人々を満足させるのが中庸政治なのである。

③『中庸』には、礼の生じた起源は、家族秩序と社会秩序の安定のために設定された制度であると述べている。魯の哀公に政治を問われた孔子は、仁・義・礼について、以下の様に述べている。

読み下し文―「哀公、政を問う。子曰わく、……仁とは人なり、親を親しむを大と為す。義とは宜なり、賢を尊ぶを大と為す。親を親しむの殺（差）、賢を尊ぶの等は、礼の生ずる所なり。故に君子は身を脩めざるべからず。身を脩めんと思わば、以て親に事えざるべからず。親に事えんと思わば、以て人を知らざるべからず。人を知らんと思わば、以て天を知らざるべからず。」

日本語訳―「魯の哀公が政治について質問された。先生はこう答えられた。……

「では、仁とは何か。それは仁・義・礼の三つに分けて説くことができる。」

仁とは人で「あつて、人と人が親しみあうこと」である。親しい肉親を親愛することが最も大切である。義とは宜で「あつて、ものごとに応じた適宜のあり方を得させること」である。「肉親の情をこえて」賢人を賢人として尊重することが最も大切である。肉親を親愛することにも「親疎による」差別があり、賢人を尊重することにも「才能による」区別があつて、そうした区別こそ礼の起こる根拠である。「つまりは、礼とは仁と義とを節度つけて飾るものである。」従つて、「政治の中心となる」君子はわが身を正しく修めなければならないが、わが身を正しく修めたいと思えば、親によくお仕えし「て肉親を親愛し」なけ

ればならないし、親によくお仕えしたいと思えば、人のことをよくわきまえて「て賢人を尊重し」なければならない。そして、人のことがよくわかりたいと思えば、窮極の天を知らなければならない。」（九）。

肉親の親愛を中心とした家族秩序Ⅱ仁と賢人を尊重する社会的秩序Ⅱ義の両者を整理統合した礼Ⅱ中庸の制度化物は、人間界の上下秩序の安定にあつたとすれば、この礼制度の問題は、政治実践の徳目に直結するモラルなのである。

④『論語』には、礼の作用は、和Ⅱ和合Ⅱ調和であると述べている。

「有子が曰わく、礼の用は和を貴しとなす。先王の道も斯れを美と為す。小大これに由るも行なわれざる所あり。和を知りて和すれども礼を以てこれを節せざれば、亦た行なわるべからず。」（一〇）。

有子によれば、先王の政治姿勢も、この礼による人々の和合Ⅱ調和に目標があつたと言う。しかし単純に和合するだけでは不可で、人々の調和が上手に行かず、人々の和合には、礼制度という階層区分による秩序ある調和が重要であると言うのである。従つて礼による政治実践とは、家族制度の上下親疎の秩序と社会制度の賢愚の上下秩序を、国家権力が統制する所に、儒教政治の主眼があるのである。

⑤従つて政治が弛緩して王朝が衰微あるいは滅亡すれば、人民の社会生活における中庸思想もすぐさま弛緩・衰微して行くのである。孔子が「中庸思想が、最高のモラルなのに、庶民に実行されなくなつて久しい」と嘆いていたのは、この理由からであろう。孔子の生きた春秋戦国時代は、既に周王朝が衰微して諸侯国は独立状態になつていたのである。

『論語』八佾篇には、「先生がいわれた、「夏の礼についてわたしは話すことができるが、「その子孫である」杞の国では証拠がたりない。殷の礼について

「堯がいった、「ああ、なんじ舜よ。天のめぐる運命はなんじが身にあり。〔なんじ帝位につくべき時ぞ。〕まことにほどよき中ほどを守れ〔允執其中〕―筆者注〕。四海は苦しめり。天の恵みの永久につづかんことを。」舜もまたそのことばを〔帝位を譲る時に〕禹につげた。」(五)。

中庸思想を政治姿勢の中核とするのは、四海の困窮を救い、天の恵みが永久に続く上での重要な政治徳目と言うのである。つまり孔子が創始した儒教は、中国人共通の伝承的な先王が政治徳目の眼目とした中庸の徳目を継承したものであったのである。従って中庸思想は、儒家の中核的政治思想と言うよりも、中国人が共有する政治的財産と言った方が妥当なのである。

そしてこの文章は、『中庸』において、「中は天下の大本、和は天下の達道」として、「中和は、天地の運行や万物の繁栄をも規定する」という、天人相関説と同様な論理展開をしている。人間世界の中庸政治が、天地・万物の行方も規定する程、それ程、重要な政治徳目であつたと言いたいのである。これと同じような記事が『詩経』にも見えていて、

「剛ならず柔ならず、政を敷いて優優たれば、百禄是に適(あつ)まる」(商頌・長発篇)

とある。優優とは調和の意味であるとのことであるから(六)、剛強でもない軟弱でもない中庸政治は、諸々の福祿をもたらすというのである。

②それでは中庸政治に心がけた堯・舜・禹は、何故に大聖人であつたのであろうか。『中庸』には、「先生はいわれた、「舜はいかにも大知者だね。舜は〔ただのもの知りではなく〕好んで人にものをたずね、そのうえ身のまわりのつまらないことまでよくよく吟味して、その悪いところは抑えて善いところをあらわしひろめ、ものごとの両極端をとらえて、その中ほどを人民のあいだに適用

した(執其両端、用其中於民―筆者注)。まあ、こういう〔大知としての〕すばらしさによって舜(充実)とよばれたのであろう。」(七)とある。

それは、両極端のどちらにも偏らないで、真ん中を執る中庸思想を政治方針として実践した故に、全く逆方向の欲望を持つ全ての人民の諸欲望を満足させることのできる為政者の為であつた。それが、儒教が言う大知者なのである。

この舜の「執其両端。用其中於民」の中庸政治と同じ様な議論を孟子は述べている。孟子は、魯の賢人・子莫の「執中無權」の政治批判で、儒家の中庸政治の長所の理由を、以下の様に明確・詳細に述べていた。

「孟子がいわれた。「楊朱は〔極端な個人主義者であるから〕、万事自分本位にしか考えない。だから、たとえわずか髪の毛一本抜くぐらいのことで大いに天下の為になるとしても、決してそれをしない。ところが、墨翟は〔これと反対で、無差別の博愛主義者であるから〕、たとえ頭の天辺から足の踵まですりへらしても、天下の為とあればそれをするのである。魯の賢人子莫は子の中ほどを執る中道主義である。この中道主義は聖人の道である中庸にまず近いといえるが、しかしあくまでも中道ということだけにとらわれてしまつて、臨機応変の処置がなかったなら、これまた楊朱や墨翟のようにただ一つの立場だけを固執して、他を忘れてしまうのと全く同じだ(子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也)―筆者注)。わしがただ一つの立場だけを固執して融通のきかないのをにくみきらうのは、正しい中庸の道をそこねるからだ。それではただ一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所(百事―筆者注)を捨ててしまうことになるからだ。」(八)。

孟子は、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義の長所を肯定して、一極点の執中に拘らずに、臨機応変に墨子の博愛主義と楊子の個人主義の長所を完全に一〇

えるけれども、少なくとも古代においては東西を問わず、一体であったから、儒教のあらゆる文献にそのことは論ぜられている。その中でも、最も要領よく倫理と政治を概論したものが『大学』と『中庸』であるが、『大学』は政治に重点があり、『中庸』は倫理に主眼を置いている。」と言う。

武内義雄氏は、「後漢の鄭玄は孔子の孫の子思が先聖の徳を照明せんがために作った文章だといひ、宋の朱子はこれを抽出し単行本となした。この書は孔子の孫の子思が道学の伝を失わんことを憂えて、堯・舜以来伝統の中を説いたもので、儒教の經典中でも特に重要な意義をもつものだ」と称し、全編を三十二章に分けて詳細な注を加えている。」の説明している。

島田虔次氏は、「中」は中国哲学ではきわめて重要な根本概念で、堯↓舜↓禹のかの一句・四句よりはじまり、『中庸』『孟子』以来、これに対する議論は綿々として続けられてきた。」と言う。

宮崎市定氏は、「それなら儒教の中心思想はなにか、といえは私は、それは中庸の学説だ、と答えたい。」と述べる。

浅野裕一氏は、『中庸』全体の編述意図が、受命なき聖人たる孔子を、無冠の王者だと主張する点にあった」とか、『中庸』の性格は、孔子を素王に上昇させんとした古代儒学の展開に位置せしめてこそ、初めてその本質が明確になるであろう。」と、その意図を述べている。

金谷治氏は、「中庸」ということは、書名として有名であるだけではなく、一つの徳目ないしは生活態度をあらわすことばとして、今も生きている・・・『論語』のなかで、「中庸の徳たるや、それ至れるかな」と孔子に賛嘆されたのがその最初の出典で、それから儒学の伝統として長く尊重されてきた。」と述べている。

以上に研究史の概要を紹介したが、「先聖と徳を照明するため、道学の伝承」、「中国哲学上の重要な根本概念」、「儒教の中心思想」、「無冠の王者の照明」、「一つの徳目・生活態度」等の様な中庸思想の研究者の説明を聴いても、何故に中庸思想は、中国哲学上の根本思想なのか、判然としてこない。わずかに宇野氏が、儒教の根本思想は、修己と治人＝倫理と政治であるとして、中庸思想は政治倫理であり、『中庸』はその最も要領よく概論したものであると言う、唯一つの説明があるに過ぎない。従って儒教思想の中心思想と言われる「中庸」思想は、何故に中国思想の精髓であり得たのか、という問題については、これまでの日本の中庸思想研究者は、誰一人として具体的資料を提示して明確に答えていなかったのである。更には又、宇野精一氏の「政治倫理」の指摘を首肯するとしても、何故に中国の政治倫理としての根本思想になり得たのかという、一歩踏み込んだ指摘は、誰一人として指摘していないのである。

三 中庸思想—中国政治の最高徳目

中庸思想の歴史的意義について、筆者は以前に、「しかし常識や調和やバランスの精神を重視するのは、自分の地位を守り人間を支配する政治支配の世界には必須であり、中国「人は優れて政治的民族である」ということだけは確かである。」（四）と、政治思想として非常に重要な徳目であると述べたことがある。ところで中庸思想は、中国における為政者の心得として、政治姿勢上の最高徳目として存在する意義について、古代資料は以下の様に述べている。

①『論語』（堯曰第二十）において、中庸思想は、堯↓舜↓禹の三代聖王相伝の最高の政治徳目であったことが、孔子により語られている。

- ⑦金谷治「中と和」『文化』 十五巻四号 一九五〇年)
- ⑧熊谷尚夫「中庸之研究」『横浜国立大人文紀要』 第二類 語学・文学二 一九五三年)
- ⑨金谷治「中庸について―その倫理としての性格」(東北大学文学部研究年報 第四号 一九五五年)
- ⑩板野長八「中庸篇の成り立ち」『広島大学文学部紀要』二二巻二号 一九六三年)
- ⑪宮崎市定「中国思想の特質」『岩波講座 世界歴史』 第四巻 月報一三一 一九七〇年 五月 参照)
- ⑫島森哲男「『中庸』篇の構成とその思想…個のあり方をたずねて」(『集刊東洋学』第三二 一九七四年)
- ⑬木村英一「中国哲学における中庸思想」(『日本中国学界報』三一 一九七九年)
- ⑭杉山一也「孟子の『中』について」(待兼山論叢 第二二号 哲学篇 一九八八年)
- ⑮浅野裕一「受命なき聖人・『中庸』の意図」(『集刊東洋学』第六一 一九八九年)
- ⑯田中正樹「北宋に於ける中庸と皇極―契嵩と蘇軾」(『集刊東洋学』六二 一九八九年)
- ⑰金谷治『中国思想を考える』(第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年)
- ⑱土屋裕史「中庸についての一考察―『孟子』と中庸の関係から」(中央大学大学院研究年報 二六号 一九九六年)

⑲杜勤「中」のシンボリズムに関する一考察…宇宙論からのアプローチ(『大阪大学言語文化学五』 一三五―一四八 一九九六年)

⑳真儒協会会長 高根秀人年・個人ブログ【儒灯】・「美の思想―中庸」(二〇〇九年七月三十一日)

以上に列挙した⑦から⑳の論文も、総体的に要約すると、『中庸』の作者の特定、成立年代の特定、『中庸』書の構成分析、作成者の思想的意図、中庸の語句規定や内容規定、中庸思想の構造論にまで、多方面に論旨が及ぶ。各研究者の個人的な問題関心や興味により研究内容が多岐にわたり、一つの問題点が批判・継承されて、研究が発展して行くような発展論的な方向性を持っていない。

このために中庸思想の研究史の発展段階論を一本化して、中庸思想の問題点を述べるのは容易ではない。従ってこれらの研究内容を個別的に逐一紹介して批評するならば、問題点の所在が散漫となり、何が中心的な問題であるか分からなくなり、研究の焦点が混沌として、焦点が散漫になってしまう危険性がある。

しかしながらそれらの事よりも何より重要な問題は、中庸思想は、孔子により最高のモラルと絶賛されて、『中庸』の巻頭で「中は天下の大本 和は天下の達道」と言われる様に、儒教にとって中国思想の中核思想なのである。だから何故に儒家にとって中国思想の中心思想になり得たのか、という根本問題の究明や探求がなされなければならないのである。

この様な問題の提起に対して、先に引用した注釈書の解説や個別論文の中で、現在日本の中庸思想の研究者は、以下の様に述べている。

宇野精一氏は、宇野哲人全訳注の『中庸』の「学術文庫への序文」において、「その儒教の根本思想とは何か、と云えば、要するに修己と治人、今の言葉で言えば、倫理と政治である。そしてこの二つは、洋の東西を問わず、と私は考

等の経書は、中国の現実の政治を指導する根本原理であった。従って『中庸』等の経書は、中国政治史や中国政治思想史レベルの重要問題であった筈である。儒家の創始者である孔子や孔子を継承した孟子が、極めて深く政治に関与した思想家であった事から考えても、この事は納得できるであろう。しかしながらこれ等の点について近代日本の中国思想史研究者には、一体、どれ程念頭に入れて、『中庸』を研究課題としていたのであろうか。本稿はこの重要な点について、関心を持ちながら、研究史の現段階の整理をして見たい。

また中庸思想は、天下の大本、天下の達道であると言うのであるから、それだけに中国においても日本においても、古代より現在に至るまで、その内容については研究の中心対象であったのである（三）。

二 現在日本の中庸研究史の現状

現在までの所、近代日本における中庸思想に関する研究書や論文について、管見の限りにおいて、収集して検討し得た著書や論文名を以下に列挙する。

先ず『中庸』の注釈・解説書について執筆された年代別に紹介したい。

①武内義雄『武内義雄全集 第三卷 儒教篇二』（角川書店 昭和五四年 初版 第四章 子思子の文献 一 中庸の本書）

②赤塚忠『大学・中庸』（赤塚忠 新釈漢文大系 第二卷 明治書院 昭和四二年 初版 平成六年 三五版）

③島田虔次『大学・中庸』（中国古典選四 朝日新聞社 一九六七年、朝日文庫 上下 一九七八年）

④宇野哲人『中庸』（宇野哲人全訳注 講談社学術文庫 一九八三年 第一刷）、

⑤金谷治『大学・中庸』（金谷治訳注 岩波書店 一九九八年 第一刷）

⑥市来津由彦篇『江戸儒学の中庸注釈と海域世界』（市来津由彦他篇『東アジア海域叢書』第五巻 汲古書院 二〇一一年 四月刊）

以上の様に近代日本の『中庸』研究は、武内氏の研究に始まり、赤塚氏、島田氏、宇野氏、金谷氏、市来氏他の研究に至るまで、多くの研究蓄積がある。しかしこれらの著書は、『中庸』の注釈が中心課題であり、解題では『中庸』の成立年代の特定、作者の特定、『中庸』の文章内容、構成要素の研究、事実関係の特定という、考証学的研究が中心課題であり、またこのような研究姿勢が中国哲学研究の主流でもあったと言える。また最近でも市来氏編集による『中庸』研究が出版されたが、その内容を見ている限り、中国による中庸の注釈書の紹介や、日本の江戸時代の漢学者の中庸の注釈書の紹介である。

これらの諸研究は、注釈者により多少の内容の相違があるが、全て『中庸』の解説書・注釈書・解題書であり、中国伝統の訓詁学の域を出ておらず、中国思想史研究における中庸思想の特質について、中国哲学史上や中国思想史上の立場において、特筆すべき近代的な重要問題を提起する研究書ではない。

他方、ところで現在までの日本の中庸思想の研究は、『中庸』解説書の解題においては、中庸の成立年代の特定、作者の特定、中庸書の構成内容の分析等の中庸の考証学的研究が主流という状況の中にあつて、中国思想上にける中庸思想の歴史学的意義に興味を持つ浅学にとって、魅力のある中庸思想の哲学的、構造論的、歴史学的意義についての研究は、中国歴史学者の宮崎市定氏の「中国思想の特質」と、中国哲学学者の金谷治氏の「中庸」である。この二論文を含めて管見の限り収集し得た論文は、以下の論考である。執筆された年代順にその論文名を以下に列挙することにする。

中庸思想研究の問題の提起

Ⅰ「中庸思想」研究史の現段階と課題（序章）Ⅰ

現在日本の中庸思想研究の研究は、多くの研究蓄積がある。しかし多くの研究は考証学的研究であり、個別の研究論文も多く上梓されているが、その研究内容は多岐に渉り、研究が発展論的に展開されていない。中庸思想をどのような問題として取り扱えば良いのかという根本問題についても曖昧藻湖としている。中庸思想研究への研究視角は、中国人全体の日常生活における社会的モラルではなく、中国政治の基本的な中核思想として政治史問題として扱う必要がある。従って本稿では、①中庸の定義と其の政治思想的意義、②中庸思想研究の現状と課題、③中庸思想の構造論研究の現状と課題について、中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想を導入して、多くの疑問点が存在する現在日本の中庸思想研究史の整理をして問題の提起を試みたい。

キーワード：中庸思想史 学説史の整理 対の思想 政治思想 構造論

はじめにー「中庸思想」研究の視角

中国古代において中庸思想は、儒教の創始者・孔子により、「中庸の徳たるや、其れ至れるかな、民、鮮なきこと久し」（一）と絶賛されている。儒教徒にとつては、中庸思想は中国思想の最高徳目であったのである。また『中庸』には「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆な節に中る、これ

小 倉 正 昭

を中と謂う。発して皆な節に中る、これを和と謂う。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して、天地位し、万物育す。」（二）とある様に、中は天下の大本で、和は天下の達道と言うのである。中庸のモラルは、天地宇宙の運行も規定して、万物の繁栄を規定すると言う。人間界の中庸のモラルが、天地万物に影響するという天人相関説を展開している。それほど、中庸思想は重要な徳目なのである。

儒教が国教化された漢代以後、中庸篇を含んだ『礼記』を含めた経書の「五経」は、官僚の必読書となり、時代は下つて唐代以後に始まる科挙試験において、「経書」は必須科目となり、宋代に入り、科挙試験が全盛期を迎えると、儒教の經典である『孟子』を始めとした「経書」は、科挙試験の最重要科目に至り、士大夫ー中国前近代の知識人ーの必読書になった。

また南宋の朱熹が、『礼記』より、『大学』と『中庸』を独立させて、『論語』・『孟子』・『大学』・『中庸』を「四書」となして、「五経」に先立つ士大夫の必読書と規定して以来、「四書」は、「五経」とともに、元代以後の明清時代にまでの歴代王朝の科挙試験の必須科目となった。

以上の様に、『中庸』をはじめとする儒教の経書は、中国古代より二〇世紀に至るまで、歴代王朝を貫通する政治に携わる中国知識人階級の必読書であった。それだけに経書を少年時代より学び、科挙試験に合格して、『中庸』をはじめとする「四書」・「五経」を政治実戦に活用する中国知識人階級には、これ

(Original Article)

Mencius' Theory on the Thought of Yang Zhu and Mozi

—Study of the structural theory of Chinese political thought examined from the thought of *Dui* (Introduction)—

Masaaki OGURA*

The commonly accepted theory among researchers of the history of Chinese thought has been that Mencius strongly rejected Yang Zhu's individualism and Mozi's humanitarianism as the thoughts at both ends of the heretical doctrine. However, a detailed analysis of Mencius' argument reveals that such criticism of Yang Zhu and Mozi is only a half-truth of his argument. In the other half, Mencius affirmed the thought of Yang Zhu and Mozi as advantageous: Mencius' criticism of Yang Zhu and Mozi was strongly affected by the thought of *Dui*, dualist thought, which is a traditional, basic thought among Chinese people. In the Confucian thought of benevolence, benevolent thought of three kinds exists: differential love, family love, and humanitarianism. Although conventional studies have not explained why it came about, the Confucian s' differential love was produced as a mixture of the criticisms of Yang Zhu's self-love and Mozi's humanitarianism.

Key words: Yang Zhu, Mozi, Mencius, humanity and justice, thought of *Dui*, three kinds of benevolence

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

文化研究所紀要 九〇冊 一九八二年 参照)

- (八)『韓非子第四冊』(金谷治訳注 二二二頁 岩波文庫 一九九四年 参照)
- (九)『孟子下』(小林勝人訳注 四一六頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (一〇)『新釈漢文大系四 孟子』内野熊一郎著 五〇〇頁―五〇一頁 明治書院 昭和三十七年 参照)
- (一一)『中国古典選九 孟子(下)』(監修吉川幸次郎 金谷治 一二二頁 朝日新聞社 昭和四一年 昭和五三年 朝日文庫本初版 参照)
- (一二)『孟子下』(小林勝人 三五一頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (一三)『論語』(金谷治訳注 二二三頁 岩波文庫 一九六四年 参照)
- (一四)『孟子下』(小林勝人訳注 三〇八頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (一五)『大学・中庸』(金谷治訳注 一五〇頁 岩波文庫 一九九八年 「注 三 その両端を執りて―「執」は手にしっかりと持つこと。」参照)
- (一六)『新釈漢文大系四 孟子』(内野熊一郎著 四六四頁―四六五頁 明治書院 昭和三十七年 参照)。
- (一七)『孟子(下)』(小林勝人訳注 三三三頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (一八)『中国古典選九 孟子(下)』(監修吉川幸次郎 金谷治訳注 二三八頁 朝日新聞社 昭和四一年 朝日文庫 昭和五三年 参照)
- (一九)『中国哲学史』(狩野直樹著 二二三頁 岩波書店 一九五三年 参照)
- (二〇)市川本太郎「儒教の異端論・特に孟子の墨家排撃について」(信州大學紀要 一一九五年 三 孟子の墨家攻撃の目標 参照)
- (二一)『世界の名著一〇諸子百家』(責任編集金谷治 二二二頁 中央公論社 昭和四一年 参照)
- (二二)『世界の名著一〇諸子百家』(責任編集金谷治 四八七頁 中央公論社 昭和四一年 参照)
- 昭和四一年 参照)
- (二三)『新釈漢文大系五〇墨子上』(山田琢著 一八八頁 明治書院 昭和五〇年 参照)
- (二四)『新釈漢文大系八莊子下』(遠藤哲夫・市川安司著 八〇九頁 明治書院 昭和四二年 参照)
- (二五)『新釈漢文大系八莊子下』(遠藤哲夫・市川安司著 八〇八頁 明治書院 昭和四二年 参照)
- (二六)『新釈漢文大系五五 淮南子中』(楠山春樹 七一頁 明治書院 昭和五七年 参照)
- (二七)『新釈漢文大系五五 淮南子中』(楠山春樹 七一〇頁 明治書院 昭和五七年 参照)
- (二八)『韓非子四』(金谷治訳注 一七六頁―一七八頁 岩波文庫一九九四年)
- (二九)日本大百科全書(小学館) 孟子 執筆者：土田健次郎 一九九六年
- (三〇)『図解雑学諸子百家』(浅野裕一著 二二九頁 ナツメ社二〇〇七年参照)
- (三一)『諸子百家』(浅野裕一著 八八頁―八九頁 講談社 二〇〇〇年参照)
- (三二)『諸子百家』湯浅邦弘著 一二七頁―一三五頁 中公新書二〇〇九年参照)
- (三三)朱坤容「先秦儒家思想における奉獻心についての一考察―墨子、荀子と孟子を中心に」(復旦大学文史研究院 墨子の兼愛説 『中国思想史』第一巻 上海 復旦大学出版社 二〇一〇年 参照)
- (三四)『孟子下』(小林勝人訳注 三八〇頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (三五)『孟子上』(小林勝人訳注 二二五頁 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (受付日二〇一三年 九月 九日)
- (受理日二〇一四年 一月 九日)

差別愛で、楊朱は個人愛で、墨子は差別愛であり、相互に対立する思想家であったと主張する。しかしこの主張は、儒家の仁愛思想の半面の真理に過ぎない。他面では儒家・孟子には、楊朱的個人愛と墨子の博愛主義が存在した。

結論と課題

以上に本論で述べた内容を要約して、今後の研究課題への問題提起にしたい。

①中国思想史研究者の儒家と楊朱・墨家の仁愛思想についての研究史を紹介したが、全ての研究者は、儒家は差別愛Ⅱ別愛であり、楊朱は自己愛、墨翟は兼愛であり、儒家と楊墨思想は激しく対立したと結論している。しかし当時代の韓非子が指摘していた様に、儒家も墨家も同じく兼愛論を主張していた。従って従来の研究者の主張は、孟子の主張の半面の真理に過ぎない。他方では孟子は楊朱・墨子思想を長所として肯定していた。

②従来の楊朱・墨翟思想の研究者の大きな誤解は、楊朱・墨翟の両極端思想を否定した議論と、逆に肯定した議論を混同して、批判論に吸収して議論を一本化して論理を展開していた。しかし関係資料を詳細に検討してみると、孟子の楊墨思想の評価には、楊朱墨翟の否定論と肯定論という、中国人の伝統的で基本的な思考様式である対の思想―両面思考が働いていたのである。

③金谷氏が提起して、澤田氏の問題視した孟子の仁義併称の政治構造論とは、一体、どのような構造性を持っているのか、未だに解明されていない。儒家の仁義併称は、孟子が始めて唱えた政治思想ではなくて、禹・周公・孔子の時代より存在した政治論なのである。但し澤田氏の指摘した「当時楊・墨両学派が隆盛であったために、 $\wedge$ 仁 $\vee$ を $\wedge$ 仁 $\vee$ だけで説き、 $\wedge$ 義 $\vee$ を $\wedge$ 義 $\vee$ だけで説くのではなく、

$\wedge$ 仁義 $\vee$ と併称して主張が為されたと考えられる。」との主張は、儒家の中庸思想の政治的展開を考える上で、非常に重要であると思える。

④澤田氏の孟子の仁義併称論の主張―「当時の思想界の趨勢を受けとめ、それに対して、彼の懐抱する儒家思想の立場から社会秩序の恢復に必要なと考えた主張」論は、再検討する余地がある。何故ならば孟子は、異端邪説の偏向した楊墨思想の風靡は、仁義の道を閉塞して、人間社会の秩序の混乱を引き起こす危険性がある、この故に排撃するのである、と言っていたのである。

⑤従って今後の問題としては、楊朱墨翟の両極端思想を否定した場合の孟子の政治思想の構造性はどのような内容であったのか、逆に楊朱墨翟の両極端を肯定した政治論の構造性はどのような内容であったのか、の解明が問題となってくる。この問題は、孟子の中庸思想の政治論展開について、詳しく検討して見たい。

(二〇一三年八月三〇日 稿了)

注

- (一)『孟子上』(小林勝人訳注 二五九頁 岩波文庫 一九六八年 参照)
- (二)小林勝人氏は、「国語によれば周の徳義徳目は仁・礼・勇・義・忠・信・恵と諸々あるが儒家の仁義もそれによる。」とする(古書から見た楊子の思想)『列子の研究・老荘思想研究序説』明治書院 一九八一年)
- (三)『武内義雄全集第七巻諸子篇二』四七頁 角川書店 昭和五四年参照)
- (四)『孟子』(金谷治著 三六頁―四二頁 岩波新書 一九六六年 参照)。
- (五)『中国古典選九 孟子(上)』(監修吉川幸次郎 金谷治 一三三頁―二三六頁 朝日新聞社 昭和四一年初版 朝日文庫 昭和五三年 参照)
- (六)『孟子下』(小林勝人訳注 三三三頁 岩波文庫 一九七二年 参照)
- (七)澤田多喜男「先秦思想史研究一斑―孟子仁義説成立考―」(東京大学東洋

に止まっただけで、どの様に場合に差別愛が成立するのかについて考察してはいない。従ってその根本的な発生の理由について、構造的に説明をしたい。儒家の差別愛は、楊朱の個人主義や墨子の博愛主義の肯定論からは発生しないことは明白である。儒家の差別愛は、楊朱の個人愛と墨子の博愛主義の否定から発生する。論理的に考えると、楊朱の自己愛の否定からは社会全体への博愛主義が発生して、墨子の無差別愛の否定からは家族中心の差別愛が生じる。両者を融合すれば、家族愛を中心にして親疎の差等に応じて、社会全体に推及して行く差別愛に帰結する。孟子は、差別愛について、以下の様に言っている。

「孟子がいわれた。『君子は禽獣草木などの物に対しては、〔妄りに殺したり、伐ったりせず〕愛し憐れむ心を持つが、相手が物だから、〔時としては殺したり、伐ることもあるので〕仁を施す心は持たぬ。一般人民に対しては、もとより仁の心は持つが、相手が他人だから、親族に対するように心から親しむ心は持たぬ。このように〔愛と仁と親しむとは根本が同じでも、対象によつて差等があるのだ〕、まずその親族を心から親しみ、その心を推し及ぼして人民に仁を施し、しかるのちに物を愛するのが、正しいのである。』（三四）。」

孟子は、楊朱の他人や物への愛情には目もくれぬ個人愛・家族愛を否定して、自己愛―家族愛―親族愛―他人愛―万物愛という様に、親疎の差等に応じて仁愛の濃淡が生じてくる、と言うのである。また孟子は、墨子派の夷子に博愛主義と差別愛の相違について、以下の様に説明を加えている。

「すると、夷子は〔これには閉口したものと見えて〕話題をそらしていった。『書経にある儒者の言葉にも『むかしの聖賢が人民を治めるには、まるで母親が自分の赤子を保護するように大切にするとありますが、これはいったい、どういう意味なのでしょう。私の考えでは、愛には差別はない。〔みんな平等で

ある。〕ただ実際に愛してゆくには身近な親族から始めよとのことで、別に墨子の博愛と〔その精神は〕違わないとおもうのですが。』そこで徐辟は孟子に告げた。孟子はいわれた。『あの夷子という男は、人が自分の兄の子を愛するのを、隣人の赤子を愛するのと全く同じにしてなんの差別もするなという意味なのだと、ほんとうに思っているのだろうか。それなら大変な間違いである。書経にあるあの言葉は譬えをとってそういったままで、そんな博愛などという意味なのではない。つまり、赤子が這っていつて井戸などに落ちこみそうになるのは、なにも知らぬ赤子の罪ではない。〔その保護者である〕親の不注意の罪なのだ。』

「それと同じように、無知の人民がなにも知らずに罪を犯して法に触れるのも、人民の罪ではなく、保護と監督の任にある君主の罪なのである。だから、君主たるものは父母が赤子を守り育てるように、よく人民を保護せよといったまでのことだ。』そればかりではない。いったい、天が物を生じるときには、その根本はただ一つなのだ。人間もわが身の根本は父母で、ただ一つだけである。〔だから〕、その根本である父母を何よりも愛するのは、人の天性である。』ところが、夷子は自分の父母も他人の父母も〔愛することは〕全く同じでかわりはないというのは、根本を二つに〔も、三つにも〕考えるからで、〔それでは〕自分の父母が二つも三つもあるというおかしいことになるの』ある。』（三五）。」

孟子は、墨翟の博愛主義思想を批判して、自分の親と他人の親を対等平等に愛するという考え方は、歴史的に見ても誤りであり、父母はこの世に一人しかいない、二人も三人もいる訳ではないと述べる。自分の最も大切な父母愛より親疎の差等に応じて他者に愛情を及ぼす差別愛の思想を展開しているのである。

以上に紹介した様に、狩野氏・市川氏、金谷氏・山田氏・遠藤氏・市川氏・楠山氏・土田氏・浅野氏・湯浅氏・朱氏等の古代中国思想史研究者は、儒家は

者は激しく対立した。……一方で孟子は墨家の兼愛論を禽獸(けもの)の所業と激しく非難した。……「墨子」非儒篇 儒家を非難する篇。儒家の主張や孔子の行動を、痛烈に批判する。上下篇からなるが、上篇は現存しない。(三〇)。

例② 孟子の非難として、「楊朱より約五十年ほど後に現れた孟子は、楊朱に激しい非難を浴びせている。孟子はその理由を、「楊朱は我が為にするを取る。一毛を抜きて天下を利するも、為さざるなり」(『孟子』尽心下篇)と述べる。もしあなたの髪の毛を一本抜くことが、天下全体の利益になるとしたならば、抜いてもらえるかと尋ねられた楊朱は、にべもなく嫌だと断ったそうだ。このように楊朱は、我が身の利益しか眼中になく、天下全体の利益のために一毛を抜くことさえ惜しむ徹底した利己主義者であった、実に怪しからぬ男だというわけである。そこで孟子は、「楊氏は我が為にす。是れ君を無みするなり。墨氏は兼愛する。是れ父を無みするなり。父を無みし君を無みするは、是れ禽獸なり」(『孟子』滕文公下篇)と、自分の父も他人の父も等しく愛せと説いて父への孝を無視する墨子の思想や、利己主義を説く楊朱の思想は、人間から忠誠心を失わせ、人々を君臣関係や国家組織から離脱させる、野獸にも等しい邪説だと弾劾した」(三二)と述べる。浅野氏引用の前半の資料は、孟子は楊朱の為我説と墨子の兼愛説を長所として肯定しているのである。浅野氏の言う様に後半に引用した史料では、孟子は楊朱・墨子を批判して否定していた。しかし、それは孟子の楊朱・墨子思想批評の半面の真理に過ぎない。

〈湯浅邦弘氏批判〉 湯浅氏は、墨翟の兼愛説について以下の様に述べている。「しかし、その前提となる兼愛は、きわめて特異な愛である。奴隸がいうように、愛とは万人に対して平等に向けられるのではなく、対象を選んで注ぐべき感情ではないのか。親密な者へは厚く、疎遠な者には薄い、という愛こそが

もつとも受け入れられやすいのではないか。墨家の説く兼愛の理想は、確かに崇高ではあるが、それは、普通の人々にとって大きな違和感のある愛であった。」

「また、それは孟子も同様で、「自分の父への愛と他人への愛を同一視」するという兼愛理解には、少なからぬ誤解がある。……墨家の掲げる兼愛のスローガンをとらえて、その非中国的な側面を強調したという可能性である。いずれにしても、墨家の説く兼愛は、中国世界においては、きわめて特異な思想であった。」(三二)と、墨子の兼愛説は、非中国的な特異思想であると言う。しかしこの論は、孟子の主張の半面である。他面で墨子の兼愛説を肯定している。

朱坤容氏批判 朱氏は、墨子は兼愛を以て乱を治める思想家＝義者として、「まず、「兼愛」とは何か?……つまり兼愛の反義語は別愛で、すなわち分別のある愛とされた。だから墨子が強調したいのは無分別の平等愛であった。孟子の言う親、仁、愛には異なる対象が存在するが、兼愛はそれと違い、その特徴は平等、愛には区別がないということである。」(三三)と言う。墨子は、儒家の孟子と反対の平等愛情であった述べている。この主張も儒家の半面に過ぎない。孟子の墨子の博愛主義の主張を無視している。

以上に紹介した様に、狩野氏・市川氏・金谷氏・山田氏・遠藤氏・市川氏・楠山氏・土田氏・浅野氏・湯浅氏・朱氏等の古代中国思想史研究者は、儒家は差別愛で・楊朱は個人愛・墨子は差別愛で、相互に対立する仁愛思想であったと主張する。しかしこれらの主張は、儒家の仁愛思想の半面の真理に過ぎない。他面では儒家には楊朱的個人愛と墨子的博愛主義が存在した。この様に孟子には、一方で差別愛を主張して楊朱・墨翟思想批判が存在すると同時に、他方では差別愛を否定した楊朱・墨翟思想の全面的肯定論が存在するのである。

最後になるが、従来の儒家研究者は、儒家の仁愛は差別愛であると指摘する

ていて、孟子は墨翟的兼愛論者であった事を無視している。

△楠山春樹氏批判▽ 楠山氏は、語訳において、「孟子非之 『孟子』 尽心篇に「楊朱為我を取り、一毛を抜きて、天下を利するも為さず」とあり、滕文公篇に「楊子の為我は、是れ君を無みするなり」とあるによつて、孟子の楊朱批判を僅かに知ることができる。またその批判は、『呂氏春秋』が楊子を評して「陽生は己を貴ぶ」（不二篇）と述べているのとはほぼ一致する」（二六）と述べて、孟子は楊朱を全面的に批判したと言う。しかし楠山氏の引用した前文は、楊朱肯定論であり、後者は孟子の楊朱否定論であり、最後の文章は、孟子の楊朱の否定論や肯定論でなく、楊朱の思想論である。楠山氏は、孟子の楊朱の否定論と肯定論を区別せずに、楊朱否定論一本に終結してしまっている。

そもそも『淮南子』の原文の通釈には、「そもそも、弦楽鼓舞を型通りに演じて「楽」を習い、進退辞儀を型通りに行なつて「礼」を修め、手厚く葬り久しく服喪して死者を弔うことは、孔子の立説である。しかし墨子はこれを非とした。兼ね愛し、賢者を尊び、鬼神を崇び、命を否定することは、墨子の立説である。しかし楊朱はこれを非とした。己の本性を全くし、内なる真を保持して、外物によつて形体を煩わされぬようにすることは、楊子の立説である。しかし孟子はこれを非とした。このように、取捨する所は人によつてこととなるが、それぞれ心にうなずくところがあつて、主張しているわけである。かくて、ことの是非には、「それを受容するか否かの」根拠があるのであつて、その根拠を得れば非とされることはなく、根拠を失えば是とされることはない。」（二七）とあり、諸子の思想には長所と短所があり、諸子の思想には是非があり、思想家毎に趣捨を異にしていると言うのである。

〈金谷治氏批判〉 金谷氏は、韓非子の儒家と墨家の兼愛説批判を引用して、以

下の様に述べている。読み下し文は、「今、儒・墨は皆な称す、先王、天下を兼愛すれば、則ち民を視ること父母の如しと。何を以て其の然るを明らかにするや。曰く、……先王は其の法を勝たしめて其の涙を聴さず。則ち仁の治を為すべからざるや、亦た明らかなり。」とある。そして通訳として、「いま儒家や墨家はみなこういつている。「古代の聖王は天下の人々をひろく愛したので、父母のような態度で民衆にのぞんだ」と。どうしてそのことがわかるかとたずねると、彼らは答える。……古代の聖王はこの法律のきまりを尊重して、その感情には従わなかった。してみると、仁愛の情では政治を行なえないことは、明らかである。」（二八）とある。韓非子は、儒家と墨家は同様の兼愛論と規定している。

金谷氏は注にて、「一 兼愛―肉親を重く見る差別愛に対し、無差別の博愛をいう。もと儒家に反対した墨家の主張であつたが、ここでは両家共通の主張とされている。」と言う。金谷氏は、儒家は差別愛で、墨家は兼愛であると言いたいのである。しかし韓非子は、儒家と墨家は同じ兼愛説であると言う。前節で検討した様に孟子は墨子の兼愛説を長所であるとして、これを肯定していた。従つて金谷氏の儒墨の仁愛相違論の主張は、資料的に見て成立しない。

△土田健次郎氏批判▽ 土田氏は、「孟子の一連の論争のなかでもっとも有名なのは、性に悪はいえぬとする告子との応酬である。また墨翟（墨子）の兼愛説（無差別愛の主張）と楊朱の為我説（徹底した利己主義）をそれぞれ極論として退け、家族倫理を柱に漸次他者へと及ぼす仁義の主張を行った。」（二九）と、孟子は墨翟の兼愛説と楊朱の為我説を批判して差別愛を主張したと言う。この論議は孟子の楊墨思想の半面に過ぎない。孟子の楊墨の肯定論を無視している。

〈浅野裕一氏批判〉 浅野氏は、墨家の兼愛論について、以下の様に述べている。

例①「儒家との対立 戦国期となり墨家は儒家と並ぶ天下の二大学派へ。両

あろう。」(二〇)と述べている。

市川氏の孟子の目的批判の前半の文章は、確かに孟子が墨翟の博愛主義を否定した文章として引用したのは正解である。しかし後半の孟子「天下の為には自分を犠牲にまでしてする」との墨翟評価の文章は、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義を長所として肯定した文章である。従って否定した文章の中に肯定した文章を挿入して、孟子は墨翟を批判したという市川氏の議論は成立しない。

〈金谷治氏批判〉 金谷氏は、儒家は差別愛、墨子は無差別平等愛と述べる。

「兼愛の思想は、家族愛を主とする儒教の立場をのりこえて、無差別平等の愛をめざすものである。儒教の仁愛はまず血のつながりを重視する差別愛であり、それを近くから遠くへと拡大してゆこうとする。しかし、近親への愛と他人への愛とがしばしば衝突するのは、愛情の本質からしてむしろ自然である。……この兼愛思想にとって重要なことは、それが基本的に家とか国家というわくをつき破った広い立場にあることである。」(二一)と述べている。

金谷氏は、楊朱についても「楊朱は戦国の人、道家の思想家。詳しい伝記はわからないが、自己中心主義者として孟子の非難されている。孟子よりはやや前の人であろう。『列子』に楊朱篇がある。」(二二)と述べ、孟子は楊朱も批判したと述べている。金谷氏の説明も一面的解釈であり、孟子の楊墨評価の半面に過ぎない。孟子は楊朱・墨翟の両極端思想を包容して肯定しているのである。

△山田琢氏批判▽ 山田氏は、儒家の親愛―仁は差別愛であり、墨子の親愛―仁は差等がない博愛であり、儒家と墨子の仁愛は相違すると述べている。

「そして更に親に対する親愛の情の発露の仕方が、儒家と墨家とは異なることを知らなければならない。孟子に「吾が老を老として人の老に及ぼす」(梁恵王上)と言うように、儒家では自分の親と人の親とに対する親愛の情にも、

わが身に近い者から遠くの者へと及ぼす順序に遠近の等差がある。墨家では遠近による等差はない。孝子たる者は互いに人の親を愛するというように、自分の親と人の親とに対する親愛の情は同時に成り立つ。またそのことが成り立つような国家の建設を目ざしているのである。」と述べている(二三)。

山田氏は、儒家は差別愛で、墨子は無差別博愛主義であると言う。しかしこの主張も、狩野氏・市川氏・金谷氏の学説と同様であり、孟子の半面の真理に過ぎず、儒家には墨子的な博愛主義が存在する。

〈遠藤哲夫・市川安司氏批判〉 遠藤・市川氏は余説に於いて、「以上は墨家に対する批評である。その批評たるや、きわめて簡単であるが、要点を得ている。「非楽」「薄葬」など、礼楽を尊び、送葬を重んじる儒家に対する反発であり、「身を磨りへらして働け」というのは、その実利的方面を強調したものである。これらの思想は、いずれも孟子によって批判されている。殊に「兼愛」の一事に至っては、仁と類似するところから、孟子の攻撃は鋭かったのだが、天下篇では深く論及していない。天下篇では、「兼愛」といった情の問題よりも、礼とか楽といった形式面が重視されているように見える。」(二四)と述べている。

なお本文では莊子は、「たしかに、墨翟や禽滑釐の考え方は正しのであるが、それが行為として現れた場合は正當なものではない。後の世の墨者たちを、苦勞させ、ふくらはぎやすねに毛が無くなるような労働を目標として行動させるに過ぎない。これは天下を乱す罪が多くて、天下を治める功の少ないものである。しかしながら、墨子自身はやはり天下を真に愛したのである。道を求めて得られなければ、その身はいかにやせ衰えようと、なお道を求めてやまない人物であった。まことにすぐれた人物である。」(二五)と、高く墨子を評価している。この文章の中でも、墨子の兼愛説は、儒家の孟子に攻撃されているとし

しい人の道であり、それは仁義の併称によって守られると考えた。孟子は、仁義の道徳によつて、当時の中国世界を風靡していた揚墨思想に対抗した。」

金谷氏は、この文章の意味を、楊朱と墨翟の両極端思想を排撃したのが孟子の思想的立場であつたと、内野氏や小林氏と同様の主張をしていた。注釈者の内野氏・小林氏・金谷氏の三者は、孟子の滕文公篇の楊朱・墨翟思想の排撃論が強烈である為に、そこから頭から離れないのであり、その思い込みの強さが、楊朱・墨翟の極端思想を肯定した本文を否定論に誤解してしまう結果に帰結したのである。三氏は共に、「それでは只一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所を捨ててしまうことになるからだ」と、孟子は述べていると言う。

しかし「多くの長所を捨ててしまう」とは、楊朱と墨子の両極端思想の長所を捨てるな、という事を意味しているとは、明確に述べていない。この事が注釈上の最大の欠点である。それを明確にしていれば、本文は楊朱と墨翟の両極端思想を肯定した執中有権の中庸実現の文章であつた事が、一目瞭然になる。しかし三氏は共に、注釈内容を朱子の指摘に従い、大変な誤訳をしたのである。

四 孟子の楊朱・墨翟肯定論と学説史の問題点

本節では儒家の差別愛と墨翟の博愛論の研究史の整理と批判をして見たい。
 〈狩野直樹氏批判〉 狩野氏は墨子の兼愛説について、「墨子は此の如く兼愛を唱導し、之に対立するものを別愛となした。別愛とは各人相互の区別を立てて、愛を施すに厚薄軽重の差等あるものを謂うのである。」（一九）と述べて、儒家の差別愛と対立する思想であると言う。儒家の差別愛と墨子の博愛説の違いを指摘した一般的な説明である。しかし儒家は、墨家の博愛主義を包容している。

この説明は誤りである。儒家には差別愛と博愛が存在する。

〈市川本太郎氏批判〉市川氏は、孟子の墨翟批判について以下の様に述べる。
 「孟子の排難を加えた最も著しい対象は、楊朱派と墨家である。其の言に曰く、処士横議、楊朱墨翟之言盈天下 天下之言不帰揚、則帰墨。楊氏為我、是無君也。墨子兼愛、是無父也、無父無君、是禽獸也。公明儀曰、庖有肥肉、厩有肥馬、民有飢色、野有餓殍。此率禽獸而食人也。楊墨之道不息、孔子之道不著。是邪說誣民、充塞仁義也。仁義充塞、則率獸食人、人將相食。（孟子 滕文公篇下）」と。楊朱の為我主義、墨翟の兼愛説が孟子の排撃する目標であることは、此の文によつて明かである。墨子の兼愛論に対しては、父を無みするものと評し、その為に仁義が充塞せられ、邪論に誣せられるとし、更に禽獸の道であると酷評し、其の攻撃の目標を明かにしている。尚他の篇においても兼愛説を次の如く評している。

墨子兼愛、摩頂放踵、利天下為之。（孟子尽心篇上）

墨子の兼愛は一面より觀察すれば徹底した平等愛とも云うべきものである。儒教に於ても愛は説く所であるが、兼愛説の如き無差別平等の愛ではなく、本末軽重を明かにし遠近親疎による差別的博愛である。我が老を老として人の老に及び、我幼を幼として人の幼に及ぶ方法が、孟子の説く仁義であつて差別の觀念が基礎となつている。然るに兼愛の思想から云えば、自己の父老を愛すると同様に他人の父老を愛し、そこに何等の差別を認めざるが故に、これを実践するにおいては孝道を害する虞れがある。そこに孟子が「墨子兼愛は無父也。」攻撃した理由が明かとなるのである。朱子は、

墨子愛無差等、而視其至親、無異衆人、故無父（孟子集注）

と説明し、愛の無差等を以て無父の根拠としているが、孟子の意を得た解釈で

博愛主義」ととの中間の意味。中庸の中とはちがう。中庸の中はすでに権を含み、臨機応変の融通性があるが、子莫の中は両極端の中間を執って、中間に固定している。権がないから、一定の道に固定するものである。七 道を賊う、賊は害う。朱子は「為我は仁を害い、兼愛は義を害い、執中は時中を害う」と注をして、楊朱・墨子・子莫の三人を指して道を害う者といっているが、黄東発は文勢からいうと、これは子莫の執中だけについていたものだといっている。文勢上はそうらしいが、孟子は三人ともにこれを排斥しているのであるから、朱子の説でよいであろう。」と述べている。

しかし内野氏と同様に小林氏の注釈は誤りである。以下に論点を述べる。

①小林氏は、執中について、中庸の中は、権＝臨機応変性を既に含んでいると言う。しかし孟子の文章は、「子莫執中、執中為近之」とあり、子莫の執中を肯定している。『論語』に「堯曰、咨爾舜、天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終、舜亦以命禹」(堯曰篇)とあり、堯は舜に執中の政治を相伝している。孟子の執中は、堯・舜・禹の三代相伝の執中の肯定と同意である。続いて孟子は、「執中無權、猶執一也」とあり、孟子は子莫の無權を批判している。従って中自身には権の意味は含まれていない。孟子は、子莫を批判して、儒家の中庸を実現する為に、「執中有權」を主張しているのである。

②内野氏・小林氏は、朱子の説に従い、孟子が楊朱・墨子・子莫の三者を排斥した文章内容であると言う。しかしこの説明は大変な誤解であり、本文の注釈と語注の乖離が甚だしい結果になる。文章全体を素直に読めば理解できる。孟子は楊朱と墨子を肯定しているのであり、子莫の「執中無權」を批判して、「執中有權」を主張しているのである。朱子の注釈は誤りである。文勢上は、絶対に朱子のように解釈できず、黄東発・弁疑・蘭溪の三人の解釈が正しい。孟

子は、子莫の執中を肯定している。ただ子莫の執中無權を一極端思想と批判して、楊子の為我説と墨子の兼愛説の両極端の長所を完全に活かす中庸の実現のために、臨機応変性のある「執中有權論」の必要性を述べているのである。

最後に金谷治氏の注釈の問題点の検証をしたい。金谷治氏は、この文章について、以下の様に註釈をしている。

「孟子のころの有力な学派、楊朱派と墨翟派、それに子莫という人物の立場をまじえて批評を加えたのである。楊朱の為我すなわち利己主義と、墨翟の兼愛すなわち無差別愛とは、いずれも極端にすぎた論である。それらの中間を守って行く子莫の立場こそ、「これに近し。」真理に近い。しかし、子莫には「權」がない。「權」というのは融通性である。本来はかりの分銅のことであるが、重さにつれて左右するから、融通性を示すのに用いられたのである。中間を守っていても融通性がなければ、結局一端に執着しているようなもので、「一を擧ないて百を廢する。」ほかの多くの立場の長所に気づかず、真実の道を害することにもなる、という。孟子自身の立場が、楊・墨の中間、しかも融通自在なそれにあることは、いうまでもない。楊・墨を排撃することばは、滕文公篇(十六章上冊二三三頁)にもあり、この異端をしりぞけて孔子の立場を宣揚することが、孟子の自覚的な任務であった。子莫はどんな人物なのか、諸説はあるが結局は分らない。」(一八)と述べている。

ところで既に引用したが、金谷氏は、以下の様に述べていたのである。

「尽心上篇に、「孟子曰わく、楊子は為我を取る。一毛を抜きて天下を利することと為さざるなり。墨子は兼ね愛す。頂を摩りて踵に放るも、天下を利することとはこれを為す。」とあり、孟子は楊朱と墨翟の主張を両極端に立つものと考え、自分をその中間の立場と意識していた。両極端は禽獸であり、自分の立場は正

いのと同じになってしまう。（楊子や墨子と変わらなくなる。）」一を執つて応変することを知らないのを悪む理由は、それが道をそこなうからである。即ち一道だけはそれでよいとしても、そのために沢山のよい道をすててしまうことになるからである。」と述べている。

内野氏は、語訳に於いて「○無権 権とは、物の軽重をはかる分銅のこと。はかるなしとは、その時に応じて義にあうかどうかをはかることをしないという意。『権すること無ければ』と読んだが、普通は、『権無きは』と読んでいる。○猶執一也 一つのことをとり守つて、その時その時に応じて事を行なうことができないのと同じである。○賊道 道を害すること。朱子は「我が為にすれば仁を害し、兼愛すれば義を害し、中を執れば時中に害あり」と、楊子・墨子・子莫の三人にかけ、黄東発・弁疑・蘭溪は、文勢から見れば子莫だけについて言ったものだとしている。文勢上はそうらしく思われるが、心の中では三人ともこれを排斥しているのだから、朱子のように解釈してもよいであろう。○挙一廢百 一つの宜しいことは出来ても、そのために他の多くの宜しいことをすてることになる。」とする。そして余説では「本章も、有名なるもの。『道の貴ぶところは中、中の貴ぶところは権（はかるの意）』であることをいっただけで、と朱子はいっている。時宜を権量した中庸が中道であり、権なき中は執中で、又一に固執するものである。楊・墨も従って一事に固執するもの、中道には程遠いものである。」と、本文は、朱子の解釈に従い楊・墨の極端思想の否定であると、述べている（一六）。

内野氏は、子莫の執一無権は、「（楊子や墨子と変わらなくなる。）」と解釈しているが、孟子は中庸思想実現に於いて子莫の執一無権＝執一論を否定しているのであり、何も楊朱と墨子の両極端思想を批判しているのではない。従つて

ここで楊朱と墨子を挿入するのは、黄東発・弁疑・蘭溪の様に文脈の論理を考えて見ると、朱子の解釈は間違っている。内野氏は、朱氏の解釈に従い引きずられて、誤訳しているのである。孟子は、子莫の執中無権を批判しているのであり、楊朱や墨子を批判していない。更には内野氏は、「即ち一道だけはそれでよいとしても、そのために沢山のよい道をすててしまうことになるからである。」と注釈する。問題なのは、誰の何の為に、沢山のよい道を捨ててしまうのかを明確にしなければならない。本文の全体の文脈から考えて見ると、楊朱と墨子の長所を捨ててしまうからだ、と孟子は言っていることは明白である。

次ぎは小林勝人氏の訳注批判である。「孟子がいわれた。楊朱『極端な個人主義者であるから』、万事自分本位にしか考えない。だから、たとわずか髪の毛一本抜くぐらいのことでおおいに天下の為になるとしても、決してそれをしない。ところが、墨翟は「これと反対で、無差別の博愛主義者であるから」、たと頭を天辺から足の踵まですりへらしても、天下の為とあらばそれをするのである。魯の賢人子莫はこの中ほどを執る中道主義である。この中道主義は聖人の道である中庸にまず近いとはいえるが（原文は「子莫執中、執中為近之」）、しかしあくまで中道ということだけにとらわれてしまつて、臨機応変の処置がなかったから、これまた楊朱や墨翟のようにただ一つの立場に固執して、他を忘れてしまうのと全く同じだ（原文は「執中無権、猶執一也」）。わたしがただ一つの立場に固執して融通のきかないのをいみじうするのは、正しい中庸の道をそこねるからだ。それでは只一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所を捨ててしまうことになるからだ（原文は「所惡執一者、為其賊道也、挙一而廢百也」）。と述べている。（一七）。

小林氏は、注に於いて、「五 中を執る、子莫は楊朱（の個人主義）と墨子（の

この文章の「悪執」は、本文の「悪執一」と論理は同じである、と小林氏は述べている。従って無権執一であり、無権臨機応変性が無いことは、一点に固執する子莫の思想的立場と同様の意味である。

①の内容は、孟子は、一毛を抜いてでも天下の為になるとしても絶対にそうしない楊朱の個人主義（私欲）と、天下の為になるのであれば身を粉にして何でもする墨翟の兼愛（博愛主義（公欲））の両極端思想の内容は全く逆の思想であることを述べている。子莫の執中、つまり楊朱と墨子の真ん中を執る「執其中」は、儒家の中庸に近い、と肯定している事になる。本文の表面上の解釈では、子莫は楊朱と墨子の両極端を否定して、其の真ん中を執るのか、楊朱と墨子の両極端を肯定して、その中間を執るのか、どちらなのか判然としない点が存在する。しかし論理的に考えると、両極端を否定した場合には、否定した両者の中間を執りしつかり手に握ること、つまり両者の真ん中をしつかり手に握る「執る事は、両極端が存在しない故に、どう考えても絶対に不可能である」。

従って本文は、『中庸』に、「子曰く、舜其大知也与。舜好問、而好察邇言、隱惡而揚善、執其兩端、用其中於民、其斯以為舜乎」とあるが、「舜は両端をしつかり手に握り、両端を肯定して、その中を人民に適用した、つまり舜は両端の中を執った」と同様の論理である。楊朱と墨子の両端を手に握って、両極端を肯定した上で、その真ん中を執っている事を意味すると言わざるを得ない。

②の内容は、「だがしかし子莫の執中は、執中無権臨機応変性が無い為に、一つの極端に固執している様な性格の中道主義である。私が執一を憎むのは、儒家の中庸を害うからである。執一一つの長所のみに拘泥して、百楊朱の為我説と墨子の兼愛説の長所を完全に活かしていないのである。」と、孟子は子莫の執中無権論を批判しているのである。

従って孟子の主張する儒家の中庸思想は、執中「有権論」であり、楊朱の為我説と墨子の兼愛説を一点に固執しないで、臨機応変に完全に活かすのが、中庸思想と言いたいのである。孟子は、楊子の自己本位的な個人・家族主義「私権力の極端思想と墨翟の社会的平等を目指す無差別の博愛主義」公権力の極端思想を、各々長所がある極端思想であり、子莫の「執中無権」論は、本当の中庸思想ではない。「執中有権」が中庸思想には絶対に必要なのであり、両極端の長所を一〇〇%に生かさなければ、儒家本来の中庸思想ではないと言うのである。

以上が正確な本文の注釈であろうと思う。ところで多くの研究者は、以下の様に注釈している。今、それらの個別の注釈を挙げて、何処に問題が存在するかを詳細に検討して見たい。

内野熊一郎氏の訳注批判。内野氏は、「孟子曰く、楊子は我が為にするを取る。一毛を抜いて天下を利用するも、為さざるなり。墨子は兼愛する。頂を摩して踵に放るも、天下を利用するは之を為す。子莫は中を執る。中を執るは之に近しと為すも、中を執りて權すること無ければ、猶一を執るがごときなり。一を執るに惡む所の者は、其の、道を賊ふが為なり。一を挙げて百を廢するばなり、と。」と読み下す。そして本文を通釈して「孟子が言うに「楊子は、ひたすら自分のためばかりすることをその主義とした。たとい一本の毛を抜くことにより天下を利用することが出来るような場合でも、自分のためでなければ一毛を抜こうとはしなかった。墨子は他人を平等に愛した。たとい自分の頭の先からすりへらして踵までへらしても、天下を利用するためならばこれを行なった。子莫はこの二人の中間を執った。その中間を執ってやろうとすることは、道に近いと言えるが、しかし、いつも中間を執って、その場その場に依じて輕重をはかり事よろしきに処することがないならば、それは一をまもって少しも融通がきかな

それを自然な態度でただ受け入れればよいのに、逃げ出した豚を追いまわすように、ことさらに弁論し、また身を寄せてきた者を繋りつけるようなことまでする。ちかごろの若い儒者は困ったものだ、という心。滕文公篇の六十章（二二八頁）などのげい気魄と比べると、さらに年老いてからのことばなのであろうが、なるほど、ここにも処世の真理はあるようである。「招」は胃（けん）なりと注されていて、足を縛りつけること。（一一）。

金谷氏の批評論を素直に読めば、孟子は楊朱・墨翟の極端思想を自由に儒教の中で泳がしておけと言うのであり、殊更に弁論して排撃するなど言うのである。しかし金谷氏は、滕文公篇での楊朱墨翟への激しい批判が無くなり、氣迫が衰えた老人になった孟子の楊・墨の排撃文である、と言うのである。

孟子の本文についての小林氏・内野氏・金谷氏の注釈を検討した結果、三者の孟子の本文の読み下し文と、その語訳や批評とは、大きく乖離して矛盾していると言わざるを得ない。三氏は、孟子の滕文公篇での過激な楊朱・墨翟批判が頭に深く染み付いていて、それから一步も離れないのであり、その結果この様な矛盾撞着した結論を下してしまったのである。この本文では、孟子は、楊朱・墨翟の両極端思想を包容するのが儒教思想である、と言いたいのである。

次に決定的な孟子の楊朱墨翟思想の肯定論の資料を紹介して見たい。滕文公篇では、孟子は一方では徹底的に楊朱と墨翟を異端邪説の偏向思想と厳しく排撃したのである。しかし今度は全く逆な発言をする。直前に引用した楊墨肯定論に続いて孟子は、子莫の執中無權論を批判して、執中の中庸＝有權論を主張する。この場合には、楊子の個人主義と墨翟の博愛主義の両極端を高く評価して肯定している。この文章の解釈については、多くの異説が存在するから、原文を引用して詳細に注釈して見たい。

原文は、「孟子曰、楊子取（衍？）為我、拔一毛、而利天下、不為也、墨子兼愛、摩頂放踵、利天下、為之、子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也、所惡執一者、為其賊道也、舉一而廢百也、」（一二）とある。

読み下し文は、「孟子曰く、楊子は我が為にす。一毛を抜きて天下を利するも、為さざるなり、墨子は兼ね愛す。頂（あたま）を摩（あたま）して踵（するへら）に放（至）るとも、天下を利することは之を為す。子莫は中を執る。中を執るは之（道）に近しとなすも、中を執りて權（はかる）ることなければ、猶一を執るがごとし。一を執るを惡む所は、その道を賊（そこな）うが為なり。一を挙げて百を害すればなり。」となるであろう。

本文の文章構成の特徴は大別して、①「孟子曰、楊子取（衍？）為我、拔一毛、而利天下、不為也、墨子兼愛、摩頂放踵、利天下、為之、子莫執中、執中為近之」と、②「執中無權、猶執一也、所惡執一者、為其賊道也、舉一而廢百也」に二分割に出来る。①は、子莫の執中の肯定論である。②は、子莫の執中無權論、執一の批判である。

ところで「執」とは、手にしっかりと握ることである。孔子は、「論語 衛靈公篇」で、「子曰、君子貞、而不諒」と述べている、読み下し文は、「子曰わく、君子は貞にして諒ならず。」であり、注釈は「君子は正しいけれども、馬鹿正直ではない。」と言う意味である（一三）。君子と言うのは、頑固一徹ではなく、臨機応変に弾力的思考をする人であると言う。

孟子は、「君子不亮、惡乎執」と述べている。読み下し文は、「孟子曰く、君子の亮（かか）諒）わらざるは、「一を」執ることを惡めばなり」、注釈は、「孟子がいわれた。「君子は（行いが正しいが）馬鹿正直ではない。それは一つの」とばかりのまでも固執して融通の利かないのを惡みきからである。」（一四）。

孟子が楊子の個人主義と墨翟の博愛主義について、一方で人間社会の安定的秩序を混乱する異端邪説の危険思想と批判して、これらを否定していた。しかし同時に他方では、以下の様な楊朱と墨翟の両極端思想を包容する発言をしている。『孟子』尽心篇について、小林勝人氏は、以下の様に訳注をしている。

「孟子がいわれた。「墨翟の説にかぶれて学ぶ者が、その誤りを悟ると、必ず楊朱の門に走り、やがて楊朱の説の誤りを悟ると、必ず中庸をえたわが儒者の道に帰ってくるものだ。」「かくて両極端の邪説から目覚めて」、わが道に帰って来たなら、心よくこれを受け入れてやるまでのことだ。ところが現在、楊・墨の徒と論争する儒者たちは、まるで逃げ出した豚でも掴まえるかのような態度だ。すでにもとの檻の中に入ってしまったら、もうそれでよいのに、さらにまた逃げ出さぬようにと四足を縛っておくようなことをする。」「これではあまりに残酷で、立つ瀬が無いではないか。」(九)。

原文の読み下し文は、「孟子曰く、墨を逃(去)れば必ず楊に帰し、楊を逃れば必ず儒に帰す。帰すれば斯(し)ち之を受けんのみ。今の楊・墨と辨ずる者は、放豚を追うが如し、既に其の苙(檻)に入れば、又従いて之を招(羈)ぐ。」である。従って「楊墨の学説の誤りを悟るのではなく、楊墨の学説に満足出来なくて楊墨学説を去る」のである。即ち孟子は、墨翟の博愛主義者と楊朱の個人主義者の両極端を兼有しているのが儒教であり、墨翟と楊朱を拘束して叩き潰す様な事をせずに、両極端思想の学説を、受け入れた儒教思想の中で自由に泳がしておけと言う。言い換えれば墨翟の博愛主義と楊朱の個人主義を包容して肯定するのが、幅広い心を持つ儒教思想なのである、と言うのである。

ところで本文に対して、内野熊一郎氏は、「孟子曰く、墨を逃るれば必ず楊に帰し、楊を逃るれば必ず儒に帰す。帰すれば、斯に之を受けんのみ。今の楊・

墨と辨ずる者は、放豚を追うが如し。既に其の苙に入れば、又従って之を招ぐ、と。」と読み下している。そして「孟子が言う、「墨子の道を学ぶ者は、その非をさとると、必ず楊子の門に学ぶようになる。楊子の門に学んで、満足出来ない」と、必ず儒者の門に身をよせてくる。身を寄せてくれば、そのままこれを受け入れてやればよいのである。ところが、現在の楊子・墨子の人たちと弁論する者は、あたかも逃げ出した豚をおりの中へ追いこもうとするような態度である。しかもおりに入れば、それでよいのに、更には今度はその足をつなぐようなやり方をしている。ひどすぎる。」(一〇)と訳注している。

この内野氏の読み下し文と訳注を読む限り、孟子は、「楊朱と墨翟の両極端思想は、儒教思想の中で、自由に泳がしておけ。縛るな、批判するな」と言うのである。従って儒教は、楊朱と墨子の思想を容認して、楊朱・墨子を吸収した思想であると、孟子は言っていることは明白である。

しかし内野氏は、語訳で「○墨 墨子の学をさす。墨子の学は兼愛を説くものである。○楊 楊子の学をさす。楊子の学は絶対為我主義で、墨子の学と両極端をなす。○儒 孔子の流れをくむ学派で、中庸をたつとぶ。」と解釈して、余説では、「本章は、楊墨異端説でも、その非を悟って帰投したものは、これを寛大に受け入れるべきことを説く。本文の比喩は巧妙で面白い。」と述べる。

つまり内野氏は、楊子・墨子・儒教の三者を対立する思想と考えており、孟子は、楊子・墨子の思想を放棄して、儒家の中庸思想に思想転向した者は、寛大に儒家に受け入れたなさいと言っている、と、解釈しているのである。内野氏は、本文の読み下しと通釈において、全く乖離した語訳・余説を展開している。

ところでこの文章について金谷治氏は、以下の様に註釈している。

「楊朱、墨翟の極端な学説では、きっと中庸の儒家の教えにもどってくる。

を完全に活かせと主張する。つまり逆に楊子・墨子の利益主義の肯定論なのである。従って孟子にとって楊墨は禽獣ではない。澤田氏が孟子の利益主義批判の中に楊朱・墨翟を入れたことは間違いである。孟子の楊墨批判は、仁義Ⅱ礼制無視の極端な偏向思想への批判である。金谷氏は、孟子の立場は中間Ⅱ中庸思想であると言う。これは正しい見解である。しかしこの資料中には仁義の併称は見当たらない。従って楊・墨を肯定した資料に関する限り、孟子は仁義道徳で楊墨思想を攻撃したのではない。孟子の楊墨批判は半面の真理に過ぎない。孔子や孟子の仁義主義からの利益主義批判は、当時霸道政治を実行した管仲や商子等の法家の利益誘導政治や蘇秦・張儀等の縦横家への批判である。

以下に諸例を引用して、事実関係を証明したい。

「管氏にして礼を知らば、孰か礼を知らざらん」（『論語』卷第二 八份）

「孟子曰く、今の君に事うる者は皆、我能く君の為に土地を辟（闢）き、府庫を充たすと曰う。今の所謂良臣は民の賊なり、君道に郷（郷）わず、仁に志さざるに、之を富まさんことを求むるは、是れ桀を富ましむるなり。」（『孟子』告子下）とあり、仁と対立する富国策は、管仲等の法家流思想である。

「齊の宣王問いて曰く、齊桓・晋文の事、聞くこと得べきか。孟子對えて曰く、仲尼の徒、桓・文の事を道うもの無し。是の以に後世に伝うる無く、臣未だ之を聞かざるなり。以（已）む無くんば則ち王（道）を述べんか。」（『孟子』梁惠王章句上）とあり、儒家の王道政治と法家の霸道政治は対立する。

「景春曰く、公孫衍（商鞅）・張儀は豈誠の大丈夫ならずや。……孟子曰く、是れ薦んぞ大丈夫たるを得んや。子未だ礼を学ばざるか。」（『孟子』滕文公章句上）とあり、孟子は商鞅や張儀は、礼義知らずだと批判している。

「公孫丑問いて曰く、夫子齊にて当路らば、管仲・晏子の功、復許（期）す

べきか。孟子對曰く、子は誠に齊人なり、管仲・晏子を知れるのみ。……管仲は君を得ること彼の如く其れ専らにして、国政を行なえること彼の如く其れ久しかりしも、功烈は彼の如く其れ卑（賤）し。」（『孟子』公孫丑章句上）

「孟子曰く、求は季氏の宰となりて、能く其の徳を改めしむるなく、而かも粟を賦すること他日に倍せり、孔子曰く、求は我が徒に非ず、小子鼓を鳴らして攻めて可なりと、此れに由りて之を觀れば、君仁政を行なわざるに之を富ますは、皆孔子に棄てらるる者なり。……故に善く戦う者は上刑（重刑）に服せしめ、諸侯を連ぬる者は之に次ぎ、草萊を辟き土地（の宜しき）に任じ（聚斂を図る）る者は、之に次ぐ。」（『孟子』婁離章句上）

以上の六例を見ても理解できる様に、儒家の思想上の全面的対抗者は、呉起・孫子の兵家、蘇秦・張儀の縦横家、中心は李悝・商鞅の法家である。「先王の仁義を言うも治に益無く、吾が法度を明らかにし、吾賞罰を必ずすれば、則ち国富みて治まる」（八）とあることを見ても、この事は首肯されるであろう。

結論 以上述べた事を集約して言うと、孟子の楊・墨批判について、金谷第一著書は楊朱Ⅱ無仁、墨子Ⅱ無仁として、第二著書では楊子Ⅱ無義Ⅱ無君、墨子Ⅱ無仁Ⅱ無父とした。澤田氏は、金谷第二著書を批判したが、それは資料的には正しい見解であった。しかし澤田氏が言う孟子の仁義併称は、当時の楊・墨批判への反発に起因した思想ではない。仁義の併称Ⅱ併称は、禹・周公・孔子時代よりの伝統の焼き直しであった。また楊・墨は、利益第一主義を展開していない。利益主義は、当時の法家流の思想家の主張であったのである。

三 孟子の楊朱・墨翟思想の肯定論

と言うのは、金谷氏も澤田氏も、資料を誤解している。第一節に述べた孟子の主張した揚墨批判で引用した本文の構造の要点が、その理由である。

揚朱・墨翟批判は、孔子の道Ⅱ仁義の道の顕彰する事が任務である。

仁義の道の閉塞は、人間社会の混乱を惹起する。それ故に古い聖人の道Ⅱ仁義を継承保持して、楊墨の異端邪説の追放の努力している。

無父無君Ⅱ仁義無視は、周公の打倒した異端邪説の思想。

揚朱墨翟の思想は、間違った学説、偏向の行動、無責任の言動。これを追放して、禹・周公・孔子の三聖人の継承者を志すことが目的である。

以上の孟子の主要な論点から、以下の様な結論が導き出されるであろう。

金谷氏も澤田氏も、孟子の揚墨批判の本文を正確に読んでいない。仁義の併用は、禹・周公・孔子以来の伝統思想である。揚墨批判の為に孟子は仁義を併称したのではない。例えば『孟子』には「王子塾曰、士何事、孟子曰、尚志、曰、何謂尚志、曰、仁義而已矣、殺一無罪、非仁也、非其有而取之、非義也」(尽心章句上)とある。また「舜明於庶物、察於人倫、由仁義行、非行仁義也」(婁離章句下)とある。この資料は、全く楊・墨思想とは関係が無い。

孟子の仁義併用の起源Ⅰ仁と義を融合して、制度化したのが礼である。『孟子』には「孟子曰く、仁の実は、親に事うる是れなり。義の実は、兄に従う是れなり、智の実は、斯の二者を知りて去らざる是れなり。礼の実は、斯の二者を節文する是なり。」(離婁章句上)とある。

つまり孟子は、梁の恵王の利益主義批判において、礼の別称として仁義の語句を使用したのである。『礼記』がある様に、礼制は周公に起源を持つ古い思想である。『論語』には、「孝弟也者、其為仁之本與」(学而第一)、「顔回問仁、子曰、克己復禮為仁」(顔淵第十二)、「子曰、君子義以為質、礼以行之」(衛靈公

第十五)とあり、礼制度は、仁と義を含む制度なのである。

梁の恵王に仁義の語句を使用して利益政治を排除しているが、後文で仁と義を区別して主張している。この事は、仁義の併称と仁と義の分離は、同じ内容である事を意味している。また『孟子』は、仁と義の別用と分離を多用している。例えば「孟子曰、仁人心也、義人路也」(告子章句上)とある。

『論語』には、例えば「子曰、弟子入則孝、出則弟」(学而卷第一)「子曰、出則事公卿、入則父兄」(子罕第九)とあり、内Ⅱ家族Ⅱ親への孝行Ⅱ仁、外Ⅱ君臣Ⅱ目上への梯順Ⅱ義なのであり、家族と国家社会関係を総合的に述べて仁義を併称したのである。孟子の仁義併称は、これと同じ事である。

梁の恵王の利益政治批判で孟子は仁義政治を主張してはいるが、澤田氏の主張する様に、何も完全に利益主義を否定はしていない。「孟子対曰、王何必曰利、亦有仁義而已矣、」と言う様に利益一点張りを批判しているのである。利益主義の全面否定ならば、中国語の語法上は「何不必曰利」とならなくてはいけない。孟子の「恒産なければ恒心なし」の言葉は余りにも有名であり、「百畝之田、勿奪其時、数口之家、可以無飢矣、謹庠序之教、申之以孝梯之義、頒白之者不負載於道路矣」(『孟子』梁恵王篇)と言う様に、経済政策の上に道徳政治を展開するのが、孟子の仁義政治の内実なのである。

また楊・墨は、利益主義を述べていない。澤田氏の議論には資料的根拠が欠落して規定性が薄い。金谷氏・澤田氏が引用した「孟子曰、楊子取為我、拔一毛而利天下、不為也、墨子兼愛、摩頂放踵、利天下為之」(尽心上)は、第三節にて詳細に検証するが、楊子・墨子への利益主義批判ではない。続く後文に「子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也、所惡執一者、為其賊道也、拳一而廢百也」とある。孟子は、執中有權論の中庸思想実現の為に両極端の長所

理想的な家族・君臣関係を破壊するのは、楊朱・墨翟の $\wedge$ 兼愛 $\vee$ 主義・ $\wedge$ 為我 $\vee$ 主義である。……孟子は、墨家の主張は $\wedge$ 兼愛 $\vee$ であり、楊朱の主張は $\wedge$ 為我 $\vee$ であること、 $\wedge$ 兼愛 $\vee$ は $\wedge$ 無父 $\vee$ に、 $\wedge$ 為我 $\vee$ は $\wedge$ 無君 $\vee$ にゆきつく思想だと考えている。『孟子』冒頭の $\wedge$ 仁義 $\vee$ の主張と、 $\wedge$ 仁 $\vee$ は $\wedge$ 親 $\vee$ に、 $\wedge$ 義 $\vee$ は $\wedge$ 君 $\vee$ に関連して説かれていることを思い起こすならば、孟子の $\wedge$ 仁 $\vee$ の主張は墨家の $\wedge$ 無父 $\vee$ に連なる $\wedge$ 兼愛 $\vee$ 主張に対してなされたものであり、 $\wedge$ 義 $\vee$ の主張は楊朱派の $\wedge$ 無君 $\vee$ に連なる $\wedge$ 為我 $\vee$ 主義に対してなされたことは明白である。当時楊・墨両学派が隆盛であつたために、 $\wedge$ 仁 $\vee$ を $\wedge$ 仁 $\vee$ だけで説き、 $\wedge$ 義 $\vee$ を $\wedge$ 義 $\vee$ だけで説くのではなく、 $\wedge$ 仁義 $\vee$ と併称して主張が為されたと考えられる。孔子の主要な思想は $\wedge$ 仁 $\vee$ であつたが、孟子になつて $\wedge$ 仁義 $\vee$ 説になつたと発展的にみるならば、孔子の後に出た墨翟が $\wedge$ 兼愛 $\vee$ を説いて $\wedge$ 仁 $\vee$ の側面を強調する余りに、 $\wedge$ 義 $\vee$ の側面が忘れがちなために $\wedge$ 仁義 $\vee$ と併説したようなものではないと、金谷氏説を批判した。

⑤更に孟子は、 $\wedge$ 仁義 $\vee$ 主義に対立する者として $\wedge$ 利 $\vee$ 中心の立場を掲げている。「宋桎の立場は $\wedge$ 利 $\vee$ ・ $\wedge$ 不利 $\vee$ の打算の観点から非戦を説くのに對して、孟子は、為人臣懷利以事其君、為人子懷利以事其父、……是君臣父子兄弟、終去仁義懷利以相接、然而不亡者、未之有也、先生以仁義說秦楚之王、……是君臣父子兄弟、去利懷仁義以相接也、然而不王者、未之有也、何必利。」（告子下）と論駁している。この主張や説き方は、梁惠王篇冒頭のそれと極めて類似したものである。 $\wedge$ 仁義 $\vee$ に対する $\wedge$ 利 $\vee$ の主張者の中には、墨家が含まれていることは明白である。孟子が攻撃して止まない $\wedge$ 利 $\vee$ の主張者の最大の一つは墨家に他不ならない。また揚朱派の思想と $\wedge$ 利 $\vee$ の関係については、「拔一毛而利天下、不為也」（尽心上）といった $\wedge$ 為我 $\vee$ 主張が、ほぼ利己主義と同じである所から、自分の $\wedge$ 利 $\vee$ のみを考えて他を顧みない、 $\wedge$ 利 $\vee$ 中心の思想であることは明らかである。

墨家も揚朱もともに $\wedge$ 利 $\vee$ の主張者とみることができる。 $\wedge$ 利 $\vee$ の立場は、この両学派のみではなく、梁惠王に代表される如き為政者をはじめとして、孟子の仁義 $\vee$ 主張を除く、多くの一般のひとたちも含むものであり、孟子の $\wedge$ 仁義 $\vee$ の主張と $\wedge$ 利 $\vee$ の排撃は激しくならざるを得なかった。」つまり澤田氏は、楊朱・墨翟は $\wedge$ 利 $\vee$ の立場であるが故に攻撃したのであると言う。

⑥「孟子の $\wedge$ 仁義 $\vee$ 説の $\wedge$ 仁 $\vee$ の主張は、 $\wedge$ 義 $\vee$ 的思想に連なる墨家に対して、 $\wedge$ 義 $\vee$ の主張は $\wedge$ 仁 $\vee$ 的思想に連なる楊朱学派に対してなされたものであつて、従来推測されていた如きその反対ではない、ということが明らかになつた。だとすれば、孟子の $\wedge$ 仁義 $\vee$ 説は、まさしく同時代の思想界の状況のなかで、当時の思想界の趨勢を受けとめ、それに対して、彼の懷抱する儒家思想の立場から社会秩序の恢復に必要なだと考えた主張をうち出したものだということができる。」（七）と言う。澤田氏は、孟子の仁義の主張は社会秩序の恢復のために、主張されたのであると結論している。以上に澤田氏の金谷説批判の概要を紹介したが、金谷氏と澤田氏の問題点を要約すると、凡そ以下の様になるであろう。

金谷説の墨翟の兼愛説の義の欠如批判と楊朱の為我説の仁の欠如説に対して、澤田氏は逆に、墨翟の兼愛説は親への仁の欠如であり、楊朱の為我説は君への義の欠如であると批判している。これは資料的に見て正しい批判である。しかし澤田氏は、金谷氏の第二著書を検討していない。金谷氏の第一著書だけを見て批判しているに過ぎないのである。問題なのは、金谷氏の第一著書と第二著書の自己矛盾性の根拠を批判するべきであつたと思われる。

しかし以下の論点は、金谷氏・澤田氏は共に間違いを犯しており、更にまた金谷氏を批判した澤田氏は一層の誤りを犯しているのである。

孟子の仁義併称は、墨翟の兼愛説と楊朱の為我説に対する批判から生まれた

墨翟は兼愛説Ⅱ無差別の悪平等主義で父子の家族制度を無視している。君父を無視する楊墨の異端邪説を排撃しなければ、孔子の道Ⅱ仁義は現れない。現在の天下の思想の混乱の原因は、楊朱墨翟の異端思想に原因がある。楊朱・墨翟の邪悪な論説・一方に偏った誤りの行為・出鱈目な思想を排撃して、禹・周公・孔子の三聖者の道を継承して仁義の道を宣揚する悲願を持つ。

この論考を読んで、すぐに気がつく事は、金谷氏の第一著書と第二著書では、楊朱・墨翟について、金谷氏は全く正反対の主張をしている事である。第一著書では、墨翟Ⅱ無義Ⅱ無君、楊朱Ⅱ無仁Ⅱ無父として、孟子は批判している。第二著書では墨翟Ⅱ無父、楊朱Ⅱ無君として、孟子は批判していると言う。第二著書が資料的に見て正しく、第一著書は朱子の「為我は仁を害し、兼愛は義を害し、執中は時中を害す。」(六)を下敷きにした見解で、間違であろう。

金谷氏の第二著書の内容に対して激しく詳細に批判したのが、澤田多喜男氏である。澤田氏は、金谷氏の仁義説を批判して、以下の様に述べている。

「金谷治前掲書第二章では、孟子の仁義Ⅱ説が、当時の思想的対抗者である楊朱と墨翟の学派に対抗して生まれた、というのはいとして、孟子が仁Ⅱに加えて義Ⅱを説いたのは、墨翟学派を打破するためとし、また楊朱学派は極端な自己中心主義で、社会改革や他人への思いやりの欠如があるため、孔子は仁Ⅱを強調したのだとする。つまり墨家の兼愛Ⅱ説に対して義Ⅱを、楊朱の仁Ⅱ為我Ⅱ主義に対して仁Ⅱを説いたというものであるが、これは後述する拙稿の主張と全く逆である。金谷氏はそこで何故か「未有仁而遺其親者也、未有義而後其君也」(梁惠王上)や「無父也」「無君也」(告子上)について触れていないのは、『孟子』の文章全体を正確に読んでいない嫌いがある。」と批判している。

そして澤田氏は、孟子の仁義併称の理由について、以下の様に述べている。

①『論語』には仁Ⅱ義Ⅱはそれぞれ分離してみえるが、仁義Ⅱという併称した語としてはみえず、仁義Ⅱの語が儒家の文献に現れる最初は『孟子』であることは、まぎれもない事実である。春秋末期の孔子は仁Ⅱを説きまた義Ⅱについても説いたが、戦国中期の孟子は何故に仁義Ⅱと併称した言葉を使用するようになったのか、つまり仁Ⅱ義Ⅱから仁義Ⅱへと変化する思想的背景はいかなるものかが問題である。澤田氏は、金谷氏の主張する孟子の思想は、仁義の併称であると認めるが、思想的背景の指摘が欠如していると批判したのである。

②孟子は、思想上の対抗者である楊朱と墨翟の学派に対して仁義Ⅱを説いたと推測できるが、楊墨思想の如何なる点について仁義Ⅱ説を説いたのか、未だ明確な回答は無い。この点を解明するのが本論の目的であると言う。

③『孟子』の冒頭の文章には、以下の様にある。

「孟子見梁惠王、王曰、叟不遠千里而來、亦將有以吾國乎、孟子対曰、王何必曰利、亦有仁義而已矣、……上下交征利、而國危矣、萬乘之國、弑其君者、必千乘之國、千乘之國、弑其君者、必百乘之國、……苟為後義而先利、不奪不賢、未有仁而遺其親也、未有義而後其君者也、王亦曰、仁義而已矣、何必曰利。(梁惠王上)

ここで注目されるのは、仁義Ⅱに対して利Ⅱがいわれ、仁Ⅱに対して親Ⅱが、義Ⅱに対して君Ⅱが言われていることである。これらは楊・墨批判に深くかわることで重要だけでなく、仁義Ⅱの内容が如何なるものかを示している点で重要である。つまり仁Ⅱは親Ⅱと関連して家族道徳と関連して、義Ⅱは君Ⅱと関連して君臣道徳と関連する事を意味している。

④『孟子』冒頭に見える孟子の利Ⅱの排除と仁義Ⅱの主張は、利Ⅱに基づいて人が行動すれば家族道徳、君臣道徳は崩壊するとの危機感に基づくが、孟子の

差異のある差別愛に対抗する為に生れた。差別愛を理性的な立場から強調したのが義であり、孟子は義によって墨翟学派の兼愛説を打破しようとした。

揚朱の為我説Ⅱ生命保存を第一にする養生思想の自己中心主義は、国家社会の問題に気を奪われて自己を失う事の多い当時の思想家に反逆して生まれた。

極端な自己中心主義では社会の改善が望めないし、他人への思いやりが無さ過ぎる為に、孟子は仁愛の思想により揚朱学派の自己本位説を打破しようとした。

尽心上篇に、「孟子曰わく、揚子は為我を取る。一毛を抜きて天下を利することも為さざるなり。墨子は兼ね愛す。頂を摩りて踵に放るも、天下を利するとはこれを為す。」とあり、孟子は揚朱と墨翟の主張を両極端に立つものと考え、自分をその中間の立場と意識していた。両極端は禽獣であり、自分の立場は正しい人の道であり、それは仁義の併称によって守られると考えた。孟子は、仁義の道德によって、当時の中国世界を風靡していた揚墨思想に対抗した。

金谷氏の主張の問題は、以下の点に存在する。

孟子の仁義思想は、楊朱・墨翟に対抗する為に突如として生まれた思想ではない。また墨翟の兼愛説と楊朱の為我説も、戦国時代に突如として生まれた思想ではない。楊朱・墨子・孔子の三思想は禹の時代より存在する古い思想である。孟子の仁義説も、楊朱の為我説、墨翟の博愛説も、焼き直し思想である。

ところで金谷氏は、第一節に引用した孟子の楊朱墨翟批判の本章に対して、岩波新書刊行本『孟子』とほぼ同時に上梓された朝日新聞社刊行本・『孟子』に於いては以下の様に批評している。煩雑を厭わず引用して検討して見たい。

「聖王は生まれず諸侯はかってきまま、そして処士横議、すなわち官に仕えず王権に服しないものがかつてな議論にふける時代。楊朱と墨翟とは、そうした処士の代表者であった。楊朱は為我主義つまり自分本位の主張で、国君のこ

となどは思いもよらず、墨翟は兼愛主義つまりわが父も他人の父もひとしく愛する悪平等で、従って自分の父を軽んずるものである。こうした君父を無視するような邪説するような邪説を退けるのでなければ、孔子の道、仁義の教えもあらわれようがない。あたかも獣に人を食べさせるような、ものごとの顛倒した混乱の時代、その原因は全くこの楊・墨の学説にあるのだ、と孟子ははげしい攻撃をあげせる・・・

では、この混乱した時勢を正道にひきもどすのは、誰の仕事であろうか。それこそ自分の任務なのだ、と孟子は熱情をこめてことばをつづける。詩は、魯頌すなわち魯の国の祭祀の歌、閔（ひつ）宮篇の句で、周公が不道德な南北の国々を討ち従えたことを歌っている。禹と周公と孔子と、一治一乱の歴史のなかにあつて、乱世をしずめた三聖人の働きは大きい。孟子も、またその後を追つて、「聖人の徒がら」たらんとするのである。「邪悪な論説をやめさせ、一方にかたよった誤りの行為をしりぞけ、でたらめな言葉を追放し」そして聖人の正しい伝統を発揮する、そのためにこそ弁舌をふるうのである。「弁を好む」と人はいう。されど、「われ豈に弁を好まんや、われ已むを得ざるなり。」

孟子の時代が、儒家の思想にとつていかに困難な時代であつたか、そして、その中であつて、孟子が自己の天職を自覚していたか、この章は、それを物語つて余りがあるであろう。天下に満ち満ちる楊朱・墨翟の言をおし止め、禹・周公・孔子の三聖者をついで、仁義の道を宣揚しようとする悲願が、高い調べで唱いあげられているのである。」（五）。

以上の金谷氏が述べる孟子の主張の論点を要約すると、以下の様になる。

楊朱・墨翟は処士で、全く勝手な議論を為して、両極端思想は天下に満ちて、一世を風靡している。楊朱は為我主義Ⅱ自己本主義で君臣関係を無視して、

国時代の孟子の時に突如として出現した新思想ではないということである。禹・周公・孔子の意思を継承したいと孟子の言う様に禹の時代より楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義が中国に存在していたということである。そして儒家が説く仁義も禹・周公の時代より同時に存在していたと言うことである(三)。

二 孟子の楊朱・墨翟思想の学説史批判

孟子の楊朱・墨翟思想の批判については、多くの研究蓄積が存在するので、それらを紹介して、孟子の楊墨批判の問題点を検討したい。武内義雄氏は、滕文公篇での孟子の楊墨批判について、以下の様に述べている。

「孟子滕文公篇に堯・舜・文・武の功績を称揚した後、「……楊朱・墨翟の言天下にみつ。天下の言、楊に帰せざれば則ち墨に帰す。楊氏は我が為にす、これ君を無する也。墨子は兼ね愛す。これ父を無する也。父を無し君を無するはこれ禽獣なり。……」これは孟子が堯・舜・文・武・孔子の道を粗述して楊・墨の異端を排斥するに力めたことを表明した文である。楊朱は老子が自然に因循することをもって人の道だと説いた教えを受けついで一步すすめ、自然が人に現れたものは感覚的欲望であるから、人は宜しくその本能に従って我がためにのみ行なうべきだと主張した人で、単に道徳的の欲求のみを人の天性と見て感覚的の欲は外誘に本づくものと説く孟子とは全く正反対な主張である。次に墨子は孟子の教えを受けたとも伝えられるほどで、儒家と似た主張を持つて居るが、儒家が周の礼制度を基礎にして差別的な教えを垂れているのには反対で、かかる礼制は徒に冗費を増すのみだと排斥したが、孟子はかかる経済的打算に根據をもつ功利説には賛成しない。そこで孟子は楊朱の為我説と墨

家の兼愛説に極力反対した。孟子の言によると、当時の思想界は楊に帰せざれば墨に帰すという状態であつたらしく、孟子はいちいちそれに反駁している。」(三)と述べる。武内氏の楊朱・墨翟論の問題点は、第一節に紹介した孟子の楊朱・墨翟批判を基に検討すると、以下の様に要約できるであろう。

武内氏は、孟子は、楊朱の為我説と墨子の兼愛説に極力反対したと主張する。武内氏の楊朱の為我主義が君臣関係を無視して、墨翟の兼愛説は父子の家族制度を無視していると批判するのは正しい主張である。

しかし武内氏の墨翟の批判の論点は誤りである。墨子は、「争乱の起こる原因は、利己主義的な自利自愛主義から生じるのであり、相愛の無い故に起こる」として兼愛説を展開しているのである(『墨子』兼愛篇)。墨翟の兼愛説は、「経済的打算に根拠を持つ功利説」に反対して兼愛説を主張したのであり、武内説とは全く反対の立場から兼愛説を展開しているのである。

また武内氏は、「儒家が文武周公を理想として周礼を尊重するのに対して墨家は大禹を目標として夏礼によって儒家の弊を矯めようとしたもので儒墨の相違はただこの点に係っている。その救世救民の意気と精神においては両者の間になんら拮据とすることがない。」と述べる。しかし孟子は、禹・周公・孔子の継承者を自認しているのであり、この立場から墨翟の兼愛説を無父と批判して、仁義の政治を主張している以上、同氏の学説は首肯し難い。

孟子の仁義政治主張の政治目的については、武内氏の説明では不明である。続いて金谷氏の主張の要点は、以下の通りである(四)。

孟子の道徳は、孔子の仁を受けついで仁義の道徳である。それは、当面のライバルである楊朱と墨翟の学派に対抗して生まれたと言う。

墨翟の兼愛説は無差別平等の博愛主義は、縁故者びいきの儒家孔子の親疎で

下にみちあふれて、天下の言論は楊朱の説に賛成しなければ、必ず墨翟の説に賛成するという有様。いったい、楊氏の説は、自分のためだけに考えない自分本位の個人主義で、つまり君主を全く無視するものである。墨氏の説は、自分の親も他人の親も平等に兼ね愛する無差別の博愛主義だから、父があってもないのと同然、つまり父を全く無視するというもの（原文の要点は、「聖王不作、諸侯放恣、処士横議、楊朱墨翟之言、盈天下、天下之言、不歸楊、則歸墨、楊氏為我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無父無君、是禽獸也」）。このように、自分の父を無視し自分の主君を無視するのは、これこそ、とうてい人間とはいえない禽獸のふるまいである。」（一）

孟子の歴史認識は、この世は治まったり乱れたりしているという、一治一乱説であり、当時の思想界の混乱状況を本来の健全な治世の姿に戻そうとして議論を始めたのである。孟子は、戦国の乱世に一世を風靡している楊朱の個人主義は君主や国家制度を無視して、墨翟の博愛主義は父子の家族制度を無視する、到底人間とはいえない禽獸の行為であると言う。続いて孟子は、以下の様に楊朱と墨翟の両極端思想を批判する。

「今もし、楊朱・墨翟の説が鳴りをひそめなければ、孔子の正しい道はどうてい世に顕われませぬ。かくして邪説が人々を欺き眩まして、仁義の心をさし塞いでしまうのである。仁義の心がさし塞がれてしまうと、獸ものどもを引き連れて人間を食らわすことにもなり、やがては人間同士お互いに食いあうようなあさましいことにもなりかねないのだ。自分はそれが心配だからこそ、古い聖人の道を固く守り抜いて、楊朱・墨翟の説を排撃し、でたらめな言論を追放し、間違った学説を唱えるものが二度とは現われぬようにと、懸命に努力しているのだ。……父を無視し主君を無視する禽獸にもひとしい野蛮人は、これこ

そ周公が討ち懲らしたもうたところなのである。私もまた天下の人心を正し、間違った学説を排撃し、片寄った行いを防ぎとめ、でたらめな無責任きわまる言論を追放して、そして禹・周公・孔子の三聖人の志をうけ継ぎたいと思っている。だから、決して議論が好きだというわけではない。ただ、黙ってばかりはおれないのだ。私にかぎらず、誰でも言論をもつて、楊朱・墨翟の邪説を排撃するものは、すべて聖人の仲間なのである（原文の要点は、「楊墨之道不息、孔子之道不著、是邪説誣民、充塞仁義也、仁義充塞、則率獸食人、人將相食、吾為此懼、閑先聖之道、距楊墨、放淫辭、邪説者不得作、……無父無君、是周公所膺也、我亦欲正人心、息邪説、距詖行、放淫辭、以承三聖者、豈好辯哉、予不得已也、能言距楊墨者、聖人之徒也」）（二）と言う。

孟子の主張したい本文の構造の要点は、凡そ以下の様になるであろう。

楊朱墨翟批判の目的Ⅱ孔子の道Ⅱ仁義の道の顕彰する事が任務である（二）。

仁義の道の閉塞Ⅱ楊朱・墨翟の異端思想の風靡は、孔子の道Ⅱ仁義を閉塞させて、人間社会の秩序の混乱を惹起する危険性が存在する。それ故に古の聖人の道Ⅱ仁義を継承・保持して、楊墨の異端邪説思想の追放に努力しているのだ。

無父無君Ⅱ仁・義の無視は、周公の打倒した邪説の思想であり、禹・周公・孔子の時代において、中国古代よりから仁義無視の偏向思想は存在した。

楊朱・墨翟の思想は、間違った学説、偏向の行動、無責任な言動であり、これを追放して、禹・周公・孔子の三聖人の継承者を志すことが目的であった。

孟子は、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義を、禽獸に等しい野蛮思想、出鱈目な無責任極まる言論と述べて、文明国の中国には到底受け入れることができない危険思想と、両極端思想を激しく批判する。

特筆すべき点は、楊朱・墨翟の様な偏向した異端邪説の極端思想は、何も戦

孟子の楊朱・墨翟論

小倉正昭

―対の思想から考察した―

中国政治思想の構造論研究(序章)―

孟子は、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義を異端邪説の極端思想として激しく排撃したと言うのが、従来の中国思想史研究者の通説であった。しかし孟子の主張を詳細に分析すると、この様な楊墨批判は、孟子の半面の真理に過ぎないことが判明する。孟子は他面に於いて、楊朱と墨子の思想を長所として肯定していたのである。つまり孟子の楊朱墨翟批評には、中国人の伝統的で基本的な対の思想―両面思考が強く働いていたのである。従って儒家の仁愛思想には、差別愛・家族愛・博愛主義の三種類の仁愛思想が存在した。従来の研究では儒家の差別愛が何故に生まれてくるのは不明であったが、儒家の差別愛は、楊朱の自己愛と墨子の博愛主義を批判した融合物として生まれて来たのであった。

キーワード：楊朱 墨翟 孟子 仁義 対の思想 三種類の仁愛

はじめに―問題の提起

孟子や儒家の中庸思想政治の構造を考える上で、個人主義者の楊朱と博愛主義者の墨翟の思想をどの様に評価するのかは、重要な問題である。しかし現在の日本の孔子・孟子等の儒家思想研究者の間には、孟子の楊朱や墨翟の思想の理解について、多くの学説や異論があつて、未だ孟子の楊朱や墨翟の思想につ

いての正しい、統一見解が提起されていないように思える。そこで本稿では、従来の孟子の楊朱と墨翟の両極端思想についての学説史を紹介して、孟子の主張している楊朱・墨翟思想についての正しい評価は、一体、何処に存在するのかを明らかにして、孟子の中庸政治の目的は何処に存在するのか、という重要問題を明らかにする為の予備的な基礎作業をして見たいと思う。

一 孟子の楊朱・墨翟思想の批判

孟子は、墨翟の博愛主義と楊朱の個人主義を、以下のように徹底的に嫌い、激しく批判して、両極端思想について否定的な評価を下している。

「門人の公都子がたずねた。「世間の人たちはみな、先生をたいへん議論好きだと申しています。失礼ですが、なぜなのでしょう。」孟子はこたえられた。「自分とて、なにも議論が好きなのではないが、このご時勢では黙ってばかりもおれず、やむをえず議論しているまでだ。いったい、この世に人間があつてから、随分久しい年月がたつているが、その間、治まったり乱れたり(原文は「一治一乱」)、くり返してばかりいるのだ・・・[孔子の歿後は]、聖王はあらわれず、王室も衰えはてて、諸侯たちはわがまま放題なことをし、在野の学者は勝手気ままに無責任な言論を唱えて世間をまどわし、中でも楊朱や墨翟の説が天

教職員の研究活動記録（平成 25 年 1 月～平成 25 年 12 月）

所属 氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
教 養 教 育 科 小倉正昭	毛沢東の権力闘争と対の思想 —李志綏『毛沢東の私生活』の分 析を手掛かりとして(序章) —	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 4 6 巻,pp.229-250 (2013)	
小倉正昭	整風運動と対の思想 —李志綏『毛沢東の私生活』の分 析を手掛かりとして(二) —	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 4 6 巻,pp.209-228 (2013)	
小倉正昭	「大躍進」と対の思想 —李志綏『毛沢東の私生活』の分 析を手掛かりとして(三) —	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 4 6 巻,pp.187-208 (2013)	
小倉正昭	戸別農地請負制と対の思想 —李志綏『毛沢東の私生活』の分 析を手掛かりとして(四) —	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 4 6 巻,pp.165-186 (2013)	
小倉正昭	社会主義教育運動と対の思想 —李志綏『毛沢東の私生活』の分 析を手掛かりとして(五) —	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 4 6 巻,pp.143-164 (2013)	
小倉正昭	文化大革命と対の思想 (上) —李志綏『毛沢東の私生活』の 分析を手掛かりとして(六) —	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 4 6 巻,pp.121-142 (2013)	
小倉正昭	文化大革命と対の思想 (下) —李志綏『毛沢東の私生活』の分 析を手掛かりとして(七) —	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 4 6 巻,pp.99-120 (2013)	
久留原昌宏	文人・松村勝行の研究(下) —詩・ 短歌・俳句・作詞作曲など—	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 46 巻 p p .153 - 166	
堀江太郎	東海地区高専数学担当教員が共 同で執筆した「基礎数学問題集」 の作成目的とその教育効果につ いて	共著	「高専教育」第 3 7 号(受理 済)	堀江太郎，伊藤清，大貫洋介， 川本正治，西川雅堂，安富真 一，篠原雅史
堀江太郎	東海地区高専数学担当教員が共 同で執筆した「基礎数学問題集」 の作成目的とその教育効果につ いて	共著	平成 2 5 年度全国高専教育 フォーラム、豊橋技術科学大 学 (2013.8)	堀江太郎，伊藤清，大貫洋介， 川本正治，西川雅堂，安富真 一，篠原雅史
川本正治	物理との関連を考慮した数学の 授業について	単著	日本数学教育学会総会特集 号，p464，山梨	川本正治
川本正治	東海地区高専数学担当教員が共 同で執筆した「基礎数学問題集」 の作成目的とその教育効果につ いて	共著	高専教育 第 3 7 号(受理 済)	堀江太郎，伊藤清，大貫洋介， 川本正治，西川雅堂，安富真 一，篠原雅史
大貫洋介	数学への興味を育むための 出前授業の実践	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要， 第 46 巻，pp.1-8(2013.2)	
大貫洋介	東海地区高専数学担当教員が共 同で執筆した「基礎数学問題集」 の作成目的とその教育効果につ いて	共著	平成 25 年度全国高専教育フ ォーラム，(2013.8)，豊橋技 術科学大学	堀江太郎，伊藤清，大貫洋介， 川本正治，西川雅堂，安富真 一，篠原雅史

所属 氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
大貫洋介	高専テキストシリーズ確率統計	共著	森北出版	大貫洋介，古城克也，佐藤巖， 高田功，中谷実伸，長水壽寛， 渡利正弘
大貫洋介	東海地区高専数学担当教員が共 同で執筆した「基礎数学問題集」 の作成目的とその教育効果につ いて	共著	論文集「高専教育」第 37 号	堀江太郎，伊藤清，大貫洋介， 川本正治，西川雅堂，安富真 一，篠原雅史
飯島和人	(学術論文) q-multinomial expansion of LLT coefficients and plethysm multiplicities	単著	European Journal of Combinatorics 34 (2013), no. 6, 968-986.	Kazuto Iijima
田村陽次郎	A systematic muscle model covering regions from the fast ramp stretches in the muscle fibres to the relatively slow stretches in the human triceps surae.	共著	Taylor & Francis Online, Computer Methods in Biomechanics and Biomedical Engineering (2013 Apr 29) ,Epub DOI:10.1080/10255842.2013. 790016	Y.Tamura, A.Ito, and G.A.Cresswell
田村陽次郎	ヒト上腕二頭筋の低周波粘弾性 測定	共著	ロボティクス・メカトロニク ス講演会 2013 予稿集 p.115, 筑波(2013,5)	伊藤明，堀内亮，平山敦基， 田村陽次郎
山崎賢二	みえサイエンスネットワークに よる未来産業人材育成—地域自 治体・地域企業・高等教育機関の 連携で育てる未来の科学者・技術 者—	共著	東海工学教育協会高専部会 シンポジウム，富山 (2013,12)	大津孝佳，埤克己，益川賢市， 生川和美，奥田一雄，山田伊 智子，万谷義和，山崎賢二， 下野晃，船越邦夫，兼松秀行， 末次正寛，白井達也，打田正 樹，山口雅裕，平井信充，平 野武範，板谷年也，伊東真由 美，中川元斗，山田太，鈴木 昌一，中村勇志，真伏利史， 西森睦和，坂井崇，林幸雄， 松岡守，後藤太一郎，加藤進， 松井純，上井大輔，山下晃司， 山田晶
仲本朝基	難・多・短な講義における工夫— 持込プリントについて—	単著	論文集「高専教育」第 36 号 2013.3, pp.151 - 156.	仲本朝基
仲本朝基	クォーク模型による 3 バリオン 系におけるパウリ効果	共著	RCNP/九大研究会「ハドロン 物理と原子核物理のクロス オーバー」，九州大学，福岡 市，September 4-6, 2013	仲本朝基，鈴木宜之
仲本朝基	クォーク模型による 3 バリオン 系におけるパウリ効果	共著	日本物理学会 2013 年秋季大 会，日本物理学会講演概要集 第 68 巻第 2 号第 1 分冊，p.52	仲本朝基，鈴木宜之
丹波之宏	Controlling Manipulation, Stimulation, and Rupture of Giant Unilamellar Vesicles on Si Substrate for Lipid Bilayer Array	共著	2013 Materials Research Society (MRS) Spring Meeting (San Francisco)	Yoshiaki Kashimura, Ruairidh Forbes, Yukihiro Tamba, Koji Sumitomo, and Keiichi Torimitsu
丹波之宏	巨大脂質膜ベシクル操作による 脂質二分子膜アレイの作製	共著	2013 年 日本応用物理学会 春季	樫村吉晃, Ruairidh Forbes, 丹 波之宏，鳥光慶一，住友弘二

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
丹波之宏	Sealed Microwells: A Potential Route to Low Noise Bio-sensors	共著	2013 年 日本応用物理学会 春季	Ruaridh Forbes, Yoshiaki Kashimura, Yukihiro Tamba, Keiichi Torimitsu ¹ , Koji Sumitomo
三浦陽子	Triangular Spin Tubes with Bond Randomness	共著	Journal of the Korean Physical Society, 62, 2188-2192 (2013)	Yoko Miura, Hirotaka Manaka
三浦陽子	Spin Dynamics of Triangular Spin Tubes	共著	Journal of the Korean Physical Society, 62, 2032-2036 (2013)	Hirotaka Manaka, Yoko Miura
三浦陽子	実験室中において形成されるバイオフィルムにおけるいくつかの金属の濃縮について	共著	材料とプロセス 26, p417 (2013)	兼松秀行，大倉優太，平井信充，三浦陽子，伊藤日出生，田中美穂
三浦陽子	各種材料上に形成されるバイオフィルムの新しい評価分析解析手法	共著	材料とプロセス 26, p664-665 (2013)	兼松秀行，平井信充，三浦陽子，伊藤日出生，荻野唯，田中美穂
三浦陽子	Various Metals from Water by Biofilm from an Ambient germas in a Reaction Container	共著	Materials Science and Technology 2013, 2154-2161 (2013)	H. Kanematsu, N. Hirai, Y. Miura, M. Tanaka, T. Kogo, H. Itoh
三浦陽子	Biofilm Leading to Corrosion on Material Surface and the Moderation by Alternative Electro-magnetic Field	共著	Materials Science and Technology 2013, 2761-2767 (2013)	H. Kanematsu, N. Hirai, Y. Miura, H. Itoh, D. Kuroda, S. Umeki
三浦陽子	Various Mortals for Anti-Fouling Purposes in Marine Environments	共著	The Irigo Conference 2013, 25P-50	H.Kanematsu, T. Masuda, Y. Miura, N. Hirai, D. Kuroda
三浦陽子	Evaluation Techniques for Biofilm Formed on Biomaterials	共著	International Symposium on EcoTopia Science 2013 (ISETS '13), 14-1-3	H. Kanematsu, N. Hirai, Y. Miura, H. Itoh, T. Masuda, D. Kuroda
三浦陽子	Biofilm formation on Polymer Materials by a Laboratory Acceleration Reactor	共著	International Symposium on EcoTopia Science 2013 (ISETS '13), P-1-4	H. Kanematsu, H. Itoh, Y. Miura, T. Masuda, D. Kuroda, N. Hirai, D. M. Barry, P. B. McGrath
三浦陽子	希釈三角スピントューブにおける置換元素の違いによる構造と磁性の変化	共著	日本物理学会 第 68 回年次大会 第 3 分冊 P. 512 (2013).	三浦陽子，赤坂卓英，野村慎也，真中浩貴
三浦陽子	三角スピントューブ磁性体 CsCrF ₄ のスピン秩序状態における ¹³³ Cs/ ¹⁹ F-NMR	共著	日本物理学会 第 68 回年次大会 第 3 分冊 P. 547 (2013).	松井一樹，後藤貴行，真中浩貴，三浦陽子
三浦陽子	複屈折イメージング装置を用いた結晶評価法の開発	共著	第 74 回応用物理学会秋季学術講演会 (2013)	真中浩貴，野村慎也，赤坂卓英，八木元太，三浦陽子
三浦陽子	二次元複屈折イメージング装置を用いた結晶評価法の開発	共著	日本物理学会 2013 年秋季大会 第 3 分冊 P. 397 (2013).	真中浩貴，野村慎也，赤坂卓英，八木元太，三浦陽子
三浦陽子	温度変化可能な複屈折イメージング装置の開発	共著	応用物理学会九州支部学術講演会 (2013)	八木元太，真中浩貴，三浦陽子

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
林浩士	英語科協同学習におけるQ-Uの活用	単著	全国高等専門学校英語教育学会研究論集第32号 pp.96-105(2013. 3)	Michael E. LAWSON
林浩士	心理検査Q-Uを利用した英語科協同授業実践	単著	神戸英語教育学会紀要『KELT』第28号 pp.17-30(2013. 1)	
LAWSON, Michael E.	"LESSONS LEARNED: A Pedagogical Strategy to Facilitate Successful English-Language Presentation-Oriented Classes for the Advanced Engineering Course."	単著	Kosen Kyoiku: Journal of Education in the Colleges of Technology. Vol. 37 (2013). Institute of National Colleges of Technology.	
日下隆司	A CASE REPORT ON APPLING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION.	共著	Proc. of Int. Symp. on Advances in Technology Education ISATE, Nara (2013. 9)	
松尾江津子	攪乱する女体—柿喰う客「女体シェイクスピア」シリーズ	単著	第52回シェイクスピア学会、鹿児島大学(2013.10.6)	

所属 氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
機 械 工 学 科 埜克己	Dynamic Stress and Deformation of Non-homogeneous Poroelastic Moderately Thick Shells of Revolution Saturated in Viscous Fluid	共著	Advanced Materials Research, Vols. 652-654(2013), pp 1466-1470.	Takeshi Gonda, Dhigeru Ohtsuka, Masaki Yakabe, Katsumi Tao
末次正寛	和弓の破損に関する力学的考察	共著	鈴鹿工業高等専門学校 紀要, Vol.46, pp.9 - 16(2013).	末次正寛, 辻正利, 谷川義之, 南部紘一郎, 西岡將美
末次正寛	Deflection of Longitudinal Ultrasonic Waves by Stress Gradient	共著	8th International Symposium on Advanced Science and Technology in Experimental Mechanics, #141(2013).	Masahiro Suetsugu, Noriki Inui and Kouichi Sekino
民秋実	竹繊維強化複合材料の製作方法と強度特性	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第46号 pp.17~21	民秋実, 藤井透, 大窪和也, 伊藤慎人
藤松孝裕	工業機器内における気液二相流に関する研究	共著	三重県技術展示会 in デンソー, p. 74 (2013.8).	藤松孝裕, 鬼頭みずき, 近藤邦和
藤松孝裕	液浸法の測定精度について	単著	第9回微粒化セミナー(液体微粒化の基礎と計測技術), 日本エネルギー学会・日本液体微粒化学会, 5章, pp.1-18 (2013.9).	
藤松孝裕	二流体ノズルを用いた噴霧冷却システムの冷却効果	共著	日本設計工学会 2013 年秋季研究発表講演会講演論文集, pp. 109-112 (2013.10).	藤松孝裕, 丸林航, 川越やか, 近藤邦和
藤松孝裕	エコラン用エンジンの性能改善に関する研究	共著	日本設計工学会 2013 年秋季研究発表講演会講演論文集, pp. 9-12 (2013.10).	藤松孝裕, 重松 昌樹, 中村勇志, 近藤邦和
藤松孝裕	液浸法の測定精度に関する研究 (微小液滴の逃げの影響)	共著	日本設計工学会 2013 年秋季研究発表講演会講演論文集, pp. 25-28 (2013.10).	藤松孝裕, 松本将樹, 近藤邦和
藤松孝裕	流路断面積が急縮小する水平管内気液二相流に関する研究 (液膜挙動の観察)	共著	日本設計工学会 2013 年秋季研究発表講演会講演論文集, pp. 119-122 (2013.10).	藤松孝裕, 近藤邦和
白井達也	Processing上で古典的なコンソール対話型プログラミングおよび高度なグラフィックスプログラミングを実現可能なフレームワーク Crowbar+Tomahawk の開発	単著	鈴鹿高専紀要, Vol.46, pp.23-32(2013)	白井達也
白井達也	Moodle +/- 5年 高等教育機関向け学習支援環境から次のステップを考えてみよう	単著	日本ムードル協会, Moodle Moot Japan 2013, 基調講演	白井達也
白井達也	ダイレクトモーターカーの実用化に向けた拡張型ダイレクトモーター駆動方式の提案	共著	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 (ROBOMECH2013)	白井達也, 伊藤覇臣
白井達也	タンデム 型マルチモータパワユニットの開発	共著	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 (ROBOMECH2013)	大島拓郎, 白井達也

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
白井達也	非線形バネ要素 SAT に線形領域を付加した三モード SAT の提案	共著	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 (ROBOMECH2013)	山中康平，川合啓太，白井達也
白井達也	薬学部生と既卒者が共に学習できる薬学統計学のeラーニングサイトの構築について	共著	日本薬学会，第133年会 (2013)	宮崎恭行，村田俊郎，岡本晃典，川下理日人，白井達也，上島悦子，高木達也 上島悦子 2, 高木達也 2,3
白井達也	A CASE REPORT ON APPLYING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION	共著	International Symposium on Advances in Technology Education (2013)	T.Shirai, A.Ito, T.Kusaka, S.Ishihara, T.Aoyama, H.Minoura, S.Morikawa and K.Ise
Masaki Uchida	Study on rehabilitation training support system	単著	International conference of Global Network for Innovative TEchnology 2013(2013,12)	Masaki Uchida
打田正樹	2012 年高専ロボコン出場ロボット「エンペラー」の開発	共著	第31回日本ロボット学会学術講演会(2013,9)	磯村英和，打田正樹
打田正樹	上肢リハビリ支援システムのためのアームレス移動型ロボットの開発	共著	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2013(2013,5)	坂倉和樹，打田正樹
打田正樹	直接操作型柔軟物搬送システムのための制振制御	共著	リニアドライブ研究会 (2013,2)	落合祥平，打田正樹
打田正樹	自動車エンジン用電磁駆動バルブの位置決め制御	共著	リニアドライブ研究会 (2013,2)	伊丹翔一，打田正樹
鬼頭みずき	共鳴噴流の流動特性と切欠きノズルによる制御	共著	日本機械学会論文集，79-798B, pp. 126-139, 2013	社河内敏彦，鬼頭みずき，辻本公一，安藤俊剛
鬼頭みずき	Resonance Jet Flow from Notched Orifice Nozzle	共著	International Conference on Jets, Wakes and Separated Flows (ICJWSF), 2013	Kito, M., Shakouchi, T., Tsujimoto, K., Ando, T.
鬼頭みずき	オイルフィルム法を用いた壁面せん断応力の測定	共著	日本設計工学会・2013 年度秋季大会研究発表講演会講演論文集, 2013	鬼頭みずき，近藤邦和
南部紘一郎	粒子衝突現象の有限要素シミュレーション	共著	第3回日本熱処理中部支部講演会	南部紘一郎 小園達矢
南部紘一郎	微粒子衝突処理の表面改質効果に及ぼす投射ガスの影響	共著	第3回日本熱処理中部支部講演会	花村洸樹 南部紘一郎
南部紘一郎	コールドスプレー粒子の付着現象の数値解析	共著	第3回日本熱処理中部支部講演会	坂本篤治 南部紘一郎 埜克己 福本昌弘
南部紘一郎	微粒子衝突処理における単一粒子の粒子衝突解析	単著	鈴鹿高専紀要第46巻	南部紘一郎
南部紘一郎	微粒子衝突処理によるアルミニウム合金 A5056 のナノ結晶創製	共著	平成25年度日本熱処技術協会春季講演会	清水雄紀 南部紘一郎

所属 氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
南部紘一郎	有限要素法を用いた粒子衝突処理における粒子衝突現象の解明	単著	トライボロジー会議 2013 秋福岡	南部紘一郎
南部紘一郎	粒子衝突処理を用いた微細結晶組織創製に影響を及ぼす因子の解明	共著	平成 25 年度日本熱処理技術協会秋季講演会	南部紘一郎 清水雄紀
南部紘一郎	直径 10 μ m の微細粒子を用いたピーニングによるアルミニウム合金 A5056 の疲労特性改善	共著	M&Mカンファレンス 2013	中村裕紀 菊池将一 南部紘一郎 安藤正文

所属氏名	著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
電気電子工学科 大津孝佳	Reduction of Coupled Voltage of Power Cable with Electro-static Countermeasure	共著	2012 Asia-Pacific Symposium on Electromagnetic Compatibility (APEMC 2013), Melbourne, Australia	Takayoshi Ohtsu, Yusaku Kobayashi, Hideyuki Doyama, Shogo Imai, Kentaro Hayashida, Shunsuke Okada, Yorioki Matsumoto
大津孝佳	導電性ポリカーボネート樹脂の放電特性と放射電磁波	共著	静電気学会学術講演会 2013	大津孝佳, 堂山英之, 鷺坂功一
大津孝佳	鈴鹿高専に於ける知的財産活動	単著	第9回 TRIZ シンポジウム, 日本 TRIZ 協会	大津孝佳
大津孝佳	ESD Study on discharge current and radiated electromagnetic wave with conductive polycarbonate composite resin	共著	EOS/ESD Symposium for Factory Issues 2013, ESD Association, Penang Malasia	Takayoshi Ohtsu, Hideyuki Doyama, Yusaku Kobayashi, Kouichi Sagisaka, Taichi Shirayama
大津孝佳	導電性ポリカーボネート樹脂の放電特性と放射電磁波	共著	ESD シンポジウム、日本電子部品信頼性センタ(2013)	大津孝佳, 堂山英之, 鷺坂 功一, 白山 太一
大津孝佳	ESD ガン印加時の保護素子の効果と電子デバイスへの影響	共著	ESD シンポジウム、日本電子部品信頼性センタ(2013)	大津孝佳, 堂山英之
大津孝佳	ポリマー導電材料を用いたケーブルの摩擦帯電及び誘導帯電による放電ノイズの低減	共著	第10回宇宙環境シンポジウム, JAXA	大津孝佳, 堂山英之, 松本頼興
大津孝佳	みえサイエンスネットワークによる未来産業人材育成ー地域自治体・地域企業・高等教育機関の連携で育てる未来の科学者・技術者ー	共著	東海工学教育協会 高専部会シンポジウム	大津孝佳, 坪克己, 益川賢市, 生川和美, 奥田一雄, 山田伊智子, 万谷義和, 山崎賢二, 下野晃, 船越邦夫, 兼松秀行, 末次正寛, 白井達也, 打田正樹, 山口雅裕, 平井信充, 平野武範, 板谷年也, 伊東真由美, 中川元斗, 山田太, 鈴木昌一, 中村勇志, 真伏利史, 西森睦和, 坂井崇, 林 幸雄, 松岡守, 後藤太一郎, 加藤進, 松井純, 上井大輔, 山下晃司, 山田晶
川口雅司	Analog Learning Neural Network using Two-Stage Mode by Multiple and Sample Hold Circuits,	共著	Studies in Computational Intelligence, Volume 493, Springer, chapter 12, pp159-170(2013)	Masashi Kawaguchi, Takashi Jimbo, and Naohiro Ishii
川口雅司	Vector Generation and Operation in Neural Networks	共著	Lecture Notes in Computer Science Volume 7824, pp 10-19(2013)	Naohiro Ishii, Toshinori Deguchi, Masashi Kawaguchi, Hiroshi Sasaki
川口雅司	Vector Operations in Neural Network Computations	共著	International Journal of Software Innovation, 1(2), 40-52, April-June 2013	Naohiro Ishii, Toshinori Deguchi, Masashi Kawaguchi, Hiroshi Sasaki

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
川口雅司	Vector Operations in Neural Networks Computations	共著	2013 14th ACIS International Conference on Software Engineering, Artificial Intelligence, Networking and Parallel/Distributed Computing (SNPD), pp450-456,(2013)	Naohiro Ishii, Toshinori Deguchi, Masashi Kawaguchi, Hiroshi Sasaki
川口雅司	スウェーデンゲームの実施とその教育効果について	共著	第 23 回インテリジェント・システム・シンポジウム (FAN2013),pp54-57(2013)	川口雅司， 渥美清隆， 馬場則夫
川口雅司	学習オートマトン並びにソフトコンピューティング技術を活用した意思決定支援システムの構築に関する新しい取り組み	共著	第 23 回インテリジェント・システム・シンポジウム (FAN2013),pp50-53(2013)	馬場則夫， 川口雅司
辻琢人	シリコン太陽電池作製実験教材の構築	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台	井頭卓也， 蜂谷海， 上田和成， 長岡史郎， 若原昭浩
辻琢人	CS-MBE 法によるサファイア基板への GaN 薄膜の形成の試み	共著	平成 24 年度電子情報通信学会東海支部卒業研究発表会	喜多一平
辻琢人	作製プロセスを簡略化した Si 太陽電池の作製実験教材の構築	共著	平成 24 年度電子情報通信学会東海支部卒業研究発表会	井頭卓也
辻琢人	作製プロセスを簡略化した Si 太陽電池の作製実験教材の構築	共著	平成 24 年度分豊橋技術科学大学高専連携教育研究プロジェクト学生成果報告会	富田昌吾
辻琢人	シリコン太陽電池作製実験教材の地域貢献事業及び国際交流事業への展開	共著	平成 25 年度工学教育研究講演会・第 61 回年次大会， pp.122-123	長岡史郎， 若原昭浩， 井頭卓也
辻琢人	作製プロセスを簡略化したシリコン太陽電池作製実験教材の開発	共著	第 154 回教育工学研究会	富田昌吾， 長岡史郎， 若原昭浩
辻琢人	A Study for PBL Type Semiconductor Device Education using P-N Junction Prepared by the Simplified Simultaneous Phosphorus and Boron Diffusion	共著	7th International Symposium on Advances in Technology Education, pp.209-214	S. Nagaoka, R. Takahashi, A. Wakahara
辻琢人	固相拡散源を用いたシリコン太陽電池の作製と評価	共著	高専-TUT 太陽電池シンポジウム	前田一真， 富田昌吾， 柳田健介， 山下雄也
西村一寛	導入教育としての磁石教材ー球磁石からなる 3 次元磁石パズルー	共著	鈴鹿高専紀要, Vol.46, p.51-55 (2013).	西村一寛， 篠原雅史
西村一寛	フェライトナノ粒子凝集体の合成とその特性	共著	東京工業大学 応用セラミックス研究所 共同利用研究報告書, No.17, p.153-155 (2013).	西村一寛， 松下伸広
西村一寛	フェライト微粒子凝集体の室温合成とミリングによる色変化	共著	第 154 回教育工学研究会 (2013 年 9 月 7 日), 大同大学.	杉野弘幸， 西村一寛

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
西村一寛	積層された磁性板の磁場制御アシスト分離技術の開発	単著	第 37 回日本磁気学会学術講演会(2013 年 9 月 3-6 日)，北海道大学, 3pD-5, p.74.	西村一寛
西村一寛	小型風力発電機の特性調査と環境発電の応用	共著	第 153 回教育工学研究会(2013 年 3 月 23 日)，大同大学	浅井宏昭，西村一寛
柴垣寛治	PLD 法による形状記憶合金薄膜の薄膜形成に関する研究	共著	平成 24 年度日本技術士会中部本部修習技術者研究業績発表会 (2013 年 2 月)	青山剛士，上瀧雅己，柴垣寛治
柴垣寛治	PLD 法によるシート基板上への合金薄膜成膜	共著	平成 25 年度電気関係学会東海支部連合大会 (2013 年 9 月)	上瀧雅己，青山剛士，柴垣寛治
柴垣寛治	Synthesis and characterization of Ti-Ni shape memory alloy thin films by pulsed laser deposition	共著	Applied Physics A., Vol. 110, Issue 4 (2013) pp.805-808	K. Shibagaki, K. Kawano, A. Mori
柴垣寛治	飛行時間型質量分析装置におけるイオン軌道の解析	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要，第 46 巻，(2013) pp.57-63	柴垣寛治，青山剛士
柴垣寛治	マルチチャンネル分光器を用いた PLD 成膜プロセス診断の検討	共著	日本高専学会誌，Vol. 18, No. 3 (2013) pp.35-40	柴垣寛治，川野晃太
柴垣寛治	海外に目を向ける学生を育てるには	単著	東海工学教育協会高専部会国際化教育の現状と課題シンポジウム概要集 (2013) pp.25-26	柴垣寛治
柴垣寛治	小特集「大気圧非熱プラズマを活用した環境保全技術の新展開」	共著	プラズマ・核融合学会誌 第 89 巻 3 号 (2013) pp.137-169	大久保雅章，栃久保文嘉，水野彰，藤島英勝，大塚馨一，清水一男，西川和男，柴垣寛治
山田伊智子	Phthalocyanine with Trifluoroethoxy Substituents for Organic Solar Cells	共著	Seventh International conference on Molecular Electronics and	Ichiko Yamada, Norihito Iida, Yasuhiko Hayashi, Tetsuo Soga and Norio Shibata

所属 氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
電子情報工学科 井瀬潔	A CASE REPORT ON APPLING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION. A CASE REPORT ON APPLING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION.	共著	Proc. of Int. Symp. on Advances in Technology Education ISATE, Nara (2013. 9)	T. Shirai, A. Ito, T. Kusaka, S. Ishihara, T. Aoyama, H. Minoura, S. Morikawa and K. Ise
井瀬潔	公開講座「Arduino で LED を制御 しよう！」の実施	共著	計測自動制御学会 中部支 部 教育工学研究委員会 教育工学論文集, VOL. 36, pp.14-16 (2013).	伊藤明，井瀬潔，柴田勝久， 森育子，平野武範，板谷年也， 西村吉弘，森岡晶子
飯塚昇	ASIC Implementation of Multimode Frequency Domain Equalizer for Heterogeneous Wireless System	共著	IEEE International Symposium on Personal, Indoor and Mobile Radio Communications PIMRC'13	Y. Miyake, K. Komatsu, H. Oguma, N. Izuka, S. Kameda, M. Iwata, N. Suematsu, T. Takagi, and K. Tsubouchi
伊藤明	A systematic muscle model covering regions from the fast ramp stretches in the muscle fibres to the relatively slow stretches in the human triceps surae.	共著	Taylor & Francis Online, Computer Methods in Biomechanics and BiomedicalEngineering (2013 Apr 29) ,Epub DOI:10.1080/10255842.2013. 790016	Y.Tamura, A.Ito, and G.A.Cresswell
伊藤明	ヒト上腕二頭筋の低周波粘弾性 測定	共著	ロボティクス・メカトロニク ス講演会 2013 予稿集 p.115, 筑波(2013,5)	伊藤明，堀内亮，平山敦基， 田村陽次郎
伊藤明	A CASE REPORT ON APPLING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION.	共著	Proc. of Int. Symp. on Advances in Technology Education ISATE , Nara (2013. 9)	T.Shirai, A.Ito, T.Kusaka, S.Ishihara, T.Aoyama, H.Minoura, S.Morikawa and K.Ise
伊藤明	公開講座「Arduino で LED を制御 しよう！」の実施	共著	計測自動制御学会中部支部， 教育工学論文集，Vol.36， pp.14-16(2013).	伊藤明，井瀬潔，柴田勝久， 森育子，平野武範，板谷年也， 西村吉弘，森岡昌子
田添丈博	意味関連辞書構築のための単語 間関連度収集手法の検討	共著	言語処理学会第 19 回年次大 会，P5-10 (2013 年 3 月)	後藤慎也，鈴木良生，田添丈 博
田添丈博	過去の試合結果を基に動作する コンピュータプレイヤー～盤面デ ータの分割～	共著	平成 25 年度電気関係学会東 海支部連合大会，N2-5 (2013 年 9 月)	佐熊裕介，田添丈博
田添丈博	情報オリンピックへの参加	共著	計測自動制御学会中部支部， 教育工学論文集，VOL.36， pp.38-40 (2013 年 12 月)	田添丈博，箕浦弘人，青山俊 弘，浦尾彰，西村吉弘，桑原 裕史
田添丈博	競技プログラミングを活用した コーディング教育	共著	電子情報通信学会，技術者教 育と優良実践研究会，第 19 回研究会 (2013 年 12 月)	田添丈博，青山俊弘，箕浦弘 人，浦尾彰，西村吉弘，森川 哲

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
箕浦弘人	空間投影型 AR による歩行者用ナビゲーションシステムのユーザビリティの改善	単著	第 18 回日本バーチャルリアリティ学会大会論文集 (2013.9)	箕浦弘人
箕浦弘人	A CASE REPORT ON APPLING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION	共著	Proc. of Int. Symp. on Advances in Technology Education ISATE, Nara (2013. 9)	T. Shirai, A. Ito, T. Kusaka, S. Ishihara, T. Aoyama, H. Minoura, S. Morikawa and K. Ise
青山俊弘	Preliminary Results for Discovering Related Words from Logs of Scholarly Repositories	共著	Proceedings of IIAI International Conference on Advanced Information Technologies (CDROM)	Takehiro Shiraishi, Toshihiro Aoyama, Kazutsuna Yamaji, Takao Namiki, and Daisuke Ikeda
青山俊弘	A CASE REPORT ON APPLING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION.	共著	Proc. of Int. Symp. on Advances in Technology Education ISATE, Nara (2013. 9)	T. Shirai, A. Ito, T. Kusaka, S. Ishihara, T. Aoyama, H. Minoura, S. Morikawa and K. Ise
青山俊弘	The Candida glabrata sterol scavenging mechanism, mediated by the ATP-binding cassette transporter Aus1p, is regulated by iron limitation.	共著	Molecular microbiology	Nagi M, Tanabe K, Ueno K, Nakayama H, Aoyama T, Chibana H, Yamagoe S, Umeyama T, Oura T, Ohno H, Kajiwarara S, Miyazaki Y
青山俊弘	SarabiWEKO: Metadata class management system for WEKO repository	共著	2nd International Conference on Academic Library	Toshihiro Aoyama, Kazutsuna Yamaji, Daisuke Ikeda, Takao Namiki
青山俊弘	機関リポジトリコンテンツの多面的な学内利用フレームワークの提案と実装	共著	情報知識学会誌	青山俊弘，山地一禎，池田大輔，行木孝夫
青山俊弘	第一学年を対象とした電子情報工学実験の改善	共著	高専教育	浦尾彰，長嶋孝好，青山俊弘，森育子，西村吉弘，森岡晶子
青山俊弘	Automatic reproduce metadata from the log of HTTP server	共著	8th International Conference on Open Repositories	Toshihiro Aoyama, Yuta Suzuki, Kazutsuna Yamaji
青山俊弘	A mash-up of a Japanese Open Repository and a Researcher CV Platform	共著	8th International Conference on Open Repositories	Kazu Yamaji, Toshihiro Aoyama, Satoru Bannai, Noriko Arai
板谷年也	移動導体に対向配置された方形コイル周辺の磁界解析とスラブ材の異常診断への応用	単著	山口大学大学院理工学研究科，博士論文	板谷年也
板谷年也	方形コイル系を用いた渦電流速度計の特性解析	共著	電気学会論文誌 A， Vol.133, No.8, pp.416-423 (2013)	板谷年也，石田浩一，田中章雄，武平信夫，山本節夫
板谷年也	駅前キャンパス「鈴鹿高専みんなの理科教室」の取り組み	共著	計測自動制御学会中部支部，教育工学論文集， Vol. 36 pp.1-3 (2013)	板谷年也，中川元斗，南部紘一郎，柴垣寛治，下野晃，伊東真由美，幸後健，吉田茂太，桑原裕史

所属 氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
板谷年也	公開講座「Arduino で LED を制御しよう!」の実施	共著	計測自動制御学会中部支部， 教育工学論文集， Vol. 36 pp.14-16 (2013)	伊藤明，井瀬潔，柴田勝久， 森育子，平野武範，板谷年也， 西村吉弘，森岡晶子
浦尾彰	第一学年を対象とした電子情報 工学実験の改善	共著	高専教育，Vol.36, pp.1-6.	浦尾彰・長嶋孝好・青山俊弘・ 森育子・西村吉弘・森岡晶子
浦尾彰	個別化教授システムを基礎とし た工学実験の実践	共著	高専教育，Vol.36, pp.73-38.	浦尾彰・西村吉弘・森岡晶子・ 川瀬雅人
浦尾彰	対話エージェントを利用した Web 学習における感情状態の研 究：性別要因に着目した検討	共著	ヒューマンインタフェース 学会論文誌，Vol.15, No.3, pp. 209-218.	林勇吾・浦尾彰
浦尾彰	情報オリンピックへの参加	共著	教育工学論文集，Vol.36, pp. 38-40.	田添丈博・箕浦弘人・青山俊 弘・浦尾彰・西村吉弘・桑原 裕史

所属氏名	著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
生物応用化学科 生貝初	脂質単分子膜上での毒素タンパク質による孔形成挙動	共著	オレオサイエンス, 13 巻, pp.441-446, 2013.	大石祐司, 生貝初
生貝初	Patents for Antibacterial Metallic Coating and Its Future Trend in Japan	共著	Research Inventy: International Journal Of Engineering And Science, Vol.3, No.6, pp.47-55, 2013.	Hideyuki Kanematsu, Hajime Ikegai and Michiko Yoshitake
生貝初	緑膿菌のバイオフィーム形成における金属の作用	共著	第 8 6 回日本細菌学会総会、千葉幕張、2013 年 3 月	神崎拓也、生貝初
生貝初	コレラ菌溶血毒の溶血作用と毒素分子内レクチンドメインの糖認識の関係	共著	第 8 6 回日本細菌学会総会、千葉幕張、2013 年 3 月	高村永梨奈、島村忠勝、生貝初
生貝初	緑膿菌バイオフィームを用いた微生物腐食モデル	単著	第 2 7 回 Bacterial Adherence and Biofilm、学際シンポジウム バイオフィーム：私たちがとりまく環境と健康との関わり、東京、2013 年 7 月	生貝初
生貝初	緑膿菌バイオフィームの形成制御	共著	日本防菌防黴学会 第 4 0 回年次大会、豊中、2013 年 9 月	生貝初、神崎拓也
生貝初	バイオフィーム形成過程の水中 AFM 観察に向けた基礎的検討	共著	日本防菌防黴学会 第 4 0 回年次大会、豊中、2013 年 9 月	平井信充、兼松秀行、生貝初
生貝初	鉄鋼材料表面における緑膿菌のバイオフィーム形成とその制御	共著	日本鉄鋼協会 第 1 6 6 回秋季講演大会 微生物が促進する鉄鋼材料の腐食自主フォーラム「微生物が促進する鉄鋼材料の腐食」、金沢、2013 年 9 月	生貝 初、永井直宏、川村文夫
澤田善秋	Kinetics Study on Hydrolysis of Toluenesulfonic Acid	共著	The 9th World Congress of Chemical Engineering(WCCE9), Seoul, Korea,4 pages(2013)	Yoshiaki Sawada, Shinya Yodoya, Yuya Mizutani and Jennifer Chia Wee Fern
澤田善秋	トルエンスルホン酸の加水分解における速度論的考察	共著	第 18 回高専シンポジウム (仙台)講演要旨集,p97(2013)	澤田善秋, 水谷友哉, 淀谷真也
平井信充	リグニンからの鉛電池負極添加剤	共著	リグニン利用の最新動向, シーエムシー出版, (2013), pp.176-180.	平井信充 (分担執筆)
平井信充	バイオフィームによる水中クロムイオンの選択的捕捉	共著	CAMP-ISIJ, Vol.26, (2013) pp.666-667.	平井信充, 杉田大地, 兼松秀行
平井信充	各種材料上に形成されるバイオフィームの新しい評価分析解析手法	共著	CAMP-ISIJ, Vol.26, (2013) pp.664-665.	兼松秀行, 平井信充, 三浦陽子, 伊藤日出生, 萩野唯, 田中美穂
平井信充	電気炉スラグを含むモルタルの生物付着評価	共著	CAMP-ISIJ, Vol.26, (2013) pp.662-663.	増田智香, 兼松秀行, 平井信充, 黒田大介, 横山誠二, 田中美穂

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
平井信充	実験室中において形成されるバイオフィームにおけるいくつかの金属の濃縮について	共著	CAMP-ISIJ, Vol.25, (2013) pp.417.	兼松秀行，大倉優太，平井信充，三浦陽子，伊藤日出生，田中美穂
平井信充	Various Metals from Water by Biofilm from an Ambient Germs in a Reaction Container	共著	Proceedings of Materials Science and Technology (MS&T) 2013, (2013), pp.2154-2161.	Hideyuki Kanematsu, Nobumitsu Hirai, Yoko Miura, Miho Tanaka, Takeshi Kogo, Hideo Itho
平井信充	Biofilm Leading to Corrosion on Materials Surfaces and the Moderation by Alternative Electro-magnetic Field	共著	Proceedings of Materials Science and Technology (MS&T) 2013, (2013), pp.2761-2767.	Hideyuki Kanematsu, Nobumitsu Hirai, Yoko Miura, Hideo Itoh, Daisuke Kuroda, Senshin Umeki
平井信充	バイオフィーム形成過程の水中 AFM 観察に向けた基礎的検討	共著	日本防菌防黴学会第 40 回年次大会要旨集, (2013) pp.104.	平井信充，兼松秀行，生貝初
平井信充	無機硫酸塩を添加した硫酸電解液中における鉛電極のサイクリックボルタモグラム測定	共著	2013 年電気化学秋季大会講演要旨集, 1L01, (2013) pp.203.	平井信充，山本唯
平井信充	鉛電極のサイクリックボルタモグラムに及ぼす有機カチオンの添加効果	共著	2013 年電気化学秋季大会講演要旨集, 2N26, (2013) pp.281.	平井信充，小林俊介
平井信充	Acquisition of metal ions in water by biofilm	共著	Materials Science and Technology (MS&T) 2013, (2013).	Nobumitsu Hirai, Hideyuki Kanematsu
平井信充	Fundamental study for in-situ observation of biofilm in water by means of AFM	共著	Materials Science and Technology (MS&T) 2013, (2013).	Nobumitsu Hirai, Takafumi Kanata, Masanori Suzuki, Shigeru Katsuyama, Toshihiro Tanaka, Hideyuki Kanematsu
平井信充	硫酸水溶液中における鉛電極の電気化学的挙動に及ぼすアルカリ金属イオンの添加効果	共著	第 37 回電解技術討論会－ソーダ工業技術討論会－講演要旨集, (2013) pp.84-87.	平井信充，山本唯
平井信充	硫酸水溶液中における鉛電極の酸化還元過程における各種官能基を導入した修飾リグニンの添加効果	共著	第 37 回電解技術討論会－ソーダ工業技術討論会－講演要旨集, (2013) pp.88-91.	平井信充，中原郁実，眞柄謙吾
平井信充	鉛電池の正極負極反応に及ぼす有機カチオンの添加効果に関する基礎的研究	共著	第 45 回溶融塩化学討論会講演要旨集, 1A18, (2013) pp.35-36.	平井信充，小林俊介
平井信充	Cyclic Voltammetry of Lead Electrodes in Sulfuric Acid Solution Containing Various Inorganic Sulfates	共著	The 7th Asian Conf. on Electrochemical Power Sources (ACEPS7), 1P-29, (2013), pp.93.	Nobumitsu Hirai, Yui Yamamoto
平井信充	材料表面に付着した微生物およびバイオフィームの原子間力顕微鏡 (AFM) 観察	単著	微生物腐食研究若手会 第一回セミナー	平井信充

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
平井信充	バイオフィルム可視化技術の現状と将来展望	単著	(社)日本鉄鋼協会フォーラム"自然環境中の鉄鋼材料の劣化と微生物の役割"第5回フォーラム	平井信充
平井信充	水中でものの表面を拡大して見てみよう	単著	みえアカデミックセミナー2013	平井信充
高倉克人	Spontaneous Transformation from Micelle to Vesicle Associated with Sequential Conversions of Comprising Amphiphiles within Assemblies	共著	Chemical Communications, DOI:10.1039/C3CC47786J	Katsuto Takakura, Takahiro Yamamoto, Kensuke Kurihara, Taro Toyota, Kiyoshi Ohnuma, Tadashi Sugawara
高倉克人	ハロアルカンの添加に引き起こされるピリジンボロン酸の自己集合	共著	日本化学会第93回春季年会(2PB-125)	小坂恭平，水野裕介，高倉克人
高倉克人	双性イオン型両親媒性分子の合成とベシクル形成	共著	日本化学会第93回春季年会(2PC-162)	大倉優作，栗原顕輔，豊田太郎，高倉克人，鈴木健太郎，菅原正
高倉克人	水中での両親媒性分子間イミン交換反応に対するボロン酸誘導体の触媒能	共著	第18回高専シンポジウム(A2-38)	久野友梨亜，北村優衣，高倉克人
高倉克人	両親媒性分子間長鎖アミン転移に関連付けられる会合体の形態変換	共著	第24回基礎有機化学討論会(3C06)	高倉克人，栗原 顕輔，豊田太郎，菅原正
高倉克人	カルボン酸とイミダゾリウムを有する双性イオン型両親媒性分子によるジャイアントベシクルの形成とその表面電荷	共著	第24回基礎有機化学討論会(1P078)	大倉優作，栗原顕輔，豊田太郎，高倉克人，景山義之，鈴木健太郎，菅原正
高倉克人	両親媒性分子間長鎖アルキルアミン転移反応に誘引される会合体の形態変化	共著	第64回コロイドおよび界面化学討論会(P029)	高倉克人，久野友梨亜，古川愛
高倉克人	半経験的分子軌道計算ソフトウェア「Scigress MO Compact」の座学への適用	単著	鈴鹿高専紀要第46巻(2013) p. 77	高倉克人
山口雅裕	Regulation of red blood cell transition from larval to adult type during anuran metamorphosis	共著	46th Annual meeting for the Japanese society of developmental biologist	Masahiro Yamaguchi, Yui Kawaguchi, Iyo Matsuda, Tsutomu Kinoshita
山口雅裕	メダカ仔魚を用いた in vivo での亜鉛イオンの生体毒性評価	共著	第166回鉄鋼協会秋季講演大会	大平麻由佳，甲斐穂高，中川元斗，山口雅裕
山口雅裕	メダカ仔魚を用いたリチウムの生体影響評価	共著	第166回鉄鋼協会秋季講演大会	甲斐穂高，山口雅裕，中川元斗，石橋康弘
山口雅裕	ツメガエルと陸生種における赤血球転換タイミングの比較解析	共著	日本動物学会第84回大会	山口雅裕，川口唯，山川菜摘，木下勉

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
淀谷真也	Kinetics Study on Hydrolysis of Toluenesulfonic Acid	共著	The 9th World Congress of Chemical Engineering(WCCE9), Seoul, Korea,4 pages(2013)	Yoshiaki Sawada, Shinya Yodoya, Yuya Mizutani and Jennifer Chia Wee Fern
淀谷真也	トルエンスルホン酸の加水分解における速度論的考察	共著	第 18 回高専シンポジウム(仙台)講演要旨集,p97(2013)	澤田善秋，水谷友哉，淀谷真也
淀谷真也	4-Vinylbenzylamine を開始剤として用いた PBLG マクロモノマーの合成	共著	第 18 回高専シンポジウム(仙台)講演要旨集,p72(2013)	淀谷真也，宮前由里香
淀谷真也	2-Vinylpropylamine を開始剤に用いた PBLG マクロモノマーの合成と重合	共著	第 18 回高専シンポジウム(仙台)講演要旨集,p73(2013)	淀谷真也，ウォン シ ギー
淀谷真也	Cyclopropylamine を開始剤に用いた PBLG マクロモノマーの合成と重合	共著	第 18 回高専シンポジウム(仙台)講演要旨集,p74(2013)	淀谷真也，竹田真里江
淀谷真也	Furfurylamine を開始剤として用いた PBLG マクロモノマーの合成と重合	共著	第 18 回高専シンポジウム(仙台)講演要旨集,p75(2013)	淀谷真也，森優也
甲斐穂高	バイオマスプラント設置場所選定のための LCA 評価	共著	第 8 回日本 LCA 学会研究発表会（草津）	甲斐穂高、大田政史、上田和音、中道隆広、石橋康弘
甲斐穂高	臭素酸電解水製造装置の開発と評価に関する研究	共著	環境科学会 2013 年会(静岡)	甲斐穂高，森美由貴，中道隆広，石橋康弘
甲斐穂高	廃石膏ボードを用いたホウ素吸着素材研究	共著	環境科学会 2013 年会(静岡)	圓福康平，下高敏彰，泉哲也，大場和彦，甲斐穂高，石橋康弘，中道隆広
甲斐穂高	熱処理と微生物処理における有機性廃棄物の可溶化効果	共著	環境科学会 2013 年会(静岡)	山崎祐史，下高敏彰，泉哲也，大場和彦，甲斐穂高，石橋康弘，中道隆広
甲斐穂高	バイオマス資源の熱挙動における重量解析	共著	環境科学会 2013 年会(静岡)	中道隆広，村上信明，石橋康弘，大場和彦，甲斐穂高，下高敏彰，泉哲也
甲斐穂高	メダカ仔魚を用いたリチウムの生体影響評価	共著	第 166 回鉄鋼協会秋季講演大会（金沢）	甲斐穂高、山口雅裕、中川元斗
甲斐穂高	メダカ仔魚を用いた in vivo での亜鉛イオンの生体毒性評価	共著	第 166 回鉄鋼協会秋季講演大会（金沢）	大平麻由佳、甲斐穂高、中川元斗、山口雅裕
甲斐穂高	メダカ仔魚を用いた共存イオン存在下での金属の生体影響評価について	共著	第 24 回廃棄物資源循環学会研究発表会（札幌）	甲斐穂高、大田政史、中道隆広、山口雅裕、石橋康弘
甲斐穂高	臭素酸電解水の化学的性質と殺菌評価について	共著	第 24 回廃棄物資源循環学会研究発表会（札幌）	甲斐穂高，森美由貴，中道隆広，竹下哲史，石橋康弘

所属氏名	著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
材料工学科 井上 哲雄	東海工学教育協会高専部会の活動とその成果	共著	工学・工業教育研究講演会講演論文集, pp244-245, (2013.9) 新潟 日本工学教育協会	大石哲男, 井上哲雄, 稲葉盛基, 伊東孝, 勝山智男,
宗内篤夫	PEFC におけるカソード合金触媒の研究	共著	第 18 回高専シンポジウム 1 P26	草分剛瑠、宗内篤夫
宗内篤夫	バリヤー放電における非鉛ガラス電極材料の研究	共著	第 22 回 日本オゾン協会 年次研究講演会	坂井亮介、宗内篤夫
宗内篤夫	Prolongation of life of high temperature proton exchange	共著	J.Power Sources, 査読あり, 241, 87-93, 2013	Yuka Oono, Atsuo Sounai, Michio Hori,
宗内篤夫	燃料電池用ガス拡散シート用織物およびガス拡散シート	共著	特願 2013-157158,	吉野一郎 他
江崎尚和	産学官・地域連携によるものづくり技術者教育	共著	日本工学教育協会, 工学教育, 第 61 巻第 4 号, pp.66-71 (2013, 7)	森邦彦, 坂本英俊, 大淵慶史, 埜克己, 江崎尚和, 斎藤正美
兼松秀行	Study on Characteristic of Surgical Instruments.	共著	Journal of Mechanical Engineering and Automation, 2013. 3(2): p. 23-28.	Kobayashi, T., Hagiwara, H., Hashimoto, R., Takashina, T., Kanematsu, H., and Mizuta, K
兼松秀行	大気暴露式水循環装置中での金属酸化物表面に形成したバイオフィルムの評価法についての検討.	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 2013. 46: p. 81-84.	幸後健, 山本裕太, 内貴貴文, 荻野唯, 神崎拓也, 兼松秀行, 生貝初, 伊藤日出生
兼松秀行	実験室中において形成されるバイオフィルムにおけるいくつかの金属の濃縮について	共著	材料とプロセス, 2013. 26(1): p. 417	兼松秀行, 大倉裕太, 平井信充, 三浦陽子, 伊藤日出生, 田中美穂
兼松秀行	Study on Evaluation Methods for Mechanical Properties of Organic Semiconductor Materials.	共著	Journal of Physics: Conference Series, 2013. 433: p. 012009: 1-7.	Kobayashi, T., Yokoyama, T., Utsumi, Y., Kanematsu, H., and Masuda, T.
兼松秀行	Optimizing Structure of LED Light Bulb for Heat Transfer.	共著	Journal of Physics: Conference Series, 2013. 433: p. 012016: 1-6.	Kobayashi, T., Itami, D., Hashimoto, R., Takashina, T., Kanematsu, H., Mizuta, K., and Utsumi, Y.,
兼松秀行	Study on performance simulation of polymer electrolyte fuel cell for preventing degradation.	共著	Journal of Physics: Conference Series, 2013. 433: p. 012021: 1-9.	Kobayashi, T., Fukuda, T., Hashimoto, R., Kanematsu, H., and Utsumi, Y.
兼松秀行	Remote Sensing of Radiation Dose Rate by a Robot for Outdoor Usage.	共著	Journal of Physics: Conference Series, 2013. 433: p. 012030: 1-6.	Kobayashi, T., Doi, K., Kanematsu, H., Utsumi, Y., Hashimoto, R., and Takashina, T.
兼松秀行	Biofilm Formation Derived from Ambient Air and the Characteristics of Apparatus.	共著	Journal of Physics: Conference Series, 2013. 433: p. 012031: 1-6.	Kanematsu, H., Kougo, T., Kuroda, D., Ogino, Y., and Yamamoto, Y.

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
兼松秀行	Biofilm Formation and Evaluation for Spray Coated Metal Films on Laboratory Scale	共著	Thermal Spray 2013 - Innovative Coating Solutions for the Global Economy2013, ASM International: Busan, Republic of Korea. p. 520-525.	Kanematsu, H., T. Kogo, D. Kuroda, H. Itoh, and S. Kiriwara, ,
兼松秀行	Effect of Deposition and Strage Conditions on the Gas Permeability of SiOx Thin Films.	共著	Applied Mechanics and Materials, 2013. 378: p. 248-252.	Kobayashi, T., S. Kamikawa, Y. Itou, H. Kanematsu, and Y. Utsumi
兼松秀行	Patents for Antibacterial Metallic Coating and Its Future Trend in Japan	共著	Research Inventory: International Journal of Engineering and Science, Vol3, Issue 6 (August 2013), p.47-55	Hideyuki Kanematsu, Hajime Ikigai and Michiko Yoshitake
兼松秀行	US Students Carry Out Nuclear Safety Project in a Virtual Environment.	共著	Procedia Computer Science, 2013: p. 846-852.	Barry, Dana M., Kanematsu, Hideyuki, Fukumura, Yoshimi, Kobayashi, Toshiro, Ogawa, Nobuyuki, and Nagai, Hiroto, ,
兼松秀行	Eco Car Project for Japan Students As A Virtual PBL Class.	共著	Procedia Computer Science, 2013: p. 870-877.	Kanematsu, Hideyuki, Kobayashi, Toshiro, Ogawa, Nobuyuki, Barry, Dana M., Fukumura, Yoshimi, and Nagai, Hiroto, ,
兼松秀行	動物細胞の生理機能変化による亜鉛、ニッケルおよびクロム (IV) の検出への適用と有効金属濃度.	共著	材料とプロセス, 2013. 26: p. 644-646.	小川亜希子, 兼松秀行, 樋尾勝也, 玉内秀一
兼松秀行	ヒトマクロファージ様細胞株を用いたニッケルイオン認識機構の研究	共著	材料とプロセス, 2013. 26: p. 647-649.	玉内秀一, 奥野広教, 岩渕和也, 兼松秀行, 小川亜希子, 樋尾勝也
兼松秀行	普通鋼及びステンレス鋼スラグ溶出成分の化学的及び生物化学的特性評価.	共著	材料とプロセス, 2013. 26: p. 656-659.	高橋利幸, 横山誠二, 兼松秀行, 小川亜希子
兼松秀行	電気炉スラグを含むモルタルの生物付着評価.	共著	材料とプロセス, 2013. 材料とプロセス: p. 662-663.	増田智香, 兼松秀行, 平井信充, 黒田大介, 横山誠二, 田中美穂
兼松秀行	各種材料上に形成されるバイオフィルムの新しい評価分析解析手法	共著	材料とプロセス, 2013. 26: p. 664-665.	兼松秀行, 平井信充, 三浦陽子, 伊藤日出生, 荻野唯, 田中美穂
兼松秀行	バイオフィルムによる水中クロムイオンの選択的捕捉.	共著	材料とプロセス, 2013. 26: p. 666-667.	平井信充, 杉田大地, 兼松秀行
兼松秀行	Evaluation for Corrosion Resistance of Nano-Cluster Layer and Biofilm Formation.	共著	International Journal of Engineering Sciences & Research Technology, 2013. 2(9): p. 2424-2432.	Kanematsu, Hideyuki, Hihara, Takehiko, Ishihara, Tomoyuki, and Imura, Kyoki, Kogo Takeshi

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
兼松秀行	Metal Coated Glasses by Spurttering and Their Microfouling Properties.	共著	APIRC2013, Irigo, Aichi, Japan, Oct.24-25	T.Kougo, H.Kanematsu, N.Wada, T.Hihara, M.Minekawa, Y.Fujita
兼松秀行	Various Mortars for Anti-Fouling Purposes in Marine Environments	共著	APIRC2013, Irigo, Aichi, Japan, Oct.24-26	H.Kanematsu, T.Masuda, Y.Miura, N.Hirai, D.Kuroda, S.Yokoyama
兼松秀行	Comparison of Heat Transfer Performance among Solid, Hollow and Sodium Encapsulating Engine Valves	共著	APIRC2013, Irigo, Aichi, Japan, Oct.24-27	T. Kobayashi, I. Hashimoto, R. Hashimoto, T. Takashina, H. Kanematsu, K. Mizuta and Y. Utsumi
兼松秀行	Measuring the Deformation Characteristics of The Films for Flexible Organic Light Emission Diode	共著	APIRC2013, Irigo, Aichi, Japan, Oct.24-28	T. Kobayashi, J. Okamoto, Y. Utsumi, H. Kanematsu, and T. Masuda
兼松秀行	Optimizing Structure of LED Light Bulb for Heat Transfer (The 2nd Report)	共著	APIRC2013, Irigo, Aichi, Japan, Oct.24-29	T. Kobayashi, S. Ishikawa, R. Hashimoto, T. Takashina, H. Kanematsu, K. Mizuta and Y. Utsumi
兼松秀行	Research on Optimization of Cooling Structure of LED Element (The 2nd Report)	共著	APIRC2013, Irigo, Aichi, Japan, Oct.24-30	T. Kobayashi, Y. Sakate, R. Hashimoto, T. Takashina, H. Kanematsu, K. Mizuta and Y. Utsumi
兼松秀行	Emission characteristics of the organic EL device using a mixed layer of α -NPD and Alq3	共著	APIRC2013, Irigo, Aichi, Japan, Oct.24-31	T. Kobayashi, H. Ikeda, Y. Utsumi, H. Kanematsu and T. Masuda
兼松秀行	Fogged Glass by Biofilm Formation and Its Evaluation	共著	Proceedings of MS & T' 13 2013: Montreal, Quebec, Canada. p. 2427-2433.	Kanematsu, Hideyuki, Kogo, Takeshi, Itoh, Hideo, Wada, Noriyuki, and Yoshitake, Michiko
兼松秀行	ひずみを導入した金属材料への海洋生物の付着	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台, 第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集, p. 59 (2013).	横川さおり, 神崎拓也, 増田智香, 大原滉平, 生貝初, 兼松秀行, 黒田大介
兼松秀行	ひずみを導入した鉄鋼材料の耐食性の変化	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台, 第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集, p. 347 (2013).	大原滉平, 増田智香, 横川さおり, 兼松秀行, 黒田大介
兼松秀行	Various Metals from Water by Biofilm from an Ambient germs in a Reaction Container	共著	Materials Science and Technology2013: Montreal, Quebec, Canada. p. 2154-2161.	Kanematsu, Hideyuki, Hirai, Nobumitsu, Miura, Yoko, Tanaka, Miho, Kogo, Takeshi, and Itoh, Hideo
兼松秀行	Biofilm Leading to Corrosion on Material Surface and the Moderation by Alternative Electro-magnetic Field	共著	Materials Science and Technology (MS & T)2013: Monatreal, Quebec, Canada. p. 2761-2767.	Kanematsu, Hideyuki, Hirai, Nobumitsu, Miura, Yoko, Itoh, Hideo, Kuroda, Daisuke, and Umeki, Senshin

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
兼松秀行	Osaka University Students Use English to Carryout a Creative Engineering Project about Tsunamis.	共著	International Journal of Engineering Research & Technology (IJERT), 2013. 2(11): p. 3688-3694.	Barry, Dana M., Tanaka, Toshihiro, and Kanematsu, Hideyuki
兼松秀行	Alloy Plating by Heating Stacked Single Layers and the Possibility of its Application in the Future.	単著	Products Finishing, 2013. 78(3): p. 1-14.	H. Kanematsu
兼松秀行	Biofilm Formation on Polymer Materials by a Laboratory Acceleration Reactor	共著	International Symposium on EcoTopica Science '13 - Innovation for Smart Sustainable Society and AMDI-4 (The 4th International Symposium on Advanced Materials Development and Integration of Novel Structured Metallic and Inorganic Materials 2013, Nagoya University: Nagoya, Japan.	Kanematsu, Hideyuki, Itoh, Hideo, Miura, Yoko, Masuda, Tomoka, Kuroda, Daisuke, Hirai, Nobumitsu, Barry, Dana M., and McGrath, Paul B.
兼松秀行	Evaluation Technique for Biofilm Formed on Biomaterials	共著	International Symposium on Eco Topica Science '13 - Innovation for Smart Sustainable Society and AMDI-4 (The 4th International Symposium on Advanced Materials Development and Integration of Novel Structured Metallic and Inorganic Materials 2013: Nagoya University: Nagoya, Japan.	Kanematsu, Hideyuki, Hirai, Nobumitsu, Miura, Yoko, Itoh, Hideo, Masuda, Tomoka, and Kuroda, Daisuke
下古谷博司	マイクロ波加熱法によるタケ粉末液状化条件の検討	共著	電気化学会 技術・教育研究論文誌, Vol.20, No.2, pp.79-81 (2013)	下古谷博司, 衛藤昂, 北村静香, 下野晃
下古谷博司	高専ブランド小中学生向け理科・技術教材の開発と市販教材開発コンテストによる作品収集	共著	平成 25 年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表概要集, pp.427-428, 豊橋 (2013)	下古谷博司, 幸後健, 桑原裕史
下古谷博司	タケ粉末由来ポリウレタンフィルム of の性状	共著	第 18 回高専シンポジウム講演要旨集, pp.435, 仙台 (2013)	下古谷博司, 衛藤昂, 松岡巧弥, 水本瞳, 下野晃
下古谷博司	イオン液体中でのコメ粉の酸加水分解	共著	第 18 回高専シンポジウム講演要旨集, pp.436, 仙台 (2013)	下古谷博司, 海老宏明, 下野晃
下古谷博司	マイクロ波加熱法によるコメ粉の最適液状化条件の検討	共著	第 18 回高専シンポジウム講演要旨集, pp.437, 仙台 (2013)	下古谷博司, 水本瞳, 衛藤昂, 松岡巧弥, 下野晃
下古谷博司	オカラによるオーラミンの吸着除去	共著	第 18 回高専シンポジウム講演要旨集, pp.440, 仙台 (2013)	下古谷博司, 眞弓綾香, 下野晃

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
下古谷博司	固体酸触媒によるオカラ液状化条件の検討	共著	第 18 回高専シンポジウム講演要旨集，pp.441，仙台 (2013)	下古谷博司，松岡巧弥，水本瞳，下野晃
下古谷博司	Sr2+イオン吸着剤へのオカラの有効利用	共著	第 18 回高専シンポジウム講演要旨集，pp.442，仙台 (2013)	下古谷博司，阪野浩也，下野晃
南部智憲	その場小型パンチ試験による 5 族水素透過膜の延性－脆性遷移水素濃度（DBTC）解析	共著	日本金属学会誌，Vol. 77, No. 12 (2013) pp. 585-592.	松本佳久，湯川宏，南部智憲
南部智憲	Design of Nb-W-Mo alloy membrane for hydrogen separation and purification	共著	Journal of Alloys and Compounds, Vol. 580 (2013) pp. S391-S396.	K.Tsuchimoto, H.Yukawa, T.Nambu, Y. Matsumoto, Y. Murata
南部智憲	Hydrogen solubility and permeability of V-W-Mo alloy membrane for hydrogen separation and purification	共著	Journal of Alloys and Compounds, Vol. 580 (2013) pp. S386-S390.	H.Yukawa, C.Tsukada, T.Nambu, Y.Matsumoto
南部智憲	Design and Development of Nb-W-Mo Alloy Membrane for Hydrogen Separation and Purification	共著	Defect and Diffusion Forum Vol. 333 (2013) pp. 61-71.	H.Yukawa, T.Nambu, Y.Matsumoto
南部智憲	バナジウム水素透過膜の水素透過能に及ぼす表面構造の影響	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部，第 23 回学生による材料フォーラム概要集 (2013) p. 133.	松下和樹，南部智憲
南部智憲	超高純度水素製造に向けたバナジウム膜の最適水素透過条件	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部，第 23 回学生による材料フォーラム概要集 (2013) p. 134.	藤井千裕，南部智憲
南部智憲	Pd-Ag 系水素透過合金膜の耐久性に及ぼす遷移金属元素の添加効果	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部，第 23 回学生による材料フォーラム概要集 (2013) p. 135.	平岡孝由貴，南部智憲
南部智憲	水素の化学ポテンシャルに基づくニオブ系合金膜の水素易動度の定量評価	共著	日本金属学会講演大会概要集，2013 年春期講演大会（第 152 回） p. 34.	湯川宏，南部智憲，松本佳久
南部智憲	Pd 完全フリーバナジウム膜の水素透過能に及ぼす負荷水素圧力および水素純度の影響	共著	日本金属学会講演大会概要集，2013 年春期講演大会（第 152 回） p. 36.	鬼頭知宏，有馬義貴，南部智憲
南部智憲	Pd 完全フリーバナジウム膜の耐久性に及ぼす熱処理の影響	共著	日本金属学会講演大会概要集，2013 年春期講演大会（第 152 回） p. 37.	有馬義貴，鬼頭知宏，南部智憲
南部智憲	タンタル水素透過膜の延性-脆性遷移水素濃度（DBTC）解析	共著	日本金属学会講演大会概要集，2013 年春期講演大会（第 152 回） p. 38.	松本佳久，湯川宏，南部智憲

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
南部智憲	高機能水素透過合金の設計開発と水素製造技術への展開	共著	日本金属学会講演大会概要集, 2013 年秋期講演大会 (第 153 回) p. S5・24.	南部智憲, 湯川宏, 松本佳久
南部智憲	Pd-Ag 系水素透過合金膜の耐久性および水素透過能に及ぼす遷移金属元素の添加効果	共著	日本金属学会講演大会概要集, 2013 年秋期講演大会 (第 153 回) p. S5・24.	有馬義貴, 南部智憲
南部智憲	Pd コーティングフリーバナジウム膜の水素透過能に及ぼす水素透過条件の影響	共著	日本金属学会講演大会概要集, 2013 年秋期講演大会 (第 153 回) p. S5・24.	鬼頭知宏, 南部智憲
和田憲幸	Decay Behavior of Tb ³⁺ Green Fluorescence in Borate Glasses	共著	Optical Materials, Vol. 35, pp. 1908-1913 (2013)	Noriyuki Wada, Kazuo Kojima
和田憲幸	Optical Properties of Tb ³⁺ -Doped GeO ₂ -ZrO ₂ Thin Films Prepared by Sol-Gel Method	共著	Optical Materials, Vol. 35 pp. 1981-1986 (2013)	Tomoe Sanada, M. Abe, Kazuo Yamamoto, Noriyuki Wada, Kazuo Kojima
和田憲幸	Fluorescence Properties and Relaxation Processes of Tb ³⁺ Ions in ZnCl ₂ -Based Glasses	共著	Materials Research Bulletin, Vol. 48, No.11, pp. 4947-4952 (2013)	Noriyuki Wada, Masahiro Shibuta, Hiroko Shimazaki, Noriko Wada, Kazuhiro Yamamoto, Kazuo Kojima
和田憲幸	Mn-O bond length in oxide glasses	共著	Memoirs of the SR Center, Ritsumeikan University, No. 15, pp. 171-172 (2013)	Noriyuki Wada, Misaki Katayama, Tomoe Sanada, Kazuhiko Ozutsumi, Kazuo Kojima, Yasuhiro Inada
和田憲幸	Forgged Glass by Biofilm Formation and Its Evaluation	共著	Conference Tools for Materials Science and Technology 2013 (MS&T'13), Proceedings, pp. 2427-2433 (2013)	Hideyuki Kanematsu, Takashi Kogo, Hideo Itoh, Noriyuki Wada, Michiko Yoshitake
和田憲幸	Concentration Dependence of Fluorescence Properties in Tb ³⁺ -Doped B ₂ O ₃ -CaO Glasses	共著	6th German-Japanese/6th International Symposium on Nanostructures (Soft/Hard 2013), Shiga, P37, March 3, 2013	Noriyuki Wada, Kazuo Kojima
和田憲幸	MgGeO ₃ :Mn ²⁺ 赤色発光薄膜の作製と光学特性	共著	日本セラミックス協会, 2013 年年会, 東京, 講演予稿集(CD-ROM), 1P073, p. 18, 2013 年 3 月	眞田智衛, 北川輝, 小島一男, 山本和弘, 和田憲幸
和田憲幸	Mn ²⁺ 含有 GeO ₂ -Li ₂ O-ZnO 系ガラスの赤色残光への B ₂ O ₃ の添加効果	共著	日本セラミックス協会, 2013 年年会, 東京, 講演予稿集(CD-ROM), 1P083, p. 18, 2013 年 3 月	水谷史仁, 宮崎亘史, 和田憲幸, 眞田智衛, 小島一男
和田憲幸	尿素を用いた均一沈殿法による Tb ³⁺ 含有 HfO ₂ 蛍光粉末の作製と評価	共著	日本セラミックス協会, 2013 年年会, 東京, 講演予稿集(CD-ROM), 3E18, p. 32, 2013 年 3 月	日本セラミックス協会, 2013 年年会, 東京, 講演予稿集(CD-ROM), 3E18, p. 32, 2013 年 3 月

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
和田憲幸	発泡過程における多孔質ソーダ石灰ガラスの気孔の成長	共著	日本化学会, 第 93 春季年会, 滋賀, 講演予稿集 DVD-ROM, 1C1-55, 2013 年 3 月	園田絵里, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	可視光応答型窒素ドーピング金微粒子含有に酸化チタン膜の作製と評価	共著	日本化学会, 第 93 春季年会, 滋賀, 講演予稿集 DVD-ROM, 1PA-31, 2013 年 3 月	横溝裕司, 与儀千尋, 眞田智衛, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	Tb ³⁺ 含有 Ta ₂ O ₅ 蛍光球状粒子の作製と評価	共著	日本化学会, 第 93 春季年会, 滋賀, 講演予稿集 DVD-ROM, 2B3-30, 2013 年 3 月	藤村麻衣, 眞田智衛, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	ZnO-GeO ₂ 系化合物における 1064 nm 励起による緑色発光について	共著	日本化学会, 第 93 春季年会, 滋賀, 講演予稿集 DVD-ROM, 2PA-004, 2013 年 3 月	山内康平, 眞田智衛, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	ゾル-ゲル・ディップコーティング法による Zn ₂ GeO ₄ :Mn ²⁺ 緑色発光薄膜の作製と無機 EL 発光材料への応用	共著	日本化学会, 第 93 春季年会, 滋賀, 講演予稿集 DVD-ROM, 3PC-006, 2013 年 3 月	眞田智衛, 山本和弘, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	リン酸塩ガラス中の Mn ²⁺ の赤色発光特性	共著	日本化学会, 第 93 春季年会, 滋賀, 講演予稿集 DVD-ROM, 3PC-064, 2013 年 3 月	和田憲幸, 田畑直輝, 眞田智衛, 小島一男
和田憲幸	Mn ²⁺ 含有透光性ガラスセラミックスの結晶化と発光特性	共著	電気化学会, 創立第 80 周年記念大会, 宮城, 講演要旨集, p. 341, 1L23, 2013 年 3 月	藤田健司, 和田憲幸, 平井信充, 小島一男
和田憲幸	Mn ²⁺ 含有フツリン酸塩ガラスの赤色発光特性	共著	電気化学会, 創立第 80 周年記念大会, 宮城, 講演要旨集, p. 346, 2L06, 2013 年 3 月	金山勇輔, 田畑直輝, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	酸化物ガラス中での希土類および遷移金属イオンの発光特性と状態	共著	ニューガラス研究会, 滋賀, 2013 年 7 月	和田憲幸
和田憲幸	発光するガラスやセラミックスの設計	共著	鈴鹿工業高等専門学校テクノプラザ, 鈴鹿, 2013 年 7 月	和田憲幸
和田憲幸	Forgged Glass by Biofilm Formation and Its Evaluation	共著	Conference Tools for Materials Science and Technology 2013 (MS&T'13), Montreal, Quebec, Canada, October 28, 2013	Hideyuki Kanematsu, Takashi Kogo, Hideo Itoh, Noriyuki Wada, Michiko Yoshitake
和田憲幸	ホウ酸塩, ケイ酸塩およびリン酸塩ガラスにおける Mn ²⁺ の局所構造	共著	New SUBARU/立命館大学 SR センター合同シンポジウム 2013, 京都, 17, 2013 年 11 月	和田憲幸, 片山真祥, 眞田智衛, 小堤和彦, 小島一男, 稲田康宏

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
和田憲幸	Mn ²⁺ および Mn ⁴⁺ 含有 GeO ₂ -BaO ガラスセラミックスの赤色蛍光	共著	日本セラミックス協会ガラス部会，第 54 回ガラスおよびフォトニクス材料討論会，大阪，講演要旨集，pp. 108-109, 2013 年 11 月	藤田健司，和田憲幸，井上幸司，小島一男
和田憲幸	Creation of Inorganic Electro Luminescence Materials by Sol-Gel Method	共著	2nd International Symposium on Functionalization and Applications of Soft/Hard Materials (Soft/Hard 2013), Shiga, P04, November 29, 2013	Tomoe Sanada, Kazuhiro Yamamoto, Noriyuki Wada, Kazuo Kojima
和田憲幸	On the green emission in ZnO-GeO compounds by 1064-nm excitation	共著	2nd International Symposium on Functionalization and Applications of Soft/Hard Materials (Soft/Hard 2013), Shiga, P07, November 29, 2013	Kohei Yamauchi, Noriyuki Wada, Kazuo Kojima
黒田大介	Various Mortars for Anti-Fouling Purposes in Marine Environment	共著	Proceedings of The Irago Conference 2013, p. 81 (2013).	H. Kanemastu, T. Masuda, Y. Miura, N. Hirai and D. Kuroda
黒田大介	高温の NH ₃ ガス環境中で熱処理した Hastelloy B2 の力学的特性	共著	第 76 回（平成 25 年秋季）日本熱処理技術協会講演大会，第 76 回日本熱処理協会講演大会講演概要集，pp. 61-62 (2013).	黒田大介，阪彩乃，御手洗容子，香河英史，升岡正
黒田大介	電子ビーム積層造形技術により作製した Ti-6Al-4V 構造体の引張特性	共著	第 76 回（平成 25 年秋季）日本熱処理技術協会講演大会，第 76 回日本熱処理協会講演大会講演概要集，pp. 51-52 (2013).	黒田大介，御手洗容子，小野嘉則，香河英史，升岡正
黒田大介	金属粉末積層造形技術により作製した Ti-6Al-4V 合金構造体の力学的特性	共著	日本金属学会 2013 年秋期（第 153 回）大会，日本金属学会講演概要，p. 1071 (2013).	黒田大介，藤井瑛大，御手洗容子，小野嘉則，升岡正
黒田大介	電子ビーム溶解法により積層造形した Ti 合金のミクロ組織と力学的特性	共著	第 57 回材料工学連合講演会，材料工学連合講演会講演論文集，pp. 15-16 (2013).	黒田大介，藤井瑛大，升岡正，香河英史，御手洗容子，小野嘉則
黒田大介	分野別到達目標に対するラーニングアウトカム評価による質保証⑤ー到達度保証のための共用試験（CBT）の構築ー	共著	平成 25 年度日本工学教育研究講演会，平成 25 年度日本工学教育研究講演会講演論文集，pp. 292-293 (2013).	黒田大介，小林淳哉，市坪誠，桜庭弘，岡根正樹，池田耕
黒田大介	高温の NH ₃ 環境中で熱処理した L-605 合金の力学的特性	共著	平成 25 年度日本熱処理技術協会第 3 回中部支部講演会，(2013.3).	黒田大介，今村優里，御手洗容子，小野嘉則，香河英史
黒田大介	高温の NH ₃ 環境中で熱処理した Inconel625 合金の力学的特性	共著	平成 25 年度日本熱処理技術協会第 3 回中部支部講演会，(2013.3).	黒田大介，岡井正名，御手洗容子，小野嘉則，香河英史

所属氏名	著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
黒田大介	人工衛星用金属材料の耐久性評価	単著	日本溶射学会中部支部第 12 期・第 1 回「溶射技術研究会」, (2013,7)	黒田大介
黒田大介	モデルコアカリキュラム (試案) の導入に向けて	単著	モデルコアカリキュラム (試案) 講演会, 和歌山工業高等専門学校, (2013,1)	黒田大介
黒田大介	SS400 および 304 鋼の耐食性と微生物付着におよぼす冷間加工の影響	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部第 23 回学生による材料フォーラム, 特別講演会資料ポスターセッション概要集, p. 122 (2013).	横川さおり, 黒田大介
黒田大介	実環境中における金属材料へのバイオフィルム形成	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部第 23 回学生による材料フォーラム, 特別講演会資料ポスターセッション概要集, p. 123 (2013).	土居明, 黒田大介
黒田大介	高温環境中における Hastelloy B2 の劣化抑制に関する基礎的研究	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部第 23 回学生による材料フォーラム, 特別講演会資料ポスターセッション概要集, p. 124 (2013).	ヨンポー プンファンヤーン, 黒田大介
黒田大介	冷間圧延と熱処理を施した Hastelloy B2 の機械的特性	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部第 23 回学生による材料フォーラム, 特別講演会資料ポスターセッション概要集, p. 125 (2013).	阪彩乃, 黒田大介
黒田大介	ひずみと熱処理による L-605 の力学的特性の変化	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部第 23 回学生による材料フォーラム, 特別講演会資料ポスターセッション概要集, p. 126 (2013).	今村優里, 黒田大介
黒田大介	高温環境中に暴露した L-605 合金の劣化におよぼすひずみの影響	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部第 23 回学生による材料フォーラム, 特別講演会資料ポスターセッション概要集, p. 127 (2013).	前田真由子, 黒田大介
黒田大介	電子ビーム積層造形した Ti 合金の積層角度と機械的特性の関係	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部第 23 回学生による材料フォーラム, 特別講演会資料ポスターセッション概要集, p. 128 (2013).	藤井瑛大, 黒田大介
黒田大介	分野別到達目標に対するラーニングアウトカム評価による質保証① - 全体像と取組みが目指すもの -	共著	平成 25 年度日本工学教育研究講演会, 平成 25 年度日本工学教育研究講演会講演論文集, pp. 284-285 (2013).	小林淳哉, 市坪誠, 岡根正樹, 櫻庭弘, 野口健太郎, 黒田大介
黒田大介	分野別到達目標に対するラーニングアウトカム評価による質保証⑥ - 到達目標におけるエンジニアリングデザイン能力 -	共著	平成 25 年度日本工学教育研究講演会, 平成 25 年度日本工学教育研究講演会講演論文集, pp. 294-295 (2013).	市坪誠, 横井克則, 池田耕, 黒田大介, 岡根正樹, 水井真治

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
黒田大介	冷間圧延後に NH ₃ ガス雰囲気中で熱処理した Inconel625 のマイクロ組織と力学的特性	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台，第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集，p. 61 (2013).	岡井正名，バトゲレル ムンフドルジ，御手洗容子，小野嘉則，香河英史，藤井剛，後藤大亮，黒田大介
黒田大介	冷間圧延後に NH ₃ ガス雰囲気中で熱処理した L-605 のマイクロ組織と力学的特性	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台，第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集，p. 62 (2013).	今村優里，御手洗容子，小野嘉則，香河英史，藤井剛，後藤大亮，黒田大介
黒田大介	ひずみを導入した金属材料への海洋生物の付着	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台，第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集，p. 59 (2013).	横川さおり，神崎拓也，増田智香，大原滉平，生貝初，兼松秀行，黒田大介
黒田大介	ひずみを導入した鉄鋼材料の耐食性の変化	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台，第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集，p. 347 (2013).	大原滉平，増田智香，横川さおり，兼松秀行，黒田大介
黒田大介	冷間圧延後に Ar ガス雰囲気中で熱処理した Ni 基耐熱合金の力学的特性	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台，第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集，p. 356 (2013).	バトゲレル ムンフドルジ，岡井正名，御手洗容子，小野嘉則，香河英史，藤井剛，黒田大介
黒田大介	冷間圧延後に Ar ガス雰囲気中で熱処理した Co 基耐熱合金の力学的特性	共著	第 18 回高専シンポジウム in 仙台，第 18 回高専シンポジウム in 仙台講演要旨集，p. 355 (2013).	平山真由香，今村優里，御手洗容子，小野嘉則，香河英史，藤井 剛，黒田大介
黒田大介	Biofilm formation and evaluation of spray coated metal films on laboratory scale	共著	Thermal Spray 2013-Innovative Coating Solutions for the Global Economy 2013, ASM International, Busan, Republic of Korea, pp. 520-525 (2013).	H. Kanemastu, T. Kogo, D. Kuroda, H. Itoh and S. Kiriwara
黒田大介	Biofilm formation derived from ambient air and the characteristics of apparatus	共著	Journal of Physics: Conference series, 433, p. 012031, 1-6, (2013).	H. Kanematsu, H. Kogo, D. Kuroda, Y. Ogino and Y. Yamamoto
黒田大介	電気炉スラグを含むモルタルの生物付着評価	共著	材料とプロセス, 26, pp. 662-663 (2013).	増田智香，兼松秀行，平井信充，黒田大介，横山誠二，田中美穂
黒田大介	高専の分野別到達目標に対するコンピュータベースでの到達度試験の作成と実施	共著	大学 ICT 推進協議会 2013 年度年次大会論文集，CD-ROM, ISSN 2187-8242 (2013) .	黒田大介，下郡啓夫，佐々木淳，野口健太郎，櫻庭弘，池田耕，小林淳哉
万谷義和	$\alpha + \beta$ 型チタン合金の焼入れ温度と冷間圧延による内部摩擦の変化	共著	日本熱処理技術協会中部支部 第 3 回講演会講演論文集 No.3, pp.13-14.(2013.3)	岩塚大典，万谷義和
万谷義和	β 型チタン合金の塑性変形挙動に及ぼす相安定性と応力誘起変態の影響	共著	日本金属学会講演概要 2013 年春期（第 152 回）大会 J14.(2013.3)	万谷義和，竹元嘉利，工藤邦男

所属氏名	著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
万谷義和	チタン合金の組織設計制御による制振性向上技術	単著	イノベーション・ジャパン 2013～大学見本市&ビジネスマッチング～ 東京ビックサイト Z-20 (2013.8)	
万谷義和	Ti-Nb 合金における焼入れ α' および α'' マルテンサイトの弾塑性変形に伴う構造変化	共著	日本金属学会講演概要 2013 年秋期（第 153 回）大会 J21.(2013.9)	万谷義和，竹元嘉利
万谷義和	機能性チタン合金の制振性を向上させる新しい合金組織設計	単著	第 4 回次世代ものづくり基盤技術産業展 TECH Biz EXPO 2013 ポートメッセ名古屋 (2013.10)	
万谷義和	制振性を向上させたチタン合金のインパルス加振 FEM 解析	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会主催 第 23 回学生による材料フォーラム 概要集 p.136. (2013.11)	荒川雅彦，岩塚大典，万谷義和
万谷義和	プラズマ窒化処理を施したチタン合金 α' マルテンサイト組織の窒化層評価	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会主催 第 23 回学生による材料フォーラム 概要集 p.137. (2013.11)	川喜田俊，万谷義和
万谷義和	β 型チタン合金の打抜き断面形状に及ぼす時効の影響	共著	日本金属学会・日本鉄鋼協会主催 第 23 回学生による材料フォーラム 概要集 p.138. (2013.11)	恒川弥佑，万谷義和
万谷義和	チタン合金 α' マルテンサイト組織のプラズマ窒化処理に伴う組織変化	共著	第 76 回日本熱処理技術協会講演大会 講演概要集 pp.65-66. (2013.11)	万谷義和，中田一博
幸後健	Unti-Biofouling of Metal On Glass Substrate Deposited by Thermal Spray	共著	Thermal Spray 2013 - Innovative Coating Solutions for the Global Economy2013	T.Kougo, H.Kanematsu, S.Tasaki, S.Kirihara
幸後健	Metal Coated Glass by Sputtering and Their Microfouling Properties	共著	The Irigo Conference 2013	T.Kougo, H.Kanematsu, N.Wada, T.Hihara, M.Minekawa, and Y.Fujita
幸後健	バイオフィルム形成が及ぼす付着汚れとその抑制について	共著	高専-TUT 太陽電池シンポジウム	高橋一真，駒田悠如，幸後健，和田憲之，兼松秀行
幸後健	Biofilm Formation and Evaluation for Spray Coated Metal Films on Laboratory Scale	共著	Thermal Spray 2013 - Innovative Coating Solutions for the Global Economy2013	T.Kougo, H.Kanematsu, N.Wada, T.Hihara, M.Minekawa, and Y.Fujita Kanematsu, H., T. Kogo, D. Kuroda, H. Itoh, and S. Kirihara,
幸後健	鈴鹿高専における原子力人材育成の取り組み	共著	原子力人材育成事業フォーラム	恒川弥佑，幸後健，井上哲雄

所属 氏名	著書，学術論文等の名称	単著， 共著 の別	発行所，発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
教育研究支援室 森邦彦	産学官・地域連携によるものづくり技術者教育	共著	日本工学教育協会，工学教育，第 61 巻第 4 号，pp.66-71 (2013, 7)	坂本英俊，大淵慶史，埤克己，江崎尚和，斎藤正美
伊東真由美	駅前キャンパス「鈴鹿高専みんなの理科教室」の取り組み	共著	第 154 回計測自動制御学会中部支部教育工学研究会(愛知)	板谷年也、中川元斗、南部紘一郎、柴垣寛治、下野晃、伊東真由美、幸後健、吉田茂太、桑原裕史
西村吉弘	公開講座「Arduino で LED を制御しよう！」の実施	共著	計測自動制御学会中部支部，教育工学論文集，Vol.36，pp.14-16(2013)	伊藤明、井瀬潔、柴田勝久、森育子、平野武範、板谷年也、西村吉弘、森岡晶子
西村吉弘	情報オリンピックへの参加	共著	計測自動制御学会中部支部，教育工学論文集，Vol.36，pp.38-40(2013)	田添文博、箕浦弘人、青山俊弘、浦尾彰、西村吉弘、桑原 裕史
石原茂宏	A CASE REPORT ON APPLING MOODLE AS VIRTUAL LEARNING ENVIRONMENT FOR ENGINEERING EDUCATION.	共著	Proc. of Int. Symp. on Advances in Technology Education ISATE, Nara (2013. 9)	T. Shirai, A. Ito, T. Kusaka, S. Ishihara, T. Aoyama, H. Minoura, S. Morikawa and K. Ise
中川元斗	メダカ仔魚を用いたリチウムの生体影響評価	共著	第 166 回鉄鋼協会秋季講演大会（金沢）	甲斐穂高、山口雅裕、中川元斗
中川元斗	メダカ仔魚を用いた in vivo での亜鉛イオンの生体毒性評価	共著	第 166 回鉄鋼協会秋季講演大会（金沢）	大平麻由佳、甲斐穂高、中川元斗、山口雅裕
中川元斗	駅前キャンパス「鈴鹿高専みんなの理科教室」の取り組み	共著	第 154 回計測自動制御学会中部支部教育工学研究会(愛知)	板谷年也、中川元斗、南部紘一郎、柴垣寛治、下野晃、伊東真由美、幸後健、吉田茂太、桑原裕史

編 集

図 書 館 主 事	中井 洋生 (教 養 教 育 科)
紀要発行部会長	中井 洋生 (教 養 教 育 科)
紀要発行部会員	小倉 正昭 (教 養 教 育 科)
〃	打田 正樹 (機 械 工 学 科)
〃	奥野 正明 (電 気 電 子 工 学 科)
〃	森 育子 (電 子 情 報 工 学 科)
〃	山口 雅裕 (生 物 応 用 化 学 科)
〃	小林 達正 (材 料 工 学 科)

Chief Editor

Hiroo NAKAI Dept. of General Education

Editors

Masaaki OGURA	Dept. of General Education
Masaki UCHIDA	Dept. of Mechanical Engineering
Masaaki OKUNO	Dept. of Electrical and Electronic Engineering
Ikuko MORI	Dept. of Electronic and Information Engineering
Masahiro YAMAGUCHI	Dept. of Chemistry and Biochemistry
Tatsumasa KOBAYASHI	Dept. of Materials Science and Engineering

本校紀要は全国の国公立大学・短期大学・高等専門学校・各種研究機関所属者の外部査読を受けています。

投稿数 12本
採用数 11本
採択率 91.7パーセント

鈴鹿工業高等専門学校紀要 第47巻

MEMOIRS of Suzuka National College of Technology
Vol. 47

発 行 平成26年2月28日
発行者 鈴鹿工業高等専門学校
三重県鈴鹿市白子町
〒510-0294
TEL 059-386-1031
FAX 059-387-0338
Published February 28, 2014
by Suzuka National College of Technology
Shiroko, Suzuka, Mie 510-0294, Japan
印 刷 西濃印刷株式会社
ISSN-0286-5483